

国際医療福祉大学

福岡薬学部

令和6年度

自己点検・評価報告書



医療福祉の多彩なエキスパートを育てる。

国際医療福祉大学

INTERNATIONAL UNIVERSITY OF HEALTH AND WELFARE

福岡薬学部 令和6年度自己点検・評価報告書

目次

第一部 国際医療福祉大学福岡薬学部

1. 国際医療福祉大学の教育理念	1
(1) 国際医療福祉大学の基本理念と教育理念	1
2. 福岡薬学部の教育研究上の目的 / 3つのポリシー	2
(1) 福岡薬学部の教育研究上の目的	2
(2) 薬学科の教育研究上の目的	2
(3) 福岡薬学部の3つのポリシー	2
3. 運営組織	4
(1) 福岡薬学部教員一覧	4
(2) チューター制	4
(3) 運営組織図	6
4. 学事報告	8
(1) 開講科目	8
(2) 卒業要件	11
(3) 進級条件	12
(4) 2024年度入学生の6年間のカリキュラム	15
(5) 在籍者数	17
(6) 学事日程	17
(7) 主な学事	19
1) 入学式	19
2) 保護者懇談会	19
3) オープンキャンパス	20
4) 国際医療福祉大学学会	22
5) 第19回月華祭	25
6) 保護者のつどい	25
7) ボランティア活動	26
8) ニュースレター(保護者通信)	27
9) 地域交流	28
10) 学生—チューター面談	29
11) ディプロマ・ポリシー到達度評価の導入	30
12) 薬学共用試験(CBT)	30
13) 卒業研究(研究室配属)	31
14) 動物実験・組換えDNA実験教育訓練	32

第二部 福岡薬学部会議および各委員会活動報告

1. 福岡薬学部会議	33
2. 福岡薬学部教務委員会	43
3. 福岡薬学部学生委員会	49
4. 福岡薬学部FD委員会	51
5. 福岡薬学部教育・研究支援委員会	52
6. 福岡薬学部広報・学生募集委員会	52
7. 福岡薬学部第三者評価・自己点検委員会	55
8. 福岡薬学部予算管理委員会	57
9. 薬学部建物運用委員会	57

第三部 福岡薬学部教育活動報告

1. 令和6年度の教育実施状況と次年度へ向けて	59
2. 令和5年度開講 福岡薬学部必修科目	61
(1) 総合教育科目 人間系	61
(2) 総合教育科目 社会系	63
(3) 総合教育科目 自然・情報系	65
(4) 総合教育科目 外国語系	72
(5) 総合教育科目 総合系	78
(6) 専門教育科目 専門基礎/学部共通	79
(7) 専門教育科目 専門基礎	83
(8) 専門教育科目 専門	90

第四部 福岡薬学部研究活動報告

1. 2024年度研究活動	142
---------------	-----

第一部 国際医療福祉大学福岡薬学部

1. 国際医療福祉大学の教育理念

(1) 国際医療福祉大学の基本理念と教育理念

国際医療福祉大学（以下「本学」という。）は、「人間中心の大学」、「社会に開かれた大学」、「国際性を目指した大学」という3つの基本理念と、この理念を実現するための7つの教育理念（人格形成、専門性、学際性、情報科学技術、国際性、自由な発想、新しい大学運営）を掲げ、病める人も、障害を持つ人も、健常な人も、互いを認め合って暮らせる「共に生きる社会」の実現を目指した教育をおこなう。

3つの基本理念

(人間中心の大学)

プロフェッショナルとしての専門的な知識や技能の修得にとどまらず、幅広くバランスの取れた良識ある人間を育成すること。

(社会に開かれた大学)

学問を創造的に追究するとともに、地域社会と一体となり、地域の医療福祉のニーズに応え、地域社会や医療福祉に関わる各界の人々の生涯教育の拠点としても機能できる大学となること。

(国際性を目指した大学)

国際的センスを備え、いかなる国の人々とも伸び伸びと協働できる真の国際人を育成すること。

7つの教育理念

(人格形成) 知識・技術のみに偏しない知・情・意を兼ね備えた人材を育み、「共に生きる社会」を目指していく。自ら考え、自ら行動する幅広くバランスの取れた人格の形成を図る。

(専門性) 日進月歩する医療福祉の高度化・専門分化に対応した、学問の確立と研究の推進をおこなう。医療福祉のプロフェッショナルとしてふさわしい能力を学生生活で身につけていく。

(学際性) 医療福祉分野の大学の特性を生かして、他学科の専門科目も教養として修得し、授業外活動も重視する。総合的教養を併せ持つ医療福祉専門職を目指す。

(情報科学技術) 情報化社会の進展に対応できるよう、すべての学科において最新の知識・技術を修得させ、情報科学技術に強い医療・福祉専門職を育成する。

(国際性) 語学教育など一般教育だけでなく、専門教育や学生生活を通じて、人間（私人）としても専門家（公人）としても国際的視野を持った人材を育てる。

(自由な発想) 人間としての品位や、社会のルール・マナーの遵守を前提におきながら、学生個人の自由な発想や行動を歓迎し、特に宗教・思想・社会運動への関心や探究を尊重する。

(新しい大学運営) 時代の変化に即応して、大学の運営も年功序列を廃し、学生の立場から教員の評価もできるシステムを導入するなど、適時見直しを進め、自由闊達な校風の中で学生の自主性を育む努力をする。大学院教育については、特に生涯学習の視点に立って専門職育成のための教育、研究の充実を図る。

2. 福岡薬学部の教育研究上の目的 / 3つのポリシー

(1) 福岡薬学部の教育研究上の目的

福岡薬学部は、薬学の各分野について、理論及び応用の研究を行うとともに、それぞれ十分な知識と技能を有し、保健医療の実践を担うことのできる応用能力及び豊かな人間性を備えた人材を育成することを目的とする。

(2) 薬学科の教育研究上の目的

福岡薬学部の教育研究上の目的をふまえ、薬学科は、薬学の各分野について、理論及び応用の研究を行うとともに、「くすり」に対する専門的な知識と、臨床現場で発揮される高い能力、技術を備え、調剤した「くすり」の適切な説明や薬物療法について、的確なアドバイスができる薬剤師の育成を目的とする。

(3) 福岡薬学部の3つのポリシー

アドミッションポリシー

①求める学生像

本学が入学者に求める要件を十分理解し、薬剤師として、豊かな心、コミュニケーション能力、新しい知識の追求に向けた関心や意欲を持ち、日々進化する薬物療法における高度化・専門化及び国際化に対応し、学びを深めるための科学的根拠に基づく論理的な思考力を身につけることが期待できる人

②薬学科の入学者に求める要件

1)知識・技能

高等学校等で学んだ教科に相応した基礎知識と、化学等の理数系科目の修得を通して身につけた科学的な思考力・理解力、また、語学系科目(英語)の修得を通して身につけた読解力を有していること。

2)思考力・判断力・表現力

薬剤師に必要な新しい知識を学ぶ意欲及び主体的な目標設定をもとに努力を継続する力、自ら思考し、判断したことを適切に表現する力を有していること。

3)主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

本学の基本理念及び教育理念を十分理解し、薬剤師として「共に生きる社会」の実現に寄与する意志を持つ人、他者と協調的に連携を図り、地域とのつながりを大切に考え、薬学の発展に貢献したいという強い意欲をもとに自他ともに研鑽しあう意志を持つ人であること。

ディプロマポリシー

DP1:薬学に関する基礎および専門的な知識・技能をバランスよく有している。

DP2:問題の発見から解決までの一連のプロセスの中で、必要な情報を収集し、科学的根拠に基づき論理的に考え行動できる。

DP3:医療人を目指す者として、人間理解、国際的感覚を養い、相手に寄り添ったコミュニケーションを実施できる。

DP4:薬剤師を目指す者として、使命感・倫理観・責任感を養い、他職種との連携を通して薬剤師の役割を理解、実践できる。

DP5:保健・医療・福祉について、日本にとどまらず世界の情勢を広く理解し、地域に貢献する姿勢と実践能力を有している。

DP6:医療の担い手を目指す者として、幅広い教養と豊かな人間性を育み、生涯にわたって自他ともに研鑽しあえる姿勢および意欲を有している。

DP7:生命科学的知識および研究マインドを基に、薬物療法を実践する能力を有している。

カリキュラムポリシー

CP1:

- a. 薬学の専門家として必要な知識・技能を修得するために、講義、演習、実習を相互に関連付けて科目を配置する。
- b. 薬物治療の実践的能力を高めるために、知識・技能を統合した能動的学修を実施する。

CP2:

- a. 問題発見から解決する能力および科学的根拠に基づいた論理的思考力を養うために、問題解決型学修 (PBL) をはじめとする能動的学修を講義、演習、実習で実施する。また、参加型実践的科目として卒業研究を配置する。
- b. 薬剤師として臨床での総合的実践能力を身につけるために、参加体験型学修である実務実習を行う。

CP3:

- a. 医療人としてのコミュニケーション能力を養成するために、ロールプレイを含む参加型実習を行う。
- b. 薬剤師の役割を理解するために、他職種との連携教育を実施する。

CP4:

- a. 薬剤師としての使命感・倫理観・責任感および豊かな人間性を涵養するために、スモールグループディスカッション (SGD)等を含めた講義、演習、体験実習を配置する。
- b. 国際的な感覚を養うために、世界の保健福祉事情に触れ、語学能力を高める機会を設ける。
- c. 生涯にわたり自ら研鑽できる医療の担い手になるために、ポートフォリオを用いた形成的自己評価の機会を設ける。

3. 運営組織

(1) 福岡薬学部教員一覧

学部長、教授	家入一郎
教授	阿部義人、石田卓巳、猪部学、太田昭一郎、緒方勝也、梶岡俊一、川端猛夫（特任教授）、岸拓弥、吉良潤一、西村信弘、長谷川雄、平木洋一、村田祐造、山口政俊（特任教授）
准教授	一木裕子、窪田香織、齊藤秀俊、多田納豊、塚本宏樹、成川佑次、宗像達夫、山本緑、吉武康之
講師	今井竜也、今村友裕、貝塚拓、中矢正、朴珍相、宗像千恵
助教	磯田紀之、坂井崇亮、澤井円香、柴田健太郎、福田光良

五十音順

(2) チューター制

本年度は、29名の薬学科教員がチューターを担った。チューターは学生の修学・生活における相談に随時応じ、問題を把握するとともに解決に向けて支援した。また、半期に一度の定期面談では、ラーニングポートフォリオを通じて学生の短期および中長期の目標に対する進捗状況を、DP評価表を通じてディプロマポリシーの達成度を確認し、アドバイスを行った。3年生に関しては、チューター担当教員を入れ替え、複数教員で学生を支援できる体制を整えた。修学困難(休学または進路変更希望)な学生については、当人および保護者との面談を随時行い適切に対応した。さらに、留年に至った場合には学生または保護者も交えた面談を行い、留年期間には、月1回の面談にて、学習および

生活の支援を行った。以下に、本年度のチューター担当教員と担当学生数（5年生は各研究室に配属されるため、研究室の主宰者がチューターとなっている）を示す。

	チューター名	職位	学生数					
			総数	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生
1	阿部 義人	教授	23	5	4	4	6	4
2	石田 卓巳	教授	25	4	3	5	6	7
3	猪部 学	教授	19	4	4	5	5	1
4	太田 昭一郎	教授	23	4	4	5	6	4
5	緒方 勝也	教授	18	5	3	7	3	
6	梶岡 俊一	教授	18	5	6	4	3	
7	西村 信弘	教授	29	5	5	5	4	10
8	長谷川 雄	教授	20	5	4	5	3	3
9	平木 洋一	教授	26	4	5	5	4	8
10	村田 祐造	教授	18	5	3	5	5	
11	一木 裕子	准教授	18	4	5	4	5	
12	窪田 香織	准教授	15	4	4	4	3	
13	齊藤 秀俊	准教授	28	4	5	6	3	10
14	多田納 豊	准教授	17	4	3	5	4	1
15	塚本 宏樹	准教授	18	5	4	4	5	
16	成川 佑次	准教授	24	4	4	4	5	7
17	宗像 達夫	准教授	22	4	5	5	3	5
18	山本 緑	准教授	20	4	4	6	2	4
19	吉武 康之	准教授	26	5	5	5	3	8
20	今井 竜也	講師	22	6	4	4	4	4
21	貝塚 拓	講師	18	5	4	5	4	
22	中矢 正	講師	20	5	4	5	3	3
23	朴 珍相	講師	21	5	5	4	4	3
24	宗像 千恵	講師	18	5	5	4	4	
25	磯田 紀之	助教	18	5	5	5	3	
26	坂井 崇亮	助教	19	6	4	4	5	
27	澤井 円香	助教	18	5	5	4	4	

28	柴田 健太郎	助教	18	5	5	5	3	
29	福田 光良	助教	18	6	4	4	4	

(3) 運営組織図

大川キャンパス・福岡キャンパス委員会構成

会議	管理運営委員会
	運営会議
	学部長学科長会議
	専任教員代表者会議
	教員会議
教務統括委員会	教務委員会
	カリキュラム小委員会
	VOD委員会
	臨床実習委員会
	国家試験対策委員会
	学修支援センター ／学修支援委員会
FD統括委員会	FD委員会
学生統括委員会	学生委員会
	キャリア支援センター ／就職委員会
	ボランティアセンター ／ボランティア委員会
国際交流統括委員会	国際交流委員会
	別科委員会
	留学生サポートセンター
学生募集統括委員会	学生募集広報委員会
地域交流統括委員会	地域交流委員会
図書統括委員会	図書委員会
防災統括委員会	防災対策委員会
DX統括委員会	教育機器整備委員会
	DX委員会
その他	ハラスメント防止委員会
	安全衛生委員会
	ニューズレター編集室
	入試システムWG
	研究推進室
	臨床教学共同研究室
	産学連携推進室
	倫理審査施設委員会
	動物実験委員会
自己点検評価委員会	

	国際医療福祉大学学会運営委員会
	シュミレーションセンター
	九州地区大学院会議

福岡薬学部内委員会組織



4. 学事報告

(1) 開講科目

授業科目の 区分	科目名	配当 年次	単位数		時間数	備考	履修 登録	確認
			必修	選択				
人間系	文学論	1 2 3 4 5 6		2	30			
	演劇論	1 2 3 4 5 6		1	15			
	心理学	1		2	30			
	哲学	1 2 3 4 5 6		2	30			
	コミュニケーション概論	1		2	30			
	雑談と傾聴～話す力と聴く力～	1 2 3 4 5 6		2	30			
	人間学	1 2 3 4 5 6		2	30			
	倫理学	1 2 3 4 5 6		2	30			
	宗教学	1 2 3 4 5 6		2	30			
	日本近現代史	1 2 3 4 5 6		2	30			
	文化人類学	1 2 3 4 5 6		2	30			
	教育学	1 2 3 4 5 6		2	30			
	死生学－死を通して生を考える	1 2 3 4 5 6		2	30			
社会系	法学	1		2	30			
	日本国憲法	1 2 3 4 5 6		2	30			
	社会学	1 2 3 4 5 6		2	30			
	国際関係論	1 2 3 4 5 6		2	30			
	国際医療福祉論	1 2 3 4 5 6		2	30			
	組織運営管理論	1 2 3 4 5 6		2	30			
	海外保健福祉事情Ⅰ(講義)	2		1	15			
	海外保健福祉事情Ⅱ(実習)	2		1	45			
	我が国の社会福祉・医療保障政策の知識	1		1	30			
	ボランティア論	1 2 3 4 5 6		2	30			
	経済の仕組み	1 2 3 4 5 6		2	30			
	数学	1		2	30			
	自然・ 情報系	物理学	1 2 3 4 5 6		2	30		
化学		1		2	30			
生物学		1		2	30			
データリテラシー		1		1	30			
医療データサイエンスⅠ(DS基礎)		2 3 4 5 6		1	30			
医療データサイエンスⅡ(AI基礎)		2 3 4 5 6		1	30			
医療必修-医療の倫理とプロ意識・医療情報-		1		1	30			
医学/医療史		1 2 3 4 5 6		2	30			
大学入門講座-医療人・社会人として成長するために-		1		1	30			
郷土論-大川学		1 2 3 4 5 6		1	15			
総合系	医療福祉教養講義	1 2 3 4 5 6		1	15			
	メディカルマナー入門	1 2 3 4 5 6		2	30			
	英語講読1(Primary)	1		1	30	留学生は選択		
外国語系	英語講読2(Basic)	2		1	30	留学生は選択		
	英語CALL1(Primary)	1		1	30	留学生は選択		
	英語CALL2(Basic)	2		1	30	留学生は選択		
	英会話	1 2 3 4 5 6		1	30			
	実用英会話	2 3 4 5 6		1	30			
	医学英語Ⅰ(入門)	1 2 3 4 5 6		1	30			
	医学英語Ⅱ(応用)	1 2 3 4 5 6		1	30			
	資格英語1(Primary)	1 2 3 4 5 6		1	30			
	資格英語2(Basic)	1 2 3 4 5 6		1	30			
	中国語	1 2 3 4 5 6		2	60			
	実用中国語会話	2 3 4 5 6		1	30			
	韓国語	1 2 3 4 5 6		2	60			
	実用韓国語会話	2 3 4 5 6		1	30			
保健 体育系	健康科学理論	1 2 3 4 5 6		1	15			
	健康科学実践	1 2 3 4 5 6		1	30			

授業科目の 区分	科目名	配当 年次	単位数		時間数	備考	履修 登録	確認	
			必修	選択					
専門基礎科目	救急医学(救命救急を含む)	2 3		1	15				
	リハビリテーション概論	1 2 3 4 5 6		2	30				
	微生物と病気	1 2 3 4 5 6		2	30				
	ケアマネジメント論	2 3 4 5 6		1	15				
	保健医療福祉制度論	1 2 3 4 5 6		2	30				
	臨床心理学概論	1		2	30				
	関連職種連携論	2		2	30				
	関連職種連携ワーク	3		1	30				
	関連職種連携実習	5		1	45				
	リスクマネジメント論	3 4 5 6		2	30				
	医療関連法規Ⅰ(医薬品全般に関わる法律)	3		1	15				
	医療関連法規Ⅱ(医薬品開発と薬害に関する法律の理解)	4		1	15				
	薬学演習Ⅰ(物理・化学・生物:基礎)	2		1	30				
	薬学演習Ⅱ(物理・化学・生物:応用)	3		1	30				
	薬学演習Ⅲ(医療倫理・ヒューマンズム)	3		1	30				
	薬学計算	2		1	30				
	病原微生物学	2		2	30				
	コミュニケーション実習	2		1	45				
	専門教育科目	基礎薬学実習	1		1	45			
		公衆衛生学Ⅰ(保健統計、疫学、制度)	2		2	30			
公衆衛生学Ⅱ(感染症と予防)		3		1	15				
薬学概論		1		2	30				
基礎統計学		1		1	15				
有機化学Ⅰ(脂肪族化合物1)		1		2	30				
有機化学Ⅱ(脂肪族化合物2)		2		2	30				
有機化学Ⅲ(芳香族化合物)		2		2	30				
生物有機化学		3		1	15				
生薬学		2		2	30				
天然物化学		2		1	15				
医薬品構造化学Ⅰ(コア構造と作用機構)		4		1	15				
医薬品構造化学Ⅱ(代表的医薬品の構造と作用)		6		1	15				
医薬品構造解析演習		2		1	30				
有機化学演習		1		1	30				
分析化学Ⅰ(化学平衡と滴定)		1		2	30				
分析化学Ⅱ(機器分析)		2		2	30				
分析化学Ⅲ(分離分析と臨床分析)		3		2	30				
薬品物理化学Ⅰ(物性とエネルギー)		1		2	30				
薬品物理化学Ⅱ(平衡と変化)		2		2	30				
放射化学	2		2	30					
生化学Ⅰ(生体分子)	1		2	30					
生化学Ⅱ(生体エネルギー・代謝)	2		2	30					
分子生物学	2		2	30					
細胞生物学	2		1	15					
解剖生理学Ⅰ(器官系概論、神経系等)	1		2	30					
解剖生理学Ⅱ(循環器系、消化器系等)	2		2	30					
がん薬物療法学	3		2	30					
ゲノム医療	3		1	15					
化学療法学	3		2	30					
免疫学	3		2	30					
疾病と病態生理学Ⅰ(神経精神系疾患、循環器系疾患等)	2		2	30					

授業科目の 区分	科目名	配当 年次	単位数		時間数	備考	履修 登録	確認
			必修	選択				
専門 教育科目	疾病と病態生理学Ⅱ(代謝系疾患、消化器系疾患等)	2	2		30			
	薬理学Ⅰ(総論)	2	1		15			
	薬理学Ⅱ(末梢神経薬理、中枢神経薬理等)	2	2		30			
	薬理学Ⅲ(免疫・炎症薬理、循環器薬理等)	3	2		30			
	薬理学Ⅳ(呼吸器薬理、内分泌薬理等)	3	1		15			
	医薬品安全性学	4	2		30			
	臨床検査医学	4	2		30			
	薬物治療学Ⅰ(神経精神系疾患、内分泌系疾患等)	4	2		30			
	薬物治療学Ⅱ(循環器系疾患、呼吸器系疾患等)	4	2		30			
	薬物治療学Ⅲ(症例・病態解析)	6	1		30			
	物理薬剤学	3	1		15			
	製剤設計とDDS	3	2		30			
	臨床薬学Ⅰ(調剤の基礎)	3	2		30			
	臨床薬学Ⅱ(調剤の実践)	4	2		30			
	臨床薬学Ⅲ(薬物療法の実践)	4	2		30			
	臨床薬学Ⅳ(チーム医療・地域医療の実践その前に)	4 5	1		15			
	薬物動態学	3	2		30			
	臨床薬物動態学	4	2		30			
	医薬品情報学Ⅰ(医薬品情報の収集と活用)	3	2		30			
	医薬品情報学Ⅱ(EBMと臨床研究)	4	1		15			
	衛生化学Ⅰ(食品・栄養)	2	2		30			
	衛生化学Ⅱ(毒性・代謝)	3	2		30			
	環境衛生学	3	2		30			
	日本薬局方Ⅰ(通則、総則、一般試験法)	3	1		15			
	日本薬局方Ⅱ(代表的な医薬品の試験と生産管理)	6	1		15			
	漢方医学Ⅰ(漢方の基礎)	3	2		30			
	漢方医学Ⅱ(漢方の応用)	4		1	15			
	OTC医薬品概論	3	2		30			
	医療データサイエンス概論	4	1		15			
	医療データサイエンス演習	6	1		30			
	医薬品レギュラトリーサイエンス概論	6	1		15			
	化学系薬学実習Ⅰ(有機合成)	2	1		45			
	化学系薬学実習Ⅱ(天然資源)	2	1		45			
	物理系薬学実習	2	1		45			
	生物系薬学実習	3	1		45			
	分子生物学実習	3	1		45			
	免疫・微生物学実習	3	1		45			
	薬剤学実習	4	1		45			
	フィジカルアセスメント実習	4	1		45			
	衛生系薬学実習	3	1		45			
	早期体験実習	1	1		45			
	医療系薬学実習Ⅰ(調剤の基礎と情報収集)	4	1		45			
	医療系薬学実習Ⅱ(調剤の実践と服薬指導)	4	1		45			
	医療系薬学実習Ⅲ(実務実習で必要な基本的技能)	4	1		45			
	実務実習事前演習	4	2		60			
薬局実務実習	5 6	10		450				
病院実務実習	5 6	10		450				
総合薬学演習Ⅰ(薬剤師の使命を含む基礎項目の確認)	6	1		30				
総合薬学演習Ⅱ(理解力および問題解決能力の養成)	6	1		30				
卒業研究	5 6	8		360				

(2) 卒業要件

卒業要件（卒業に必要な単位数）

授業科目の区分		最低単位数	
		必修	選択
総合教育科目	人間系	4単位	10単位以上 内、総合教育科目 から3単位以上 (9または11 単位以上 内、3または5 単位は日本語科目の 選択科目)※1
	社会系	5単位	
	自然・情報系	8単位	
	総合系	1単位	
	外国語系	4単位 (5単位)※1	
	保健体育系		
	小計	22単位 (23単位)※1	
専門教育科目	専門基礎科目	学部共通	5単位
		学科専門基礎	12単位
		小計	17単位
	専門科目	142単位	
	小計	159単位	10単位以上 (9または11単位以上) ※1
合計		181単位 (182単位)※1	10単位以上 (9または11単位以上) ※1
総計		191単位以上 (191または 193単位以上)	

※1 () 内の単位は留学生の単位を表す。

(3) 進級条件

進級条件（留学生以外）

(1) 1 学年から 2 学年への進級条件

- ① 1 学年必修科目(35 単位)のうち、すべての実習科目(2 単位)を含む 29 単位以上修得していること。

(2) 2 学年から 3 学年への進級条件

- ① 1 学年必修科目(35 単位)のすべてを修得していること。
- ② 2 学年必修科目(45 単位)のうち、すべての実習科目(5 単位)を含む 39 単位以上修得していること。
- ③ 以上、①②の両方の条件を満たしていること。

(3) 3 学年から 4 学年への進級条件

- ① 2 学年までの必修科目(80 単位)のすべてを修得していること。
- ② 3 学年必修科目(40 単位)のうち、すべての実習科目(4 単位)を含む 34 単位以上修得していること。
- ③ 以上、①②の両方の条件を満たしていること。

(4) 4 学年から 5 学年への進級条件

- ① 3 学年までの必修科目(120 単位)のすべてを修得していること。
- ② 4 学年必修科目 26 単位のうち、「臨床薬学 IV(チーム医療・地域医療の実践その前に)」を除く 25 単位のすべてを修得していること。
- ③ 以上、①②の両方の条件を満たしていること。

(5) 進級した場合

前年次の不合格必修科目については、受講し、定期試験を受け、単位を修得すること。

(6) 留年した場合

- ① 合格した科目の単位は認められる。
- ② 不合格の必修科目は再履修しなければならない。
- ③ 不合格になった選択科目は、新たに希望して選択するものとする。
- ④ 在学年限について:同一学年における在学年数を 2 年以内とする(休学期間を除く)但し、5、6 学年は通算で 4 年間在籍できる。

進級条件（留学生）

(1) 1 学年から 2 学年への進級条件

- ① 1 学年で履修できる外国語系科目を除く必修科目 33 単位と日本語科目 2 単位(必修/選択を問わない)を合わせた 35 単位のうち、すべての実習科目(2 単位)を含む 29 単位以上の 必修科目を修得していること。

(2) 2 学年から 3 学年への進級条件

- ① 1 学年で履修できる外国語系科目および留学生用日本語科目を除く必修科目 33 単位を修得していること。
- ② 2 学年で履修できる外国語系科目を除く必修科目 43 単位のうち、すべての実習科目 (5 単位)を含む 37 単位以上修得していること。
- ③ 日本語必修科目 2 単位以上を修得していること。
- ④ 以上、①②③の全ての条件を満たしていること。

(3) 3 学年から 4 学年への進級条件

- ① 2 学年までに履修できる外国語系科目および留学生用日本語科目を除く必修科目 76 単位を修得していること。
- ② 3 学年で履修できる必修科目 40 単位のうち、すべての実習科目(4 単位)を含む 34 単位以上修得していること。
- ③ 日本語必修科目 4 単位以上を修得していること。
- ④ 以上、①②③の全ての条件を満たしていること。

(4) 4 学年から 5 学年への進級条件

- ① 3 学年までに履修できる外国語系科目および留学生用日本語科目を除く必修科目 116 単位を修得していること。
- ② 4 学年必修科目 26 単位のうち、「臨床薬学 IV(チーム医療・地域医療の実践その前に)」を除く 25 単位のすべてを修得していること。
- ③ 4 学年終了時までに日本語必修科目 5 単位すべてを修得していること。
- ④ 以上、①②③のすべての条件を満たしていること。

(5) 進級した場合

前年度の不合格必修科目については、受講し、定期試験を受け、単位を修得すること。

(6) 留年した場合

- ① 合格した科目の単位は認められる。
- ② 不合格の必修科目は再履修しなければならない。
- ③ 不合格になった選択科目は、新たに希望して選択するものとする。
- ④ 在学年限について:同一学年における在学年数を 2 年以内とする(休学期間を除く)。但し、5、6 学年は通算で 4 年間在籍できる。

科目履修条件

5、6 学年において実務実習を履修するための条件

- ① 共用試験（CBT、OSCE）に合格すること。
- ② 実務実習生にふさわしい知識・技能・態度のバランスがとれていること。

日本語履修について（留学生）

(1) 開講科目一覧

科目名	配当年次	単位			時間数
		必修	選択	自由	
作文・読解Ⅰ（入門）	1 2 3 4 5 6		1		30
作文・読解Ⅱ（応用）	1	1			30
作文・読解Ⅲ（完成）	1 2 3 4 5 6		1		30
文法・語彙Ⅰ（入門）	1 2 3 4 5 6		1		30
文法・語彙Ⅱ（応用）	1	1			30
文法・語彙Ⅲ（完成）	1 2 3 4 5 6		1		30
発表・討論Ⅰ（応用）	1	1			30
発表・討論Ⅱ（完成）	1 2 3 4 5 6		1		30
医療福祉専門漢字	1	1			30
医療福祉専門語彙	1	1			30
日本語基礎Ⅰ（初級）	1 2 3 4 5 6			1	30
日本語基礎Ⅱ（初級）	1 2 3 4 5 6			1	30

(2) 日本語科目の区分

必修科目＝必ず履修する科目（留学生全員、卒業要件に必要な単位）

選択科目＝必要に応じて履修する科目

自由科目＝必要に応じて履修する科目（単位の取得は可能だが、取得した単位は卒業要件に含まない）

(3) 履修条件

外国語の履修については、原則として日本語科目を 10 単位取得すること。

① 10 単位の内 2 単位までは日本語科目以外の 外国語科目（母国語としない外国語に限る）をもって代えることができる。

② 「外国人のための日本語能力テスト」の得点により、最大 3 単位まで認定することができる。

カリキュラムポリシー

薬学科では教育目標を学生が達成できるよう、次の方針に則り教育課程を編成・実施する。

CP1: a. 薬学の専門家として必要な知識・技能を修得するために、理論、演習、実習を相互に関連付けて科目を配置する。
 b. 薬物治療の実践的スキルを高めるために、知識・技能を統合した創発的学習を実施する。

CP2: a. 問題発見から解決する能力および科学的根拠に基づいた論理的思考力を養うために、問題解決型学習(PBL)をはじめとする能動的学習を講義、演習、実習で実施する。また、参加型実践的科目として卒業研究を配置する。
 b. 薬剤師としての総合的実践能力を身につけるために、参加体験型学習である実務実習を行う。

CP3: a. 薬剤師としてのコミュニケーション能力を養成するために、ロールプレイを含む参加型実習を行う。

b. 薬剤師の役割を理解するために、他職種との連携教育を実施する。

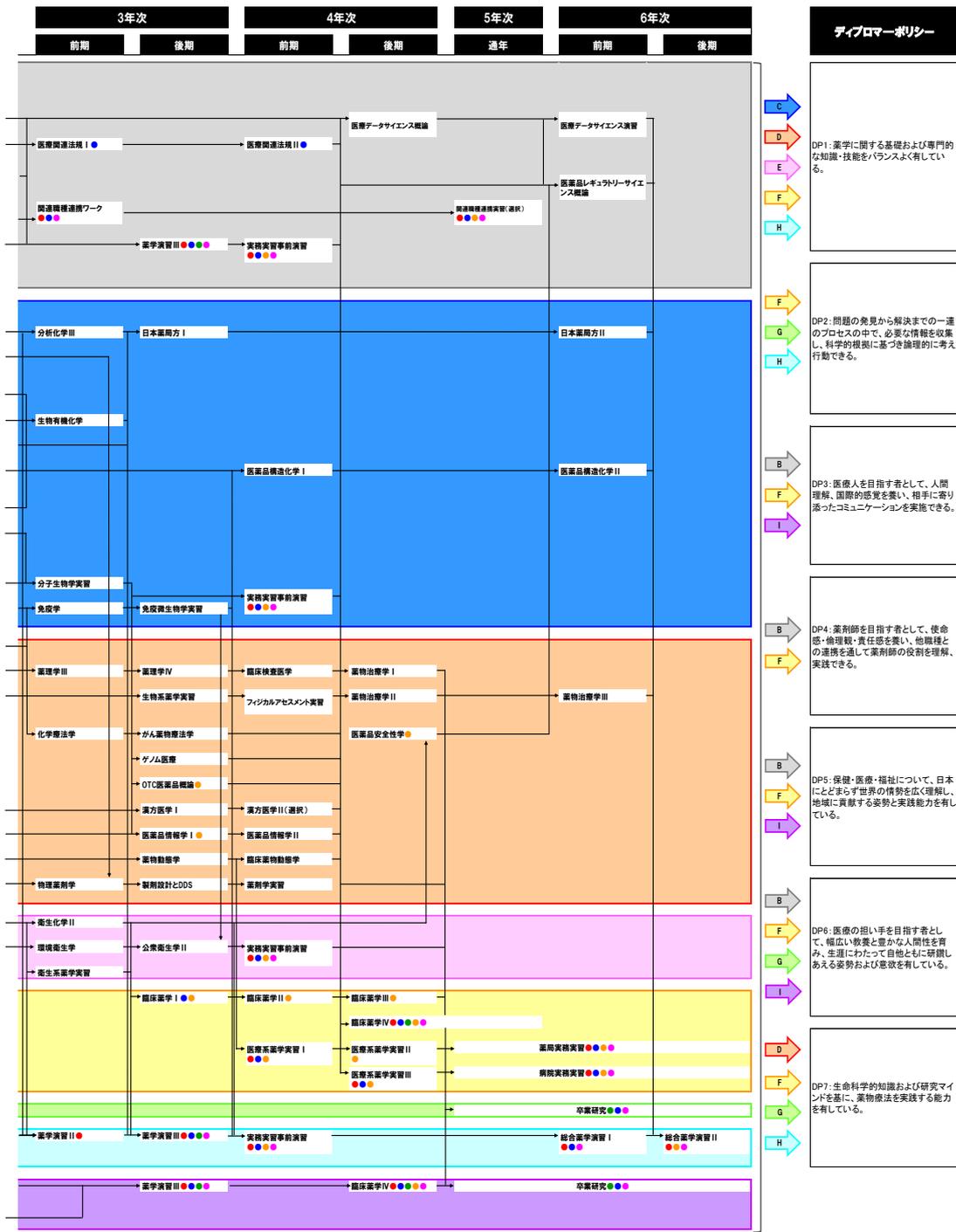
CP4: a. 薬剤師としての使命感・倫理観・責任感および豊かな人間性を涵養するために、スモールグループディスカッション(SGD)等を含めた講義、演習、体験実習を配置する。

b. 国際的な感覚を養うために、世界の保健福祉事情に熟知し、国際能力を高める機会を設ける。

c. 生涯にわたり自ら研鑽できる医療の担い手になるために、ポートフォリオを用いた形成的自己評価の機会を設ける。

学業の成績は、授業参加態度、試験成績評価、レポート評価、課題達成状況などシラバスに記載される到達目標の学習到達度を評価して判断する。

- : ヒューマンズ教育
- : 医療倫理教育
- : 語学教育
- : 国際安全教育
- : 問題解決能力養成教育



(5) 在籍者数

在籍者数（2024年5月1日現在）

学 年	薬学科		
	男	女	合計
1年生	29	108	137
2年生	38	87	125
3年生	48	89	137
4年生	40	76	116
5年生	22	60	82
合 計	177	420	597

(6) 学事日程

2月9日（金）	オリエンテーション（5年生）
2月19日（月）	令和6年度第Ⅰ期実務実習開始（～5月5日）
4月3日（水）	入学式 学科別保護者懇談会
4月4日（木）	薬学共用試験（C B T）実力試験（4年生） オリエンテーション（新入生・4年生）
4月5日（金）	プレースメントテスト（新入生） 在校生オリエンテーション（2・3年生）
4月6日（土）	オリエンテーション（新入生）
4月8日（月）	前期授業開始
4月～5月	チューター面談
5月1日（水）	大学創立記念日
5月5日（日）	令和6年度第Ⅰ期実務実習終了（5年生）
5月13日（月）	令和6年度第Ⅰ期実務実習報告会（5年生） 就職ガイダンス（5年生）
5月18日（土）	運動会
5月19日（日）	オープンキャンパス
5月20日（月）	令和6年度第Ⅱ期実務実習開始（～8月4日）
6月14日（金）、21日（金）	科目別テスト（3年生）
6月29日（土）	関連職種連携ワーク報告会（3年生）

7月7日(日)	オープンキャンパス
7月9日(火)	動物実験・組換えDNA実験 教育訓練
7月19日(金)	前期授業終了
7月20日(土)ー7月31日(水)	前期定期試験期間(予備日含む)
8月3日(土)	オープンキャンパス 大川市民夏祭り(地域交流)
8月4日(日)	令和6年度第II期実務実習終了(5年生)
8月1日(木)ー8月18日(日)	海外研修(夏季前半)(2年生)
8月8日(木)	令和6年度第II期実務実習報告会(5年生)
8月18日(日)	オープンキャンパス
8月19日(月)	令和6年度第III期実務実習開始(~11月3日)
8月19日(月)ー8月23日(金)	関連職種連携実習(5年生)
8月26日(月)ー8月31日(土)	前期追・再試験期間(予備日含む)
9月3日(火)ー9月4日(水)	薬学共用試験(CBT)体験受験(4年生)
9月16日(月)	第14回国際医療福祉大学学会学術大会
9月2日(月)	令和6年度 第1回キャンパス合同教員研修会
9月2日(月)ー9月18日(水)	海外研修(夏季後半)(2年生)
9月19日(木)	プレイスメントテスト(1年生)
9月20日(金)	後期授業開始
9月ー10月	チューター面談
10月12日(土)ー10月13日(日)	大学祭(第20回月華祭) 教育後援会 会員のつどい(12日) 学科別懇談会、個別面談(12日)
10月21日(月)	卒業研究配属(4年生)
11月3日(日)	令和6年度第III期実務実習終了(5年生)
11月8日(金)	令和6年度第III期実務実習報告会(5年生)
11月9日(土)	就職説明会
11月18日(月)	令和6年度第IV期実務実習開始(~2月9日)
11月20日(水)ー11月21日	後期定期試験期間(4年生)
11月14日(木)、21日(木)、28日	解剖見学実習 (1年生:21日・28日、2年生:14日)
12月3日(火)	薬学共用試験(CBT)本試験(Aクラス)
12月4日(水)	薬学共用試験(CBT)本試験(Bクラス)
12月18日(水)	科目別テスト(3年生)

12月22日(日)	薬学共用試験(OSCE)本試験
12月28日(土)ー1月5日(日)	冬期休暇期間
1月6日(月)ー1月7日(火)	後期定期試験追再試験期間(4年生)
1月14日(火)	後期授業終了
1月16日(木)ー1月27日(月)、31日	後期定期試験期間(予備日含む)
2月9日(日)	令和6年度第IV期実務実習終了(5年生)
2月10日(月)ー2月15日(土)	後期追・再試験期間(予備日含む)
2月25日(火)	令和6年度第IV期実務実習報告会(5年生)
3月17日(月)	令和6年度第2回キャンパス合同教員研修会

(7) 主な学事

1) 入学式(ようこそ国際医療福祉大学 福岡薬学部へ)

令和6年度国際医療福祉大学の入学式が、令和6年4月3日(水)11:00~ 大川キャンパス・図書館講堂棟3階講堂において挙行されました。薬学部は、開設5年目にあたり、5回目の新入生になります。新入生127名は、鈴木康裕学長および高木邦格理事長からの式辞に熱心に耳を傾け、これから訪れる6年間の学生生活に思いを巡らせていたのではないかと思います。在校生が増え、活気にあふれる薬学部で、同級生、先輩、教職員とともに、目標に向かって充実した学生生活を過ごしてほしいと思います。

新入生保護者懇談会

実施日: 4月3日

【実施概要】

昨年と同様に本年度も入学式の後、新入生学科別保護者懇談会を開催した。本会は主に福岡薬学部学生委員会が運営を担当した。2号館101教室にて、新入生とその保護者が参加し、家入学部長の挨拶の後、福岡薬学部の教員紹介を行なった。さらに各担当教員より教務、実務実習、学生生活関連の説明を行なった。

【自己点検・評価】

新入生学科別保護者懇談会は運営面において大きな問題はなかった。保護者からの質問はなかったが、対面にて福岡薬学部の内容紹介および教員紹介を行うことができ、保護者との関係構築に繋がったと考えている。また、学生と各担当チューターとの顔合わせをすることができ、学生の新生活への不安軽減に多少なりとも繋がったと考える。

【今後の対応】

今年度も参加者への対応および運営はスムーズに行えた。今後は事前に保護者の質問や要望を募集した上で、保護者が本当に知りたい内容を説明するなど検討が必要と考える。

2) 保護者懇談会

実施日：10月12日

【実施概要】

昨年度と同様に、本年度秋に大川キャンパス「教育後援会 会員のつどい」の後、学科別懇談会を開催した。本会は主に福岡薬学部学生委員会が運営を担当した。70組の保護者が参加し、家入学部長の挨拶の後、教務、学生生活関連の報告を行なった。その後、希望する保護者33組に対し、チューター担当教員による対面での個別面談を実施した。

【自己点検・評価】

今回は開校以来、3度目の秋の保護者懇談会であった。会場の設営、運営、保護者の案内ともに大きな問題はなかった。チューター担当教員による個別面談において、成績面、生活面、学生の要配慮事項についての相談があり、担当教員がそれぞれ対応し、面談記録を残している。本会により保護者との信頼関係の構築に繋がったと考えている。

【今後の対応】

昨年度より参加者が増えており、学年進行に伴い、来年度も増加することが見込まれる。円滑な運営のために、個別面談に対応する教員や会場案内に対応するスタッフを増やすなど今後の課題である。

3) オープンキャンパス

本年度のオープンキャンパスは計5回、毎日キャンパス見学会は計4回実施された。各オープンキャンパスの実施時期、対応教員、並びに来場者は以下の通りである。本年度の福岡薬学部オープンキャンパスは予約参加制とし、感染対策に配慮しながら対面かつ体験型の実施であった。来場者へは、ノベルティーを直接手渡し、一部配付資料を設置配布とした。体験型オープンキャンパスと言うこともあり、来場者はいずれも楽しんでいる様子であった。毎日キャンパス見学会では、少人数での参加であるため、パネルなどを用いた学科説明の後、質問なども丁寧に対応しながら時間をかけて学部内施設見学を行った。

オープンキャンパスの学科企画に関する改善点および自己評価は以下の通りである。

- ・来場者が増えたことから、本部での入試対策講座後、教室の移動無しに学科ガイダンスを行った後、学科体験プログラム会場への誘導を行った。
- ・例年、学生スタッフの不足が問題となっているが、本年度は卒業研究配属学生を学生スタッフとして配置することでこれを解決した。
- ・薬学部スタッフの見分けがつきにくいとの意見に対し、福岡薬学部独自にオープンキャンパス用ポロシャツを作成し、認識しやすい環境を作った。これにより、円滑な会場誘導と質問対応が行えた。
- ・昨年同様に医療系(2)、物理(1)、化学(1)、生物(1)、薬理系(1)、コミュニケーションブース(1)のブースを設置した。なお、括弧書きはブースの数を表す。本年度3月に、社会薬学系ブースを新規に設置した。
- ・新たな試みとして、会場内にフォトスポットを開設した。来場者は薬剤師になりきり写

真撮影を行っていた。特に保護者からの満足度が高かった。

- ・学部紹介用のパネルをコミュニケーションブース内の設置に変更し、来場者と在学生の交流に役立てた。
- ・医療系のブースでは、調剤手技の説明時間が必要なため予約制とした。来場者へ声のかけを心掛けることで、混雑緩和に努めた。
- ・学科体験プログラムにおいては、学生実習のある時期では4号館2階のスペースを、学生実習のない時期では4号館4階までの各系の実習室を使用した学科体験プログラムを実施した。
- ・福岡薬学部のオープンキャンパス参加人数は前年度649名に対して、今年度644名となり、昨年度と同程度の来場者であった
- ・今年度のプレミアムカレッジは前年度と同じく、薬理系、生物系、物理系の3つの分野で実施した。参加者は13高校、23名であった。

オープンキャンパス

日時	来場者	対応教員	対応学生
5月19日	60名	家入一郎、太田昭一郎、梶岡俊一、阿部義人、猪部学、石田卓巳、長谷川雄、緒方勝也、村田祐造、平木洋一、窪田香織、多田納豊、宗像達夫、吉武康之、山本緑、塚本宏樹、齊藤秀俊、一木裕子、成川佑次、宗像千恵、中矢正、今井竜也、朴珍相、磯田紀之、坂井崇亮、澤井円香、柴田健太郎、福田光良	1年生：7名 3年生：5名 4年生：2名 5年生：6名
7月7日	145名	家入一郎、西村信弘、太田昭一郎、梶岡俊一、阿部義人、猪部学、石田卓巳、長谷川雄、緒方勝也、平木洋一、窪田香織、多田納豊、宗像達夫、吉武康之、山本、塚本宏樹、齊藤秀俊、一木裕子、成川佑次、宗像千恵、中矢正、今井竜也、朴珍相、貝塚拓、磯田紀之、坂井崇亮、澤井円香、柴田健太郎、福田光良	2年生：45名 5年生：2名 大学院生：1名
8月3日	151名	家入一郎、西村信弘、太田昭一郎、梶岡俊一、阿部義人、猪部学、石田卓巳、長谷川雄、緒方勝也、村田祐造、平洋一、窪田香織、多田納豊、宗像達夫、吉武康之、山本緑、塚本宏樹、齊藤秀俊、一木裕子、宗像千恵、中矢正、今井竜也、磯田紀之、坂井崇亮、澤井円香、柴田健太郎、福田光良	2年生：35名 5年生：2名 大学院生：1名
8月18日	228名	家入一郎、西村信弘、太田昭一郎、阿部義人、猪部学、石田卓巳、村田祐造、平木洋一、窪田香織、多田納豊、宗像達夫、山本緑、塚本宏樹、齊藤秀俊、一木裕子、宗像千恵、中矢正、今井竜也、磯田紀之、坂井崇亮、	2年生：51名 4年生：1名

		澤井円香、柴田健太郎、福田光良	
3月17日	60名	西村信弘、梶岡俊一、阿部義人、猪部学、石田卓巳、緒方勝也、村田祐、平木洋一、多田納豊、宗像達夫、吉武康之、山本緑、塚本宏樹、一木裕子、成川佑次、宗像千、中矢正、今井竜也、貝塚拓、磯田紀之、坂井崇亮、福田光良	3年生：2名 4年生：2名 5年生：21名

毎日キャンパス見学会

日時	来場者	対応教員
7月29日	1組2名	宗像達夫
8月16日	1組2名	宗像達夫
11月21日	1組2名	磯田紀之
12月11日	1組2名	宗像達夫

プレミアムカレッジ

日時	来場者	対応教員
8月10日	23名	家入一郎、阿部義人、猪部学、窪田香織、斎藤秀俊、塚本宏樹、宗像達夫、中矢正、柴田健太郎

4) 国際医療福祉大学学会

第14回国際医療福祉大学学会学術年会

【実施概要】

第14回国際医療福祉大学学会学術大会が、国際医療福祉大学 成田キャンパスにて開催された。本年度も昨年度と同様、現地開催と Teams 配信を併用したハイブリット形式での開催であった。大会では、特別講演（1演題）、教育講演（1演題）、IUHW NEXT 講演会（1演題）、シンポジウムに加え、将来構想勉強会成果報告会が実施された。また、優秀演題口述発表（8演題）およびポスター発表（299演題）が行われ、参加者からの活発な意見交換が行われた。

プログラム

第14回国際医療福祉大学学会学術大会

9月16日（月）9:00～16:50

■開会式

学会長挨拶 国際医療福祉大学学会 会長 鈴木 康裕

■優秀演題口述発表Ⅰ

1. パーキンソン病におけるドパミン欠乏と細胞内鉄蓄積の関係
三浦 隆史（国際医療福祉大学 薬学部 薬学科）
2. AFO 基準に基づいた早期の治療介入は同種造血幹細胞移植後の閉塞性細気管支炎の発症
予防に有効である
中世古 知昭（国際医療福祉大学成田病院 血液内科）
3. 地域の健康危機に対応する保健師の実践力向上のためのケースメソッド教育の開発
一本大学院公衆衛生看護学実践コースで実施している演習の学びの特徴—
山谷 麻由美（国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究所 保険医療学専攻
看護学分野）
4. 糖尿病慢性合併症に対する理学療法の実態と介入効果の大規模レジストリー研究
河野 健一（国際医療福祉大学 福岡薬学部 薬学科）
座長：倉智 雅子（国際医療福祉大学 成田保健医療学部 言語聴覚学科長）

■優秀演題口述発表Ⅱ

5. 静的立位時の下方への視線配置が姿勢安定化をもたらす要因についての検討
内川 義和（国際医療福祉大学 保健医療学部 視機能療法学科）
6. 幼児期前期の子どもの行動に対する母親の認知スタイル形成
—母親の被養育体験と内的作業モデル（IWM）との関係性に着目して—
宮内 唯衣（株式会社コペル）
7. 高齢者における表情認知と認知機能の関連性：概念駆動型とデータ駆動型の比較研究
韓 侑熙（国際医療福祉大学 福岡保健医療学部 作業療法学科）
8. 糖脂質リポソーム製剤の腹腔内投与による抗腫瘍効果の検証
宮崎 淳（国際医療福祉大学成田病院 腎泌尿器外科）
座長：谷口 敬道（国際医療福祉大学 成田保健医療学部 作業療法学科長）

■教育公演Ⅰ

医薬品製剤設計への計算化学の応用と将来

演者：米持 悦生（国際医療福祉大学 成田薬学部長）

座長：三浦 裕也（国際医療福祉大学 薬学部長）

■特別公演

未来の医療—ビッグデータ解析、AI 診断、ゲノム・オミックス研究について

演者：小室 一成（国際医療福祉大学 副学長）

座長：伊豫 雅臣（国際医療福祉大学大学院 副大学院長）

■学会総会・優秀発表者表彰式

■懇親会

■ポスター発表（優秀賞受賞者・SGDs 発表）

■将来構想勉強会成果報告会

司会：西田 裕介（国際医療福祉大学 成田保健医療学部長）

■IUHW NEXT 講演会

地域包括ケアシステムにおける生成系 AI による医療介護連携

演者：坂野 哲平（株式会社アルム 代表取締役社長兼 Co-CEO）

座長：鈴木 康裕（国際医療福祉大学 学長）

■シンポジウム

多職種連携による研究の推進

司会：新井田 孝裕（国際医療福祉大学 副学長、保健医療学部長）

演者：多職種連携による放射線医学研究について

桐生 茂（国際医療福祉大学成田病院 副院長、

医学部 放射線医学教室 教授（代表））

リハビリテーション医学研究における多職種連携～世界に誇れる本学の強み～

角田 亘（国際医療福祉大学成田病院 リハビリテーション科 部長、

医学部 リハビリテーション医学教室 教授（代表））

多種医療職による学際的研究と看護の視座からの提案

井上 智子（国際医療福祉大学 成田看護学部長）

心理学的研究の立場から：研究室の活動を例に挙げて

長谷川 晃（国際医療福祉大学 赤坂心理・医療福祉マネジメント学部

心理学科 准教授）

■SDGs 表彰式・閉会式

■ポスターセッション（一般）

【自己点検・評価】

本年度より遠隔参加システムとして **Teams** を使用しており、対面と遠隔によるハイブリット開催で行われた。新たなシステムの導入もあり、リモート参加者への通信環境の維持、並びに質疑応答の際の対話環境の確保が課題であった。本年度は国際医療福祉大学成田キャンパスが主体となって学会を開催したが、各キャンパスを含め様々な場所からのアクセスに耐えうる通信環境が確保・維持できたことは、来年度以降の会の開催に向け意義のある成果となった。

【次年度に向けての改善】

次年度以降もハイブリッド型の開催を視野に入れた準備が必要であると思われる。本年度も一部システム操作の不手際から、発表が聞き取れない時間が生じるなど軽微ではあるものの不具合が生じている。**Zoom** から **Teams** へのシステムの変更に伴う一時的な不具合であると思われるが、通信環境の安定化は学会の達成に向け重要な案件であると思われる。また、本学部においては、早い段階での発表者や座長の選定、スケジュールの確認、通信環境の確保など、大会のスムーズな開催と進行に協力するための準備・点検が望まれる。

5) 第20回月華祭

実施日（期間）：10月12、13日

【実施概要】

本年度も学生を中心にメインステージでの催し物、模擬店などが準備・運営され、第20回月華祭が10月12、13日に2日間開催された。薬学部学生委員会は薬学部実行委員の選出、運営のアドバイス等を行った。

【自己点検・評価】

2日間とも晴天で、多くの参加者が来場し、大きな問題はなく実施された。薬学部学生も多数催し物、模擬店に参加しており、実行委員長も薬学部学生が行い、大いに盛り上がっていた。

【今後の対応】

次年度も本年度の経験を活かし、運営等のアドバイスや委員の選出を行っていく。

6) 保護者のつどい

実施日（期間）：10月12日

【実施概要】

学科別保護者懇談会を薬学部学生委員会が中心になって運営を担当した。71組の保護者が参加し、家入学部長の挨拶の後、教務、実務実習、学生生活関連の報告を行った。その後、チューター担当教員による対面での個別面談を実施し、27組の保護者と面談を行なった。

【自己点検・評価】

運営面においては大きな問題はなかった。懇談会では質問が出ており、学部長および担当教員が説明を行った。個別面談においては、成績面、生活面、メンタルケアなどにおける相談があり、チューターがそれぞれ対応し、面談記録を残している。これにより保護者との信頼関係の構築に繋がったと考えている。

【今後の対応】

学年進行に伴い、保護者懇談会、個別面談の人数が増えてきており、本年度は昨年度よりも20組懇談会参加が増えている。次年度は最終学年まで薬学部学生がいるため、特に面談対応が増加した場合にどうするかを考えなければならない。

7) ボランティア活動

福岡薬学部全学生の2024年4月から2025年3月におけるボランティア活動実績は、下記のとおりであった（報告協力：本学ボランティア委員会）。

(名)

入学式ボランティア	6
春の交通安全	1
20歳未満飲酒防止	1
アートフェス大川	2
おおかわ寺子屋	20
昇開橋スタンプラリー	2
田口小学校遊びボランティア	1
福岡県プレイリーダー研修2級	1
おおき放課後教室（夏休み版）	1
南筑後みらい塾	1
夏休み川口コミセン寺子屋	3
大川市民夏まつり（清掃ボランティア）	6
木の香まつりボランティア	2
第53回道守大川ネットワーク共同清掃活動	2
大川市学校合同音楽会	4
大川木工まつりモルック大会	2
復活 大川夜市	3

福岡マラソン	1
ユニセフ募金	1
聖ルチア講演会	4
こどもふゆまつり	4
第38回大川木の香マラソン大会	1
計	69

一部有償ボランティア

昨年度に比べ 50 名ほど参加人数が減少した。昨年度は、大川市民夏まつりに 50 名ほど参加していたとの記録があるものの、今年度は 6 名となっており、全体として参加人数が減少した。夏祭りには参加したものの、ボランティアの参加実績が減少している可能性がある。

福岡薬学部では前期と後期に 1 回ずつチューターが学生と面談を行う。その際、面談を通してボランティアに積極的に参加するよう指導してもらうべく、薬学部会議などを通してボランティア活動の参加方法について周知する。

8) ニュースレター（保護者通信）

【実施概要】

福岡薬学部と福岡保健医療学部では、国際医療福祉大学 大川キャンパスにて発行しているニュースレターを、本年度も 6 月、9 月、12 月の年 3 回にわたり、保護者の皆さまへ郵送いたし、薬学生および他学科の大学生生活の様子をご紹介します。また、3 月には卒業特別号を制作し、卒業式にて配布いたしました。なお、新設された福岡薬学部では、まだ卒業生がいないため、初めての卒業生は 2025 年度末を予定しております。

【自己点検・評価】

今年度は、これまで見合わせていた大学行事が再開され、学生の活動がより活発に行われました。2 年次の「海外保健福祉事情 II」における海外研修や学園祭も、従来どおりの形で実施されました。また、看護学部 5 号館が新たに完成し、これらの大学活動やイベントの様子を、多数の写真とともにニュースレターでご紹介しました。保護者の皆さまには、日頃なかなか目にすることのない学生の大学生生活を、少しでも感じていただけたものと思います。

【今後の対応】

今後も、学生たちが積極的に取り組む様々な活動の様子を、丁寧にお伝えしてまいります。保護者の皆さまに本学の取り組みへの理解をより一層深めていただけるよう、引き続き努めてまいります。

9) 地域交流

地域交流委員会の大きな活動は、大川夏祭りへの参加と地域公開講座である。大川夏祭りは2024年8月3日(土) 17:00~21:00に行われ、薬学部からは、1年生30名が参加した。また、薬学部のサークルからは屋台を出店した。

第15回大川市民夏まつり

令和6年8月3日(土)
17:00~21:00《雨天中止》

会場 国際医療福祉大学グラウンド

第15回 夏まつりプログラム

17:00~	学生ステージ 軽音・ダンス
17:45	開会式
18:00~	ステージイベント ・モッカ君体操 ・少林寺演舞 ・大川太極拳サークル ・田口こうきミニコンサート
19:45	大川市民盆踊り
20:10	抽選会
20:40	夢美組
20:50	花火
21:00	閉会

パイレーツ

落書きストリート、パイレーツチアリーディングショーなど盛りだくさん!!

キッズコーナー (小学生以下限定)※無くなり次第終了

トランポリン、チア体験、消防体験、ストラックアウト、ヨーヨー釣り・スーパーボールすくい、射的、おばけやしき など

田口こうき

◎共 催 / 大川中央商店街振興組合、学校法人 国際医療福祉大学、(一社)大川観光協会

◎主 管 / 大川市民夏まつり実行委員会

◎協 力 / NPO法人大川市コミュニティ協議会、大川活性化協議会、大川市連合女性会、大川商工会議所、大川市消防団、大川市保育協会、大川市私立幼稚園連盟、大川市区長会、久留米広域消防本部大川消防署、医療法人社団高邦会、学校法人高木学園、社会福祉法人高邦福祉会、新運輸(株)、タンスのゲン(株)

◎後 援 / 大川市、(協)福岡・大川家具工業会、(協)大川家具商業会

また、以下の地域公開講座が開催された。

第1回 2024年4月20日(土)～2024年7月13日(土) 毎週土曜日実施

●「2024年度 TOEIC 公開講座」

講師:徳江 武 准教授

第2回 2024年6月1日(土)

●「高齢者におけるタンパク質のとり方×運動習慣の重要性」

担当学科:理学療法学科

講師:松田 憲亮 准教授・劉 振 助教(太極拳講師)

第3回 2025年1月25日(土)

●「予防しましょう!～誤嚥性肺炎と認知症～」

担当学科:言語聴覚学科

講師:大内田 博文 准教授

10) 学生—チューター—面談

実施期間 前期:5月 後期:10月

【実施概要】

福岡薬学部では、学生一人ひとりに対して大学生生活に係るきめ細やかな指導を実現するために、チューター制度を取り入れている。チューターは、前期・後期の開始時期(5月、10月)に担当学生の個人面談を実施した。面談を通して、現在の生活態度や就学状況を把握するとともに、ラーニングポートフォリオを利用して卒業までの中長期的な目標について、また DP 評価表を通じてディプロマポリシーの達成度の確認を行った。1年生においては入学時面談記録によって、大学生生活のスタートに配慮した指導を行った。さらに、各学生のチューター面談記録を保存することにより、全ての学生にもれなくチューター面談を実施したことを確認している。

【自己点検・評価】

チューター面談の実施により、各学年の全ての学生の生活、学習のアドバイスを行うことができた。面談以外でも、チューターによる担当学生の指導・相談等は適時行われており、学生の相談窓口として活用されている。これまではコロナ感染の影響で行われなかったが、本年度は一部のチューターにより、担当学生を集めての親睦会が行われ、学年間のつながりを作るきっかけとなった。

【今後の対応】

次年度より、ユニバーサルパスポートの機能を利用したポートフォリオ利用が開始される。また、DP 評価表もユニバーサルパスポートを利用した形に変更する可能性もある。学生の指導・相談を中心としながら、新規に導入されるシステムを活用するように対応する。

11) ディプロマ・ポリシー (DP) 到達度評価

実施日 (期間) : 前期面談 (5 月) 後期面談 (10 月)

【実施概要】

福岡薬学部は、福岡薬学部および福岡薬学部薬学科の教育研究上の目的に基づき、学生が卒業までに身につけるべき資質・能力としてディプロマ・ポリシー(DP) を設定しており、学生が年次進行的に DP を身につけることが出来るように教育課程が編成されている。福岡薬学部 DP は、薬学教育モデルコアカリキュラムに定められている薬剤師として求められる基本的な資質・能力の 10 項目および国際医療福祉大学の特徴である国際性を加えた計 11 項目と関連させている。また、学生の内部質保証として学年ごとに DP を身につけていっているかどうかを判断する必要があるため、DP 到達度評価表による評価を行うこととしている。本年度は薬学部 1 年生は新モデルコアカリキュラムに移行したため、1 年生の DP 到達度評価表は新モデルカリキュラムに対応できるように改訂した。

具体的な方法としては、1) 各学生に DP 到達度評価表に各科目の成績を記入させる、2) 各学年の各科目を DP と関連した 11 項目に分類し、項目ごとの GPA 平均値を DP 到達度評価表上で自動的に算出する、3) チューターが後期面談時に DP 到達度評価表を確認する、という手順を行なった。確認した DP や資質などの項目の到達度に関して、チューターが助言・指導している。助言・指導の内容は面談記録に記録した。

【自己点検・評価】

本年度はほとんどの学生の DP 到達度評価をチューター面談を通じて行うことができた。前年度問題となった学生側の理解度不足の点に関しても、学生にわかりやすいマニュアルを作成したことで、改善したものと考えている。また、新モデルカリキュラムへの移行に関しても、これまでの経験も踏まえて、比較的スムーズに移行できたのではないかと考えている。

【今後の対応】

本年度よりユニバーサルパスポートの機能を利用した学習習熟度を評価できるシステムが導入される可能性がある。DP 評価表とともに双方のシステムを確認し、よりよい学習習熟度を測るシステムを構築し、内部質保証に繋げていきたいと考えている。

12) 薬学共用試験(CBT)

【実施日および実施概要】

2024年度の薬学共用試験 CBT は、体験受験 9月3日、4日、本試験 12月3日、4日、再試験 2025年2月19日に実施し、体験受験および本試験については受験者が多いため、それぞれ2クラスに分けて実施した。本試験では薬学共用試験センターの提示した合格基準に基づき、正答率60%以上を合格とし、2024年度の薬学共用試験(CBT)の合格者数は110名であった。なお、福岡薬学部の薬学共用試験・国家試験のHPにおいて、薬学共用試験センターの指示に従い、実施日程、合格者数、合格基準を記載し4月1日に公表する予定である。

【自己点検・評価】

2024年度の体験・本・再試験の実施・運営に問題は見られず、違反行為や不正行為についても発見されなかったことから、実施体制、監督業務について問題無く実施されたと考える。

【今後の対応】

薬学共用試験 CBT の実施体制、監督業務については問題が見当たらないため、来年度も今年度同様に試験実施・運営を行う予定である。一方、来年度はクライアント側のOSであるWindows10のサポートが終了することにより、新たにWindows11へと移行する必要があることから、受験環境構築を迅速に進める必要がある。また、実施体制、監督業務について問題が無いとは言え、気を抜かずに学生受験ガイダンス時での指導の徹底と、試験中の注意徹底を行うなどの対応を引き続き行う必要がある。

13) 卒業研究（研究室配属）

【自己点検・評価】

本科目は、「薬学教育モデル・コアカリキュラム」（平成25年改訂版）に基づき、学生が実験や調査研究を通じて研究の本質を体験し、科学的根拠に基づく問題解決能力を養成することを目的としている。今年度、4年生の卒業研究分野配属に際して、卒業研究分野とそれに対応する担当教員が前年同様に設定された。また、卒業研究の基本運営ルールと学生の配属方針についても前年同様の運営を行った。

分野ごとの研究テーマを募集した後、ガイダンスを実施し、学生に卒業研究分野紹介資料を配布した。これに並行して、各教員による研究紹介の時間（研究マインド養成講座）を設け、講義形式で幅広い領域の研究についての実際を学生に伝えた。その後学生の配属希望を調査し、過去の成績を基とする基本運営ルールに従い、110名の学生を各分野に配属することが決定された。卒業研究の実施記録は、学生に配布された記録ノートによって行われ、規定時間はこの記録をもとに確実に確保されることとなった。

実質的な研究活動期間は、4年次後期の2月から問題なく開始されている。

【今後の対応】

今後、各分野の担当教員主導で卒業研究活動が実施されていくが、定期的に進行状況を確認し、記録する必要があると考えている。アンケート、報告書、中間報告会等の実施の可能性を教員間で協議して質を保ちつつ安定した卒業研究運営を行っていく。

14) 動物実験・組換えDNA実験教育訓練

キャンパス合同で毎年1回、動物実験・組換えDNA実験教育訓練を実施している。令和6年度動物実験・組換えDNA実験教育訓練は、以下のとおり実施した。

主催：動物実験委員会及び組換えDNA実験安全委員会

実施日時：2024年7月9日（火） 17:00～18:30

実施方法：Teams 配信

実施内容：

第一部（教員および学生対象） 17:00～17:50

- 1) 動物実験に関する講話（17:00～17:25）（講師：辻 稔先生）
- 2) 組換えDNA実験に関する講話（17:25～17:50）（講師：小川 拓哉先生）

第二部（教員対象） 18:00～18:30

- 1) 動物実験申請等の手続きについて（18:00～18:15）（講師：辻 稔先生）
- 2) 組換えDNA実験等の手続きについて（18:15～18:30）（講師：小川 拓哉先生）

第二部 福岡薬学部会議および各委員会活動報告

1. 福岡薬学部会議

委員	<p>教員：家入、阿部、石田、猪部、太田、緒方、梶岡、川端、岸、吉良、西村、長谷川、平木、村田、山口、一木、齊藤、多田納、塚本、成川、宗像（達）、山本、吉武、窪田、今井、今村、貝塚、中矢、朴、宗像（千）、磯田、坂井、澤井、柴田、福田</p> <p>事務局：北原、沖石、東郷</p>
会議開催と内容	<p>第1回 2024年4月22日（月）16：30～18：00</p> <p>議題：</p> <p>1) 前回議事録について 第11回福岡薬学部会議議事録</p> <p>審議事項：</p> <p>1) OSCE 実施委員会 1.2024年度 OSCE 実施委員会 2) 福岡薬学部学生委員会 1.情報共有に関する同意書について 3) 福岡薬学部教務委員会 1.定期試験後の○×表公表のタイミングについて</p> <p>報告・連絡事項：</p> <p>1) 福岡薬学部教務委員会 1.議事録 2.大川キャンパス教務委員会 出席報告 3.2024年度福岡薬学部講義に関するお願い 4.衛生系薬学実習における卒研自習室、学生自習室の使用について 5.新年度オリエンテーション、Zoom 接続テストの実施について 6.4年生 CBT 実力試験結果 7.2024 共用試験について 8.講義プラス(卒研 B コース演習)の開始について</p> <p>2) 大川キャンパス教務委員会 1.議事録 3) 福岡薬学部学生委員会 1.チューター面談（DP 評価）に関して 2.留年生学習支援室利用者アンケートについて</p> <p>4) 大川キャンパス学生委員会 1.議事録 5) 大川キャンパス安全衛生委員会 1.議事録 2.大川キャンパス安全衛生計画書 6) 福岡薬学部広報学生募集委員会 1.活動報告</p>

	<p>7) 大川キャンパス臨床実習委員会</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 関連職種連携ワーク 2. 関連職種連携実習 <p>8) その他</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 福岡薬学部実務実習報告会・就職関連 2. 2024年度科目担当者について 3. 2024年度福岡薬学部委員会（案）について 4. 2024年度福岡薬学部会議日程について 5. 業務出張稟議の経費区分について <p>第2回 2024年5月27日（月）16：30～18：00</p> <p>議題：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 前回議事録について <p>第1回福岡薬学部会議議事録</p> <p>審議事項：</p> <p>なし</p> <p>報告・連絡事項：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 福岡薬学部臨床教育・実務実習委員会 <ol style="list-style-type: none"> 1. 臨床・教育実務実習関連 2) 大川キャンパス臨床実習委員会 <ol style="list-style-type: none"> 1. 議事録 3) 福岡薬学部地域交流委員会 <ol style="list-style-type: none"> 1. 大川夏祭りの準備状況、地域公開講座について 4) 福岡薬学部教務委員会 <ol style="list-style-type: none"> 1. 議事録 2. 講義プラス(卒研Bコース演習)の実施について 3. 4年生薬ゼミ講習の実施状況について 4. 3年生科目別テストの実施について 5. 新入生リメディアル教育の実施について 6. 令和7-8年度卒業研究実施について 7. 学生情報 8. 講義欠席状況 <ol style="list-style-type: none"> 5) 大川キャンパス教務委員会 <ol style="list-style-type: none"> 1. 議事録 2. 報告 6) 福岡薬学部広報学生募集委員会 <ol style="list-style-type: none"> 1. 活動報告 <ol style="list-style-type: none"> 7) 大川キャンパス学生募集広報委員会 <ol style="list-style-type: none"> 1. 議事録 8) 大川キャンパス学生委員会
--	---

<ul style="list-style-type: none"> 1.議事録 9) 大川キャンパス安全衛生委員会 1.議事録 10) 福岡薬学部 FD 委員会 1.議事録 11) 大川キャンパス FD 委員会 1.議事録 12) その他 1.福岡薬学部委員会について 2.福岡薬学部予算委員会について 3.2023 年度福岡薬学部慶弔費会計報告 <p>第 3 回 2024 年 6 月 17 日 (月) 16 : 30~18 : 00</p> <p>議題 :</p> <ul style="list-style-type: none"> 1) 前回議事録について <p>次回会議にて配信</p> <p>審議事項 :</p> <ul style="list-style-type: none"> 1) 福岡薬学部教務委員会 <ul style="list-style-type: none"> 1.低学年の研究室体験希望学生の受け入れについて <p>報告・連絡事項 :</p> <ul style="list-style-type: none"> 1) 福岡薬学部教務委員会 <ul style="list-style-type: none"> 1.議事録 2.プレイスメントテスト I 成績分析 3.4 年生「病院・薬局事前実習 I」定期試験の実施について 4.薬学共用試験 (CBT) 実施説明会参加報告 <ul style="list-style-type: none"> 2) 大川キャンパス教務委員会 <ul style="list-style-type: none"> 1.議事録 2.報告 <ul style="list-style-type: none"> 3) 第三者評価・自己点検委員会 <ul style="list-style-type: none"> 1.議事録 2.授業資料提出、自己点検・評価報告書作成依頼 3.ディプロマポリシー (DP) 達成度評価について <ul style="list-style-type: none"> 4) 大川キャンパス学生委員会 <ul style="list-style-type: none"> 1.委員会報告 <ul style="list-style-type: none"> 5) 福岡薬学部広報学生募集委員会 <ul style="list-style-type: none"> 1.活動報告 <ul style="list-style-type: none"> 6) 大川キャンパス安全衛生委員会 <ul style="list-style-type: none"> 1.議事録 <ul style="list-style-type: none"> 7) 大川キャンパス防災対策委員会 <ul style="list-style-type: none"> 1.議事録 <ul style="list-style-type: none"> 8) 大川キャンパスボランティア委員会 <ul style="list-style-type: none"> 1.議事録

<p>9) 福岡薬学部臨床教育実務実習委員会 1.臨床・教育実務実習関連</p> <p>10) 福岡薬学部 OSCE 実施委員会 1.2024 年度薬学共用試験 OSCE 実施説明会 参加報告</p> <p>11) その他 1.福岡薬学部委員会について</p> <p>第4回 2024年7月22日(月) 16:30~18:20 議題: 1) 前回議事録について 第2回福岡薬学部会議議事録 第3回福岡薬学部会議議事録 審議事項: 1) 福岡薬学部教務委員会 1.低学年の研究室体験希望学生の受け入れについて 2) 福岡薬学部第三者評価・自己点検委員会 1.2023年度自己点検・評価報告書について 3) 福岡薬学部広報学生募集委員会 1.オープンキャンパス時の自習室使用禁止に関して 4) 福岡薬学部 1.施設・設備委員会の設置 報告・連絡事項: 1) 大川キャンパス地域交流委員会 1.大川市民夏まつりについて 2.2024年度第2回地域公開講座について 2) 福岡薬学部教務委員会 1.議事録 2.前期成績確認スケジュールについて 3.定期試験監督について 4.CBT 体験受験、模試、本試験監督について 5.定期試験ガイダンスについて 6.2024年度卒業研究配属およびガイダンス等について 3) 大川キャンパス教務委員会 1.議事録 4) 福岡薬学部第三者評価・自己点検委員会 1.議事録 2.2023年度後期授業資料点検結果 5) 福岡薬学部学生委員会 1.保護者懇談会に関して 6) 大川キャンパス学生委員会 1.議事録 7) 福岡薬学部広報学生募集委員会</p>
--

<p>1.議事録 8) 大川キャンパス安全衛生委員会 1.議事録 9) 大川キャンパス防災対策委員会 1.議事録 10) 福岡薬学部臨床実習委員会 1.臨床教育・実務実習関連 11) 大川キャンパス臨床実習委員会 1.議事録 12) 2024 年度第 1 回福岡薬学部 FD 活動 「教授法：日本薬局方」講師：一木 裕子 准教授</p> <p>臨時福岡薬学部会議 2024 年 9 月 2 日（月）16：30～17：30 審議事項： 1) 大川キャンパス地域交流委員会 1.大川小学校体験授業依頼について 2) 福岡薬学部教務委員会 1.2024 年度前期成績判定 報告・連絡事項： なし</p> <p>第 5 回 2024 年 9 月 24 日（火）16：30～18：00 議題： 1) 前回議事録について 第 4 回福岡薬学部会議議事録 臨時福岡薬学部会議議事録 審議事項： なし 報告・連絡事項： 1) 福岡薬学部教務委員会 1.議事録 2.1～3 年生教務ガイダンス（後期）資料 3.共用試験センターCBT 体験受験の結果について 4.CBT 対策ミーティングの議事録と CBT 演習の開始 5.3 年生科目別テストの結果について 6.後期の薬ゼミ CBT 対策講習開始 7.2024 年度卒業研究配属について 8.卒研生等による 4 号館設備の時間外使用等について 9.進路志望アンケートの実施について 2) 大川キャンパス教務委員会 1.議事録</p>
--

<p>2.報告</p> <p>3) 大川キャンパス臨床実習委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>4) 福岡薬学部地域交流委員会</p> <p>1.大川小学校交流について</p> <p>5) 福岡薬学部学生委員会</p> <p>1.DP 評価表に関して</p> <p>2.令和 6 年度保護者懇談会について</p> <p>6) 大川キャンパス学生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>7) 福岡薬学部広報学生募集委員会</p> <p>1.活動報告</p> <p>8) 大川キャンパス安全衛生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>9) 福岡薬学部 F D 委員会</p> <p>1.活動報告</p> <p>10) その他</p> <p>1.2025 年度科目担当者について</p> <p>2.建物運用委員会の発足に関して</p> <p>第 6 回 2024 年 10 月 21 日 (月) 16 : 30 ~ 18 : 00</p> <p>議題 :</p> <p>1) 前回議事録について</p> <p>第 5 回福岡薬学部会議</p> <p>審議事項 :</p> <p>なし</p> <p>報告・連絡事項 :</p> <p>1) 福岡薬学部教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.2024 年度後期進級判定スケジュール</p> <p>3.2025 年度卒業研究配属について</p> <p>4.4 年生 CBT 模試 (9/17-18 実施および 10/7-8 実施)の結果について</p> <p>5.進路志望アンケート(1-3 年)の最終結果について</p> <p>6.2024 年度九州大学解剖見学実習について</p> <p>7.学生情報の追加について</p> <p>2) 大川キャンパス教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.報告</p> <p>3) 大川キャンパス学生委員会</p> <p>1.心の相談室に関して</p> <p>2.まごごろ駐車場に関して</p> <p>4) 福岡薬学部広報学生募集委員会</p>

	<p>1.活動報告</p> <p>5) 大川キャンパス安全衛生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>6) 大川キャンパスFD委員会</p> <p>1.報告・連絡事項</p> <p>7) 福岡薬学部臨床教育・実務実習委員会</p> <p>1.実務実習に関して</p> <p>8) 福岡薬学部就職委員会</p> <p>1.福岡薬学部就職説明会に関して</p> <p>9) その他</p> <p>1.新規メーリングリスト移行に伴うメールアドレス確認事項</p> <p>2.委員会に関して</p> <p>第7回 2024年11月18日(月) 16:30~18:00</p> <p>議題:</p> <p>1) 前回議事録について</p> <p>第6回福岡薬学部会議議事録</p> <p>審議事項:</p> <p>なし</p> <p>報告・連絡事項:</p> <p>1) 福岡薬学部教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.2025年度用2年生シラバスの新カリ学習事項割り当て準備</p> <p>3.4年生CBT模試(11/14-15)の結果について</p> <p>4.6年生授業計画および講習、模試等について</p> <p>5.後期授業の学生出席状況について</p> <p>6.第IV期講義プラス(5年生)リマインド</p> <p>2) 大川キャンパス教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.会議報告</p> <p>3) 大川キャンパス学生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>4) 福岡薬学部広報学生募集委員会</p> <p>1.活動報告</p> <p>5) 大川キャンパス学生募集・広報委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>6) 大川キャンパス安全衛生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>7) 福岡薬学部臨床実習委員会</p> <p>1.3期、第4期実務実習について</p> <p>8) 福岡薬学部就職委員会</p> <p>1.活動報告</p>
--	--

<p>9) 福岡薬学部 OSCE 実施委員会 1.2024 年度 OSCE について</p> <p>10) その他 1.2024 年度公的研究費の適正使用に関する注意喚起</p> <p>第 8 回 2024 年 12 月 22 日 (月) 16:30~18:00 議題: 1) 前回議事録について 次回会議にて配信 審議事項: なし 報告・連絡事項: 1) 福岡薬学部教務委員会 1.議事録 2.後期定期試験・期間外試験・4 年追再試験・前期追再試験・ 模試・TOEIC 試験の監督・補助監督について 3.後期定期試験ガイダンス(1~3 年)の実施について 4.2024 年度 4 年生 CBT 試験結果 5.2025 年度 6 年生授業スケジュール等について 2) 大川キャンパス教務委員会 1.議事録 2.報告 3.医療福祉学部(大田原)への転学部について 3) 大川キャンパス学生委員会 1.議事録 4) 福岡薬学部広報学生募集委員会 1.活動報告 5) 大川キャンパス学生募集広報委員会 1.議事録 6) 大川キャンパス安全衛生委員会 1.議事録 7) 福岡薬学部ボランティア委員会 1.議事録と大川市長賞の説明 8) 大川キャンパス F D 委員会 1.報告・連絡事項 9) 福岡薬学部建物運用委員会 1.議事録 2.委員一覧 3.建物運用申し合わせについて 10) その他 1.教員研究費の使用について 2.助教の公募について</p>

第9回 2025年1月20日(月) 16:30~18:00

議題:

1) 前回議事録について

第7回福岡薬学部会議議事録

第8回福岡薬学部会議議事録

審議事項:

なし

報告・連絡事項:

1) 福岡薬学部教務委員会

1. 議事録

2. 2025年度学年暦および実習予定案について

3. 2024年度九州大学 解剖見学実習(1年生、2年生) アンケート集計結果

4. 2025年度4年生の病院薬局事前実習I/CBT対策講習について

5. 2025年度リメディアル教育について

6. 2025年度4年生の薬学演習

7. 2025年度5年生卒研ガイダンス資料について

8. 6年生の総合薬学演習に関するガイダンス資料について

9. 5年生の模試時間割訂正について

2) 大川キャンパス教務委員会

1. 議事録

2. 報告

3) 大川キャンパス学生委員会

1. 議事録

4) 福岡薬学部広報学生募集委員会

1. 活動報告

5) 大川キャンパス安全衛生委員会

1. 議事録

6) 福岡薬学部臨床教育・実務実習委員会

1. 実務実習について

7) 大川キャンパス臨床実習委員会

1. 議事録

8) 福岡薬学部OSCE実施委員会

1. 実施・結果報告

9) その他

1. ケムドロの運用に関して

第10回 2025年2月25日(火) 16:30~18:00

議題:

	<p>1) 前回議事録について 次回会議にて通常・臨時分まとめて配信 審議事項： なし 報告・連絡事項： 1) 福岡薬学部教務委員会 1.議事録 2.2024 年度福岡薬学部前期科目授業資料点検結果 3.6 年生卒業研究発表について 2) 大川キャンパス教務委員会 1.議事録 2.報告 3) 福岡薬学部学生委員会 1.学生情報に関して 2.保護者懇談会に関して 4) 大川キャンパス学生委員会 1.議事録 5) 福岡薬学部広報学生募集委員会 1.活動報告 6) 大川キャンパス安全衛生委員会 1.議事録 7) 大川キャンパス防災対策委員会 1.議事録 8) 大川キャンパス地域交流委員会 1.議事録 9) 福岡薬学部臨床実習・実務実習委員会 1.実務実習関連報告事項 10) 大川キャンパスFD委員会 1.報告・連絡事項 11) その他 1.講演会開催について 12) 2024 年度第 2 回福岡薬学部 FD 活動 「薬学部入試の現状について」講師：神塚 泰史 事務部部长</p> <p>臨時福岡薬学部会議 2025 年 2 月 19 日（水）16：30～17：00 審議事項： 1) 福岡薬学部教務委員会 1.2024 年度後期成績判定 報告・連絡事項： なし</p>
--	--

	<p>第 11 回 2025 年 3 月 21 日 (火) 16 : 30～17 : 30</p> <p>議題 :</p> <p>1) 前回議事録について</p> <p>第 9 回福岡薬学部会議</p> <p>審議事項 :</p> <p>なし</p> <p>報告・連絡事項 :</p> <p>1) 福岡薬学部教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.新入生プレイスメントテストについて</p> <p>3.新入生リメディアル教育について</p> <p>4.3 年生科目別テストについて</p> <p>5.新入生 Teams 接続テストについて</p> <p>6.4 年生時間割について</p> <p>7.6 年生時間割について</p> <p>8.6 年生ガイダンス資料について</p> <p>9.全国統一模試 III(5 年生)の結果について</p> <p>10.来年度の実習スケジュールについて</p> <p>2) 大川キャンパス教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.報告</p> <p>3) 福岡薬学部第三者評価・自己点検委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.2024 年度福岡薬学部自己点検・評価報告書の作成スケジュールの確認</p> <p>4) 大川キャンパス学生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>5) 福岡薬学部広報学生募集委員会</p> <p>1.活動報告</p> <p>6) 大川キャンパス地域交流委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>7) 福岡薬学部 F D 委員会</p> <p>1.令和 6 年度第 2 回福岡薬学部 FD 活動報告</p> <p>8) 大川キャンパス F D 委員会</p> <p>1.連絡・報告事項</p> <p>9) 福岡薬学部臨床実習・実務実習委員会</p> <p>1.実務実習、および共用試験 (OSCE) 関連</p> <p>10) その他</p> <p>1.2025 年度福岡薬学部会議日程 (案)</p>
--	--

2. 福岡薬学部教務委員会

委員	猪部学 (委員長、教授)、多田納豊 (副委員長、准教授)、阿部義人 (教授)
----	--

	西村信弘（教授）、平木洋一（教授）、宗像達夫（准教授）、塚本宏樹（准教授）、吉武康之（准教授）、齊藤秀俊（准教授）、成川佑次（准教授）、宗像千恵（講師）、貝塚拓（講師）、坂井崇亮（助教）、澤井円香（助教）、柴田健太郎（助教）、福田光良（助教）
所管事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ 薬学教育カリキュラムの点検および改善・改革 ・ 各学年の成績集計・分析および進級・卒業要件達成度の確認 ・ 履修状況の確認 ・ シラバス作成の取り纏め ・ 各種試験（定期試験、模擬試験等）の調整・実施 ・ 卒業研究（卒研生配属、卒研発表会運営、卒論取り纏め、成績評価等）の調整・実施 ・ 薬剤師国家試験対策の企画・運営 ・ 薬学共用試験(CBT・OSCE)対策の企画・運営 ・ 教務ガイダンスの調整・実施 ・ 保護者への学習に関する報告 ・ 事務部教務係および福岡保健医療学部との連携 ・ 薬学部会議への報告・議案上程 ・ 当委員会活動の自己点検および報告書作成 ・ その他、福岡薬学部の教務に係る事項
活動概要 (委員会開催と内容)	<p>第 1 回 2024 年 4 月 16 日（火） 14:40-16:15</p> <p>議題：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 薬教務委員会(3/12)議事録 2. 大川教務委員会(4/4)報告 3. 役割分担案 4. 2024 年度福岡薬学部講義に関するお願い 5. 衛生系薬学実習における卒研自習室(4204 教室)の使用について 6. 新年度オリエンテーション、Zoom 接続テストの実施について 7. 2024 年度委員会日程 8. 4 年生 CBT 実力試験結果 9. 2024 共用試験について 10. その他 <p>第 2 回 2024 年 5 月 21 日（火） 14:40-17:30</p> <p>議題：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 薬教務委員会(4/16)議事録 2. 大川教務委員会(4/4)議事録および(5/7)報告

3. 4年生薬ゼミ講習の受講状況について
4. 3年生科目別テスト受験希望者数について
5. 新入生リメディアル教育の実施について
6. 学生情報
7. 低学年の研究室体験希望学生の受け入れについて
8. 学生の講義欠席状況について
9. 令和7-8年度卒業研究実施について
10. 2024年度委員会日程
11. その他

第3回 2024年6月10日（月） 16:20-17:50

議題：

1. 薬教務委員会(5/21)議事録
2. 大川教務委員会(5/7)議事録および(6/4)報告
3. 2023年度後期授業資料の点検について
4. プレイメントテストI成績分析
5. 低学年の研究室体験希望学生の受け入れについて
6. 4年生「病院・薬局事前実習I」定期試験の実施について
7. 定期試験ガイダンス資料の確認スケジュールについて
8. その他

第4回 2024年7月16日（火） 14:40-16:00

議題：

1. 薬教務委員会(6/10)議事録
2. 大川教務委員会(6/4)議事録および(7/2)報告
3. 前期成績確認スケジュールについて
4. 定期試験監督(敬称略)について
5. CBT体験受験、模試、本試監督(敬称略)について
6. 2023後期授業資料の点検結果について
7. 定期試験ガイダンス資料について
8. 低学年の研究室体験希望学生の受け入れについて
9. 2024年度卒業研究配属およびガイダンス等について
10. その他

臨時 2024年9月2日（月） 13:00-13:50

議題：

1. 前期成績確認
2. その他

第 5 回 2024 年 9 月 17 日 (火) 14:40-16:00

議題：

1. 薬教務委員会(7/16)、臨時教務委員会(9/2)議事録
2. 大川教務委員会(7/2)議事録および(9/9)報告
3. 教務ガイダンス資料
4. 2024 年度卒業研究配属、4 号館研究室の時間外使用について
5. 後期の薬ゼミ CBT 対策講習開始
6. 薬学演習 (CBT 演習) の開始
7. 3 年生科目別テストの結果について
8. 共用試験センターCBT 体験受験の結果について
9. 進路志望アンケートの実施について
10. その他

臨時 2024 年 10 月 8 日 (火) 13:00 -13:35

議題：

1. 総合型選抜 I 期(10/5)の合格者案について
2. その他

第 6 回 2024 年 10 月 15 日 (火) 14:40-15:15

議題：

1. 薬教務委員会(9/17)、臨時教務委員会(10/8)議事録
2. 大川教務委員会(9/9)議事録および(10/1)報告
3. 2024 年度後期進級判定スケジュール
4. 2024 年度卒業研究配属について
5. 進路希望アンケート 2024 1-3 年最終結果について
6. その他

第 7 回 2024 年 11 月 11 日 (月) 16:20~17:45

議題：

1. 薬教務委員会(10/15)議事録
2. 大川教務委員会(10/1)議事録および(11/5)報告
3. 2025 年度用 2 年生シラバスの新カリ学習事項割り当て準備
4. 授業の出席状況

5. 第Ⅳ期講義プラス (5年生) リマインド
6. その他

第 8 回 2024 年 12 月 16 日 (月) 16:20～17:20

議題：

1. 薬教務委員会(11/11)議事録
2. 大川教務委員会(11/5)議事録および(12/3)報告
3. 前期授業保管資料の点検について
4. 後期定期試験・期間外試験・4年追再試験・前期追再試験・模試・TOEIC試験の監督・補助監督について
5. 2024年度九州大学解剖見学実習(1年生、2年生) アンケート集計結果
6. 2024CBT 試験結果
7. 後期定期試験ガイダンス
8. その他

第 9 回 2025 年 1 月 14 日 (火) 16:20～17:20

議題：

1. 薬教務委員会(12/16)議事録
2. 大川教務委員会(12/3)議事録および(1/7)報告
3. 2025年度学年暦および実習予定案
4. 2025年度4年生の病院薬局事前実習Ⅰ/予備校講習
5. 2025年度リメディアル教育
6. 2025年度4年生の薬学演習
7. 2025年度5年生卒研ガイダンス資料について
8. その他

臨時 2025 年 1 月 14 日 (火) 17:20～17:35

議題：

1. 4年生後期成績確認
2. その他

第 10 回 2025 年 2 月 17 日 (月) 16:20～17:20

議題：

1. 薬教務委員会(1/14)議事録
2. 大川教務委員会(1/7)議事録および(2/3)報告

	<p>3. 2024 年度福岡薬学部前期科目授業資料点検結果</p> <p>4. 卒研発表および分野再配置について</p> <p>5. 進路希望アンケート結果（1-5 年生）</p> <p>6. その他</p> <p>臨時 2025 年 2 月 18 日（火） 13:00-13:45</p> <p>議題：</p> <p>1. 後期成績確認</p> <p>2. その他</p> <p>第 11 回 2025 年 3 月 17 日（月） 16:20～</p> <p>議題：</p> <p>1. 薬教務委員会(2/17)および臨時薬教務委員会(2/18)議事録</p> <p>2. 大川教務委員会(2/3)議事録および(3/7)報告</p> <p>3. 4 月オリエンテーション資料（3 年生案）</p> <p>4. 新入生プレイスメントテストについて</p> <p>5. 新入生リメディアル教育について</p> <p>6. 3 年生科目別テストについて</p> <p>7. 4 年生時間割について</p> <p>8. 新入生 Teams 接続テストについて</p> <p>9. 全国統一模試 III の結果について</p> <p>10. 6 年生時間割について</p> <p>11. 来年度の実習スケジュールについて</p> <p>12. その他</p>
自己点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・本委員会は、福岡薬学部会議前週に定期的を開催し、薬学部内教学課題に関する討議を行った。前後期の定期試験後において、臨時委員会を開催して成績確認を行った。委員会決定事項は、福岡薬学部会議に上申して決裁を受けた。本委員会は、大川キャンパス教務委員会と密接に連携し、大川キャンパス全体の教務活動との整合性を保った。 ・シラバス記載最適化、講義・実習スケジュール調整、定期試験等の試験監督配置、定期試験後の進級判定資料作成、学生の講義出欠状況の確認、学生への教務ガイダンス、リメディアル教育の企画・実行など、学生の学修が円滑かつ効果的に進むよう活動を進めた。 ・本学薬学部は、令和 7 年度に完成年度を迎え、1 期生が 6 年に進級する。6 年次カリキュラムは、次年度に初めて開講されるため、教務関係上必要な手配等を実施し、準備を進めた。

	・半期毎の各科目の講義資料・成績評価資料の点検作業を第三者評価・自己点検委員会と連携して本委員会が担った。
今後の対応	新6年生のカリキュラムが、円滑に実施されるように、これまでの準備を継続し、年度途中においても必要な対応をとる必要がある。また、令和4年度の薬学モデルコアカリキュラムに対応するため、今年度から導入された新カリキュラムは、2年生まで進行する。カリキュラムの移行に伴う必要な措置を講じていく。これらを念頭に、来年度は初めての卒業生を無事に送り出し、完成年度を迎えたい。

3. 薬学部学生委員会

委員	阿部義人（委員長、教授）、山本緑（副委員長）、緒方勝也（教授）、岸拓也（教授）、太田昭一郎（教授）、塚本宏樹（准教授）、一木裕子（准教授）、貝塚拓（講師）、朴珍相（講師）、今井竜也（講師）、磯田紀之（助教）、柴田健太郎（助教）、
所管事項	<p>【年中業務】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己点検および報告書作成 <p>【学生指導】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生主導行事の準備、運営の支援（大学祭、運動会、新入生歓迎会） ・チューター活動の運営 <p>【生活指導】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題発生時の学生生活の指導(交通安全、地域社会における生活等) ・修学困難な学生の把握および支援並びに対応手順の作成および周知 <p>【修学指導】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成績不振学生等への三者面談(保護者・学生・チューター)実施 <p>【健康管理】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康(ハラスメント、心身症、予防接種、学生体調管理アンケート、配慮等)に関する状況把握 <p>【教育後援会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育後援会幹事の選出 ・保護者懇談会の運営 <p>【課外活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・部活動、サークル活動の支援
活動概要 (委員会開催と内容)	<p>第1回 2024年7月16日（火） 11:00 – 12:00</p> <p>【議題】</p> <p>1. 保護者懇談会について 2. 学生指導費の利用について 3. 健康診断の対応に関して 4. 配慮学生の取り扱いについて 5. その他</p>

	<p>【報告】 なし</p> <p>第2回 2025年2月19日（水） 11:00 – 12:00</p> <p>【議題】 1. 配慮情報の取り扱いについて 2. 保護者懇談会の開催について 3. 運動会、健康診断等の対応に関して 4. 新入生歓迎会の検討について 5. その他</p> <p>【報告】 なし</p> <p>その他活動</p> <p>1. 大川キャンパス学生委員会との連携業務 福岡薬学部学生委員 4 名は、大川キャンパスの学生委員を兼務した。毎月第一月曜に開催のキャンパス学生委員会に出席し、学科への依頼事項の窓口として対応した。さらに、キャンパス学生委員会活動内容について、学科教員への情報共有を行った。</p> <p>2. チューター活動運営 チューターに対して、前期・後期開始時期には個人面談を通してラーニングポートフォリオを確認すること、担当学生の就学・生活指導を適宜行うこと、DP 評価表にもとづきディプロマポリシーの達成度の確認することを依頼した。また、前期・後期の成績判定後に留年が確定した学生については、心情のケアや就学の意思確認、必要に応じて保護者との情報共有、などを入念に行うように依頼した。 留年生に向けて、学習支援室（ゼミ室 8）の活用やチューターとの定期面談について毎月指導した。チューターに対しても、定期的な指導を依頼した。なお、実施した全ての面談について、委員会作成の書式を用いて記録・報告するようにチューターへ依頼し、提出されたファイルを集計・保管した。1 年生入学時の学生記録用紙は取りまとめた後に、学年主任に保管を依頼した。さらに学科別保護者懇談会（10/12 開催）を運営・遂行した。</p> <p>3. 学生主導行事の準備、運営の支援（大学祭(月華祭)、運動会)を行なった。</p>
自己点検・評価	<p>大学主導・学生主導行事（学科別保護者懇談会、月華祭、運動会）が開催された。いずれの運営も特に大きな問題はなく、円滑に遂行された。委員会会議を開催し、所轄事項を円滑に遂行するように議論した。また、大川キャンパス学生委員会との連携業務および学科におけるチューター業務について</p>

	て、滞りなく活動を継続できたため、学生委員会としての目的は概ね達成したと考える。
今後の対応	大学祭、運動会などの学生イベントやチューター活動を通じた学生間のつながりを持たせるイベントのサポート業務を引き続き行っていく。また、健康管理、生活指導など学生生活のサポートや保護者懇談会等の円滑な運営を引き続き支援していく。さらに、本年度はこれまでコロナ感染で難しかった学生間の縦のつながりを考え、チューター主催の懇親会および新入生歓迎会などのサポートも行っていければと考えている。

4. 福岡薬学部 FD 委員会

委員	齊藤秀俊(委員長、大川キャンパス FD 委員兼任、准教授)、石田卓巳(副委員長、教授)、梶岡俊一(教授)、吉武康之(准教授)、中矢正(大川キャンパス FD 委員兼任、講師)、今井竜也(講師)
所管事項	<ul style="list-style-type: none"> ● 本学の基本理念と教育の目標を基盤とした独自の薬学教育の啓蒙 ● 教員の教育技法向上支援 ● 授業アンケート結果の分析と活用 ● 教育・研究実施に係る教員間の意思疎通サポートと環境整備 ● FD 委員会活動の自己点検及び報告書の作成 ● 薬学部各委員会と連携した薬学部課題の抽出、およびそれを題材とする研修会の開催
活動概要 (委員会開催と内容)	<p>1. 薬学部 FD 活動：年 2 回実施</p> <p>第 1 回(7/22、26 人出席、出席率 79%)：薬学部必修科目のうち学生アンケート結果のスコアが最も高かった一木裕子准教授より「教授法：日本薬局方」と題し、講義の進め方や工夫について発表して頂いた。</p> <p>第 2 回 2/25、23 人出席、出席率 74%)：本学事務部部长、神塚 泰史氏をお招きし、「薬学部入試の現状について」と題し、現代の医療系学部における地域ごとの受験人口の遷移や将来予想をふまえ、今後の入試に対する議論点等をお話し頂いた。</p> <p>なお、欠席教員に向けて後日説明資料の配布を行った。</p> <p>2. 大川キャンパス FD 活動</p> <p>大川キャンパス FD 活動：全キャンパスにおける 2 回の合同教員研修会 (9/2、3/17) に加え、科研費獲得経験談(7/16)、学内教員に学ぶ教授法(10/15)に参加した。</p>
自己点検・	本学の FD 活動は薬学部内での開催に加え、大川キャンパス内、全キャンパス内

評価	でそれぞれ企画されている。本学部には様々な背景を持つ教員が在籍しているため、FD 活動では薬学部の枠組みの中で今後目指すべきベクトルを共有できる内容を企画した。活動後のアンケート結果において企画内容に対する評価は総じて高く、我々が企画・実施している FD 活動は、新設学部である本学の薬学教育遂行に一定の役割を果たすことができていると考えている。
今後の対応	来年度は最高学年が 6 年生となり、福岡薬学部としては初の卒業生輩出、薬剤師国家試験受験に対応することになる。学生達が臨床で活躍するためにはどのような教育や対策を日々行っていくのが最適か考えつつ、FD 活動を通して我々も薬学教育の専門家としてさらなるグレードアップを目指したい。

5. 福岡薬学部教育・研究支援委員会

委員	石田卓巳（委員長、教授）、阿部義人（副委員長、教授）、川端猛夫（教授）、岸拓弥（教授）、吉良潤一（教授）、村田祐造（教授）、朴珍相（講師）、中矢正（講師）、磯田紀之（助教）、坂井崇亮（助教）
所管事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究費申請の啓発 ・ 教員の研究・教育業績（論文、総説、著書、学会発表、講演、担当科目等）のとりまとめ ・ セミナーおよび研究会の企画・実施 ・ 研究の支援 ・ 当委員会活動の自己点検および報告書作成
活動概要 （委員会開催と内容）	なし
自己点検・評価	研究・教育支援委員会では、研究の支援や業績の取りまとめなど薬学部教員の研究・教育に関する内容を審議し福岡薬学部教員会議に提議・報告している。本年度は、第 14 回国際医療福祉大学学会学術大会（9/16 開催）における協力体制の構築、並びに年度毎にまとめられる第三者評価・自己点検報告書の研究活動報告書について、書式を第三者評価・自己点検委員会会議に提議し決定すると共にその取りまとめを行なった。また、本年度は議題等の提案がなされなかったため会議を開催しなかった。
今後の対応	本学学会学術年会における協力体制の構築については、来年度も継続して対応する予定である。次年度以降も他の委員会との連携を図りながら、本委員会が掲げた所管事項に伴い研究支援活動を行う。

6. 福岡薬学部広報・学生募集委員会

委員	宗像達夫(委員長、准教授)、平木洋一(教授)、窪田香織(准教授)、磯田紀之(助教)、坂井崇亮(助教)、澤井円香(助教)、福田光良(助教)
所管事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ オープンキャンパスにおける学科宣伝と体験企画の考案・実施 ・ 高校模擬講義、高校訪問、進学相談会担当者調整 ・ 学生募集・広報委員会参加 ・ 薬学部パンフレット/大学パンフレットの作成と校正 ・ 薬学部ホームページの情報追加と変更依頼 ・ 薬学部フォーラムの対応と内容調整 ・ その他の広報媒体への学生の手配、原稿の校正など ・ パンフレットなどで使用する素材集め ・ SNS 発信に向けた準備 ・ 当委員会活動の自己点検および報告書作成 ・ 高校訪問担当参与との連携
活動概要 (委員会開催と内容)	<p>委員会会議と内容</p> <p>第1回 2025年3月25日 メール審議</p> <p>議題：自己点検評価提出用文章の確認</p>
自己点検・評価	<p>本委員会は、第1回福岡薬学部会議にて設置され、福岡薬学部の広報・学生募集を主目標として活動を開始した。福岡薬学部開設5年目にあたる今年度の活動として、本委員会の所管事項制定を行い、これに沿って活動を行った。</p> <p>各所管に対する対応は以下の通り。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オープンキャンパスにおける学科宣伝と体験企画の考案・実施 <p>オープンキャンパスの学科紹介パネルの制作(5月)</p> <p>オープンキャンパス、毎日キャンパス見学会の対応教員とりまとめ(随時)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高校模擬講義、高校訪問、進学相談会担当者調整 <p>教員による高校訪問先の取りまとめ(4月)</p> <p>高校訪問先への教員の割り振り(103校対象、4/26)</p> <p>模擬講義・進学ガイダンス・大学見学・体験授業: 筑前高校(7/12)、筑紫中央高校(7/19)、久留米信愛高校(8/20)、八女学院高校(9/6)、大川樟風高校(9/13, 11/27)、佐賀北高校(9/18, 10/22)、杉森高校(9/20)、祐誠高校(10/16)、岩田高校(2/13)、東福岡高校(2/26)</p> <p>地方説明会(6/15 熊本, 6/16 大分, 6/22 鹿児島, 6/23 宮崎, 6/30 長崎)</p> <p>高校・予備校教員対象説明会(5/17 大川, 5/24 福岡)</p> <p>入試対策講座・学科相談会(10/12, 13 大川)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学生募集・広報委員会参加 <p>大学広報学生募集委員会への出席と学科報告(4月、8月、10月、11月、</p>

	<p>2月の計5回、3月24日現在)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・薬学部パンフレット/大学パンフレットの作成と校正 <p>3月24日現在、作成進行中</p> <ul style="list-style-type: none"> ・薬学部ホームページの情報追加と変更依頼 <p>福岡薬学部ホームページの変更のお願い(3/22)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・薬学部フォーラムの対応と内容調整 <p>本年度フォーラムの実施無し</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その他の広報媒体への学生の手配、原稿の校正など <p>学科紹介リーフレット校正(5/8)</p> <p>福岡薬学部パンフレット用写真撮影(12/24, 1/8)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SNS発信に向けた準備 <p>インスタグラムフォロワー(765人、3/24現在)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校訪問担当参与との連携 <p>各県参事との高校訪問計画の打ち合わせ(5/31)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当委員会活動の自己点検および報告書作成 <p>本報告書の作成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その他 <p>県別交流会(6/6)</p> <p>プレミアムカレッジの実施(8/10)</p> <p>特待奨学生選抜、一般選抜入試合格者対象相談・見学会(12/27, 12/28, 2/10, 2/11)</p> <p>以上、本年の実施の無かった薬学フォーラム以外のほぼ全ての所管について活動が行われており、当初の目的は概ね達成できたものとする。</p>
今後の対応	<p>高校訪問は108校と多くの高校に説明に行くことが出来た。また、本年度の高校訪問は、他学科と一緒に巡回する形式であったため、日程および時間調整が難しいきらいがあった。昨年度より開始したプレミアムカレッジについては、昨年より実施時期も早く、また参加者も多かった。本年度より、特待奨学生選抜、一般選抜入試合格者対象相談・見学会が実施され、見学および相談に来た参加者は大変満足をしている様子であった。しかしながら、学科内における委員会会議をほぼ設けることが出来ず、業務消化に手一杯であった。またSNSについても後半、更新が滞ってしまっていた。来年度は積極的に業務分担を行う事を考えたい。さらに来年度は状況を踏まえながら、本年度以上に活動することで、充実したものになるよう努力が必要であるとする。また、18歳人口減少による、受験生の減少も考慮に入れ、学生確保のための福岡薬学部の知名度をさらに上げることが必要である。これらについては、さらにアイデアを出す必要があり、動画やSNSなどを利</p>

	用した広報・学生募集活動を今年度以上に取り組む必要がある。
--	-------------------------------

7. 福岡薬学部第三者評価・自己点検委員会

委員	山口政俊（顧問、教授）、吉富博則（外部委員）、家入一郎（学部長）、猪部学（委員長、教授）、阿部義人（副委員長、教授）、西村信弘（教授）、石田卓巳（教授）、宗像達夫（准教授）、多田納豊（准教授）、成川佑次（准教授）、宗像千恵（講師）、中矢正（講師）、澤井円香（助教）、中村泰弘（事務部長）、横溝公紀（事務副部長）、東郷栄里（事務部）
所管事項	<ul style="list-style-type: none"> ・教育研究上の目的及び三つの方針に基づく薬学教育研究活動の自己点検・評価 ・自己点検・評価結果の教育研究活動改善への反映推進 ・自己点検・評価報告書の作成と公表 ・教育研究活動の質的・量的解析 ・薬学教育評価機構等の第三者評価受審に関する対応 ・福岡薬学部会議への報告・議案上程 ・当委員会活動の自己点検および報告書作成 ・その他、薬学教育研究活動の自己点検・評価に関する事項
活動概要 （委員会開催と内容）	<p>第 1 回 2024 年 5 月 31 日（金） 13:00-14:00</p> <p>議題：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 前回議事録 2. 2024 年度の主な活動方針および授業資料提出、自己点検・評価報告書作成依頼 3. 役割分担 4. ディプロマポリシー(DP)達成度評価について（阿部先生） 5. 2024 年度委員会スケジュール 6. その他 <p>第 2 回 2024 年 7 月 19 日（金） 13:00-14:00</p> <p>議題：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 前回議事録 2. 2023 年度自己点検・評価報告書作成状況 3. 2023 年度後期授業資料点検結果 4. その他 <p>第 3 回 2025 年 2 月 25 日（火） 13:00-14:00</p> <p>議題：</p>

	<ol style="list-style-type: none"> 1. 前回議事録 2. 2024 年度前期授業資料点検結果 3. ディプロマポリシー(DP)達成度評価について (阿部先生) 4. 2024 年度福岡薬学部自己点検・評価報告書の作成スケジュール 5. 2025 年度の主な活動方針 6. 2025 年度の第三者評価・自己点検委員会の開催について 7. その他
自己点検・評価	<p>自己点検評価・PDCA サイクル循環による教育の継続的改善： 本学福岡薬学部は、本年度開設 5 年目を迎え、来年度に完成年度を迎える。これまでに基本的な授業科目は、すべて開講され、複数年が経過している。開設初年度より、自己点検・評価の体制を整え、毎年度自己点検・評価報告書の作成を継続している。主な学事、委員会活動、必修科目、研究活動について自己点検・評価し、令和 6 年度自己点検・評価報告書についても取りまとめを実施している。それぞれの項目について主担当者は自己点検し、報告文書を 4 月はじめまでに提出し、令和 7 年 9 月を目途に 自己点検・評価報告書を最終化して、ホームページに公開する。</p> <p>講義資料、成績評価資料の点検評価： 上記同様に、本学福岡薬学部の開設時に整えた自己点検・評価のもう一つの柱は、必修科目の講義資料、成績評価資料の点検であり、各科目担当教員の PDCA の取り組みを後押しし、教員の教育力および学部全体でのレベル向上を目指している。科目責任者から提出されたエビデンス資料の点検評価は、福岡薬学部教務委員会へ委託した。点検結果、指摘事項は、各科目担当者および福岡薬学部内にフィードバックし、各科目において令和 7 年度授業改善に繋げる。</p> <p>ディプロマポリシー(DP)到達度評価： 前年度より、薬剤師としての資質を評価する到達度評価表を作成し、半期ごとのチューター面談に組み入れて DP 到達度を評価可能であることを施行している。本年度は、大学が学生のポータルサイトとして用いているユニバーサルパスポート (UNIPA) のアップグレードが検討され、ポートフォリオ機能が追加された。この機能を利用し、資質の到達度評価表の内容を UNIPA 内で実行することを検討することになった。</p> <p>外部委員からの助言： 前年度から引き続き外部委員による助言をいただき、教育活動や自己点検・評価活動を有益なものとするように進めた。</p>
今後の対応	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自己点検・評価報告書作成と改善 (PDCA サイクル循環) を継続し、教育の一層の質向上を諮る。

	<p>2. 常に教員の異動による担当教員の交代があるが、必修科目エビデンス資料の点検およびその結果の科目担当者へのフィードバックを継続して行い、教育の質を維持するとともに、一層の質向上を諮る。</p> <p>3. ディプロマポリシー (DP) 到達度評価については、UNIPA 新機能を利用した方法に移行させ、引き続き有用性を検証する。</p> <p>4. 次年度は、福岡薬学部完成年度にあたり、最初の卒業生を送り出すことになる。入学から卒業に至る過程の点検とともに、引き続き外部委員よりご助言をいただく。</p>
--	---

8. 福岡薬学部予算管理委員会

委員	家入一郎 (委員長、学部長)、阿部義人 (教授)、西村信弘 (教授)、猪部学 (教授)、長谷川雄 (教授)、石田卓巳 (教授)、吉武康之 (准教授)、斉藤秀俊 (准教授)、成川佑次 (准教授)、宗像達夫 (准教授)、宗像千恵 (講師)、北原希 (事務)
所管事項	<ul style="list-style-type: none"> ・福岡薬学部予算の立案 ・福岡薬学部予算の執行計画および執行状況の把握
活動概要 (委員会開催と内容)	本年度は予算委員会は開催していない
自己点検・評価	2025年度から、予算案作成方法および配分方法が変更になったため、学内の福岡薬学部への予算配分が決定した後、福岡薬学部内部予算案作成し、委員会を執り行う予定としている。
今後の対応	次年度の予算執行を円滑に行なっていけるように、執行状況を把握しておく。また、本年度の実績をもとにスムーズな次年度の予算案作成を目指す。

9. 薬学部建物運用委員会

委員	家入一郎 (学部長)、阿部義人 (委員長、教授)、西村信弘 (教授)、猪部学 (教授)、緒方勝也 (教授)、石田卓巳 (教授)、吉武康之 (准教授)、斉藤秀俊 (准教授)、山本緑 (准教授)
所管事項	・福岡薬学部内の各部屋 (研究エリア) の運用、部屋割りの取り決め
活動概要 (委員会開催と内容)	<p>第1回 2024年7月16日 (火) 11:00 - 12:00</p> <p>[議題]</p> <p>1. 建物運用申し合わせ (案) に関して 2. 研究室のカードキーの割り当てに関して 3. 講師室、助教室のキャビネットの割り振りに関して 4. 薬事務資料の保管に関して 5. その他</p>

	<p>【報告】 なし</p>
自己点検・評価	<p>本年度から、各研究分野に卒業研究生が配属され、各研究分野の研究が活発化しており、建物内の研究室の割り当てを行うこととなった。また研究の活性化により、建物内の施設運営に規定が必要になることもあったと考えられた。このような背景に際し、本年度は建物内施設の運用を議論できる場として、建物運用委員会を発足した。委員会においては、今後施設運営が円滑に行えるように議論を行なった</p>
今後の対応	<p>次年度も建物運用を円滑に行なっていけるよう執行状況を把握し、問題点があれば、委員会においてすみやかに議論を行うことのできるように運営していく。</p>

第三部 福岡薬学部教育活動報告

1. 令和6年度の教育実施状況と次年度へ向けて

今年度は1期生が5年次まで進級し、新たに薬局、病院における実務実習を実施した。さらに、卒業研究が始まり、学生は担当教員の指導のもと、研究活動を実施した。開設年度からこれまで継続して実施している授業科目の自己点検・評価活動は、5年目になり、PDCAサイクルによる教員の教育力向上に繋がっている。(下記「2.2024年度開講 福岡薬学部必修科目」の報告を参照)次年度は、完成年度を迎え、新たに6年次のカリキュラムがスタートする。1～5年次の内容の向上を目指すとともに、新6年生の教育を十分な準備のもとに進め、最終的に本学福岡薬学部を目指す「リサーチマインドを持った臨床に強い医療人としての薬剤師を育成する」目標を推進し、優れた薬剤師の輩出を目指す。

今年度特記すべき教育実施内容について、下記に追加する。

病院・薬局実務実習

病院及び薬局において、各11週の実務実習を実施した。実習先施設(病院・薬局)と連携して、臨床系教員を中心に学生を指導した。福岡薬学部全教職員は、巡回指導等を介して実務実習中の学生指導・支援に参画・協力するとともに、各教員は、実務実習指導・管理システムを介して、実習中の卒研担当学生をサポートした。今年度、初めての実施であったが、滞りなく終了した。

関連職種連携実習

5年次の学生が、大川キャンパスの他学科(PT、OT、ST、MT)、成田キャンパス(MD)、福岡国際医療福祉大学(NS)の7学科の学生と混成チームを作り、グループ総合病院である高木病院で、5日間実施された臨床実習に初めて参加した。本実習は、「関連職種連携論」「関連職種連携ワーク」に続く科目で、実際の臨床現場において、医療関連職種の連携のあり方を学ぶ。病院・薬局事前実習が終了してから履修するため、実務実習をさらに充実させる貴重な機会となる。ただ、選択科目であり、日程の制限もあるため、履修は一部の学生のみとなっている。

卒業研究

5年次からの2年間、学生は卒業研究に取り組むため、教員が構成する研究分野に所属する。4年生に対してリサーチマインド養成講座(各研究分野の教員による研究内容紹介等)を実施し、研究室訪問等を経て学生の分野配属を実施した。その後、実務実習期間を除く5年次の期間は、指導教員のもとで、実験あるいは調査研究を通して研究を体感し、リサーチマインド(科学的根拠に基づいて問題点を解決する力など)を養った。次年度は、引き続き研究を継続し、卒業論文の作成、卒業研究発表を実施する。

新カリキュラム（令和4年度改訂薬学モデルコアカリキュラムに対応）の導入

令和6年度入学の新1年生から、薬学教育モデル・コア・カリキュラム（令和4年度改訂 新薬学モデルコアカリキュラム）に対応したカリキュラムを導入した。従来の平成25年度版旧薬学モデルコアカリキュラムが適用される2～5年生が、1年次に履修したカリキュラムから変更になる部分があったが、問題なく実施できた。次年度は、新カリキュラム対応が2年次まで進み、旧カリキュラムと異なる部分が多くなるため、十分な準備が必要である。

自己点検評価・PDCAサイクル循環による教育の継続的改善

主な学事、委員会活動、各必修科目の教育内容および研究活動に関する自己点検評価、報告書の作成・ホームページ公開、点検結果を基にした次年度活動の改善を継続する。必修科目のエビデンス資料の収集・点検、その結果の科目担当者へのフィードバックを継続し、福岡薬学部の教育レベルの維持・向上を目指す。

ディプロマポリシー到達度評価

現在施行しているDP達成度評価表による資質の評価について、UNIPAの新機能への組み込みを予定しており、これにより、より効率的に評価を実施できるような体制を構築する。また、施行を継続することで評価法の妥当性を検証し、問題点を抽出することで、評価内容の見直しにつなげ、制度の向上を目指す。

2. 令和5年度開講 福岡薬学部必修科目

(1) 総合教育科目 人間系

科目名	心理学 (PS)	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	藤枝 恵	科目担当者			
自己点検・評価	<p>心理学的な用語の理解と説明に加え、授業の回数を重ねるたびに自己理解が深まるよう授業全体を構成した。そして、授業で学ぶ心理学に加えて、授業以外の日々の生活でも心理学の授業で学んだことを実践し、学んだことが自然と身につく、学生の対人関係スキルの向上に繋がるよう授業内容を工夫した。授業の内容が心理学であり、当てられた学生も、自分の内面について語ることに躊躇することが予想され、授業中、発表形式で学生からの意見を聞き出すことは困難である。そこで毎回 A5 サイズの用紙を配布し、質問、感想について記載してもらい回収した。そして、毎回、授業の初めに、前回の授業に対する学生の感想、質問を読み上げて、前回の授業についての補足や質問に対する詳しい説明を行った。</p> <p>毎回、学生からの質問やコメントを題材にし、授業の振り返りを行うことで、学生の理解は深まったようである。授業の終わりに提出してもらい、感想・質問の内容も、授業の回数を重ねるごとに、非常に内容の深いものとなっていった。また、学生のモチベーションを引き出すため、心理テストを多用した。</p>				
今後の対応	<p>学生が、授業中に意見を述べたり、質問したりできれば、より理解を深めることができるが、1年生ということもあり、大勢の前で発表することに慣れていない学生も多い。引き続き、授業の終わりに質問を書いて提出してもらいなど、できるだけ多くの学生の意見を聞きながら授業を進めていきたい。学生の理解の程度、興味の程度などを、毎回、授業終了時に確認し、学生の理解力と興味に応じた講義内容にすることができれば、授業は双方向性となり、学生の理解もさらに深まり、興味も広がると考えられる。また、自ら調べたり、体験したり、それを自然な形で他の学生と共有できるような授業の内容にできれば、今後の病院実習などでも役立つであろう。引き続き、ロールプレイや、グループ学習、グループワークなどを、うまく取り入れて、学生の発言の場が増えるように工夫していきたい。</p>				

科目名	コミュニケーション概論	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	中島 薫	科目担当者	中島 薫		
自己点検・評価	<p>本講義では、日常の対人関係や、対人援助場面における信頼関係を築く上で必要となるコミュニケーション技術、およびその土台となる自己・他者理解、援助技術について体験的に学び、実生活や今後の臨床実習場面で活用できることを目標としている。また今年度はヘルスコミュニケーションに関するテキストを使用し、様々な疾患についての偏見やジェンダーバイアス等についても扱い、自分自身の意識や言動を振り返る機会を設けた。具体的には、①自己意識の改善、②コミュニケーションについての知識と基礎技能習得、③対人援助場面やセルフケアとしても活用できる心理療法の体験、④ヘルスコミュニケーションの視点で疾患、家族、社会をとらえることを目的とし、テキストをベースとしながらワークシートやロールプレイ、グループワークを通じて行った。</p> <p>講義内の毎回のロールプレイやグループワークによりコミュニケーションへの苦手意識が克服されていることが、多くの学生のリフレクションシートから確認された。レポート課題では講義内で学んだ傾聴技法、自己表現技法、リラクゼーション技法のうちいずれかを生活内で試行し報告するよう求め、実生活内への活用、定着を図った。レポートでは試験前や発表前にリラクゼーションを活用しその効果の実感を得られたという報告が多く見られた。またヘルスコミュニケーションについての内容を取り入れたことで、技術習得だけでなく、その技術を実践する自分自身の患者観や援助者としての倫理にまで触れる講義となったと考えている。</p>				
今後の対応	<p>昨年度課題として挙げていた、テキスト内の事例が薬学部学生に想定される対人援助場面とややずれがあるという問題については、テキスト変更により解消されたと考えられる。ただテキスト変更が昨年度までのテキスト廃版による急なもので、新テキストが学生の手元に届くまで時間を要した。このため十分にテキストを参照しながらの講義が行えない場面もあったが、次年度は初回よりテキスト含め資料等を活用し講義を進めたい。ヘルスコミュニケーションに関する学生の関心が高いことも窺えたため、それも踏まえての講義計画の見直しも行いたい。</p> <p>リフレクションシートを通じての質疑応答は今年度も活発に行われ、学生にとっては講義内容の理解を補うだけでなく、他の学生の考えや悩みを知り共感したり、多様性を感じられたりするよい機会とな</p>				

	っていたことから、今後も継続していきたい。
--	-----------------------

(2) 総合教育科目 社会系

科目名	法学	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	今井竜也	科目担当者			
自己点検・評価	<p>例年通り、はじめに「法とはなにか」というテーマで3回授業をし、法の基本的特質についてある程度理解してもらった上で、具体的な社会問題について、法的観点からそれをどう見るのかを学び、かつ考えてもらった。</p> <p>法解釈や学説、諸制度を理解させるよりも、法や制度の持つ基本的な理念、人と社会との関係性、現代社会において直面する様々な社会問題に対し、私たちがどう考え行動するべきか、というような、法や社会のあり方の本質に迫るようなテーマ設定をし、毎時間、ランダムに受講生を指名して口頭での質疑応答を行うことに加え、ミニッツペーパーを用いた質疑応答、Google Formを用いた宿題課題への回答など、自分の意見を述べる機会をなるべく多く設けることで、「覚えることよりも考えること」を重視した、主体的な学習ができるように工夫した。</p> <p>法が扱う伝統的なテーマ(刑罰、契約、労働など)に加え、教育、環境、司法制度などの現代的なテーマも扱った。</p> <p>それに加え、今年度も医療・自然科学と社会科学の境界上にある学際的なテーマを積極的に扱ってみた。「感染症・パンデミックと法」においては、日本の感染症対策から論を起し、先のコロナ禍における「自粛要請」の法的問題について考えた。「科学・科学者と法」においては、科学と法との関係、科学的事実と法的事実の違いについて考えた。</p>				
今後の対応	<p>受講者が「難しくて堅苦しい」という先入観を持たずに、興味をもって法を学べるような内容を毎年精査しているつもりであるが、各テーマを十分理解できるよう、さらに内容や説明の仕方を精査する必要がある。古典的テーマ/現代的テーマと、うまくバランスを取りながら、法を起点として社会の諸相を見、考えられる授業を展開していきたい。</p> <p>学生の傾向として、客観性や抽象性の高い話を理解することが苦手であること、十分に復習がされず、復習のためにほぼ毎回出している宿題課題も、積極的な復習を喚起する材料として十分に機能してはいな</p>				

	いこと、理解よりも暗記に頼る傾向が強く、論述に弱いことなどが挙げられ、これらの問題傾向にどう対応していくのかということについても、引き続いて考えていく必要がある。
--	---

科目名	我が国の社会福祉・医療保障政策の知識	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	家入一郎	科目担当者	多田納豊、朴 珍相		
自己点検・評価	<p>当科目は大学の必修三科目に位置付けられ、医療系大学生として必要な我が国の社会福祉・医療保障政策への理解を深め、将来、各専門分野で活躍するために必要な基礎的な知識と能力を高めることを目的とした科目である。</p> <p>13回は各分野のプロフェッショナルの先生方によるビデオ形式の講義が実施され、2回はSGDにより、我が国の社会福祉・医療保障制度の問題点と展望について振り返りを行った。</p> <p>ビデオ形式の講義では、わが国の置かれている社会・経済状況を踏まえた医療提供体制や診療報酬制度について概要の理解や、わが国の社会福祉政策についての理解、地域福祉と地域医療構想、ソーシャルケアについてその概念などについての理解を目的とした講義がなされた。14,15回の2回にわたって実施したSGDでは、これらの内容の振り返りとともに、将来に学生自身が医療人となる事に向けて当事者意識を持ち、また問題提起能力と問題解決能力の機会となる様に、13回のビデオ講義の内容を踏まえて、日本の医療体制・制度・社会情勢の問題点をグループで話し合い抽出し、さらにその解決策を提案する内容とした。また、他者・他の班の意見を短時間で共有する手法として「ワールドカフェ」という手法を取り入れ単純な1グループ内での意見交換にならない様にした。</p> <p>授業アンケートに「全体として難しい話だったが、最後のグループワークに繋げることができてよかった」という意見があり、特に最終2回のグループワークの意味づけがしっかりできたと考えられる。</p>				
今後の対応	<p>グループワークの内容自体に大きな問題は無い様子であったので、次年度も同様の内容で実施する。ただし、グループワークの際には教室が狭いという意見が複数あったため、可能であれば別の教室の使用も視野に入れる。</p> <p>また、授業アンケートに「各回に振り返りの時間が欲しい」という意見があったが、動画による講義を短縮し、振り返りシート作成等の</p>				

	時間を設けることができると各回の理解が深まる可能性が考えられる。
--	----------------------------------

(3) 総合教育科目 自然・情報系

科目名	数学	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	安本誠一	科目担当者			
自己点検・評価	<p>医療人として実践的な能力を持つためには、教養教育、専門教育を通じた知識の習得が必要で、医療現場では「数学」的な知識や考え方が非常に重要な要素になっている。例えば、物質のエネルギーや反応速度、濃度計算を計算するのに、運動方程式や微分積分、ベクトルなどを、また、物質の溶解、分散や安定性、更には体内動態を解析する際に、指数・対数関数や微分積分の知識が必要不可欠となる。データ解析に用いられる統計学的手法も含め、「数学」は医療現場のさまざまな専門科目の基礎として位置付けられている。本講義では、このような医療現場の現実的問題において、数学が活かされている具体的事例を考えながら数学的思考を身に付けていくことを目的としている。</p> <p>本年度は、昨年度の教科書を変更して講義内容を易しくし、高校数学の復習から大学教養レベルとの連携を充実させた。また、新規に採用した教科書には国家試験の過去問が記載されており、学生への刺激となったのではないかと感じた。しかしながら、本年度も計算能力不足の学生や高校レベルの数学、特に、指数・対数計算や微分積分の学習が不十分な学生が多々入学してきていると感じられた。</p>				
今後の対応	<p>講義終了後に、毎時間のように学生から質問があり、受講学生の様子や理解度を感じながら講義を展開できたと感じる。しかしながら、定期試験の結果を通してしてみると、年々、新入学生の数学力の差が二極化していると感じられた。来年度は数学力不足の学生の様子も見ながら、講義終了後の学生との Q&A タイムを重視した講義を心がけたいと考えている。</p>				

科目名	化学	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	坂井 崇亮	科目担当者			
自己点検・評価	<p>本講義前半では、SI 単位や有効数字など化学計算能力の習得、原子や化学結合の性質など、高校化学の復習・延長からなる基本的知識の習得を目標に行った。次に、有機化学への導入として、軌道の概念、</p>				

	<p>正しい構造式の書き方、反応式における矢印の用い方、共鳴、酸性度等に関する講義を行った。また、昨年度より、分子構造の理解を促進する目的で、不飽和度の計算を追加している。講義資料は Google クラウド上で授業開始前に閲覧可能とし、必要な者は各自印刷とした。課題は Google フォームと記述物の提出物にて行った。一人一人の提出課題に対し採点・返却を行い、理解の補助に努めた。また、疑問点がある際には積極的に質問へ来るように促し、理解の促進をはかった。</p> <p>成績評価において、昨年度は定期試験 95%、課題 5% から定期試験 100% へと変更を行った。その結果、昨年度は再試験者の割合が 25% から約 35% へと増加したが、再試験不合格者数への影響はなかったことから、本年度においても同様に定期試験 100%にて評価を行った。結果、再試験対象者は 20%と減少し、再試験不合格者数の大きな変化は見られなかった。</p>
今後の対応	<p>本年度においては薬学教育モデル・コア・カリキュラムの改訂が行われた。化学においては大きな変更はないため、従来通りに講義を進行した。成績評価方法は次年度においても引き続き定期試験 100%とし、今後の動向を注意深く見守っていく予定である。</p>

科目名	生物学	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	多田納豊	科目担当者			
自己点検・評価	<p>講義では、高校において未学習の者や苦手意識を持ってしまった学生に、生物の面白さを感じてもらえるようにし、その一方で、高校で既に学習した学生が無駄な時間を過ごしていると感じない様、要所に原理・発展・応用などの少し踏み込んだ内容を講義し、既学習者にとっても初めて見聞きする内容を織り交ぜることを心掛けた。一昨年度には、授業アンケートの自由記載に「資料が見にくい」という意見がほとんどなくなり、反対に「見やすい」という意見が増えたため、資料の構成はこれまでと同様にしていたが、今年度には「資料が見にくい」という意見が散見された。学年（世代）ごとに感性が異なる可能性が考えられるが、特に配色をもう少し工夫した方がよさそうである。</p> <p>また、講義内容の重要ポイントの理解、知識の定着や自主学習の方向性を確認してもらうことを目的として、Googleフォームを活用し、前回の講義に関する確認問題を講義開始までに解くようにアナウンス</p>				

	<p>スし、学生の自主学習に役立ててもらった。この際に、学生の理解の向上を目的として、正答率を基に適宜追加説明・解説を行った。また理解度を自主的に高めてもらうことを目的として、全ての講義を録画し、いつでも視聴し復習できるようにクラスルームにアップした。</p> <p>疑問があれば質問に来るように講義毎に何度も伝えているが、積極的に質問に来る学生は限られていた。また、確認問題を次の講義までに解かない学生も多くおり、学生のモチベーションを如何に上げるかが重要であるように思われる。</p>
今後の対応	<p>アニメーションなどを利用し直感的に理解しやすい講義資料の作成を心掛けるとともに、内容にストーリー性を持たせる講義を今後も継続して心掛ける。また、授業動画の利用は、復習に有用に思われるため、引き続き利用する。</p> <p>今年度の授業アンケートで気になった点として、自身の理解度を量るための「演習問題」の要望が散見された。図書館に設置されている参考書の章末問題や、高校の生物の問題集なども書店に売られているが、そういったものを自分から入手していくという能動的な学習行動ができていないと感じた。次年度は能動的な行動を促すような指導を心掛ける。</p> <p>例年と同様に自主学習の仕方が分からない学生が一定数存在する様である。理解を深める学習方法を如何にして身につけてもらうのが課題である。</p>

科目名	生物学（再履修）	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	多田納豊	科目担当者			
自己点検・評価	<p>本科目の該当学生は、既に1年次に同様の内容の授業を受講した学生である。理解度を自主的に高めてもらうことを目的として、講義の動画をクラスルームにアップロードし、その動画を視聴する事と、ノートを用いた学習を課題とし、毎回、個別にノートチェックおよびその内容に基づく指導を行った。特に、着眼点の修正や、様々な事象の関連性を意識できる様になることを意識して指導した。ただ配布資料を写すのではなく、自分なりのノートがしっかり作れる学生は試験に合格できるだけの力がついていて、ノートづくりが資料を抜粋して写すだけの「作業」となってしまう学生は知識の定着ができない様子である。その点を指摘して改善できるよう指導をしている。</p> <p>また、講義内容の重要ポイントの理解、知識の定着や自主学習の方向性を確認してもらうことを目的として、Googleフォームを活用し、</p>				

	<p>前回の講義に関する確認問題を講義開始時に出題し、学生の自主学習に役立ててもらった。</p>
今後の対応	<p>例年と同様に、アニメーションなどを利用し直感的に理解しやすい講義資料の作成を心掛けることについて今後も続ける。また、引き続き、内容にストーリー性を持たせる講義を構成・改善できるよう心がける。</p> <p>ノートを用いた学習を課題とし、そのノートチェックを通して学習の仕方の問題点を指摘できたことは良いと考えているため、来年度も同様な取り組みを行う。ただ、作業としてのノート作成から変わらない学生もあり、意義が伝わっていない・理解できない、もしくはモチベーションが低い学生への様に指導していくかが課題であると考ええる。</p>

科目名	リメディアル教育	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	多田納豊	科目担当者	宗像達夫、坂井崇亮、磯田紀之		
自己点検・評価	<p>例年、入学選抜試験が様々な形態で実施され、入学者の学力には大きなバラつきがみられる。薬学教育に十分についていける学生が一定数いる一方で、物理・化学・生物・数学という理系科目の基礎学力が不足している学生も一定数認められる。毎年、化学、生物、物理の基礎科目で不合格となる者が一定数あり、また、1年目から留年してしまう学生も存在する。このような現状の打開を目的として、1) 入学時に物理・数学、化学、生物のプレースメントテストⅠを実施し、統一の実力試験により新入生の入学時の学力を評価し、2) 物理・数学、化学、生物学の科目毎に成績下位者（プレースメントテストⅠでDまたはE判定だった学生と、特定の入試区分内の平均点以下だった学生）を対象とし、3) 科目毎に、今後の薬学教育に必要な基礎領域について再教育（リメディアル教育）を実施した。今年度は、昨年度と同様に、「物理・数学」は、①指数・対数、②微分・積分、③束一的性質を、「化学」では、①原子の構造と元素の周期表、②反応係数、③酸・塩基を、「生物」では、①遺伝情報の分配、②動物の刺激の受容と反応、③体内環境（の調節）を範囲とした（各科目3回ずつ、計9回実施した）。なお、今年度の2回目の1年生（留年生）は、前期休学者を除き、全員を全科目の対象者とした。</p> <p>リメディアル教育対象学生は、9月に、各自が受講した対象科目のみプレースメントテストⅡを受験し学習効果の評価を行った。いずれの科目も、対象者全体としては有意な点数の上昇が認められた。しかしながら化学、数学・物理については平均点の上昇が僅かであった。生物に関しては顕著な得点上昇が認められ、リメディアル教育の実施</p>				

	の有効性を示している可能性がある（ただし、学生は前期に必修科目の「生物学」を受講しており、その影響が大きいと思われる）。
今後の対応	例年、入学時プレースメントテストⅠの成績下位者に対してリメディアル教育を実施し、学力向上に一定の効果がある可能性が示されている。基礎学力の向上、ひいては留年率の低下を目指して、来年度も同様にリメディアル教育を実施する。これまでリメディアル教育の内容は今後の薬学教育に向けて大切と思う部分について実施しているが、各学年で科目毎の不得意な領域が変動する可能性もあるため、領域の設定はプレースメントテストⅠの結果を踏まえて適宜変更するという考えに変更はない。また、極少数ではあるが、プレースメントテストⅠの成績下位者に含まれない学生の中にも留年者が存在し、分析の結果、ある特定の入試区分において、その入試区分内の平均点以下の学生（プレースメントテストの判定はギリギリC判定でリメディアル教育の対象にならなかった）のなかに留年する学生が多くいることが分かったため、今年度から「ある特定の入試区分において、その入試区分内の平均点以下の学生」もリメディアル教育対象者とすることにした。

科目名	データリテラシ	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	吉武 康之	科目担当者			
自己点検・評価	授業は講義及び演習形式で行った。演習の初めに講義資料を電子ファイルと紙媒体で提供し、資料を前面のスクリーンで掲示した。演習中はできる限り学生自身で問題解決をするよう指導した。演習の進捗状況は学生の PC 画面を教員用 PC で確認し、質問には個別対応した。複数の学生が質問した内容に関しては、その学生の画面をスクリーンへ映し、全員に対して解説を行った。資料や課題のやりとりにはファイル共有システム利用した。その結果、学生一人一人との対話時間が多く確保可能となり、結果的に理解度が高まった。演習の終わりに PC やネットワークを利用して自ら考える課題を用意し、オンラインでの添削・評価を行った。授業時間外の学習に際して、パソコンを持っていない、ネットワークに制限がある等の理由で自宅での復習が十分できない学生が少なからずいた。また、一部アプリケーションソフトウェアの契約が切れて、実習日程を変更することになった。				
今後の対応	近年の学生は情報伝達ツールとして携帯電話や電子タブレットの利用には長けているが、パソコンを使った操作には不慣れなものもある。学生のパソコン購入は必須であると考え。よって入学時に「大学推奨パソコン」の紹介を検討して頂きたい。				

科目名	医療必修-医療の倫理とプロ意識・医療情報-	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	家入 一郎	科目担当者	多田納 豊、今井 竜也		
自己点検・評価	<p>薬学部 1 年生を対象に、疾病に対する基本的なアプローチ、医療倫理の基本的原則と規制、医療プロフェッショナリズム、医療安全と医薬品安全、医療事故等の事例と法律解釈、というテーマを学修できるような授業を 13 回、オムニバス形式の VOD 授業として提供し、学生に視聴させ、リフレクションペーパーで各トピックの理解度を確認した。さらに、2 回の SGD を行った。各テーマについて、事前に予習課題を提示し、学生はそれにあらかじめ目を通して SGD のテーマに関する基礎的知識を自学自習したうえで、SGD に参加してもらうという形をとった。</p> <p>1 回目は医療事故防止策を題材としたもので、薬学部生という特性も加味し、日本で最も多い医療事故である薬をめぐる医療事故(薬害)をテーマとして課題を設定したうえで、日本において薬害をなくす(減らす)ための方策について、各班で議論してもらい、いくつかの班には授業内で話しあった結論を口頭で報告してもらった。2 回目は、情報セキュリティインシデントについて、「勤務する病院で、情報セキュリティ対策の責任者としてあなたが基本方針を策定することになった」と仮定して、必要とされるいくつかのセキュリティ対策の中で、どれを最優先して実施するのか、その理由も含めて議論してもらい、1 回目の SGD 同様、授業時間内にいくつかの班に、話し合った内容を口頭で報告してもらった。2 度の SGD で話しあったことの成果は、各学生に課題レポートとしてまとめさせ、グループレポート課題として評価を行った。</p>				
今後の対応	<p>学生の VOD 授業の視聴確認がシステム上難しいという問題があったため、本来は学生各自が時間を作って、期限までに視聴したうえでリフレクションペーパーを提出するという形の授業であったが、教室に集めて視聴するという形をとった。</p> <p>リフレクションペーパーについては、端的に各回の感想を書くだけで済むものにしてしまうと、適当に聞き流しておざなりの記述で済ませる学生が多くなるのが危惧されたため、記述の際には「初めて知ったこと」、「重要だと思ったこと」、「疑問・質問」の 3 点を必ず記述に含むように指示した。その結果、記述量と内容について、全体的にあ</p>				

	<p>る程度の水準は担保できたので、来年以降もこの方向性で学生にはディレクションしていく。</p> <p>SGDについては、1回目のSGDは課題テーマとして大問1問のみを提示したため、班によっては議論が早く終わってしまい、時間を持て余している様子が伺えた。そのため、2回目のSGDでは中間課題を挟み、中間課題についていくつかの班に口頭報告してもらい、後半ではその口頭発表等も参考にして、メインテーマの議論をしてもらうという方法を取り、中弛みの解消に効果があった。次年度以降、中間課題との組み合わせというやり方についても継続したい。</p> <p>ただ、学生を集めてVOD授業を視聴させるというやり方は、致し方ない事情があるとはいえ、学生の集中力持続という意味では少々問題がみられる。授業の性質上、どうしても単調になりがちで、最初から最後まで緊張感と集中力を持続するのに苦労している学生も散見された。リフレクションペーパーの記載内容についてディレクションしておくことで、最初から最後まで、メモも取らずに聞き流すということは避けられてはいるものの、学生のモチベーション維持という点については、いろいろと方策を考える必要はあるかもしれない。</p>
--	---

科目名	生命倫理(再履修)	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	今井竜也	科目担当者			
自己点検・評価	<p>例年通り、「生命倫理の枠組みと用いられる基本的な方法論」について論じた後、「人間の生老病死を巡る課題」、「医療テクノロジーの社会適用における課題」を考えるという三部構成で、1コマ1テーマで授業を展開した。</p> <p>今期は再履修学生1名の履修であったため、毎時間、トピックに関する質疑応答を実施し、授業の最後にも宿題課題を出し、次週の講義冒頭に口頭で回答してもらい、こちらからもコメントを返しながら問題意識を深めるという手法を用いた。昨年まではこれらのことを、ミニッツペーパーとGoogle Formを利用して行っていたが、受講人数が1名という事もあり、双方向性については質疑応答を多用することで強化を図っている。</p> <p>今年も、薬学部生向けの薬害や創薬という「薬」に特化したテーマを引き続き扱ってみた。薬をめぐる倫理、法、制度は4年次の「医療関係法規」の方でも詳しく話がされるが、その前段階として基本的な枠組みを話しておくことで、専門科目への架橋となることが期待される。</p>				

今後の対応	2025 年度も再履修の学生 1 名が、本授業を受講する予定である。基本的には今年度のやり方を踏襲し、双方向性を意識して内容の理解に資する授業を行いたい。
-------	---

科目名	統計学	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	安本誠一	科目担当者			
自己点検・評価	<p>医療分野で利用する統計学手法の多くはコンピュータ用アプリケーションソフトで求められている。しかし、その統計学を使った解析結果を解釈するのは人なのであるから、統計学に対する正しい知識が必要となる。そこで、その基本となる統計学の原理と解析結果に対する解釈の考え方を講義することが理想である。しかしながら、昨年度までは後期（15 コマ）の講義時間であったが、今年度は後半期（8 コマ）の講義時間へと縮小された。それゆえ、統計学の数学的な説明や解釈に割く時間を取ることが出来ず、統計計算のテクニカルな手法を説明することに講義時間が割かれたように感じた。</p> <p>このような時間短縮ではあるが、講義では丁寧に説明をしたつもりで、統計学の数学的知識もある程度、伝えられたのではないかと考える。昨年度と同レベルの定期試験内容（教科書の試験範囲は減）での出題であったが、100 点の学生が 30 名もいた半面、不合格率が 16%（20 名）であった（平均 77.5 点）。年々、入学してくる学生間の学力差が広がってきており、下位層の学力レベルのさらなる低下が感じられた。</p>				
今後の対応	<p>昨年同様に学力レベルの下位層の学生の中には、簡単な小数計算や分数計算ミスで点数を落とす計算力不足の学生が多数存在し、また、出題分を読み間違えて、自己都合的に解釈をしているなど国語力の学力低下も懸念される。それゆえ、学生が基礎的な学力を備えて入学してきているかも疑わしくなっている状況である。このような学生が年々増加している状況の中で、どのように対応していかねばならないかということを検討することは甚だ難解なことである。</p> <p>取りあえずは、講義に対する学生からの授業アンケートを踏まえて、次年度の講義の在り方を検討していきたいと考えているが、初等中等教育レベルの基礎学力が不足している学生に対しての教育には限界を感じている。高等教育としての講義のレベルを下げるわけにはいかないのである。</p>				

(4) 総合教育科目 外国語系

科目名	英語講読 1 (Primary)	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	加藤 明子	科目担当者			
自己点検・評価	<p>グローバル社会において、医療分野でも英語を必要とする機会が増え、また「海外保健福祉事情」の海外研修では英語を使う機会も多い。「なぜ英語を学修するのか」という動機を明確にし、英語学修に興味を持てるよう、通訳技法などを活用しながら実践的な方法で教授した。英語でコミュニケーションができ、身近な話題についてプレゼンテーションができるような、国際社会で通用する英語運用能力を身に着けることを目標とした。</p> <p>初回の授業では、異文化を意識した効果的な自己紹介の方法を提示し、グループ内で自己紹介のプレゼンテーションをしてもらった。また『医療通訳』（厚生労働省ホームページ）のテキストをもとに、医療英単語が身につくよう毎回単語テスト（30 問）をおこなった。実際の医療現場で使用されることが多い英語表現の単語テストなので、終始学修意欲が高く、予習復習をしっかりとこなう学生が多くみられた。また学習意欲が持続するよう、学修目的を明確にし、「使える英語」に焦点をおいた学習内容にも気を配った。教科書のダイアログをもとに、ロールプレイを通して会話の練習をおこない、英語特有のリズムや表現を身に着けられるような授業内容にするよう心がけた。</p>				
今後の対応	<p>実際に英語を使ってはじめて、感覚的に英語が身につくので、語学習得は「学修」というより「訓練」に近い。その「訓練」に学生を導くため、「なぜ英語を学習するのか」という動機を常に意識してもらおうよう心がけている。受講生が 123 名と多く、会話指導において難しい点もあるが、できるだけインタラクティブな授業を心がけ、発言の機会を多くすることで、発音矯正をしながらリスニング能力を高め、「話す」ことにも重点をおいていきたい。</p> <p>また以下の要素を念頭においた、教材研究や指導も継続していきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語で自分の考えを相手に伝えることができる ・異文化を理解し、柔軟に対応することができる ・英文を理解するのに必要な文法知識や語彙力を養うことができる 				

科目名	英語講読 2 (Basic)	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	加藤 明子	科目担当者			
自己点検・評価	<p>グローバル社会において、医療分野でも英語を必要とする機会が増え、また「海外保健福祉事情」の海外研修では英語を使う機会も多い。「なぜ英語を学修するのか」という動機を明確にし、英語学修に興味を持てるよう、通訳技法などを活用しながら実践的な方法で教授した。英語でコミュニケーションができ、身近な話題についてプレゼンテーションができるような、国際社会で通用する英語運用能力を身に着けることを目標とした。</p> <p>初回の授業では、診療科や病気の名前、症状など医療英語に特有な表現に慣れてもらうため、英語で書かれた問診票を教材に用いた。また『医療通訳』（厚生労働省ホームページ）のテキストをもとに、医療英単語が身につくよう毎回単語テスト（30 問）をおこなった。はじめは単語数の多さに戸惑う学生もいたが、「薬に関する用語」のテストでは、薬学部の学生ということもあり、意欲的に学習に取り組む姿勢が見られた。英語学修の目的を明確にすることで学修意欲が増し、実際の医療現場で使われている英語表現を授業で扱うなど学修内容にも気を配った。</p> <p>以前薬学部 2 年生を対象に、海外研修帰国後、以下の内容についてアンケートをおこなった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・滞在国でのコミュニケーション手段（英語、翻訳アプリなど） ・コミュニケーションをする上で困ったこと ・ことば以外の面で困ったこと（文化の違い、食習慣など） ・海外研修を通して今後の英語学習に生かしていきたいこと <p>「異文化コミュニケーションに必要なことは何か」を具体的に考えてもらうことで、学修意欲の向上につながるよう努めた。アンケートから、「使える英語」を身に着けたいという意見が多かったので、薬局で実際に使われる英会話の教材を作成したり、ロールプレイを通して英語でプレゼンテーションをしてもらったりと、実践的な学修にも重点を置いた。また英語学修に対して前向きな意見が多く、大半の学生は「英語は必要」という意識を持っているため、その意欲を今後の授業内容や教材研究に生かしていきたい。</p>				
今後の対応	<p>実際に英語を使ってはじめて、感覚的に英語が身につくので、語学習得は「学修」というより「訓練」に近い。その「訓練」に学生を導くため、「なぜ英語を学習するのか」という動機を常に意識してもら</p>				

	<p>うよう心がけている。受講生が約 130 名と多く、会話指導において難しい点もあるが、できるだけインタラクティブな授業を心がけ、発言の機会を多くすることで、発音矯正をしながらリスニング能力を高め、「話す」ことにも重点をおいていきたい。</p> <p>また以下の要素を念頭においた、教材研究や指導も継続していきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語で自分の考えを相手に伝えることができる ・異文化を理解し、柔軟に対応することができる ・英文を理解するのに必要な文法知識や語彙力を養うことができる
--	--

科目名	英 語 CALL1 (Primary) (PS)	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	鄒 艶	科目担当者			
自己点検・評価	<p>概要：</p> <p>今年度の講義では、学生の英語力のばらつきと学習負担の大きさ、そして英語に使う時間の制約といった二つのチャレンジに直面しました。これらの課題に対処するため、新しいスタートを切るクリニック系の教科書を導入し、実用性を重視したアプローチを採用しました。また、講義中には TOEIC の練習やシャドーイング、ロールプレイ、ディベート、マイ・オピニオン、エッセイ作成などの活動を通じて、学生たちのヒヤリングと話す能力を向上させ、リーディングとライティング能力の向上も図りました。</p> <p>到達目標：</p> <p>講義の主な目標は、英語力の差異がある生徒たち全員が上達できるようにすることでした。大学の生徒たちの目標が受験ではなく実用性に転換していることを考慮し、実践的なアクティビティを通じてコミュニケーションスキルを向上させ、実際の使用に耐える英語力を育むことを重視しました。</p> <p>重点的に取り組んだ内容と取り入れた工夫：</p> <p>学生の英語力向上を促進するため、講義ではクリニック系の教科書を導入し、TOEIC の練習やシャドーイング、ロールプレイ、ディベート、マイ・オピニオン、エッセイ作成などの実践的な活動を積極的に取り入れました。これにより、生徒たちは言語スキルを向上させるだけでなく、実際のコミュニケーションにも適用できるようになりました。</p>				

	<p>うまくいった点：</p> <p>新しいアプローチと実践的な活動の導入により、生徒たちの興味を引きつけ、講義への積極的な参加が見られました。特に、シャドーイングやロールプレイなど、実際の使用に即したアクティビティは学習効果が高かったです。また、表現力の向上が顕著にみられました。</p> <p>課題：</p> <p>クラス全体の参加度が高かったですが、コースの時間制限により、さらに大きく成長するためにはもっと力と時間が必要です。これからの講義で引き続き、学生の英語力向上を目指して取り組んでいく必要があります。</p> <p>まとめ：</p> <p>今年度の講義では、学生の英語力向上と学習負担の軽減に向けた二つの大きなチャレンジに果敢に取り組みました。実践的なアクティビティなどにより、生徒たちの成果が見られましたが、課題も浮き彫りとなりました。今後はこれらの課題に対処するための改善策を検討し、より効果的な英語教育を提供していくことが求められます。</p>
<p>今後の対応</p>	<p>来年度の講義では、引き続き学生の英語力向上と学習負担の軽減に焦点を当て、より効果的かつ持続可能なアプローチを追求していく方針を掲げます。</p> <p>方針</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 参加度の向上: 生徒たちが受験中心の枠を超え、実用性を重視する視点を養えるようなアクティビティやアプローチを検討します。生徒たちが英語を実際のコミュニケーションや仕事に活かせるような学習環境を整えます。 2. 実践的な活動の強化: シャドーイング、ロールプレイ、ディベート、マイアピニオンやエッセイ作成といった実践的なアクティビティをさらに充実させ、学生が実際の場面で英語を使う機会を増やします。 <p>重点的に取り組むべき課題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 参加度の向上: 大体の生徒が参加してくれましたが、さらに多くの生徒の積極的な参加を引き出すため、新たな喚起手段や学習への動機づけを促進する戦略を検討します。例えば、興味を引くテーマを取り上げたり、インタラクティブな活動を増やすことで、生徒の関心を高めます。 2. 時間の制約に対処: コースの時間制限により、さらに大きく成長するためにはもっと力と時間が必要です。授業外の学習

	<p>サポートや、オンラインリソースを活用して、学生が自主的に学習できる環境を提供します。</p> <p>来年度も学生たちが英語力を向上させ、自己実現につながるような講義を提供していくことが、我々の使命であり目標です。</p>
--	---

科目名	英 語 CALL2 (Basic) (PS)	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	鄒 艶	科目担当者			
自己点検・評価	<p>概要</p> <p>今年度の講義では、CALL1 に引き続き、医療系の学生が実践的に使える英語を身につけることを目標に設定しました。講義では、TOEIC の練習、シャドーイング、モノログ、ロールプレイ、ディベート、長文読解などの活動を取り入れ、学生の英語 4 技能を強化しました。特に、ヒアリングやスピーキング能力の向上に重点を置きました。</p> <p>到達目標</p> <p>医療現場で必要な基本的な英語の用語や表現を習得することを目指しました。さらに、学生一人ひとりが英語力を高め、実際の場面で活用できる実用的なスキルを身につけることを目標としました。</p> <p>重点的に取り組んだ内容と工夫</p> <p>学生の英語力向上を促進するため、講義では医療英語を扱う教科書を中心に使用し、TOEIC の練習、シャドーイング、ロールプレイ、ディベートなどの実践的な活動を積極的に取り入れました。これにより、学生は言語スキルを向上させるだけでなく、実際のコミュニケーションの場面でも応用できる力を身につけることができました。</p> <p>うまくいった点</p> <p>教科書の内容に合わせた実践的な活動を取り入れたことで、学生の関心を引き、講義への積極的な参加が見られました。特に、ロールプレイなど実際の会話を想定したアクティビティは、学習効果が高く、学生の理解を深めるのに有効でした。</p> <p>課題</p> <p>講義の最初に「この講義に期待すること」を書いてもらったところ、多くの学生が夏休み中の海外研修で刺激を受け、「英語に力を入れたい」「話せるようになりたい」といった意欲的なフィードバックを寄せていました。しかし、実際に話す機会を与えられても積極的に発話する姿勢が不足していると感じました。周囲の目を気にしてしまう学生も多いようです。今後は、こうした消極的な態度を改善し、学生の</p>				

	<p>モチベーションを高めるアプローチを模索する必要があります。</p> <p>まとめ</p> <p>今年度の講義は CALL1 からの継続であったため、スムーズに進行し、設定した到達目標を達成できました。一方で、発話する姿勢が不足している現実もあります。学生が自信を持ち、自分の意欲を表現できる環境を整えることが今後の課題となります。講師として、学生との連携を強化し、より良い学習環境を築いていくことを目指します。</p>
今後の対応	<p>来年度の講義では、引き続き学生の英語力向上と自己表現の強化に重点を置き、より効果的かつ持続可能なアプローチを追求していきます。</p> <p>方針</p> <p>学生の参加度を高め、実用的な英語運用能力を養うことを重視します。そのために、英語を実際のコミュニケーションや将来の職業に活かせるようなアクティビティやアプローチを導入し、実践的な学習環境を整えます。</p> <p>重点的に取り組むべき課題</p> <p>学生の積極的な参加を引き出すことは、依然として重要な課題です。来年度は、新たな動機づけの方法を検討し、個々の学生に合わせたアプローチを取り入れることで、より主体的に学習に取り組める環境を構築していきます。</p> <p>来年度も、学生が英語力を向上させ、自己実現につながる学びが得られるよう、充実した講義の提供を目指します。</p>

(5) 総合教育科目 総合系

科目名	大学入門講座－ 医療人・社会人として成長するために－	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	家入 一郎	科目担当者	平木 洋一、澤井 円香、坂井 崇亮		
自己点検・評価	<p>本科目は新入生を対象に 1) 本学建学の精神と教育理念・ポリシー、2) 学習地域の特性の理解と社会的貢献、3) 大学の意義と自主的な学びの必要性とその方略、4) 大学生生活上の注意点、5) 社会人としてのマナーや医療人としてのコミュニケーション能力の向上、6) 関連医療職種の理解とチーム医療の必要性などを学ぶこと</p> <p>により、医療系大学生としての基礎的能力を高め、より良い医療人・</p>				

	<p>社会人として成長するために必要な素養を涵養するための科目である。</p> <p>教育目標の到達の為、理事長・学長・市長をはじめとした、それぞれ該当する背景を有する経験豊かな複数の講師にオムニバス形式で講義して頂き、教育のポリシーや地域への理解、医療人としての知識を深める機会を設けた。講義形式は全キャンパス共通の VOD 講義と対面講義の形式にて行った。</p> <p>成績評価として講義内容に関するレポート評価を行い、学習の到達度を確認した。</p> <p>本年度より、従来の講義回数 8 回から 15 回へと変更となり、医師や看護師、薬剤師等の医療職専門の講師による他職種の理解を目的とした内容の講義が追加された。</p> <p>授業アンケート結果より、対面回に対するポジティブなコメントがある一方、VOD 回において集中を欠く旨等のコメントが数件見られた。</p>
今後の対応	<p>次年度においては、新市長就任に伴い講師変更となるが、引き続き地域の歴史と地元との交流をテーマに講義をしていただく。</p> <p>VOD 回においては、講義終了時に簡単な講義内容のレポートを提出させ、講義への集中度増加をはかる予定である。</p>

(6) 専門教育科目 専門基礎/学部共通

科目名	臨床心理学概論	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	藤枝 恵	科目担当者			
自己点検・評価	<p>臨床心理学の基本的内容の理解に加え、薬剤師として必要な臨床心理学的スキル、薬剤師の業務遂行に必要なコミュニケーション能力が獲得できるよう授業内容を工夫した。</p> <p>グループワークでは、5～6人でひとグループとして、実際に薬剤師になってから臨床現場で遭遇しうる課題に取り組んでもらった。これは、臨床心理学への理解を促すための工夫でもある。グループ数を20グループ程度としたので、各グループから出された意見やコメント、話し合いの結果などについても、十分フィードバックすることができた。</p> <p>グループワークにより、コミュニケーションスキルが向上したという学生の反応も多かった。講義の回数が増すごとに、グループワークでのディスカッションも活発になっていった。</p>				

	グループワークは、薬学部で身につけるべき能力としてコアカリキュラムにも含まれるコミュニケーション能力の向上にも非常に効果的であった。
今後の対応	グループワークで実際の臨床現場で高頻度に直面する課題についてディスカッションする機会を設けたことが、学生のモチベーションの向上に有用であった。今後も、授業では実践的な内容を取り扱う予定である。また、ロールプレイでは薬剤師の役割を演じてもらうことで、薬剤師としての役割の重要性をより明確にイメージできるよう工夫していきたい。

科目名	関連職種連携論	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	永井良治	科目担当者	長谷 麻由、中原 雅美、森山 良太、大谷 久也、大内田 博文、戸田 修二、平塚 剛、村上 武士、平木 洋一、彌永 和美、後藤 純信		
自己点検・評価	<p>保健・医療・福祉の統合が進む社会状況にあって、その現場で働く職種には各々の専門的立場からサービスを提供すると同時に、各職種が連携し、利用者に総合的に支援することが求められている。全人的支援を行うには、関連職種連携が不可欠であり、それを行えるようになるためには他職種の専門性を理解すると共に、職務の関連性や連携について理解することが必要である。本講義の到達目標は 1.専門職種間連携の概要を理解し、自職種について説明できる。2.保健・医療・福祉に携わる職種の専門性と関連性について説明できる。3.職種連携実践のあり方について概説できる。ことである。この目標を達成するため、福岡保健医療学部学部長をはじめした、医師、看護師、保健師、薬剤師、臨床検査技師、言語聴覚士、作業療法士、理学療法士、社会福祉士、介護福祉士の学内専任教員と臨床の先生方よりオムニバス形式で講義をして頂き、保健・医療・福祉を支える職種の理解と専門職種間連携の理解を深めた。学修内容の確認としては、講義内容に関する問題を作成して頂き学修の到達度を確認した。</p> <p>授業アンケートの結果より、「総合的に判断してこの講義は満足でしたか。」そう思う・ややそう思う 回答率は 68.4%、「シラバスに沿って授業が行われていましたか。」76.7%、「工夫された授業が行われていましたか。」69.1%、また自由記載では「職種やチーム医療などについての授業で、様々な職種とチーム医療するなどの内容が、分かりやすかった。」一方、試験範囲が広いため、試験勉強が行いや</p>				

	すいように授業の要点を分かりやすくしてもらいたい、などの意見もみられた。
今後の対応	昨年度のアンケート結果では、キャンパス平均より、すべての項目が低値であったが、今年度はキャンパス平均より高い値であった。次年度もわかりやすく授業概要と到達目標について説明すること、また定期試験では範囲が広いいため授業の要点を絞りこめるよう授業展開していく必要がある。

科目名	関連職種連携ワーク	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	大内田博文	科目担当者	永井良治、石橋英恵、長谷麻由、中原雅美、下田武良、松田憲亮、永沢善三、原麻理子、鈴木あかり、西村信弘、矢口貴博、松野豊、木下栄子、宗像千恵、坂井崇亮、有家尚志、和野紗央里、中矢正、朴珍相、貝塚拓、磯田紀之、柴田健太郎、西之園栞、澤井円香、一木裕子、韓侑熙、西田哲司、劉振、上野民生、坂梨史典、平木洋一、福田光良、吉田亮平、草場耕二		
自己点検・評価	<p>本学独自のカリキュラムとして、関連職種連携教育（IFE : Interpret Professional Education）に取り組んでいる。特に、学部・学科の垣根を越えチームを形成する関連職種連携ワークと関連職種連携実習は、医療福祉の総合大学である本学の大きな特徴となる講義の一つに位置付けられている。</p> <p>関連職種連携ワークでは、保健・医療・福祉に携わる職種の専門性と関連性、チーム医療・チームケアの理念と実践方法を理解し、各職種が連携して課題を解決し、患者・利用者中心の専門的サービスを提供する技能を修得する。到達目標は次の6点を掲げている。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 対象者・児を ICF の概念などを用いて多角的・全人的に理解できる。 2) 実際にチームを形成できる（チーム・ビルディング）。 3) チームにおける自らの役割を発見・理解し、メンバーシップを発揮できる（メンバーシップ）。 4) 他職種を理解した上で、自職種の役割と責任を説明できる（他職種理解） 				

	<p>5) グループワークの成果を発表し、質疑応答に対応できる。</p> <p>6) グループワークにおける到達目標の達成状況を客観的に省察し、論理的に説明できる。</p> <p>2024年度は、理学療法学科、作業療法学科、言語聴覚学科、医学検査学科、薬学科の5学科、合計330名の学生が履修し、学科横断型の25班を編成した。授業の構成は、初回オリエンテーションと3回のグループワーク、報告会（中間・最終）、最終リフレクションの機会を設けた。</p> <p>各グループにチューター教員を1-2名配置し、方向性を示し、議論の促進を行なった。中間報告会では同じ事例を検討している班の発表が聞けるようグループ編成をした。それにより視点の拡大や質疑応答も活発に行えた。また中間報告会后にチューター教員からの今後の検討事項についての提案や問題提起を行なったことで、以降の事例検討も活発なものとなった。</p> <p>本講義を通じて学生は各職種を理解を深めることができたと考える。また、他学科の学生に自分の学科を説明する過程を経て、薬剤師に対する理解も深まったようである。チーム形成やメンバーシップについても学んだことで、他職種との関わり方について考えるきっかけにもなったと思われる。</p> <p>反省点として、提示される症例によっては、介入の余地が少ない学科が散見され、グループワークの際に発言や関わりが乏しくなりがちであった。また、グループワークへの参加度に偏りがあり、実施方法やチューターの介入方法について引き続き模索していく。</p>
今後の対応	<p>チューター教員に対して今年度の振り返りと次年度に向けた検討事項について聴取したところ、チューターの役割や介入度を統一する、実施日ごとに評価をつける、事例情報を再検討する必要がある、等の意見が上がった。</p> <p>また、次年度の本講義の参加は、理学療法学科、作業療法学科、医学検査学科、薬学科、看護学科の5学科であり、参加学科の構成が変わる。</p> <p>どの学科も満遍なく関われるよう、症例情報の見直し、症例数の増加も検討していく必要がある。また、チューターを対象とした説明会を実施し、チューターの役割や介入方法、頻度について共有を図る。</p>

科目名	公衆衛生学	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	石田卓巳	科目担当者	朴珍相		

自己点検・評価	<p>本講義では、人々の健康増進、公衆衛生の向上に貢献できるようになるため、現代社会における疾病とその予防に関する基本的知識の修得を目指し授業を行った。健康と疾病の概念とその変遷、保健統計、疫学、医療・介護保険制度、感染症とその予防、生活習慣病とその予防、母子保健、労働衛生など広範囲に及ぶ内容をカバーしている。本講義では、実際の保健統計を用いた解析能力や疫学的思考の習得に加え、感染症予防や生活習慣病予防の実態、医療・介護保険や労働衛生の現状などを理解し、かつ説明できることを到達目標とした。授業は対面で15回開講され、指定教科書および参考書の解説と理解を主軸に進行した。また、公衆衛生学が現在の社会情勢から得られる知識を基として知見を深めていく発展的学問であることから、現状の社会問題との関連性を想起させる授業説明を行い、自らの力で知識を集約し発展させる意識付けを行った。定期試験は、教科書を基に CBT および国家試験にも対応できるような問題形式とした。さらに、再試験については、問題形式は変えず難易度を下げたものを準備した。これらの結果を見る限り、本年度は、学生における学習内容の理解度は一定のレベルに達しているように見受けられた。一方で、成績の振るわなかった学生については、これらの理解と修得に向けた学習時間の確保が必要であると感じた。</p>
今後の対応	<p>衛生化学は、薬学における専門科目の中でも様々な分野の知識を必要とする発展型の学問である。中でも公衆衛生学は、現状の社会情勢を背景としたテーマとのつながりが強く、これらの知識の有機的な繋がりや理解が必須な科目である。この知識と情報の集約的繋がりが不十分であることが、学生の理解度のばらつきを産み出している原因の一つであると考察する。これを改善するため、授業で触れる様々なトピックに対して、社会問題と繋がりを想起させるような授業の実施を目指す。また、授業での重点項目の解説を丁寧に行うと共に、授業開始時の口頭試問を充実させることが望ましいと考えている。</p>

(7) 専門教育科目 専門基礎

科目名	薬学計算	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	宗像達夫	科目担当者	吉武 康之、多田納 豊、 貝塚 拓、中矢 正、宗像千恵、 柴田 健太郎		
自己点検・評価	薬学計算は、薬学で学ぶ者にとって必須な基本的な計算の復習を目				

	<p>的とする。具体的には、臨床上での計算の重要性に始まり、分数計算、指数対数、単位変換、濃度計算、pH 計算、緩衝液について演習を行った。先の内容は大田原の薬学部でも行っていたが、福岡薬学部では、この内容に加えて薬剤師国家試験で近年多く出題されるグラフと統計、ミカエリス-メンテン式を追加した。演習の実施に当たっては、クラス編成試験の成績により、A~F の 6 クラスへ分割した。実施自体に問題は無く、学生からの評価についても良好であり、本講義は良好に進行したものとする。クラス編成試験の結果について、単純に成績でクラス分けを行ったが、実力別に分かれていない可能性が問題点としてある。</p>
今後の対応	<p>昨年度の問題点であった、15 回目の授業資料は問題無く準備が出来た。新カリキュラム移行に伴い、来年度本講義は選択科目となるが、本年度同様に実力試験を考慮し、学力不足の学生対象に展開していく予定である。</p>

科目名	病原微生物学	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	多田納豊	科目担当者			
自己点検・評価	<p>本科目は、微生物の分類、構造、生活環などに関する基本的事項、および、ヒトと微生物の関わりおよび病原微生物に関する基本的事項を修得する事を目的とする科目である。当科目は、病原体の種類やそれによって引き起こされる感染症について多くの部分は暗記が必要な科目ではあるが、当科目を実施する上での一つの目標として、学生に、暗記のみに偏ることなく、病原体の性質を構造や産生する毒素などから論理的に「理解」できる部分をしっかりと「理解」できるようになってもらう、ということを目指している。そこで、「何故その病原体がその様な感染症の原因となるのか」、「何故その病原体がその様な感染経路を経て感染するのか」など、理屈の説明を丁寧に行った。また、暗記が必要な部分についても、ただ文字の羅列・名称として記憶するのではなく、実際の構造や病態（臨床像）のイメージがともなう形での記憶の定着を目指し、構造や病態（臨床像）の画像をセットで示すように心がけた。過去の授業評価アンケートにおいて「授業が分かりやすかった」という意見が複数あったため、今年度も基本的な構成は変えずに行った。今年度の授業評価アンケートにおいて「教材が分かりやすかった」との意見が複数あったことから講義資料・授業の構成は良かったのではないかとと思う。</p>				

	<p>自身が科目責任者となっている他の科目と同様に、講義を毎回録画し、動画を復習のために視聴できるようにした。学生に動画の提供は好評であり、復習に寄与できたと考えられる。しかし、他方で、復習・反復学習の重要性を何度も伝えているにもかかわらず、復習時間が足りていない学生が多く、暗記と理解が必要な当該科目について、学生が取り組む姿勢をどのような方法で改善できるのが今後の課題である。</p>
今後の対応	<p>本年度は、講義内容の重要ポイントの理解、知識の定着や自主学習の方向性を確認してもらうことを目的として、他の担当科目と同様に、Google フォームを活用し、前回の講義に関する確認問題を次の講義回までに出題し、次の講義開始時に、正答率を基に適宜追加説明・解説を行った。この取り組みは学生からも好評であり、学生の自主学習の一助となっていると考えられるため、来年度もこの取り組みは継続する。しかしながら、半数以上（今年度は7割程度）の学生が授業開始までに確認問題を解いておらず、学習に取り組む姿勢が3年生になっても定着していない学生が多い点は非常に問題であると思われる。</p> <p>また、講義の動画を復習のツールとして活用する取り組みも、来年度も継続して実施する予定である。</p> <p>暗記量が多い科目であることと、その記憶の定着のためにも「理解」に基づく暗記の仕方を、「理解する点」をより明示しながら講義をする必要があると考えた。引き続き、論理的に捉える部分は、それが分かる資料の作り方を意識して改善していく。</p>

科目名	病原微生物学 (再履修)	学年	4 学年	期	前期
科目責任者	多田納豊	科目担当者			
自己点検・評価	<p>本科目の該当学生は、既に3年次に同様の内容の授業を受講した学生である。理解度を自主的に高めてもらうことを目的として、講義の動画をクラスルームにアップロードし、その動画を視聴する事と、ノートを用いた学習を課題とし、毎回、個別にノートチェックおよびその内容に基づく指導を行った。特に、着眼点の修正や、様々な事象の関連性を意識できるようになることを目指して指導した。</p> <p>また、講義内容の重要ポイントの理解、知識の定着や自主学習の方向性を確認してもらうことを目的として、Googleフォームを活用し、前回の講義に関する確認問題を講義開始時に提出し、学生の自主学習に役立</p>				

	てもらった。
今後の対応	4年次であるため、この科目を欠単すると進級できない事が確定してしまうため、学生自身が本気で学習したことが大きな要因であると思うが、課題としたノートを自身で作し、その際に教科書や講義資料を見て学習した事で、覚えるべき内容がしっかり頭に入っていた様に見受けられた。特に、ノートを丁寧（文字や見た目の綺麗さではない）に書いていた学生は本試験で合格する傾向が強く認められる。再履修科目の方策として、今年度のやり方で来年度も行う予定である。

科目名	薬学演習 I(物理系)	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	中矢 正	科目担当者	多田納 豊、坂井 崇亮、阿部 義人、塚本 宏樹、吉武 康之、柴田健太郎、宗像 達夫		
自己点検・評価	本演習では、2 年前期までに学習した内容の習熟度確認を目的としている。物理系、化学系、生物系でそれぞれ 5 回ずつ計 15 回の授業を行い、定期試験 100%による評価を行った。演習問題及びその説明の授業回数は昨年度までと同様であり、定期試験の難易度についても例年通りであった。本試験の平均得点率が 6 割程度であり、昨年度、一昨年度よりもやや上昇傾向にあった。しかしながら、まだ習熟できていない学生も一定数見られた。必要な復習過程をより絞って効率的に習得・定着させることを教員間で共有し、且つ第一回の授業で強調したため、学習範囲については理解できていた。昨年度に記した今後の対応方法として、学生自身による既学習内容の復習をより強く促すことにしたが、この点についてはある程度浸透度が高くなっていると考えられた。				
今後の対応	本科目は復習が重要な学習ポイントである。既学習内容の復習を今年度と同様に強く促し、学生の意識向上に向けた働きかけを行っていく。尚、来年度からカリキュラムの変更があるが、本演習では、これまでと同様の学習内容をしっかりと習得させることを継続する。				

科目名	薬学演習 II	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	磯田紀之	科目担当者	阿部義人、猪部学、宗像達夫、塚本宏樹、成川佑次、中矢正、柴田健太郎、坂井崇亮		

自己点検・評価	<p>本講義では、2年後期までに学習した内容の復習を目的とし、演習問題を行い、解説を加える形式で、化学系、生物系、物理系でそれぞれ5回ずつ担当し実施した。</p> <p>アンケートの結果より、100%の学生がシラバス通りの授業が展開されたと答えていることから、シラバス通りに授業が行えたと考えられる。一方、授業内に解説が終わらない回もあり、問題量が多すぎると学生からの指摘を受けた。</p> <p>成績評価は各分野において行った演習問題は評価には含まず、定期試験の点数のみで評価を行った。定期試験は、本試験、再試験を行い、143名中126名（再履修含む）が単位を取得でき、多くの学生が本試で合格した。また、本年度は不合格者中の留年者の割合が低く、再履修学生に関しても適切なフォローのもと指導が行えたものと考えられる。本試平均点は66%程度と、例年と同程度の水準であった。</p>
今後の対応	<p>本年度の授業評価アンケートを踏まえ、今後も引き続き授業内の問題量の改良を心掛けながら実施する。特に、授業内での解説が不十分である回は、理解度の低い内容に焦点を絞り問題量を調整するよう努める。</p>

科目名	薬学演習Ⅲ	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	柴田 健太郎	科目担当者	阿部 義人、多田納 豊、塚本 宏樹、宗像 達夫、吉武 康之、貝塚 拓、中矢 正、磯田 紀之、澤井 円香		
自己点検・評価	<p>本科目は、3年次前期までに実施された基礎系薬学科目（化学系・物理系・生物系・衛生系）の復習を目的に実施された。学生諸氏はこれまで、薬学演習ⅠおよびⅡにて同様の形式で授業を受けているが、衛生系は新規科目であった。復習項目は、3年次前期までに達成した到達目標の中から選抜し、シラバスの各回に掲示している。</p> <p>なお、受講生のこれまでの成績を鑑み、化学系分野を強化すべきである旨教員間でコンセンサスを得たため、吉武准教授が7回分追加授業を行い、計22回の授業回数となった。</p> <p>初回ガイダンスでは、演習に対する取り組み方を説明した。また、総授業回数増加に伴い、計画的に復習を行うよう指導した。</p> <p>再履修クラスにあっては、Google Classroom を利用した課題の提示、提出の指示を行った。</p> <p>授業の平均出席率は93.1%で、再履修クラスは89.2%とやや差があった。昨年度の平均出席率は93.1%、再履修クラスは90.6%であっ</p>				

	<p>たことから、総授業回数が増加しても出席率に大きな差は見られなかった。本科目の不合格者についても、昨年度とほぼ変わらない人数となった。しかしながら、総授業回数の増加に伴う定期試験勉強に対する負担は大きかったようで、「授業回数増加についてももう少し早めに伝達してほしかった。」「中間試験を実施してほしかった」などの意見が寄せられた。中には、「(中間試験の実施を検討すべきであるが) あらゆる範囲の授業を実践的にわかりやすく行ってきて良かった。」「(総回数 22 回は多かったが) 化学分野の復習はとても役に立った。」などという条件付きではあるがポジティブな意見も見られた。</p>
今後の対応	<p>学年全体の成績を鑑み、化学分野を強化すべく授業回数を増やす試みを行った。昨年度と比べ、出席率や不合格者数に大きな変化は見られなかったものの、授業アンケートの結果から、定期試験を 2 回に分けるなどの配慮が必要であったことが示された。一方で、授業が役に立ったという意見もあったため、授業回数を増やす際は、実施方法の工夫、すなわち、学生に対するこまめなヒアリング、定期試験の回数を増やすなどの対策を講じることで、単位認定科目である演習科目を用いた弱点分野の克服を実践できる可能性がある。</p> <p>来年度は通常の 15 回にて授業を実施する予定であるが、今回のアンケート結果から、「学生に対する必要な配慮はないか」また「授業アンケートの結果を待たずして学生から授業に対する要望はないか」など、授業期間中に学生の意見を積極的に聞き出す必要がある。</p>

科目名	基礎薬学実習	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	猪部学	科目担当者	村田祐造、多田納豊、塚本宏樹、 貝塚拓、阿部義人、宗像達夫、 中矢正、磯田紀之、坂井崇亮		
自己点検・評価	<p>本実習科目は、1 年生の基礎実習科目として、物理系と生物系の基本的な技能を学ぶ。物理系では、薬学教育モデルコアカリキュラムの中から、薬学で必要とされる基本的な分析器具や測定値の取り扱い方法(C-2-1(1)-(2))、実際の滴定や容量分析(C-2-2(6)-(9))を通じて、日本薬局方の通則や試験法(C-2-3(1)-(2))を学ぶ。生物系では、同様に生物の基本的な構造やアミノ酸、タンパク質といった主要成分の性質や特徴(C6-1(1)-(2))を学ぶ。さらに、本科目では、少人数で構成される実習班での共同実験を通じて、協働する態度を醸成することを目標とした。本科目は、新カリキュラムへの移行に伴い、本年度が初めての開講であり、従来の基礎薬学実習 I(物理系)と基礎薬学実習 II(生物系)から、必要となる部分をあわせて構成されている。そのため、旧科目それぞれの担当が、両者の特徴を引き継ぐ形で実施され、充実した内容</p>				

	<p>になったと思う。また、新規に開講するための事前準備を要したが、特に大きな問題なく全日程が終了した。感染症等による欠席があったが、補講により対応した。以上、概ね問題なく実施できた。</p>
今後の対応	<p>本実習で実施する技能は、1年次に履修する「薬品物理化学Ⅰ」、「分析化学Ⅰ」、「生物学」、「生化学Ⅰ」、「解剖生理学Ⅰ」等の科目で修得する知識と関連づけられ、1年生が行う基礎実習として最適な内容となっている。さらに、少人数による共同作業は、6年間を通じて継続して学ぶコミュニケーション力、協働する態度の醸成において、重要な機会となっている。今年度は、初めての実施であったが、大きな問題なく終了した。来年度も引き続き、技能、知識だけでなく、コミュニケーション力など、多様な資質の向上を促していきたいと考えている。</p>

科目名	コミュニケーション実習	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	石田卓巳	科目担当者	山本緑、齋藤秀俊、 今井竜也、朴珍相、貝塚拓、 澤井円香、柴田健太郎		
自己点検・評価	<p>薬剤師の業務（かかりつけ薬剤師、チーム医療、セルフメディケーション等）は物から人へシフトしている。これに伴い、薬剤師が身につけるべき能力として、薬に関する専門性に加えて高いコミュニケーション能力の重要性が高まっている。本実習では、学生が将来薬剤師として社会で活躍するために必要なコミュニケーション能力を身につけることを目的とし、自己・他者理解、非言語的／言語的コミュニケーションや傾聴などのコミュニケーションスキルの習得、薬剤師を想定したロールプレイ、グループディスカッション、薬剤師としてのキャリアデザイン作成、プレゼンテーションなどの項目を実践した。さらに、修得したスキルを実践で活かすため、大学来訪者とのコミュニケーションの機会を設けた。今年度は履修者を 8 グループ（16 人程度／グループ）に分け 1 期間で実施したが、昨年度と同様に各グループにおいてロールプレイやディスカッション等が活発に行われた。ただ、1 グループの人数が多いため実習内容によっては中弛みが発生することも避けることはできなかつたため、来年度以降、如何にして学生の集中を維持させるか、そしてスキルの習得を効率化させるかが課題であると思われる。</p>				
今後の対応	<p>これまでの実習プログラムの工夫により、学生たちが自主的に役割を決めて演習を進めるスタイルが定着してきている。このため、グループディスカッション等のテーマ設定・シナリオをさらに研磨して、より意見交換が進むような内容にしていく必要性が感じられる。ま</p>				

	<p>た、薬剤師として社会で業務を行う自覚をより高める内容が望ましいことから、テーマやシナリオの設定は今後も重要な課題の一つであると考えている。グループメンバーの毎回の入れ替えは、これまで話したことのない学生間の接点を作り、緊張感をもった状態で実習に取り組みさせるのに有効な手段と考えている。さらに、低学年次にキャリアデザインを考えるきっかけを提供し薬学学習への意欲を高める意義があることから、キャリアデザイン作成のプログラムも来年度以降継続して実施する予定である。</p>
--	---

(8) 専門教育科目 専門

科目名	薬学概論	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	家入一郎	科目担当者	石田卓巳、一木裕子、猪部学、今井竜也、多田納豊、中矢正、西村信弘、平木洋一、宗像千恵、山口政俊、山本緑、吉武康之		
自己点検・評価	<p>当科目は、これから薬学を学ぶ新入生に対して、医療と薬学の歴史を知ること、「薬剤師」の活動分野（医療機関・薬局のみならず、製薬会社や衛生行政等）を知り、国民の健康管理、医療安全や薬学防止等における「薬剤師」の役割を理解する事、自身が目指す「薬剤師」としての使命感を身につけるための科目とすることを旨とする。そしてこれから学ぶ「薬学」がどのような学問であるのか理解するための科目である。</p> <p>専門分野の異なる多くの教員がオムニバス形式で講義を行うことにより、学生には将来目指すべき「薬剤師像」を多面的・多角的に理解し、どの様な考え方が必要か、またどのような学習が必要かを認識してもらえるプログラムになっていると考えられる。また、前年度の学生の授業アンケートの自由記載において、これから取り組む「薬学」を様々な視点からとらえて学んでいくことを知り、興味をもてたという意見が複数あり、この科目の目的が果たされていると考える。特に、教員の異動等により今年度から新たにご担当頂いた先生方もあったが、先生方のご尽力により適切に実施できたと考える。</p> <p>また、生命倫理教育の充実、特に態度の養成を目的として、生命倫理に関して学生同士が討議する（SGD）回では、過去の実施内容の見直しから、昨年度に引き続き「脳死・臓器移植」という1つのテーマに絞って実施した。</p> <p>また、学生の評価方法として、各講義回における内容についてのレ</p>				

	<p>ポート課題や小テストを課し、それらを評価対象とすることで、毎回の講義内容について学生が自身の考えを整理し纏めることができたと考えられる。</p>
今後の対応	<p>学生の授業アンケートの結果は、授業の難易度に関する項目を除く全ての項目でキャンパス平均と同等かそれ以上の高評価となっており、今後も引き続き同様の形式・内容で実施する予定である。また、倫理教育を目的としたSGDの回では、倫理観について、「知識」のみではなく「態度」を身につける機会となる授業を実施することができた。授業評価において「他者の意見を聞き新しい発見があった」という意見もあり、引き続き同様の内容で次年度も実施する予定である。</p> <p>また、今年度は昨年度と異なる点として治験に関する外部講師による講演も行われたが、「視野を広げることに繋がっている」という意見もあり、良い学びの機会を提供できていると考える。今後も引き続き改良を心掛けながら、今年度の内容を基本として実施する。</p>

科目名	薬品物理化学Ⅰ	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	宗像達夫	科目担当者			
自己点検・評価	<p>薬品物理化学Ⅰでは、学問の性質上、難解なため、内容をできるだけかみ砕く形で講義を行った。具体的には、教科書に書かれている公式の導出や変形などをなるべく省略しない形で掲載した講義資料などを準備した。また、SI基本7単位や誘導単位などのように、薬学を学ぶ上で基礎となる部分については、講義の初めに、書かせるなどの繰り返し学習を行った。また、区切りとなる單元ごとに小テストを行い、單元ごとに整理をさせるよう促した。しかしながら、計3回の小テストの結果では、繰り返しの復習の際、学生自身がどこまで手を抜いていたのかで結果に大分差が生じた。</p> <p>本年度は新カリキュラム移行に伴い、相平衡の内容を薬品物理化学Ⅱから移動させた。今までの内容に追加した形となるので、1年生が習う講義範囲としては多少多くなったが、理解が難しい部分でもあるので丁寧に解説をおこなった。しかしながら量子化学の部分では、網羅的に扱うのは難しいので、内容の取捨選択を行い、アドバンストの部分を少なくせざるを得なかった。定期テストの結果では、大半の学生に問題は見られなかったが、数式処理苦手な学生は苦戦しているようであった。</p>				
今後の対応	来年度の対応として、理解が進んでいない部分の講義資料の充実や、				

	<p>演習問題の修正など、より学生自身が自己学習を進められるよう修正を行う予定である。また、小テストに重点を置く傍ら、暗記として捉える学生に対しても何かしら策を考える必要がある。さらに、第 110 回薬剤師国家試験については、本講義の範囲が多く出題されており、さらに、現在の学問領域と臨床応用を踏まえた、式とグラフの対応も多く出題されていることから、付け焼き刃的な対応にならないよう考慮する必要がある。</p>
--	---

科目名	薬品物理化学Ⅱ	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	宗像達夫	科目担当者			
自己点検・評価	<p>薬品物理化学Ⅱでは、1年次の薬品物理化学Ⅰを基礎に、反応速度論、相平衡、溶液の化学、束一的性質の4つについて講義を行った。これらの内容は、高校化学を基礎にしているため、高校化学の理解が内容把握に大きく関わってくる。そこで、講義資料では、高校化学で学ぶ範囲についても、内容を盛り込んだ講義資料とした。また、区切りとなる單元ごとに小テストを行い、單元ごとに整理をさせるよう促した。計3回の小テストの結果では、3回とも二峰性の分布を示したことから、学生の学習態度に大きく差が生まれていることが解る。この小テストに対しての違いが定期試験結果の差に繋がった物と考えている。一方で、一部の学生は演習前に問題を解き解答を求めるなど、積極的な姿勢を取る学生もいたことは、非常に喜ばしい。</p>				
今後の対応	<p>来年度の対応として、第110回の薬剤師国家試験では薬品物理化学Ⅰの内容が多く出題されており、また内容も踏み込んだ物が多くなっていくことから、次年度最初の講義にて、これらの提示を行うつもりである。また、問題の詳細な解説の要求は、自分の解法が合っているかに自信が無いところに起因しているようなので、様子を見て検討するが、電子媒体での配布は行わない。</p> <p>昨今の薬剤師国家試験ではグラフとより内容に突っ込んだ形の問題が多く出題されていることから、それらを踏まえて、講義資料などの修正を行い、現在の学問領域と臨床応用を踏まえた、式とグラフの対応などを積極的に取り入れていくことが必要である。さらに、来年度は新カリキュラムへの移行となるため、内容の構成を考え直す必要がある。</p>				

科目名	物理薬剤学	学年	2 学年	期	後期
-----	--------------	----	------	---	----

科目責任者	阿部義人	科目担当者	宗像達夫
自己点検・評価	<p>本講義では薬物の溶解性、安定性（宗像担当）、界面、分散、粘度、レオロジー、粉体の物性（阿部担当）を理解し、その基礎知識を学ぶことを目的とした。1回～6回（宗像担当）に関しては、教科書ならびに過去に出題された薬剤師国家試験の問題内容から関係する周辺知識が網羅できるようにまとめた配付資料を中心に講義を行った。配付資料は物質の溶解、医薬品の安定性の2部構成とし、それぞれの内容に入る授業回で配布を行った。7回～15回（阿部担当）に関してはパワーポイントを用いて、なるべくわかりやすく講義した。講義内容に関しては、講義前に Google クラスルームを用いて、PDF ファイルとして事前配布し、予習ができるように配慮した。講義内容を元に練習問題を作成し、講義終了後に復習として配布した。7～9回、10～12回の講義のあと、テスト形式で講義内容の理解度の確認をした。確認テストの結果、理解度が足りていないと思われた学生には、さらにテスト内容に関するレポートの提出をさせ、理解を深めるように指導した。</p> <p>定期試験として、本試験、再試験、追試験を記述式、再再試験をマークシートで行った。本試験は合格点に達しているものが少なく学生が理解できているかの判断が難しかったが、再試験、再再試験で点数が向上し、単位を取得した学生も多く、自己学習の効果を見ることができた。単位を落とした学生に関しては、解答の記述から明らかに自己学習ができていない様子が見て取れた。</p>		
今後の対応	<p>本年度は、前年度より、定期テストの平均点が低く、理解できていない学生が多かった。演習後の質問も少なく、レポートの提出も悪かった。今後、自己学習を促す工夫が必要かもしれない。</p>		

科目名	医薬品構造解析	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	阿部義人	科目担当者	吉武康之、中矢正		
自己点検・評価	<p>本講義では赤外吸収、ラマン散乱の原理（中矢担当）、核磁気共鳴、質量分析、X線結晶回折、熱分析の原理（阿部担当）を理解し、スペクトル解析演習を通して、医薬品などの構造を推定できるようになること（吉武担当）を目的とした。原理の理解（1回～10回）に関してはパワーポイントを用いて、教科書の内容をなるべくわかりやすく講義した。講義内容に関しては、講義前に Google クラスルームを用いて、PDF ファイルとして事前配布し、予習ができるように配慮した。演習が足りないと思われたので、講義内容を元に練習問題を作成し、講義</p>				

	終了後に復習として、配布した。スペクトル解析演習（11回～14回）に関しては、まずは赤外吸収、核磁気共鳴、質量分析のスペクトルの読み方を理解させ、演習を行った。前年度の反省をもとに、最終日に演習問題の解説を行い、理解を深めた。定期試験として、本試験、再試験を行った。各試験はマークシートにより、3～5問の選択肢から選ばせたが、問題によっては正答率が、2割より少ないものもあった。
今後の対応	定期テストの正答率が低い部分は、練習問題からの応用問題であり、基礎の部分から、さらに応用できるようにしっかりと理解させることが必要かと思われた。次年度はこのあたりを考慮して、講義を行いたいと考えている。

科目名	医薬品構造化学	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	阿部義人	科目担当者			
自己点検・評価	<p>本講義では生体分子の構造と化学的な機能である反応性を理解するとともに、医薬品のコア構造と薬理作用との関連を学ぶことを目的とした。医薬品と生体分子との相互作用に関する基礎的理解（1回～3回）を行い、その後、具体的な医薬品の作用機序をその構造と相互作用について各論的に解説（4回～12回）した。本講義は前期前半の講義（8回）であるが、教授すべき内容が多く全12回とした。講義はパワーポイントを用いて、教科書の内容をなるべくわかりやすく講義した。特に、昨年度の改善点を踏まえて、有機化学、生化学にて理解してないような部分は時間をかけて、教授した。講義内容に関しては、講義前に Google クラウドルームを用いて、PDF ファイルとして事前配布し、予習ができるように配慮した。また講義内容を元に練習問題を作成し、講義終了後に復習として配布した。さらに5～12回に関しては、前回の内容の小テストを行い、学生の理解を深める工夫をした。定期試験として、本試験、再試験を行った。各試験はマークシートにより、3～5問の選択肢から選ばせたところ、予想していたよりも比較的高い平均点となった。授業評価においても、毎回の小テストが理解につながったと書かれており、各項目で、予習、演習問題による復習、小テストによる確認を行なって、各自の理解を含めたことが効果的であったと考えている。ただし、単位を落とした学生もおり、解答の記述から明らかに自己学習ができていない様子が見て取れた。</p>				

今後の対応	本講義は、有機化学、生化学、薬理学の総合的な理解が必要であり、前年度の反省を踏まえた対応を行なったが、まだ基礎の部分でしっかりと理解できていない部分があるため、次年度もこの点を考慮して、講義を行いたいと考えている。
-------	---

科目名	放射化学	学年	2 学年	期	前期 前半
科目責任者	中矢 正	科目担当者			
自己点検・評価	本講義では薬学コアカリキュラムに則り、基本的な放射壊変の種類や壊変法則、放射線の種類や放射線の物質との相互作用と減弱法則、放射性核種の物理的性質などを学ぶとともに放射線の検出原理や放射線測定器の原理などを理解し、放射化学の理解を深めることを目的とした。到達目標として、物質を構成する原子・分子の構造、及び化学結合に関する基本的事項を修得する。化学物質などの生体への有害作用を回避し、適正に使用できるようになるために、化学物質の毒性などに関する基本的事項を修得することを掲げた。教科書を基準として、より具体的であるとともに簡潔に理解ができるよう、多くの図の作成、及び引用を行った。また、各回の一週間程度前には内容スライドの配布を行った。より理解度を測ることを目的として、今年度から試験出題方法を一部変更したが、本試験、再試験共に昨年度と同程度の良い成績であった。				
今後の対応	授業内容はコアカリキュラムで定められた範囲を網羅していることから、訂正・修正を加える程度で次年度も活用していく。また、各回で重要項目について教授した点についても、概ね理解度が高かったことから、これらについても継続する。				

科目名	物理系薬学実習	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	阿部義人	科目担当者	宗像達夫、中矢正、澤井円香		

自己点検・評価	<p>物理系薬学実習では、反応速度、分子吸着、分光機器分析、クロマトグラフィーなどに関する技能、知識の習得を目指した。</p> <p>初日に実習講義を行い、内容の理解を深め、当日はなるべく実習自体に時間が取れるようにした。そのため、当日の予習が不十分な学生が実習に時間がかかることもあったが、実習に慣れていくに従って改善して行った。本年度は、昨年度と同様、実験グループを学生番号順ではなく、ランダムにシャッフルし、普段あまり交流のない学生とコミュニケーションを取るよう配慮したところ、授業アンケートにおいて好評であった。また、1) 基本的な器具の使い方などは1年生時に習った基礎薬学実習(物理)の実習書などで実習前に再確認させる。2) グラフの書き方、実習の内容などを実習時にもしっかりと教えるなどの対応を行った。実習は最後まで問題なく終了した。</p> <p>ループリックに従い、各科目担当者が採点したところ、全員合格点以上であり、実習の意義は学生に伝わったものと考えている。</p>
今後の対応	<p>本年度の実習に関しては、十分な指導ができたものと考えている。今後もこれらを続けていくことで、しっかりとした実習指導を続けて行きたい。</p>

科目名	分析化学Ⅰ		学年	1 学年	期	後期
科目責任者	山口政俊		科目担当者	中矢正		
自己点検・評価	<p>薬学領域における分析化学は、創薬科学、医療薬学、生命科学、衛生薬学などのあらゆる分野で不可欠な基礎知識および基盤技術となっている。医薬品の確認試験、純度試験および定量、生体試料中の薬物濃度の測定、ゲノム、プロテオーム、メタボロームなどのオミクス解析、バイオマーカー解析、環境および食の安全性の評価を行う上で、分析化学の知識や技能・態度の習熟が必要である。さらに、本講義では、基本的な思考方法や理論を学習するとともに、薬剤師あるいは薬学研究者にとって不可欠なものである。また、改訂コアカリの「C2 医薬品及び化学物質の分析」中の化学的分析法を中心に講義に取り組んだ。講義は、パワーポイントを用いて行った(講義前週までに講義資料を学生に送信、提供した)。</p> <p>今期は、昨年の自己点検・評価・課題(講義内容の過多による、学修の消化不良、それによる学生の不安)に対応し、さらなる講義の改善に努めた</p> <p>学習内容に対して、講義時間が足りないことは否めない。したがっ</p>					

	て、学生の自己学習が必須になる。これをカバーするために、効果的自習のために基礎演習や応用演習問題を与えるとともに、その解説を行った。今期は、昨年の学生からの授業評価アンケートを踏まえ、講義の在り方や習熟度の向上を目指して、効果的講義の実施のための改善を行なった。
今後の対応	学生からの授業評価アンケート（化学平衡と滴定の講義内容のバランス、国家試験や CBT 対策など）では、未だ改善の余地がある。特に、一部の学生は、化学平衡についての基礎的知識が不足していることを不安視している。これらの対応・改善を来期以降も続ける。これまでの講義や試験結果から感じたことであるが、本学の学生は、選択肢の正解率は極めて良好である。一方、記述問題の回答が出来ない。この原因を究明し、この更なる対応も考慮し、今後の講義の在り方を改善する。

科目名	分析化学Ⅱ	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	山口政俊	科目担当者	阿部義人		
自己点検・評価	<p>薬学領域における分析化学は、創薬科学、医療薬学、生命科学、衛生薬学などのあらゆる分野で不可欠な基礎知識および基盤技術となっている。コアカリキュラム C2 コース「化学物質の分析」の一般目標は、「化学物質（医薬品を含む）をその性質に基づいて分析できるようになるために、物質の定性、定量に必要な基本知識と技能を習得する」とされている。「分析化学Ⅰ」では、化学的手法に基づく分析化学（定性・定量分析及びその基礎的事項）を中心に、また、「分析化学Ⅱ」では、物理的手法に基づく分析化学（分離分析、分光分析、臨床分析法）を中心に講義を行った。生体試料中の薬物濃度の測定、ゲノム、プロテオーム解析、環境および職の安全性の評価を行う上で、単に分析化学の知識の集積だけではなく、技能・態度の習熟が必要である。本講義では、基本的な思考方法や理論を学習するとともに、基本的な思考方法や理論を学習するとともに、薬剤師にとって研究能力の開発も不可欠である。これらを考慮し、講義に取り組んだ。講義は、パワーポイントを用いて行った（講義前週までに講義資料を学生に送、提供した）。</p> <p>試験は、後期の本試験（100 点満点）及び再試験（90 点満点）を実施した。</p>				
今後の対応	他大学の一部では、本講義内容を一年以上の期間で講義している。同じ内容を本稿では半期で行うため、講義に際し重要度に応じて講義時				

	<p>間の濃淡を考慮した。学生からの授業評価アンケートを踏まえ、講義の在り方や習熟度の向上を目指して、効果的講義の実施のための改善を行った。また、一部の講義内容が、他の教科内容と重複することが分かった。講義内容のチェックと講義内容の分担分けを実行した。さらに、講義内容の重要度を考慮し、講義内容の濃淡を明確にし、理解しやすい講義を構築した。今後は、薬学教育改訂コアカリキュラムへの対応も熟慮し、講義内容をさらなる改善を進める</p>
--	--

科目名	有機化学Ⅰ	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	吉武 康之	科目担当者			
自己点検・評価	<p>講義は 15 回を対面形式で実施した。講義資料は事前に Classroom 上に公開した。授業ではその印刷した物を配布し、教科書、分子模型と共に手元に置いて受講するよう指示した。授業の初めには、復習として高校で学んだ化学の内容を解説した。有機化学を基礎的な内容を確実に理解するため、時折画面には分子模型の操作を映しながら学生に分子模型の組み立てを体験させた。有機化合物の例は日常で用いられるものや医薬品など親しみやすいものを多用した。講義の途中で一部の学生に質問をして理解度を確認した。定期試験では授業で掲示した練習問題を改変したものをを用いた。再試験では基礎的な内容を中心に難易度を下げた問題を準備した。今年度より、化学のリメディアル科目が追加されたこともあってか、定期試験の成績が向上し、学生の理解度が全体的に向上した。</p>				
今後の対応	<p>定期試験の結果から、1 割程度の学生が講義内容を理解していないと思われ。これらの学生は練習課題に取り組んでいない傾向にあり自主的な学習ができていないので、課題提出の義務化などが必要と思われる。また講義を理解するために必要な基礎知識に欠けた学生には、時間の許す限り高校化学の復習も取り入れていきたい。</p>				

科目名	有機化学Ⅱ	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	吉武 康之	科目担当者			
自己点検・評価	<p>講義は 15 回を対面形式で実施した。講義資料は事前に Classroom 上に公開した。授業ではその印刷した物を配布し、教科書、分子模型と共に手元に置いて受講するよう指示した。第 1 回の講義では、有機化学Ⅰの復習を行った。有機化学反応を理解するため、概説をおこなった。化学反応の各論では、それぞれの反応を関連付けた解説を心がけ</p>				

	た。反応例として実際の医薬品合成反応を多く紹介した。講義の中間期に前半のまとめとして、演習とその解説をおこなった。学生の理解度は定期試験で判断した。約2割の学生が再試験となり、理解不十分と判断した。再試験では特に重要な内容に絞って出題をし、その結果9割以上の学生が理解できたと思われる。
今後の対応	授業アンケートでは「講義のスピードが速い、内容が難しい」との意見がみられた。1年次の復習や演習を加えることで授業回数が減ったため、1コマあたりの内容が密になる傾向があった。復習や演習は自宅で学習してもらおうよう変更を検討している。反応機構の理解には実際に書いてみるのが一番の習得法と考える。練習問題を自分で解くことで、応用力も養えるので、今後は問題を多く提供する予定である。

科目名	有機化学 III	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	吉武 康之	科目担当者			
自己点検・評価	講義は15回を対面形式で実施した。講義資料は事前に Classroom 上に公開した。授業ではその印刷した物を配布し、教科書と共に手元に置いて受講するよう指示した。第1回の講義では、有機化学IIの復習を行った。官能基の特徴とその反応性を理解できるよう意識して講義した。反応例として実際の医薬品合成反応を多く紹介した。講義の中間期に前半のまとめとして、演習とその解説をおこなった。学生の理解度は定期試験で判断した。約4割の学生が再試験となり、理解不十分と判断した。再試験では特に重要な内容に絞って出題をし、その結果9割以上の学生が理解できたと思われる。授業アンケートでは「内容が難しい」という意見があった。				
今後の対応	有機化学の最終科目であり、内容も多いことから、以前の科目が理解できていない学生には習得が難しいのかもしれない。練習問題等を用意し、日頃から自習する習慣をつけてもらう必要があると感じた。反応機構の理解には実際に書いてみるのが一番の習得法と考える。練習問題を自分で解くことで、応用力も養えるため、今後は問題を多く提供する予定である。				

科目名	化学系薬学実習 I (有機合成)	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	吉武康之	科目担当者	坂井崇亮、磯田紀之		
自己点検・評価	医薬品や生体成分の多くは有機化合物である。簡単な有機化合物の				

	<p>性質を理解し、その構造から、塩基性水溶液にイオンとなって溶けるか、酸性水溶液にイオンとなって溶けるかを見分けるすべと実験操作法を習得した。具体的には、酸性化合物と塩基性化合物の混合物を酸性、塩基性の抽出操作による分離法とその操作の意味を習得した。また、得られた有機化合物の誘導體化、再結晶による精製操作を習得した。医薬品合成では、局所麻酔薬である<p>p</p>-アミノ安息香酸エチルの合成を行い、得られた化合物の融点測定、混融試験、質量分析、核磁気共鳴スペクトルの測定により解析を行い、有機化合物の同定法、純度解析法を修得した。</p> <p>本年度は、反応機構の理解を深めるため、実習前講義での各反応の反応機構を説明することにより、理解を促すよう工夫をした。また、本年度はすべての実験操作の説明を動画用いて行なったことにより、説明による待ち時間を短縮することができ、全体として実習時間の短縮につながった。実験の安全性に関しては、知識の習得と安全な実験操作の徹底に努めると共に、消火設備を増やす等の安全面の強化を行なった。</p> <p>反応機構の理解や電子の移動を表す矢印の適切な扱い方に関する解説を行なったこともあり、例年に比べ実習試験の平均点の向上が見られた。一方で、パソコンでレポート作成を行う際は、化学式描写にケムドローを使用するようルールと課しているが、適切に行われていない例が見られた。</p>
今後の対応	<p>実験操作をスムーズかつ安全に行えるよう、また、実験操作の化学的な意味合いの理解を深めるように引き続き促していく。また、実験手技の動画資料の提供や、実験器具の増設あるいは円滑に共有できる方法を考えることで、実験の待ち時間を短縮できるように努める。</p>

科目名	生薬学	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	成川佑次	科目担当者			
自己点検・評価	<p>生薬学は薬となる天然に由来する植物，動物，鉱物について，その基原，成分，品質，薬効など幅広く学修する科目である。今年度は，重要生薬については講義中に標本を回覧して，見た目や香りなどから重要な生薬をまずは覚えてもらうよう配慮した。また，来年度から新コアカリ対応となることを踏まえ，2024 年度から教科書を変更し，内容も薬物過量摂取や大麻取締法の改正など最近問題となっていることを取り入れ，2 年次から複合領域を意識した内容を講義した。3 回</p>				

	<p>の小テストを実施や Google classroom にて復習問題を出すなどは今年度も継続して行った。</p> <p>2024 年度の定期試験の結果は平均 57.8 点で、再試験対象者は 60 名と多くなってしまった。これは記述式問題を増やしたことが理由であると考えられるが、単なる暗記科目ではなく知識を定着させるためにも必要であると思われる。</p>
今後の対応	<p>著作権侵害への対応と学生の利便性の向上のために教科書を変更し、講義内容も変更したが、やや難しい内容になってしまった。要点を絞って、より理解が深まるように配慮していきたいと考えている。</p>

科目名	天然物化学	学年	2 学年	期	後期前半
科目責任者	成川佑次	科目担当者			
自己点検・評価	<p>天然物化学は天然に存在する有機化合物の分類、性質、生合成、用途、医薬品等への応用について学修する科目である。今年度は、昨年度の内容を踏まえ、新たに新コアカリキュラムに対応できるよう内容を見直しながら講義を行った。化学の基礎を学んだ上で生体成分や生理活性物質に関してその構造などについて詳しく説明したものの、化学構造に関して苦手な学生が多く、有機化学の基礎から確実に知識を身につける必要があると考えられる。定期試験の結果は平均 76.0 点とまずまずの結果であるが、追再試験対象者が 14 名いた為、なるべく本試験で合格できるよう、講義を行っていく。</p>				
今後の対応	<p>天然物化学は半期の科目であり、教科書の内容を全て講義することは中々難しいが、重要な天然有機化合物に関しては重点的に講義を行うようにする。また、化学系薬学実習Ⅱ（天然資源）と同時期の講義であるため、実習と連携してより知識が定着できるように配慮する。</p>				

科目名	漢方医学Ⅰ(漢方の基礎)	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	成川佑次	科目担当者			
自己点検・評価	<p>漢方医学Ⅰ(漢方の基礎)は漢方の基礎、歴史、診断法、使用法、副作用や注意点などを学修する科目である。学生に苦手意識を持たないよう出来るだけ簡単に漢方独自の概念や用語など説明するとともに、漢方処方の各論では典型的な症例なども紹介して具体的にイメージできるようにした。今年度も基本的には昨年度の講義を踏襲して行っ</p>				

	<p>たが、Google Classroom にて質問欄を設け、学生が適宜質問でき、それを講義内で共有するように配慮した。また、講義の冒頭に前回の復習講義、課題の解説を行っているが、やや長いと学生アンケートから指摘されたため、来年度はもう少しまとめて講義するよう注意する。定期試験の平均点は73.7とまずまずの成績であった。</p>
今後の対応	<p>漢方医学に関しては国家試験では症例として複合問題で出題されることが多く、症例の文章を読んで患者の情報をとらえ、正しい選択肢を選ぶような力が必要とされる。学生の中には症例の問題に苦手意識をもつ者がいるため、講義中から国家試験の過去問や症例などを紹介し、早いうちにそのような問題の苦手意識を解消できるよう検討を行う予定である。</p>

科目名	漢方医学 II(漢方の応用)	学年	4 学年	期	前期後半 (集中講義)
科目責任者	成川佑次	科目担当者	今村友裕		
自己点検・評価	<p>漢方医学 II (漢方の応用)は、3 年生・漢方医学 I (漢方の基礎)で学修した知識を発展させ、実際の薬剤師実務に応用できるようになるために、前半は今村講師に医師として診断法や症例などについて講義を担当していただき、後半は鍼灸、中医学など統合医療に関する講義を成川が行った。東洋医学に関しては NHK で放送された内容などもとり入れて、学生の興味を引くよう工夫した。定期試験は平均 81 点と高く、実務実習へ行く前の 4 年生に対して有用な講義が実施できたと考えている。</p>				
今後の対応	<p>漢方医学 II (漢方の応用)は、旧カリにおいては必修科目であるが、東洋医学に関して興味を示さない学生がいるのも事実である。漢方医学 I では国家試験にも出題されるような重要な事項を講義しているのに対し、漢方医学 II では応用的であり、浅い内容になっている可能性がある。今後は講義内容を精査し、学生がより興味をもってもらえるよう検討する。</p>				

科目名	化学系薬学実習 II (天然資源)	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	成川佑次	科目担当者	吉武康之、磯田紀之、坂井崇亮		
自己点検・評価	<p>化学系薬学実習 II (天然資源) は生薬、漢方薬の取り扱いに必要な生薬形態の観察と鑑別、漢方薬の調製、品質評価のための試験法などの</p>				

	<p>技能を修得する実習科目である。生薬の鑑別においては形態とともに希望者には味や香りを確認してもらい生薬が印象に残るようにし、確認試験などに関しては化学構造に基づく機序についても理解できるように配慮した。今年度は教員数の減少に伴い、最後の実験結果の確認に時間がかかってしまった点が反省点である。間違った実験結果の解釈を防ぐために必要ではあるものの学生にとってはストレスであったと思われることから、来年度は方法を検討する。</p>
今後の対応	<p>出席時の確認に関して教員の数が少ない中で効率よくこなせるよう、やり方を考える必要があるが、実験操作をただ行うだけではなく、その意味も含めて理解させることが大事である。また、薬用植物の観察についても重要なものに関してはその形態が判別できるよう、解説を行うつもりである。</p>

科目名	生化学Ⅰ(生体分子)	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	塚本宏樹	科目担当者			
自己点検・評価	<p>「生化学Ⅰ」では、生体分子の構造と性質、機能と役割を理解し、薬学教育の基盤となる知識の修得を目標に授業を行った。「アミノ酸・タンパク質」、「糖質」、「脂質・生体膜」を小分子と高分子の視点で捉え、その構造と性質、生体内における機能と役割を説明できることが到達目標である。</p> <p>全15回の授業内容は、昨年同様、「アミノ酸・タンパク質」、「糖質」、「脂質・生体膜」に大別し、特に「酵素」について重点的に授業を行った。最終回のインフルエンザ流行によるオンライン授業を除き、すべて対面形式で実施した。</p> <p>同学期の「基礎薬学実習Ⅱ(生物)」では、「アミノ酸の定性」と「酵素反応速度測定・解析」を実習している。本科目で学修するタンパク質・酵素に関する知識と物理化学的測定法・解析法の技能を連携し、知識から応用に至る学修項目を一貫して修得できるよう工夫している。特に、学生が苦手な「酵素・酵素反応速度論」では、酵素の特性や反応速度論の理解に必要な知識、解析法、解析結果の解釈に重きをおいて授業を行い、実習では、酵素反応速度を実測し、測定データに基づく酵素反応速度論解析(Michaelis-Menten plot、K_m、V_{max}の算出等)の技能を修得した。</p> <p>小テストは、授業内容の段階的理解の確認と毎回授業の復習を促す目的で2回(各10分)実施した。例年通り五肢択一問題であるが、不確かな知識や理解では正解できない工夫をしている。第1、2回小テ</p>				

	<p>スト、定期試験の満点はあるものの、第1回小テスト以外は、例年に比べ、低調であった。定期試験と小テストの成績は、例年通り、強く相関し、日常的な予習復習の重要性が強く確認された。</p> <p>予習復習を促すため、講義資料は事前にWEB掲載し、教科書の該当範囲は初回授業で周知した。SBOsは各回授業の冒頭にも明示し、授業内容と達成目標を明確にした。授業内容に沿った復習問題を授業前にWEB掲載し、授業内容の予習復習によって要点となる知識を体系化できるよう工夫している。</p>
今後の対応	<p>生化学は、生命現象を化学的に探究するため、最低限の化学の知識と理解が必要となる。アミノ酸、糖、脂質等、多様性に富んだ小分子が存在するが、その基本構造や違いを生み出す官能基、並びに、生体分子の構造と性質の物理化学的関係を整理し理解することが大切である。小分子の理解は高分子の構造や性質を理解する基礎となる。</p> <p>例年、本学の学生は、「脂質・生体膜」に関して苦手意識があるようである。複合脂質の理解は生体膜の構造や性質を理解する基礎となり、アミノ酸・タンパク質の理解は膜タンパク質の局在や生体膜の機能発現の理解にもつながる。生体分子の名称、構造式を単に暗記するのではなく、構造から性質、機能、役割につながる「考える力」を養える授業にしたい。</p> <p>不合格者は例年並み、全体の成績は正規分布に近いが、一部の不合格者は抜本的な対策が必要と感じる。</p> <p>学生授業評価は例年通り高く、授業内容・計画に大きな変更、修正は必要ない。講義資料、伝え方、復習課題をブラッシュアップし、到達目標を達成できるよう取り組んでいきたい。</p>

科目名	生化学 II	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	猪部学	科目担当者			
自己点検・評価	<p>本科目は、2 年生前期に開講され、薬学教育モデルコアカリキュラムの C6(5)「生体エネルギーと生命活動を支える代謝系」を中心とする範囲をカバーする科目であり、生命の維持に必須である活動エネルギーや生体構成要素を、摂取した栄養素から生み出すしくみについて学ぶ。三大栄養素である糖質、タンパク質、脂質の「異化」と「同化」により行われる代謝反応は、酵素により触媒され、その反応は相互に関連している。これら、複雑な代謝反応系と栄養素の分解・吸収を含む体内での輸送系、貯蔵等、生命現象の根幹をなす代謝経路を包括的に修得する。授業は、糖質からの ATP 産生経路を中心に、脂質やタ</p>				

	<p>ンパク質などの性質の異なる代謝経路をブロックとしてとりまとめ、パワーポイント資料を用いて行った。配布したパワーポイント資料には空欄を設け、説明にあわせて記入してもらうことで、重要ポイントを意識してもらう工夫を行った。また、スライド1枚あたりの文字数を少なくして、文字を見やすくし、メモを書き込めるスペースを十分にとれるようにした。授業に集中する動機を与えるため、各回の終了後に、小テストを実施しているが、昨年に引き続き、解答に対するフィードバックを強化し、振り返りによってより効果的に理解が進むように充実させた。以上、本年度も概ね問題なく実施できた。</p>
今後の対応	<p>本科目は、1年前期の「生物学」、1年後期の「生化学Ⅰ」に続き、生物学の基本を学ぶ科目であり、その後続く「分子生物学Ⅰ、Ⅱ」や「免疫学」などの基盤を形成する。今年度は小テストの解答へのフィードバックを強化し、より理解が進むような工夫を行った。次年度も同様な方針で実施する予定で、引き続き小テストのフィードバックを強化し、授業に対する学生の取り組みを促したいと考えている。</p>

科目名	分子生物学Ⅰ（遺伝情報・細胞内情報伝達）	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	塚本宏樹	科目担当者			
自己点検・評価	<p>「分子生物学Ⅰ」では、「遺伝情報の保存と発現」、「遺伝子工学の基本技術」、「細胞の分裂と増殖」について学び、その仕組みについて分子・細胞レベルで理解し説明できることが到達目標である。</p> <p>授業内容は、「第 1-7 回セントラルドグマ」、「第 8-10 回遺伝子工学」、「第 11-14 回細胞分裂・細胞死・がん」の 3 部構成（第 15 回まとめ・補足）とし、対面形式の講義を行った。例年同様、各回の授業が SBO 過多に陥らないよう、伝える要点を絞り、毎回授業における学修理解の積み重ねが科目全体の理解につながるよう心掛けた。予習、復習を促す学修支援と理解の醸成を図る目的で、授業前に確認問題を WEB 配信し、授業の要点を事前に把握し、復習しやすくなるよう昨年度から継続的に取り組んだ。確認問題や授業内容に関して質問する学生も例年通り見られた。第 1 部セントラルドグマ、第 2 部遺伝子工学について基礎的内容を問う小テスト（15 分、10 点）を各 1 回実施したところ、例年以上の成績であった。取り組みが授業内容の早期復習とそれに伴う学修理解の向上に貢献していると考え。一方、小テストが良い成績だった安心感からか定期試験の成績は伸び悩み、平均点こそ例年通りであったが、高得点者が少ない結果であった。</p>				

今後の対応	<p>4年度目であるが、昨年度に続き、現状の授業内容・計画で問題ない と考える。試験結果を見る限り、特に伝わりにくい授業内容はなさそ うであるが、全体的に底上げにつながられるかが今後と課題と考 える。丸暗記で覚えきれない内容ではないため、どれだけ知識を体系化し 理解できるかがポイントである。復習課題の解答を作り、暗記に頼る 学生も少なからずいるものと思われる。その場しのぎの暗記学修では なく、高学年を見据えた知識の体系化、全体像を把握する学習スタイル を身に着け、理解を深められるよう意識付けしたい。</p> <p>授業評価アンケートを見る限り、例年通り、評価は高い。授業が能動 的な学修行動を促し、修学成果と自信につながるよう授業を通じて後 押ししたい。</p> <p>今年度モ板书を使って活用し丁寧に説明したところ、授業の進捗が想 定より遅くなった。第 15 回のまとめの回を利用し所定の開講時間内 に授業は収まったが、もう少しペース配分を速めてもよいかもしれな い。</p>
-------	--

科目名	分子生物学Ⅱ	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	猪部学	科目担当者	貝塚拓		
自己点検・評価	<p>本科目は、2年生後期の科目であり、薬学教育モデルコアカリキュラムの C6(6)細胞間コミュニケーションと細胞内情報伝達、C7(1)人体の成り立ち① 遺伝と② 発生、細胞骨格 (C6(1)③)、組換え DNA(C6(4)⑥)、細胞死 (C6(7)②)、免疫反応の利用 (C8(2)②) などを取り上げた。これらのうち、遺伝や発生は 1 年前期の「生物学」から、組換え DNA は 2 年前期の「分子生物学Ⅰ」から続く科目であり、連続した内容を含む。一方、細胞骨格と細胞運動、細胞内シグナル伝達分子の機能モチーフ、遺伝子多型の解析や遺伝疾患の診断法、リアルタイム PCR や次世代シーケンズ技術、タンパク質間相互作用、RNA 干渉やゲノム編集等の解析技術、ES 細胞等の多能性維持メカニズム、老化やストレス応答など、幅広いアドバンストな内容を含めた。授業の一部では、小テストを行うことで授業に集中する動機を与え、振り返りにより知識の定着を目指した。今年度は、一部の小テスト等で、解答に対するフィードバックをさらに補強し、振り返りによってより効果的に理解が進むように充実させた。ただ、定期試験(本試験)後の評価においては、不合格者が昨年よりやや多かった。しかし、再試験後の最終評価では、不合格者は減少し、概ね問題なく実施できた。</p>				

今後の対応	<p>本科目は、1年前期に履修する「生物学」、1年後期の「生化学Ⅰ」、2年前期の「生化学Ⅱ」、「分子生物学Ⅰ」から続く生物系基礎科目の最後に位置づけられる科目であり、全体の過不足の調整や最新知見を取り入れたアドバンストな内容で構成される。今年度は、一部の小テストの解答でフィードバックをさらに補強し、より理解が進むような工夫を行った。次年度も同様な方針で実施する予定で、引き続き授業に対する学生の取り組みを促したい。なお、2024 入学者から適用されるカリキュラムでは、本科目は廃止され、新たに「細胞生物学」(1単位)が開講する。そのため、次年度は旧カリ生のみが対象で、少人数での実施となる。</p>
-------	--

科目名	分子生物学実習	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	猪部学	科目担当者	太田昭一郎、多田納豊、塚本宏樹、柴田健太郎		
自己点検・評価	<p>本実習科目は、3年生の生物系実習科目として、薬学教育モデルコアカリキュラムの中から、抗原抗体反応を利用した検査方法を実施できる(C8(2)②)に対応したイムノプロット法を行い、モノクローナル抗体が抗原と高い特異性で結合すること、様々な検出法に活用されていることを学ぶ。さらに、遺伝子工学の基礎技術のひとつである大腸菌の形質転換をアドバンストな内容として実施した。本科目は、1年次の基礎薬学実習Ⅱ(生物)とともに、生物系の実習科目と位置付けられ、1年次に行った基礎的な実習内容やその後に授業で学んだ生命科学に関する知識を踏まえ、その他にも PCR による遺伝子断片の増幅と電気泳動、PCR-RFLP 法による H-ras 遺伝子の点突然変異の解析やコンピューターソフトを用いた DNA 配列解析などが含まれている。本実習は、3~4 名で構成される少人数班で行い、各実験で得られる結果について、班の中で統一した見解を得てレポートに記載するように促し、理解の促進をはかるとともに、協働する態度の醸成を目指した。実習では、実験ノートを記録しながら実験を進めてもらい、その日の最後に、担当教員が実験ノートをチェックしている。この過程で、教員と学生間で様々なやりとりを行い、実習の内容だけでなく、予想外の事態に対する考え方なども養えるようにしている。以上、概ね問題なく実施できた。</p>				
今後の対応	<p>本実習で実施する技能は、3年次までに履修する生命科学系の科目で修得する知識と関連づけられ、薬学教育コアカリキュラムに含まれる内容以外にアドバンストな内容を含むものとなっている。さらに、少人数による共同作業は、1年次の基礎薬学実習から引き続きコミュニケーション力、協働する態度の醸成において、重要な機会となっている。さらに、簡単な議論を通じて、問題解決法なども養う機会となっ</p>				

	ており、次年度も引き続き多様な資質の向上を促したいと考えている。
--	----------------------------------

科目名	解剖生理学Ⅰ	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	村田 祐造	科目担当者			
自己点検・評価	<p>医療従事者である薬剤師を目指す者として、人体の構造と機能を取得することは不可欠である。まずは 1 冊の指定された解剖生理学教科書の熟読と十分な理解を学生に促した。そのため教科書に沿った質問形式の予習課題を事前に紙媒体および Google Classroom で配布した。講義はそれに沿った課題を含め、教科書に沿って進めていった。また、講義後確認のため Google Classroom で課題の解答を配布した。</p> <p>講義の最初にシラバスに記されているように、予習・復習をするように伝えた。小テストを講義開始時、Google Classroom で行った。小テストは単純に教科書の語句を問う問題ではなく、講義内容を補充するような事項を交え、内容の理解を問う問題作成を心がけた。多くの学生が自己学習をしていたためであろうか、概ね良い成績であった。次の講義の始めに解説を行い、Google Classroom に掲載した問題解答のフィードバックも理解するよう告げた。</p> <p>十分学修が出来ていない学生が多く、本試験の結果は昨年度より多く、不合格者が 1/3 を超えていた。最高得点も 90 点であった。しかしながら、再試験では、集中して学習したようで単位非取得者は僅か 2 人（受験者 46 人）であった。</p>				
今後の対応	<p>今年より新カリキュラムとなり、ⅠからⅢまでであった解剖生理学がⅡまでになり、時間数が少なくなり旧Ⅱの領域が加わり、内容が増加したため、説明に十分時間をかけることが出来なかった領域もあった。そのためもあるのであろうか、本試験での合格者が昨年よりも減ってしまった。これを反省材料として、講義内容を見直し、重点的ポイントを絞り、講義を進めていくことが必要であると考えられる。また、全ての学生が授業内において、内容に興味を持ち、理解できるように努めていきたい。全ての学生が十分学修するための対応を考え、行っていきたい。</p> <p>まずは、シラバスに提示している準備学修を確実にを行うよう喚起する必要がある。シラバスでは、予習復習に 4 時間かけるように記載しているが、講義アンケートでは、2 時間以上が 12% のみで 30 分未満が 48% (昨年の 28% より大幅に増加しており、本試験での不合格者増加と関連している可能性がある) であった。復習を促す小テストであ</p>				

	ったが、さらにその喚起が個人に届くように、最初の講義で自己学習の重要性を伝え、あるいは予習レポートを課すことが良い方策かもしれない。
--	--

科目名	解剖生理学 II	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	緒方勝也	科目担当者			
自己点検・評価	<p>基礎医学としての解剖生理学は医療系学部としては共通する基礎知識である。薬学部は人体を直接扱う機会は少ないものの、総合的な医学・薬学の理解に重要な内容を含んでいる。本科目では解剖生理学分野のうち神経系、内分泌系、血液系について扱った。各講義においてはあらかじめ授業のスライドと特に重要な部分を抜粋した資料を google クラウドで配布し、学生が利用可能な形をとった。また講義の最後に講義に関連したミニテストを google フォーム上で設定し、学生の復習の補助となるよう務めた。解剖生理学は医療系の学部における共通言語を学ぶ場として非常に重要であるが、英単語のようにまずは暗記する必要がある知識も多く、要求される知識量が多かったかもしれない。</p> <p>神経系については中枢神経、末梢神経、自律神経系をそれぞれ詳説し、基本的な解剖学的知識のみならず、臨床医学につながる橋渡しとなる内容を講義した。特に自律神経系は薬剤の標的となる部分が多くあり、これらの知識は今後の薬理学の理解に重要になってくることを念頭に講義を行った。同様に内分泌系は基礎的な解剖学知識および各内分泌器官の機能や異常を来たす場合の影響、そしてこれらの薬剤の標的の観点から理解できるよう講義した。血液学では各血球血漿成分の分類および機能を講義した。血球成分は血栓や白血球成分の疾患との関連について、また血漿成分は凝固系を中心に薬剤の標的となる箇所を重点的に講義した。</p>				
今後の対応	<p>アンケートにおいて大きな問題はなかったようであった。昨年度に引き続き重点がわかりやすく伝わるよう資料は可能な範囲で枚数を減らし、また資料中の強調を通じて重要なポイントが印象に残る工夫をしていく。教科書からやや外れる内容であっても薬学部に関連の内容については触れるようにし、他の教科と連携し知識の定着を図る。特に神経系は医学部でも難関となりやすい分野であり、知識の羅列にならないよう、ゆっくりと内容に触れるよう工夫する。自律神経は多くの疾病で標的となる領域であり疾患との関連を通じて各内容が疾患理解や薬理学の理解、副作用の理解に必要であることが伝わるよう</p>				

	臨床面とのつながりの説明を増やし学生の興味を引き出すよう改善を試みる。これらの高学年での学習時に役立つよう改善を今後も継続する。
--	--

科目名	免疫学	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	猪部学	科目担当者	太田昭一郎		
自己点検・評価	<p>本科目は、2年生後期の科目であり、薬学教育モデルコアカリキュラムのC8(1)身体をまもる、C8(2)免疫系の制御とその破綻・免疫系の応用で取り上げられる「免疫」を体系的に修得する唯一の科目となっている。免疫系は、医薬品が治療の対象とする病態と深く関連しており、そのターゲットとしても重要であることから、抗炎症薬 (E2(2)①)、免疫・炎症・アレルギー疾患の薬、病態、治療 (E2(2)②)、骨・関節・カルシウム代謝疾患の薬、病態、治療 (E2(2)③) や、ウイルス感染症およびプリオン病の薬、病態、治療 (E2(7)④)、悪性腫瘍 (E2(7)⑦) など、免疫系の関連する感染症やがんなども取り上げた。さらにアドバンストとして、HIV 感染症の疫学、腫瘍マーカーなどについても触れた。授業の一部では、小テストを行うことで授業に集中する動機を与え、事前課題や振り返りにより知識の定着を目指した。今年度は、一部の小テスト等で、解答に対するフィードバックを強化し、振り返りによってより効果的に理解が進むように充実させた。5月から新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、これまで実施されていた特別措置の多くは通常対応に戻ったが、引き続き、感染には注意しながら安全に授業を実施できた。以上、本年度も概ね問題なく実施できた。</p>				
今後の対応	<p>本科目は、病態と関連する生体の高次の制御機構を学ぶ科目であり、1-2年で履修する生物系基礎科目「生物学」、「生化学Ⅰ・Ⅱ」、「分子生物学Ⅰ」で修得する生体反応の基礎を踏まえた重要科目と位置づけられる。今年度は、一部の小テストの解答でフィードバックを強化し、より理解が進むような工夫を行った。次年度も同様な方針で実施する予定で、引き続き授業に対する学生の取り組みを促したいと考えている。</p>				

科目名	衛生化学Ⅰ	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	貝塚 拓	科目担当者			
自己点検・評価	本講義では、衛生化学分野における栄養と食品に関する講義を実施				

	<p>した。本講義の到達目標として「1、五大栄養素の種類と機能および消化・吸収・代謝の過程を説明することができる。2、食事摂取基準と栄養の過不足により生じる疾患とその予防・治療法について説明できる。3、食品中の炭水化物、タンパク質、油脂が変質/変敗する機構を説明できる。4、食品添加物を含む様々な食品成分についてその種類や機能を概説できる。5、食中毒の原因となる微生物や自然毒を列挙し、その作用機構や症状の特徴を説明できる。6、食品汚染物質の代表例を挙げ、健康に及ぼす影響を説明できる。」を掲げている。</p> <p>本科目の内容は広範囲に及ぶため、各項目を均等に配分し、全範囲を網羅するよう努めている。そのため重要な点を明確にして講義し、補足的な内容や生物系科目で扱う復習的な内容は簡潔に講義した。また、スライドには図を多く取り入れ視覚的な印象を与え、理解し易い講義になるよう努めた。さらに、講義内で扱う化合物については学習カードを作成し、構造式と特徴について修得しやすくなるよう工夫した。講義の最後には復習用問題を配布し、学習のアウトプットを自身で判断できるようにした。</p> <p>全講義終了後の学生アンケートでは「復習問題で何が大事なのかを掴むことができた」という評価があり、講義と配布資料は一定の水準に達していると考え。一方で、「資料が多すぎるのでよりコンパクトにして欲しい」との評価があった。</p>
今後の対応	<p>今年度を終えて、来年度の課題は配布資料の文章を極力減らし、枚数を削減することで学生にとって学習しやすい資料になるよう工夫する。そして、学生が最後まで集中できるような講義となるよう、講義スライドに写真やアニメーションを加えたり、途中で演習を挟むなど試みる予定である。</p>

科目名	衛生化学Ⅱ	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	石田卓巳	科目担当者			
自己点検・評価	<p>衛生化学は、人々の疾病の予防や健康の維持・増進に資する予防薬学としての使命を有する科目であり、そのカバーする領域は、保健(公衆)衛生のみならず環境衛生、食品衛生、化学物質の毒性、薬毒物中毒の科学的鑑定や中毒処置法など広範囲に及んでいる。本講義では、生体に対する化学物質の毒性学的側面の理解に向け、化学物質の代謝・代謝的活性化、化学物質による発がん、化学物質による毒性とその処置、電離放射線・非電離放射線の生体への影響について授業を行った。本講義では、化学物質や放射線による生体影響に加え、それら</p>				

	<p>に対する生体の防御的反応を理解し、かつ説明できることを到達目標とした。授業は対面で 15 回開講され、指定教科書の解説と理解を主軸に進行した。授業の始まりに前回の授業で重要とされる点について口頭で質問を行うことで、学生の理解度を確認しながら進めた。また、衛生化学が他の基礎科目（有機化学、物理化学、生物学など）で培った知識を基とした発展的学問であるとの観点から、他の学問分野との知識の連携を想起させる授業説明を行い、自らの力で知識を集約し発展させる意識付けを行った。定期試験は、教科書に記載されていることを基に CBT や国家試験に対応できるような問題形式とした。さらに、再試験については、問題形式は変えず難易度を下げたものを準備した。本年度の結果を見る限り、学生における問題の読解力や学習内容の理解度が大きく二極化しているように思われた。また、基礎学力と考えられる有機化学、物理化学、生化学の知識が不足しているもの、またはそれらの知識が整理されていないものも散見された。これらの学生には更なる学習時間の確保が必要であると感じた。</p>
今後の対応	<p>衛生化学は、薬学における専門科目の中でも様々な分野の知識を必要とする発展型の学問である。このため、これまでに習得した様々な科学的基礎知識の有機的な繋がり の理解が必須である。これが不十分であることが、学生の理解度の差を産み出している原因の一つであると考察する。これを改善するため、来年度は、授業で触れる様々なトピックに対して、他の科目との繋がりを想起させるような授業の実施を目指す。また、現状のスケジュールで中間テスト等の補助的な確認を行うことは困難であるため、授業での重点項目の解説を丁寧に行うと共に、授業開始時の口頭試問を充実させることが望ましいと考えている。</p>

科目名	環境衛生学	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	山本 緑	科目担当者	山本 緑		
自己点検・評価	<p>本講義では、衛生薬学領域における環境科学分野を中心に、環境と人の健康との関わりについて講義を行った。到達目標として、 「1. 地球環境と生態系について、人の健康に關与する要因について説明できる。2. 地球環境問題とその対策、法規制について説明できる。3. 水環境による生体への影響と、浄水および下水処理について説明できる。4. 大気汚染物質の性質と発生要因および生体への影響について説明できる。5. 室内環境と健康の關係について説明できる。6. 廃棄物の種類と処理について説明できる。7. 環</p>				

	<p>境中の化学物質の特性と生体への影響について説明できる。」を掲げた。</p> <p>講義は、教科書に沿って進行した。例年通り、特に重要な事項について穴埋め形式の配布資料にまとめて、学生の理解度を高めるよう努めた。資料には毎回の復習のための確認問題を記載し、定期試験の出題範囲となることを初回時に伝えた。また、学生の自発的学習を促すべく、1. 講義中は身近な内容に置き換えた分かりやすい説明を加えること、2. 講義外では積極的に意見交換することで学生への興味・熱意を伝えること、の2点を特に意識した。講義のターゲットを成績中間層より下位方向に据えていることから、上位層に向けては毎回アドバンストの話題を紹介したり、小レポートに直接フィードバックを返したりすることを心掛けた。理解度の確認および講義への質問・要望の対応には、対面以外に Google Form も併用しており（無記名式）、今年度は Google Form を活用する学生が例年より多かった。定期試験の平均点は講義開始初年度（2022年度）並みとなり、想定より低かった。留年生が増え、そのほとんどが再試験該当となったことが一因と考えている。Google Form への回答や授業アンケートの結果から、内容への理解度や講義の印象は良好であったことから、上述した2点の意識事項についても効果はあったと判断する。引き続き、学生の学習モチベーションを高めることを第一に考えた講義を実践する。</p>
今後の対応	<p>講義の中心となる配布資料についてはアップデートを加え、理解度を高めるように作成した。内容は概ね高評価であったことから、次年度も維持していきたい。今後、留年生を含めた学習困難者の増加が予想されることから、彼らの成績向上を如何にして図るかが課題と考えている。個別の対応をするなど、学年全体の底上げを検討したい。</p>

科目名	衛生系薬学実習	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	石田卓巳	科目担当者	山本緑、貝塚拓、澤井円香		
自己点検・評価	<p>本科目は、衛生化学に関わる基本的な技能を習得するため、3年生の実習科目として開講された。実習項目は、衛生化学分野から食品成分の試験（脂質の酸価とカルボニル価の測定、および食品中のビタミンCの定量）と特定原材料の試験（PCRによる小麦成分の定性検査）、環境衛生分野から水質の試験（飲料水の硬度と残留塩素濃度の測定、</p>				

	<p>および環境水における化学的酸素要求量の測定)、空気の試験(室内環境における気温、気湿、カタ冷却力、気動、感覚温度、補正感覚温度、不快指数の測定、および大気環境における粉塵、二酸化窒素の測定)であり、これらを通じて各種測定技能の習得を目指すと共に、講義で学んだ食品衛生や環境衛生における知識の補完を行なった。実習は4名ほどで構成される少人数班を基本単位として実施し、実験での協力態勢や結果を協議する姿勢の醸成を促した。本年度も実習は概ね問題なく実施できており、良好な実習であったと考えられる。</p>
今後の対応	<p>来年度も原則的に本年度の体制を維持しながら実習を実施する。一方で、本年度の実習においても、実習期間中に実験機材や試薬等の不足が危惧される事態となったこと、さらに機材や試薬に関して危険と感じる取り扱いが一部の学生に見られたことなどいくつかの問題点も見受けられた。このため、来年度は、機材や試薬等の計画的な充足に加え、安全対策や感染対策を徹底するための更なる指導の強化など改善を行う予定である。また、レポートについても、本年度の状況を周到し、実習の理解度を深めながら、かつ学生の過剰な負担とならないような形式にまとめていく予定である。</p>

科目名	薬理学Ⅰ(総論、末梢神経薬理等)	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	齊藤秀俊	科目担当者	柴田健太郎		
自己点検・評価	<p>薬理学総論として、薬理学という学問の概念を理解し、薬物の効果やその発現機序を説明するために必要不可欠な基本的事項について「薬学教育モデル・コアカリキュラム」の内容に対応した講義を行った。また、自律神経系の解剖と生理を復習し、これら神経系に作用する薬物の薬理学的基礎知識について「薬学教育モデル・コアカリキュラム」の内容に対応した講義を行った。</p> <p>将来の薬剤師としての業務を遂行する上で必須となる知識である、1) 薬物の生体内における作用に関する基本的事項(用量と作用の関係、アゴニストとアンタゴニスト、薬物が作用する分子と細胞内情報達、薬物の体内動態等)、2) 自律神経系の働きと生理学的機序、3) 交感神経、副交感神経、自律神経節に作用する薬の薬理学的基礎知識(分類、薬物名、薬理作用、作用機序、副作用、相互作用、臨床適用等)の修得を定期試験によって確認した。講義内では必須習得事項を含むレジュメを配布した上で、視覚的情報をスライドを用いて提供し、概念としての理解が深まるように工夫した。以上、本年度も概ね問題なく実</p>				

	施できた。
今後の対応	定期試験結果から、目標としていた知識習得は達成されたと考えているが、再試験対象者の個別指導から、基礎的知識の呼び起こしの必要性が感じられたことから、今後の講義では過去の知識を反芻させるような機会を追加し、講義時間内での理解のばらつきを少なくするための工夫を実行していく。

科目名	薬理学Ⅱ	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	窪田香織	科目担当者			
自己点検・評価	<p>講義第1回～第2回は、炎症・アレルギー関連薬について、第3回～第4回は末梢神経のうち体性神経系に関する薬物、講義後半（第5～15回）は中枢神経系に関する各疾患について講義した。各疾患領域で用いる主な薬の作用機序、副作用、相互作用等の要点を講義し、学生が整理して理解出来るようにした。生理学、病態学に関連する内容も講義内容に加え、それらを薬理作用機序と繋げて理解出来るようにした。本科目は、3年次前期までに履修した解剖生理学、生化学、病態生理学等の学問と繋がり、また薬理学Ⅰで学習した基本事項や薬物の効果や作用機序等を基盤とする内容のため、それらの科目を復習しながら受講するよう伝えた。Google Classroomで講義資料を事前に配信し、目を通しておくよう指示した。また講義中には国家試験過去問題を例示して解説し、再考したい。確認問題や過去問の提示・解説は学生の知識の整理に有効であり、薬学共用試験や国家試験必須・理論問題レベルの一問一答形式の確認問題を配布して自己学習を促した。</p> <p>しかし定期試験では多くの再試験者（46名）が発生した。再試験の結果、大部分が合格したが、最終的に10名不合格となった。授業評価アンケートの結果をみると講義の内容が広範で学習が間に合わなかった、試験難易度が高かった（CBTレベルでない）という意見が見られたが、配布した資料（確認問題、国家試験過去問）のみ暗記していた学生が多かったようだ。追再試験では多くの学生の得点は上昇（+29.9点）し、合格点に達したことから、おおむね目標は達成されたと考える。</p>				
今後の対応	<p>広範な知識習得のため、疾患、薬理作用機序、各薬物の特徴等を繋げて体系的な理解が進むよう講義の流れをより一層工夫する。各講義の重点ポイントをより明確にできるような講義資料作成を目指す。配布</p>				

	資料の一部語句を空欄にして講義内で記入させるようにしていたが、講義に集中できないとの意見があったので、今後は再考したい。確認問題や過去問の提示・解説は学生の知識の整理に有効であり、薬学共用試験への準備にもつながることから、今後も出来る限り継続する。授業アンケートの結果をみると講義の内容に対して予習復習の時間が少ない（1時間未満～30分未満～の学生が半数以上）ので、もう少し自学の時間を確保できるよう資料や課題等を充実させたい。次年度以降は、講義内容の理解度に応じて、特に成績下位者の対応を検討する（補講や課題等）。
--	--

科目名	薬理学Ⅲ（循環器薬理、消化器薬理等）	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	齊藤秀俊	科目担当者	岸拓弥、梶岡俊一、窪田香織		
自己点検・評価	<p>薬理学Ⅲ（循環器薬理、消化器薬理等）の講義では、薬理学、生理学、解剖学などの知識を基盤として、循環器疾患に用いる薬物、代謝疾患に用いる薬物、血液疾患に用いる薬物、消化器疾患に用いる薬物、泌尿・生殖器作用薬の薬理学的基礎知識（分類、薬物名、薬理作用、作用機序、副作用、相互作用、臨床適応など）などを学び、薬物治療のための基礎知識を身につけることを目的とした。また、国際的な視点を醸成する一環として、主要な専門用語（テクニカルターム）は、和名および英名の両方で習得することを目的に、循環器系疾患治療薬、代謝系疾患治療薬、血液疾患治療薬、消化器疾患治療薬、泌尿器・生殖器作用薬の講義を行った。薬物の効果やその作用機序、副作用を説明するために必要事項について「薬学教育モデル・コアカリキュラム」（平成25年度改訂版）の内容に対応した講義を行った。特に循環器系疾患治療薬、泌尿器・生殖器作用薬については、専門医である教員が担当し、将来の薬剤師としての業務を遂行する上で必須となる現場の知識も含めて講義を行った。講義内では新薬も含めて必須習得事項を含むレジュメを配布した上で、視覚的情報をスライドを用いて提供し、各治療薬の理解を促した。</p>				
今後の対応	<p>定期試験結果から、目標としていた知識習得は達成されたと考えているが、新しく更新された知見についても、取りこぼしの無いように常に最新の講義を心掛けていく。今後の講義では過去の知識を反芻させるような機会を追加し、講義時間内での理解のばらつきを少なくするための工夫を実行していく。</p>				

科目名	薬理学Ⅳ	学年	4 学年	期	前期
科目責任者	窪田香織	科目担当者	太田昭一郎、猪部学、齊藤秀俊、柴田健太郎		
自己点検・評価	<p>講義前半の第1回～第9回は、感覚器系薬（1 コマ/柴田）、呼吸器系薬（2 コマ/窪田）、内分泌系薬（2 コマ/斎藤）、免疫系に作用する薬（1 コマ/猪部）、抗体医薬品（1 コマ/猪部）、抗炎症・アレルギー薬（1 コマ/太田）、抗悪性腫瘍薬（1 コマ/太田）の分担で講義した。各教員は担当疾患領域で用いる主な薬の作用機序、副作用、相互作用等の要点を講義し、学生が整理して理解出来るようにした。生理学、病態学に関連する内容も講義内容に加え、それらを薬理作用機序と繋げて理解出来るようにした。本科目は、解剖生理学、生化学、病態生理学等の学問と繋がり、また薬理学Ⅰ～Ⅲで学習した基本事項や薬物の効果や作用機序等を基盤とする内容のため、それらの科目を復習しながら受講するよう伝えた。グーグルクラスルームで講義資料を事前に配信し、目を通しておくよう指示した。薬学共用試験を控える4年生の授業に対する集中度は、3年生までと比較して増していた。本講義の後半6コマは薬理学Ⅰ～Ⅳの学修内容の総復習に割り当てた（感覚器系薬（3 コマ/窪田、3 コマ/柴田）。講義内で演習に取り組んだのち、各回演習試験を課し、演習試験結果は本科目の成績評価に含めた（5点×6回）。総復習および問題演習は、4年生までに学んだ薬理学知識の整理・確認に有効であった。</p> <p>定期試験では108人の受験者中、9名の再試験者（8名不合格、1名欠席）が発生したが、追再試験によりすべての学生が試験を合格したことから、おおむね目標は達成されたと考える。</p>				
今後の対応	<p>定期試験結果から、目標としていた知識習得は達成されたと考えているが、疾患、薬理作用機序、各薬物の特徴等を繋げて体系的な理解が進むよう講義の流れを各担当教員が一層工夫する。薬理学の総復習および問題演習は学生の知識の整理に有効であり、薬学共用試験への準備にもつながることから、今後も出来る限り継続する。授業アンケートの結果をみると講義の予習復習の時間が少ない（1時間未満～30分未満～の学生が半数以上）ので、もう少し自学の時間を確保できるよう資料や課題等を充実させたい。</p>				

科目名	がん薬物療法学	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	猪部学	科目担当者	齊藤秀俊、宗像千恵		

自己点検・評価	<p>本科目は、3年前期の科目であり、主要な疾患である「がん」に着目し、腫瘍に関する薬学教育モデルコアカリキュラムの内容だけでなく、アドバンストな内容も含めて、「がん」を包括的に学習する大学独自の科目である。以上のように、生体の基本的な仕組みを修得したうえで実施される。内容は、がん化のメカニズムやリスク要因と予防、抗がん剤の作用機序、臨床での薬物治療の実際、副作用と医療的ケアなどを含み、3つのパートに分けて実施した。薬学モデルコアカリキュラムには、「がん」に関連する項目が、C6 生命現象の基礎、D2 環境、E2 薬理・病態・薬物治療、F 臨床薬学などに散在している。本科目は、これらを一つにまとめ、「がん」という視点から薬学に必要な知識を捉えることを目的としている。授業では、各パートを担当する教員が、学生の理解促進を促すため、小テストや課題を課して授業に集中する動機を与えとともに、知識の定着を目指した。今年度は、一部の小テスト等で、解答に対するフィードバックをさらに強化し、振り返りによってより効果的に理解が進むように充実させた。また、スライド資料の配布では、1枚あたりのスライド数を少なくすることで、文字を読みやすくし、メモを書き込めるスペースを十分にとれるようにした。このように、復習を容易にし、理解が深まるように工夫した。以上、本年度も概ね問題なく実施できた。</p>
今後の対応	<p>本科目は、1-2年で履修する生物系基礎科目や生理学、免疫学等の生体の基本的な仕組みに関する科目を修得し、薬理学や病態生理学等と同時期に開講される。今年度は、一部の小テストで、解答へのフィードバックを強化するなど、より理解が進むように様々な工夫を行った。次年度も同様な方針で実施する予定で、引き続き改良を加えて、授業に対する学生の取り組みを促したいと考えている。</p>

科目名	ゲノム医療	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	塚本宏樹	科目担当者			
自己点検・評価	<p>本科目では、ゲノムの違いによる遺伝性疾患の発症と薬物応答の個体差、異なる個体間に生じる免疫応答と移植医療の関係、再生医療の移植医療への応用、がんゲノムに基づく個別医療（がんゲノム医療）とがん免疫療法の現状・展望、また、これらの医療に応用される遺伝子治療、抗体医薬や細胞医薬等を始めとしたバイオ医薬品について学修した。</p> <p>到達目標は以下のとおりである。</p>				

	<ol style="list-style-type: none"> 1. 遺伝子治療の原理、方法・手順、現状、倫理的問題点を概説できる。 2. 遺伝的素因による薬物応答の個体差について例を挙げて説明できる。 3. 移植医療の原理、方法・手順、現状、ゲノム情報の取り扱いに関する倫理的問題を概説できる。 4. 移植医療に関わる免疫反応（拒絶反応・免疫寛容）を説明できる。 5. がんゲノムに基づく個別医療とがん免疫療法の現状を説明できる。 <p>本科目は、3年前期までの必修科目、特に、免疫学と分子生物学の知識と理解を基盤に、生化学、薬理学、薬物代謝学、微生物学等の基礎科目の履修を前提とした分野横断的な発展科目である。既修科目の知識や理解が不十分な場合、本科目の到達目標を達成するのは困難である。例年、免疫学の復習を目的とした任意の補講（90分）を実施していたが、参加者が多く学生ニーズも高いと考えられるため、本年度は授業を1回増やし、全9回の授業を実施した。授業は、遺伝性疾患・遺伝子治療、ゲノム薬理、移植医療、がんゲノム医療に大別し、毎回毎にテーマ・要点を絞ったメリハリある授業を心掛けた。特に、遺伝性疾患や遺伝子治療では、背景となるゲノム等の分子生物学的内容の復習に力点を置き、移植医療では免疫学の復習に時間を割いた。また、学生の知識と理解を図り、授業の早期復習を促す目的で、第6回に小テスト（最終評価の25%）を実施した。</p> <p>授業における工夫として、学生が授業内容を予習復習できるよう授業資料を事前にWEB掲載した。また、分野横断的内容であることに配慮し、授業内容が漫然と幅広い内容にならないよう、授業を体系化し代表的な具体例も交えながら授業を展開した。学生の予習復習、各回授業で理解してほしい要点やポイントを明確にするため、質問形式の要点資料を配布（WEB掲載）し、自己学習を促した。</p>
今後の対応	<p>薬学演習の成績や学生との会話から察するに、今年度の学生も既修内容の十分な理解や知識の定着が不十分な学生が多いことが懸念された。一方、小テストの成績は、懸念したほど低くなく、過去2年に比べると高い傾向であった。一方、定期試験は例年並みであった。最終成績は正規分布に近く、不合格者数も昨年とほぼ同数であった。ただし、一部の不合格者は抜本的な対策が必要な学力水準とを感じる。授業全体としては良い傾向を感じるが、今年度の小テストに限っては、一部学生による不正行為が疑われた。小テストによる学修効果も感じてはいるが、教員一人で適正な小テストの実施環境を確保することが難</p>

	<p>しいため、来年度は小テストの実施を見送ることにする。</p> <p>学生の授業態度や出席率を見る限り、多くの学生は向学心を持ちつつも既習内容の理解不足に対する焦りを感じた。来年度も引き続き、本科目において既習内容の理解、定着を意識しつつ、本科目の到達目標の達成を目指したい。また、細胞医薬やがん免疫療法に関する授業内容に十分な時間を配分することが難しかったことが反省点としてあげられる。</p>
--	--

科目名	化学療法学	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	多田納豊	科目担当者	西村信弘		
自己点検・評価	<p>本科目は、病原微生物および寄生虫に作用する医薬品の薬理学的基礎知識（薬理作用、機序、抗菌スペクトル、主な副作用、相互作用、組織移行性）および感染症の病態・薬物治療に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を修得することを目的とする科目である。</p> <p>当科目の前半（8回）は、種々の化合物の種類・構造・性質・作用機序を「薬理学的観点」から、また、それぞれの薬物に対する耐性化のメカニズムを「生物学的観点」から授業し、後半（7回）は、臨床現場での化学療法の実際に則して、感染症に対する治療薬の選択や副作用などについて、「薬物治療学的観点」から授業した。この様に、当科目は「どのような薬物があり、それらの薬物を感染症・病原体に対してどの様に選択するのか」について、基礎から臨床への2段階構成で授業を実施している。</p> <p>薬物名とその性質・特徴の多くは暗記が必要であるが、化学構造から性質が理解できるものや薬物名に反映されるものが多くあるため、薬物名は構造式とともに記憶することを求めた。特に前半は、作用機序や副作用のメカニズムを、薬物の構造に基づいて「理解」するための説明を丁寧に行った。また、後半は、臨床における薬物の選択について、薬物の病原体に対する親和性だけでなく、副作用の観点や薬剤耐性菌出現抑制の観点、患者の状態に基づく選択の仕方などを説明し、現場で必要な知識の修得を目指した。</p> <p>当科目は、一度の講義の情報量が多い授業となるため、補助的に、講義を録画し、復習のために動画を視聴できるようにした。動画の提供は学生に好評であり、復習に寄与できたと考えられる。また、一部の授業では、講義内容の重要ポイントの理解、知識の定着や自主学習の方向性を確認してもらうことを目的として、Google フォームを活用</p>				

	<p>した確認問題を次の講義開始時までの課題とし、次の講義開始時に、正答率を基に適宜追加説明・解説を行った。この取り組みは学習の一助となっていると考えられる。</p>
今後の対応	<p>動画の活用や確認問題の実施と解説は、学修に一定の効果があると考えられるため、部分的にでも継続して行う予定である。</p> <p>また、3年生前期の「病原微生物学」の知識が必要な科目であるため、その繋がりをより明確に示し、理解を深め、記憶の定着をより強固にすることを目指し、講義内容を改善していく。</p> <p>この科目は暗記すべきことも理解すべきことも多いため毎回の復習・反復学習の必要性を講義の度に伝えているが、復習時間が1時間にも満たない学生が凡そ半数いる状況であり、学生の学習に対する姿勢・モチベーションが低い点が問題であると考え。この状況を改善する方法を引き続き考える。</p> <p>また、授業アンケートに「資料の見難さ」を指摘する意見が複数あり、この点は改善を心掛ける。</p>

科目名	化学療法学（再履修）	学年	4 学年	期	後期
科目責任者	多田納豊	科目担当者	西村信弘		
自己点検・評価	<p>本科目の該当学生は、既に3年次に同様の内容の授業を受講した学生である。理解度を自主的に高めてもらうことを目的として、講義の動画をクラスルームにアップロードし、その動画を視聴する事と、ノートを用いた学習やレポート等を課題とし、個別にノートチェックおよびその内容に基づく指導などを行った。特に、着眼点の修正や、様々な事象の関連性を意識できる様になることを意識して指導した。</p> <p>また、講義内容の重要ポイントの理解、知識の定着や自主学習の方向性を確認してもらうことを目的として、Google フォームを活用し、前回の講義に関する確認問題を講義開始時に出題し、学生の自主学習に役立ててもらった。</p>				
今後の対応	<p>4年次であるため、この科目を欠単すると進級できない事が確定してしまうため、学生自身が本気で学習したことが大きな要因であるとは思いますが、課題としたノートを自身で作成し、その際に教科書や講義資料を見て学習した事で、覚えるべき内容がしっかり頭に入っていた様に見受けられた。特に、ノートを丁寧（文字や見た目の綺麗さではない）に書いていた学生は本試験で合格する傾向が強く認められる。再履修科目の方策として、今年度のやり方で来年度も行う予定である。</p>				

科目名	生物系薬学実習	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	齊藤秀俊	科目担当者	窪田香織、貝塚拓、柴田健太郎、福田光良		
自己点検・評価	<p>医薬品の開発過程の非臨床試験で行われる動物実験について知り、一部を実体験する実習を行った。動物実験の倫理に配慮し、実験動物の適切な取り扱いや、実験動物への薬物投与の手法など、動物実験に関する基本的知識と手技を修得したうえで、代表的な自律神経系に作用する薬物、知覚および運動神経系に作用する薬物、中枢神経系に作用する薬物の効果の測定法を実践した。これらの動物実験を通して、効果を測定した薬物に関する薬理学的知識の理解を深めた。さらに、卒業研究に向けたアドバンスト教育として、抗不安薬の薬効の行動薬理学的評価法についても実践した。これらによって「薬学教育モデル・コアカリキュラム」(平成 25 年度改訂版)の内容に対応した実習を行った。履修登録者すべてが実習を完遂し、遅刻欠席等は無かった。事前に準備した模擬データの提示と実習現場での解説により学習目標は達成されたと考える。</p>				
今後の対応	<p>目標としていた知識・実技習得は達成されたと考えている、生物学・生理学範囲における基礎的知識の再確認になったと考えている。最終日に行ったアンケートからは動物の命を扱った実習から多くのことを学び、多くのことを考えさせる実習時間を提供できたと思われた。次年度も同様の機会を提供し、また目に見えて分かりやすい実験に絞ることでより印象に残る実習にするようための工夫を実行していく。</p>				

科目名	疾病と病態生理Ⅰ	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	緒方勝也	科目担当者	緒方勝也、吉良潤一、今村友裕、窪田香織		
自己点検・評価	<p>疾病と病態生理学Ⅰ(内分泌系、神経精神系疾患等)では、薬学科2年生を対象に、臨床で頻繁に遭遇する重要疾患の病態生理について体系的な講義を行った。</p> <p>本講義では、患者の病態や疾病への理解が、薬剤師として適切な服薬管理・指導を行う基盤となるという認識のもと、脳血管疾患、神経・筋疾患、精神疾患、内分泌疾患、耳鼻咽喉疾患等について、その病態生理や基本的知識を習得することを目指した。</p>				

	<p>具体的には、前半では脳血管障害や認知症（アルツハイマー型、脳血管性）などの中枢神経系疾患について学び、続いてパーキンソン病、てんかん、頭痛などの神経疾患、さらに進行性筋ジストロフィー、ギランバレー症候群、重症筋無力症などの稀少疾患についても理解を深めた。</p> <p>中盤では精神疾患に焦点を当て、統合失調症、うつ病・躁うつ病（双極性障害）、神経症、心身症、不眠症、依存症などの病態生理と治療アプローチについて学習した。</p> <p>後半では内分泌系疾患として、下垂体疾患（先端巨大症、高プロラクチン血症など）、甲状腺疾患（バセドウ病、橋本病）、副腎疾患（クッシング症候群、褐色細胞腫、副腎不全）、カルシウム代謝の異常を伴う疾患について学んだ。また、耳鼻科疾患（めまい症、アレルギー性鼻炎）についても取り上げた。</p> <p>最後に、臨床現場でよく見られる症候（疼痛、呼吸困難、脱水、浮腫など）について、その原因と関連疾患を学び、患者情報から疾患を推測する能力を養成した。</p> <p>本講義は、各疾患の代表的な症例や病態を説明できるようになることを求め、将来、臨床に強い薬剤師、患者の治療成績向上に貢献できる薬剤師となるための基礎的知識を修得できたと考える。</p>
今後の対応	<p>アンケートにおいて大きな問題はなかったようであった。各担当教官により強味のある分野毎に工夫を重ね、重点がわかりやすく伝わるよう資料は可能な範囲で枚数を減らし、また資料中の強調を通じて重要なポイントが印象に残るようブラッシュアップを継続する。学習は疾患理解に向けて薬理学、薬物治療につながるよう改善を継続する。</p>

科目名	疾病と病態生理学Ⅲ	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	太田昭一郎	科目担当者	廣岡良隆		
自己点検・評価	<p>今日の薬剤師に必要とされるのは、患者の基本情報、症状、検査データ等の情報を十分に活用した薬物治療方針の確認であり、ときには薬学的知見と科学的根拠に基づいて適切な処方提案することも求められる。</p> <p>本科目では、呼吸器系、消化器系、血液系、免疫系、骨・関節、皮膚、眼の主な疾患について、病態生理を理解し、症状、診断から治療の基本を説明できることを到達目標として、種々の疾患の病態生理と、薬剤がそれに及ぼす影響を学習し、医師と協力して様々な処方シ</p>				

	<p>ーンに対応できる薬剤師としての実践的な能力を養成するための講義を行った。</p> <p>学習の流れは以下のようにした。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 講義の前週に講義資料を配布し予習課題を与え、講義の前日までに予習を行わせた。 2. 講義を復習と位置付け、予習で理解に至らない点や疑問点を可及的に解消させた。 3. 講義の終盤に小テストを解かせ、解説を行い、知識と理解の再確認を行った。 4. 講義終了後の任意の時間帯で再度の復習を行うことを促した。 <p>以上のように、同一内容を短期間に頻回に繰り返して学習することにより理解と知識の定着をより確実にさせた。定期試験では他の多くの科目に渡って成績不良な6名の学生を除いて合格しており、一般的な能力の学生に対しては概ね予定した指導と期待する学習が実践できたと考えている。</p>
今後の対応	<p>本年度と同様の指導を行うが、成績下位者の理解度を深めるために、基本的事項を平易化した解説も適宜加えていく。</p>

科目名	臨床検査医学	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	太田昭一郎	科目担当者			
自己点検・評価	<p>現代の医療は臨床検査のデータなくしては成り立たない。薬剤師にとっても検査データを読み解き病態を把握する能力は重要であり、それをもって薬剤処方の確認や副作用の発現防止に寄与できる。本科目では、①臨床検査の評価指標を説明できること、②主な検査の測定原理と意義を説明できること、③代表的な疾患における検査値の変化を説明できること、を到達目標として、臨床検査の基礎知識と主な検査項目、および代表的な疾患における検査の意義とデータの読み方について教授した。コアカリキュラム外の本学独自の内容としては、臨床検査の評価指標、遺伝子検査、および輸血検査についての項目を加え、チーム医療や最新検査に寄与できる薬剤師の能力を高めた。</p> <p>学習の流れは以下のようにした。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 講義の前週に講義資料を配布し予習課題を与え、講義の前日までに予習を行わせた。 2. 講義を復習と位置付け、予習で理解に至らない点や疑問点を可及的に解消させた。 3. 講義の終盤に小テストを解かせ、解説を行い、知識と理解の再確 				

	<p>認を行った。</p> <p>4. 講義終了後の任意の時間帯で再度の復習を行うことを促した。</p> <p>以上のように、同一内容を短期間に頻回に繰り返して学習することにより理解と知識の定着をより確実にさせた。定期試験では全員が合格しており、概ね予定した指導と期待する学習が実践できたと考えている。</p>
今後の対応	<p>今年度と同様の指導を行うが、基本的事項を平易化した解説を充実させて、成績下位者の理解度を深めていきたい。</p>

科目名	臨床検査医学実習	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	太田昭一郎	科目担当者	緒方勝也、梶岡俊一、岸拓弥、窪田香織、斎藤秀俊、今村友裕、貝塚拓、柴田健太郎		
自己点検・評価	<p>本実習の目的は、個々の患者に適切な薬物を選択する際の基盤となる人体の生理機能や疾病の病態生理の基本を理解することである。昨年と同じく以下の方法で本実習を行った。</p> <p>まずオリエンテーション時、実習の概要を説明した上で「臨床検査医学実習の被検者となることについての同意書」を全員から得た。実習項目は以下の7つに設定、①血液学・代謝検査：血球の観察、血糖値測定、②生理機能検査1：血圧測定・脈拍、③尿検査：尿試験紙検査、④生理機能検査2：肺・心臓の聴診と心電図、⑤初期救命救急講習とワクチン接種者の実技と心得、⑥血圧・心拍数に対するカフェインの効果、⑦呼吸機能検査とした。</p> <p>学生全体を4班に分け、4号館3階実習室と高木病院4階シミュレーションセンターを利用するとともにオンライン実習も活用し、上記項目を順番に回することで実習を完遂した。実習点は実習態度とマークシートを利用した実習確認試験の2つを総合して評価した。</p> <p>各教員がこれまでの経験に基づく実習を展開しながら学生が自ら手を動かすことを目指し、体感した内容の知識取得を目指した。その結果、全員が合格点に達し単位を修得した。</p> <p>以上より、本実習の主目的である人体の生理機能を体感体得させることができたと考えている。</p>				
今後の対応	<p>来年度も基本的には本年と同様の内容を行い充実した教育を担保しつつ、時代のニーズにあった改良を加えていきたい。</p>				

科目名	医薬品情報学 I	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	宗像千恵	科目担当者	一木裕子、朴珍相		
自己点検・評価	<p>本講義では医薬品情報の収集、評価、加工などに関する基本的知識を修得し、それらを活用するための基本的事項を身につけることを目的とした。具体的な内容として、代表的な医薬品情報源について、開発過程で得られる情報、情報検索の方法や情報源の評価について、EBM、情報を加工した情報提供について等を講義した。これらの内容を科目担当者でそれぞれ分担し、14回の講義を実施した。最後の第15回は全体の振り返りの講義を行った。講義資料はGoogle Classroomを用いて学生に事前に配布し、予習を促した。</p> <p>医薬品情報においてもICT化が進んでいる現状を学生に認識させるべく、学生所有のスマートフォンやタブレットを用いて情報検索を行う時間を講義内に積極的に設けた。また添付文書やRMP等の情報源は実際の文書を学生に配布し、臨場感を持った講義となるよう心掛けた。</p> <p>本講義は3年前期の講義であるが、学生は2年次まで基礎科目を主として学んできており、「情報」という掴みどころのないものを主題とする本講義に戸惑った学生もいたようであった。教員の臨床現場での経験談を講義中に交えることで、医薬品情報と臨床との関係を認識できるよう配慮した。定期試験では再試によって全員が合格となった。このため学生は医薬品情報の基本的な知識を習得できたと考えている。</p>				
今後の対応	<p>大きな変更は講義順番の講義担当者の変更のみで、他についてはおおむね今年度と同様に行う予定である。医療DXの話題も織り込み最新の情報となるよう心掛けていく。</p> <p>薬剤師にとって医薬品情報の取得と取舍選択は、今後さらに重要となっていくものと予想する。学生がこの講義で学んだことが将来薬剤師になってから活用できるよう、実臨床を結びつけながら理解を促していきたい。</p>				

科目名	日本薬局方	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	一木裕子	科目担当者	阿部義人、中矢正、磯田紀之		
自己点検・評価	<p>日本薬局方は重要な医薬品の規格・試験法について医薬品医療機器等法に基づき定めたものであり、医薬品の公定規格書である。本講義では、</p>				

	<p>日本薬局方通則及び物理系・化学系薬学の基礎としての日本薬局方一般試験法について講義を行なった。</p> <p>本講義の到達目標として</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 日本薬局方の意義と内容について説明できる。 2. 日本薬局方通則の意義と内容について説明できる。 3. 代表的な一般試験法の原理と応用例について説明できる。 4. 医薬品各条の純度試験，確認試験，定量法の原理について説明できる。 <p>上記を念頭に置いて、各講義の前に授業スライドと重要な部分を抜粋した練習問題資料等をGoogleクラスルームにて配布し、学生が利用可能な形をとった。オムニバス方式で全授業を対面で行うことができた。</p> <p>本試験では高い平均点を示し、アンケート結果も上々であったため、教員が求めている一定レベル以上の知識獲得はできたと考えている。一方、全体の講義回数が少ないため、最終講義（第8回）には全授業の総復習の授業を行い、数多くの練習問題や解説を行うことで、学生から多くの質問があり、それに対応することができた。</p>
今後の対応	<p>本年度のアンケート結果を鑑み、大きく方針を変える必要はないと考えており、今後も、同様にオムニバス方式で、各専門分野について授業を行っていく予定である。すなわち、各講義資料をGoogleクラスルームに早めに掲載し、学生に予習をさせ、各回の担当教員がそれぞれ調整し全内容をバランスよく進める対応を続けていく。また、各担当者が、自学で復習することが可能な内容の練習問題資料を配布しているため、質問がある場合には、専門分野担当の教員が個別に対応する形式を続けていく。最終講義では、学生の理解力向上のため、全分野に渡る理解しにくい問題の解説を行ったことで学生の勉強意欲が上がる努力をした。今後も復習問題を解かせ解説をするように続ける予定である。</p> <p>成績評価について、定期試験100%で実施したが、特に問題は見当たらなかったため、来年度も同様のスタイルで取り組む予定である。</p> <p>学生アンケートでは練習問題が役に立ったとの声がかかなり多かったため、今後は、練習問題の問題数やバリエーションを更に増やし、学生の期待に更に添える様に対応したい。</p>

科目名	OTC 医薬品概論	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	宗像千恵	科目担当者	平木洋一、一木裕子		
自己点検・評価	本講義では前半では概論としてOTC医薬品に関する分類や配置・販売方法などに関する法規、相談応需の方法等を3人で分担し講義した。				

	<p>後半では各論を科目責任者が1人で担当し、様々な症状に対するOTC医薬品の製品、成分、使用方法、選択時の注意点等について講義を行った。各論については薬理学や臨床薬学など他の講義と重複する部分も多いため、学生がそのつながりを認識し理解を深めることができるよう心掛けた。</p> <p>本講義の特徴として、アクティブラーニングとして3回のTBL (Team based learning) を実施した点がある。TBLでは最初に10問の個人テストを実施した後に、答え合わせをせずにチームテストとして同じ問題を6~7人の班で考えさせた。続けて問題内容の解説をして理解を深めた後に、その内容をふまえた応用演習問題2問を与えて班で検討を行わせた。個人テスト・チームテストは各薬剤の適用や使用上の注意点等を問う基礎的な問題とし、応用演習問題は模擬症例にどのOTC医薬品を推奨するか検討する問題とした。</p> <p>講義内で実施したアンケートにおいて、TBLは学生に高評価であった。学ぶモチベーションに大きく影響したようである。</p> <p>最後に成績について述べる。定期試験ではCBTレベルを想定し、OTC医薬品に関する基礎的な問題を15回の講義内容から満遍なく出題した。その結果、全受講生が合格したことから、本講義の受講により学生はOTC医薬品の基礎部分は身につけられているものと考えている。</p>
今後の対応	<p>全体的な内容については、今年度と同様で実施していく予定としている。TBLについては学生の反応を見ながら難易度を微調整する予定である。</p> <p>講義内容の変更については、OTC 医薬品の CM を扱うなどを考慮している。最も身近な医薬品である OTC 医薬品に学生が馴染めるよう、さらなる改善を行っていきたい。</p>

科目名	臨床薬学Ⅰ	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	平木洋一	科目担当者	西村 信弘		
自己点検・評価	<p>臨床薬学Ⅰは、薬剤師として医療現場において求められる実践的能力を身につけるための基礎的科目である。本講義では、薬剤師が果たすべき役割を理解し、適切な態度で臨床に関与するための心構えと、薬学的管理の基本的な流れを学習の中心に据えている。担当教員は、実務経験の豊富な薬剤師が務め、現場に即した内容で構成されている。</p>				

	<p>前半では、処方箋の法的位置づけや根拠を理解し、薬剤師として遵守すべき法令・規則について基礎から学んだ。後半では、臨床実習に必要な知識として、地域医療や福祉との連携、チーム医療における薬剤師の役割、生涯学習の重要性、電子カルテやオーダーリングシステムの活用、そして患者情報の収集方法と活用の意義について講義を重ねた。</p> <p>また、代表的な医薬品に関する基礎知識—効能・効果、用法・用量、警告・禁忌事項、副作用、相互作用—を取り上げ、処方鑑査や疑義照会の手順をシミュレーション形式で実践。講義内では演習問題を活用し、理解の定着を図った。</p> <p>講義期間中、小テストなどによる定期的な評価は行わなかったため、学生の理解度を随時把握するのは困難であった。しかしながら、最終試験においては多くの学生が期待以上の成績を修めており、講義で求められる知識水準は概ね達成されたと評価できる。</p>
今後の対応	<p>本年度の講義実施結果を踏まえ、基本方針の大幅な変更は不要と判断し、次年度以降も同様の構成を継続する見通しである。高齢化の進行、特に「2025年問題」とされる75歳以上人口の増加は、今後の医療制度に大きな影響を与えることが予測される。こうした背景のもと、2024年度から本学においても5年生を対象とした実務実習が初めて導入され、保険調剤薬局での在宅医療実習も開始された。</p> <p>在宅患者への薬物療法においては、高齢者特有の複雑な健康課題に対応する必要がある。具体的には、加齢に伴う多疾患併存に加え、①多剤併用および重複投薬による相互作用リスクの増大、②視覚や嚥下機能の低下による服薬管理の困難化、③腎機能や肝機能の低下、体成分の変化による薬物動態の変動が問題となる。これらに適切に対応するためには、薬剤師による継続的かつ個別化された介入が不可欠である。</p> <p>こうした現場ニーズを踏まえ、臨床薬学Ⅰの講義内容にも在宅医療に対応できる視点を組み込み、学生が地域医療や高齢者医療に対する実践的な理解を深めるよう工夫する必要がある。社会的課題に対する関心と理解を促進し、薬剤師としての責任と役割を自覚させるためにも、今後の講義では学習意欲と理解度のさらなる向上を重視した教育を展開していく方針である。</p>

科目名	臨床薬学Ⅱ	学年	4 学年	期	前期
科目責任者	平木 洋一	科目担当者	一木 裕子		

自己点検・評価	<p>本科目は、3年次に履修した臨床薬学Ⅰの内容を発展・深化させたものであり、病院および薬局での実務実習に直結する前段階として位置づけられる。実習に先立ち、薬剤師に求められる基本的職能（調剤、製剤、服薬支援、無菌操作、感染予防など）に関する知識・技能・態度を包括的に修得させることを主たる目的とする。講義では、薬剤師が患者個人に適した薬物療法を提供するために必要な能力として、患者情報の適切な収集、病態の正確な評価、エビデンスに基づいた医薬品情報の活用、および治療提案から評価までの一連のプロセスを実践的に学習させた。特に調剤と製剤に関しては、基礎理論の理解に加え、現場で応用可能な判断力を養う内容とした。</p> <p>医薬品管理に関する授業では、流通・保管における品質保持の重要性を扱い、薬剤の安定性に影響を及ぼす要因や適切な保存条件についても具体例を交えて解説した。さらに、無菌調製や注射薬の調整技術、スタンダードプリコーションの原則、ケミカルハザード対策など、臨床現場での安全確保に直結する内容も取り上げた。</p> <p>講義資料は視覚的な理解を促す構成とし、臨床現場を見据えたシミュレーションの要素を随所に取り入れた。ただし、授業中に定期的な確認テストは行っておらず、学生の理解度を平時に把握することは困難であった。それにもかかわらず、最終試験においては学生の多くが高い成績を収めており、設定した教育目標に対する知識の定着が概ね達成されたと評価できる。</p>
今後の対応	<p>現段階においては、試験結果に大きな問題は見られず、講義内容の抜本的な見直しは必要ないと判断している。しかしながら、薬剤師としての実務能力を高めるためには、単なる知識の暗記ではなく、医薬品の適正使用や医薬品情報の適切な提供を、具体的な臨床場面に即して実践できる力が求められる。</p> <p>今後の講義においては、実臨床で遭遇する事例（たとえば肝機能障害や腎機能低下がみられる患者、あるいは妊婦、小児、高齢者といった生理的に特異な患者群）を取り上げ、それらに対する用法・用量設定の考え方を学生が自ら思考できるような構成にする予定である。単なる知識伝達に留まらず、状況に応じた判断力と応用力の育成を重視する。</p> <p>講義ではスライド資料を多用するため、視認性や情報の整理にも配慮し、学生が直感的に理解できるような教材の作成に取り組む。図表やフローチャートを用いた情報構造の可視化に加え、症例ベース</p>

	の解説を導入することで、講義内容が実務実習や将来的な業務に直結する知識として定着することを目指す。
--	---

科目名	臨床薬学Ⅲ	学年	4 学年	期	後期
科目責任者	一木裕子	科目担当者	西村信弘		
自己点検・評価	<p>臨床薬学Ⅲは、臨床薬学Ⅰと臨床薬学Ⅱで学んだ基礎学習に対するまとめや更に学んだ知識を応用できるようになるための講義である。臨床薬学では、患者さんや医療従事者とコミュニケーションをとる方法や医療の倫理など薬を正しく使うために必要な知識を学ぶことが重要である。薬剤師として臨床現場で活躍するために、薬物療法の実践、チーム医療・地域保健医療への参画に必要な基本的事項を習得する。</p> <p>本試験において、学生は教員が求めている一定レベル以上の知識獲得はできたと考えている。また、第14回・第15回講義はSGDを用いた講義を行った。第14回は「がん」について、第15回は「脳血管障害」について実践的な問題を用いて行った。学生にとって医療に関するディスカッションを行う重要な機会となった。学生は、予習の段階でしっかりと症例の把握に取り組んで検査値や病状を把握し、SGDでは積極的に発言しディスカッションを進めている様子が見られた。様々な意見交換がなされ、活発的なSGDをすることができた。</p>				
今後の対応	<p>本年度のアンケート結果を鑑み、大きく方針を変える必要はないと考えており、次年度以降も同様な講義内容を実施していく予定である。</p> <p>今後は、学生が効率的に予習をして授業に参加できるように、出来るだけ早めに授業スライドをGoogle クラウドに公開し、授業を受講し易いような状況にする様に努める。学生が授業内容をしっかり理解し、早めに定期試験に臨むことができるような取り組みを考えていく。</p>				

科目名	臨床薬学Ⅳ	学年	4 学年	期	後期
科目責任者	平木 洋一	科目担当者	西村 信弘、一木 裕子、宗像 千恵、 福田 光良		
自己点検・評価	<p>本講義は、病院および薬局での実務実習に先立ち、薬剤師が地域社会において果たすべき役割を多角的に理解させることを目的として実施された。対象となるテーマは、在宅医療、地域医療、介護、災</p>				

	<p>害対応、公衆衛生など多岐にわたる。単に薬学的知識を伝達するのではなく、実際の社会課題に対して薬剤師がどう関与し、どのように支援の主体となるべきかを考察させる構成とした。</p> <p>特に災害医療に関しては、東日本大震災における薬剤師の活動をもとに議論を展開した。日本薬剤師会による活動報告書によれば、延べ8,378人の薬剤師が全国44都道府県から派遣され、避難所での服薬支援や医薬品の供給調整、情報提供に従事した。その実情を学ぶために、シナリオ型シミュレーション演習を導入し、災害時に薬剤師が直面する判断や行動について体験的に理解を深めさせた。</p> <p>また、地域包括ケアを支える薬剤師の役割として、プライマリケアやセルフメディケーション支援、地域住民とのコミュニケーションの重要性にも焦点を当てた。講義内では、薬薬連携や多職種連携の実際についてディスカッションを行い、薬剤師が地域で主体的に活動する意義と、その背景にある制度や倫理についても検討させた。</p> <p>加えて、現場経験の豊富な講師を招聘し、保険薬局における在宅訪問業務や介護連携、公衆衛生活動、学校薬剤師としての取り組みなど、幅広い職能に関する講義を実施した。さらに、行政薬剤師や製薬業界を取り巻く法規制（GMP、GLP、GCPなど）に関する法的枠組みについても扱い、薬剤師の活躍の場が多領域に及ぶ現状を体系的に紹介した。</p> <p>講義は短期間ながらも濃密であり、薬剤師が専門職として社会とどのように関わっていくべきかを多面的に問い直す契機となった。学生にとっては、現場を意識した実践的な知識と態度を養う貴重な機会となったと考えられる。</p>
<p>今後の対応</p>	<p>学生の反応や到達度評価に基づけば、基本的な教育目標は概ね達成されており、講義方針そのものを根本から見直す必要はないと判断している。ただし、臨床薬学Ⅳで扱う内容は極めて多岐にわたり、薬剤師としての実践的判断力や倫理観にも関わる重要な領域を含んでいる。わずか数回の講義で全体を十分に理解させることは難しく、單元ごとの学びを深化させるための補完的な手段が求められる。</p> <p>今後は、オンデマンド配信による講義映像の提供や、要点を整理した解説資料の段階的配布を実施し、学生が自律的に復習・理解を進められる環境の整備を進める予定である。また、ディスカッションや事例検討といった能動的学習の導入を検討し、学生が単に情報を受け取るだけでなく、思考し判断する力を育成する講義構造へと移</p>

	行させていく必要がある。講義運営の中で得られた課題と手応えをもとに、次年度以降は講義設計を段階的に改良し、学生の主体的な学びと臨床現場で通用する知識・態度の醸成を両立できる教育を目指す。
--	---

科目名	薬物治療学Ⅰ	学年	4 学年	期	後期
科目責任者	緒方勝也	科目担当者	緒方勝也、今村友宏、窪田香織、柴田健太郎		
自己点検・評価	<p>薬物治療学Ⅰでは精神神経系疾患、内分泌、代謝疾患あるいは感覚器系を扱った。これまで学習してきた解剖生理学、疾病と病態生理を踏まえ各疾患における薬物治療について学習を進めた。</p> <p>前半では代謝系疾患として糖尿病とその合併症、脂質異常症、高尿酸血症・痛風について学び、続いて感覚器疾患として緑内障、白内障などの眼疾患、メニエール病などの耳鼻咽喉疾患、および皮膚疾患の治療薬について理解を深めた。アレルギー・免疫疾患では、アナフィラキシーショック、消化管アレルギー、全身性エリテマトーデス、関節リウマチなどの自己免疫疾患、さらに後天性免疫不全症と移植医療における薬物治療についても学んだ。</p> <p>後半では神経・精神系疾患に焦点を当て、うつ病、躁うつ病、神経症、統合失調症といった精神疾患と、脳血管障害、パーキンソン病、認知症、片頭痛、てんかんなどの神経疾患について詳細に学習した。また、稀少疾患や睡眠障害、薬物依存症についても理解を深めた。</p> <p>最後に内分泌系疾患として、ホルモン産生臓器別の疾患、甲状腺および副甲状腺機能異常症、下垂体疾患（尿崩症）、副腎疾患について学習した。</p> <p>各疾患について、病態生理の理解に基づいた薬物治療の原理と実践を学び、薬理学や臨床薬理学の知識を活用しながら、薬物の作用機序、効果、副作用、および適正使用について理解を深めた。本講義を通して、薬学的観点から患者情報を適切に解析し、安全で効果的な薬物治療を実施するための基礎的知識を修得した。</p>				
今後の対応	<p>アンケートにおいて大きな問題はなかったようであった。各担当教官により強味のある分野毎に工夫を重ね、重点がわかりやすく伝わるよう資料は可能な範囲で枚数を減らし、また資料中の強調を通じて重要なポイントが印象に残る工夫をしていく。学習はCBT、病院実習、そして国家試験につながる準備段階でありこれらに向けた学習時に役立つよう改善を今後も継続する。</p>				

科目名	薬物治療学Ⅱ	学年	4 学年	期	後期
科目責任者	齊藤秀俊	科目担当者	西村信弘、岸拓弥、梶岡俊一、宗像千恵、平木洋一、福田光良		
自己点検・評価	<p>今までに学習した疾病と病態生理学、薬理学、薬物動態学を基盤として、循環器系・血液造血器系・代謝疾患系・呼吸器系疾患・泌尿器系疾患・生殖器系疾患・消化器系疾患および悪性腫瘍の薬物治療(治療薬の使い分け、薬物療法時の注意点)について「薬学教育モデル・コアカリキュラム」の内容に対応した講義を行った。各担当教員の配置は、教員の専門性に即して行い、シラバスに明記した疾患ごと(消化器系疾患10種、骨関節疾患3種、感染症8種、血液・造血器系疾患5種、悪性腫瘍24種、泌尿器・生殖器系疾患8種、循環器系疾患12種、緩和医療関連)に、病態から治療法・治療薬の選択、薬物有害事象、薬学管理ポイント(動態の特徴、代謝経路、使用上の注意)までの基本的事項についての知識習得を目的としている。さらにアドバンスド学習として実務家教員による処方解析に関する講義も行った。</p> <p>授業では、学生の理解促進を促すため、講義のみではなく、確認課題を課して授業を復習する動機を与えるとともに、知識の定着を目指した。講義内では必須習得事項を含むレジュメを配布した上で、視覚的情報をスライドを用いて提供し、疾患概念から個別の専門的知識をつなげる学習を目指した。</p>				
今後の対応	<p>次年から実習臨む4年生にとって、薬剤師としての実践的知識を学ぶ講義であることから、基礎的知識のみならず新しく更新された知見についても、取りこぼしの無いように常に最新の講義を心掛ける。確認問題等をフィードバックと共に提供することにより、授業への理解が進むような工夫を常に構築していく。また、過去の知識を反芻させるような機会を講義内に含める努力を行い、講義時間内での理解のばらつきを少なくするための工夫を実行していく。</p>				

科目名	製剤設計と DDS	学年	4 学年	期	前期
科目責任者	阿部義人	科目担当者	西村信弘、中矢正、福田光良		
自己点検・評価	<p>本講義では製剤化の意義を教えるため、経口投与製剤、点眼剤、吸入剤、注射剤、貼付剤(1~5回、西村担当)、生薬関連製剤(6回、中矢担当)の種類やその特性を講義した。また、製剤の特性を理解した上での生物学的同等性(7回、中矢担当)、添加剤、製剤の製造工程、</p>				

	<p>製剤の試験法（8～10回、阿部担当）を講義した。さらにドラッグデリバリーシステム（DDS）に関する講義を行なった（11回～15回、福田担当）。パワーポイントを用いて、教科書の内容をなるべくわかりやすく講義した。講義内容に関しては、講義前に Google クラウドルームを用いて、PDF ファイルとして事前配布し、予習ができるように配慮した。演習に関しては、講義内容を元に練習問題を作成し、講義終了後に復習として、配布した。定期試験として、本試験、再試験を行った。各試験はマークシートにより、5問の選択肢から選ばせるところ、本試験では一定の不合格者が出たが、再試験では全ての学生が合格した。高学年の講義であるため、内容は難しいと思われるが、授業アンケート上でも特に問題点はなかったと思われ、昨年度の反省を生かすことができたと考えている。</p>
今後の対応	<p>次年度はさらに講義内容をわかりやすく、演習問題の配布など内容の充実を行っていきたいと考えている。</p>

科目名	医薬品安全性学	学年	4 学年	期	後期
科目責任者	山本 緑	科目担当者	石田 卓巳		
自己点検・評価	<p>本講義では、医療や薬学が高度化・複雑化する現状の下、医薬品の適正使用を理解してもらうことを目的とした。到達目標には、「1. 医薬品の毒性を理解し、その対策について説明できる。2. 医薬品のリスクを理解した上で、適切な投与法を設計することができる。3. 薬害の歴史および薬害を回避するための薬剤師の使命を説明できる。4. 医薬品開発における安全性評価について説明できる。5. 安全な薬物治療のために、臨床検査値について説明できる。」を掲げた。新コアカリにおいて、薬害を起こさないための学習の充実化が盛り込まれたことから、2 コマに渡り薬害に関する講義、ミニテスト、レポートを課す、などして対応した。</p> <p>本講義は、知識の確実な定着のために、これまでの履修科目の復習をメインとした内容で構成した。講義の進行は、前半部はパワーポイント、後半部は書き込み式の配布資料を用いた。医薬品の安全性に係る内容は、臨床薬学や臨床検査も含む重要な事項と考えたことから、国試の頻出内容を中心に穴埋め形式の配布資料にまとめて、学生の関心・理解度を高めるよう努めた。学生の自発的学習を促すべく、1. なるべく身近な内容に置き換えた分かりやすい説明を加えること、2. 最新 Topics を国試に関連付けて話すこと、の2点を意識した。定期試験について、昨年同様の難易度となるように作成した結果、平</p>				

	<p>均点は3点程下がり、さらに平均点以下の学生数が増加していた。これまでの学修内容の理解が不十分な学生が昨年より増加しているようであり、今後の演習等における対策の徹底が必要と思われる。</p> <p>講義内容は、授業アンケートや担当回で毎回実施したグループフォームアンケートにおいて高評価であったことから、先述した2点の意識事項について効果はあったと判断する。しかし、設問の聞き方次第では答えを間違える学生が一定数おり、対象を多面的に捉える思考力をどう養成するかが今後の課題である。共用試験前のメンタル面も考慮に入れつつ、国試突破後の薬剤師として社会貢献する将来へと、モチベーションを高めることを第一に考えた講義を実践したい。</p>
今後の対応	<p>配布資料の内容や講義スタイルについて、学生からは好評であったため、次年度も維持していく。また、本試験で正答率の低い内容については、重点的に解説を加えることとする。4年生であれば自身の苦手分野は既に把握しているので、コミュニケーションをしっかりと取りながら、学年全体で理解に不安のある領域の強化に努めたい。</p>

科目名	医療関係法規	学年	4 学年	期	前期
科目責任者	今井竜也	科目担当者	平木洋一		
自己点検・評価	<p>昨年同様、薬剤師が業務を遂行するにあたって必要な法や制度について、教科書の章立てを基に、薬剤師の負う法的・倫理的責任、薬剤師法、薬機法、麻薬等取締法、あへん法、大麻取締法、毒物及び劇物取扱法、および医療供給や医療保障の関係法など多岐にわたる内容を、自作レジュメなども用いながら授業を行った。関係する法や制度の理念や目的の適確な理解を基礎に、各種試験、および将来携わることになる業務に必要な基礎的知識を身につけさせることを目標とした。</p> <p>本授業は15コマという限られた時間内で、多くのことを理解し、身につけてもらわなければならない。予習に多くの時間を割いてもらうため、昨年同様、反転授業方式を採用し、学生が授業内容について、予め自学自習を済ませていることを前提として、授業ではその内容の確認と、学生の理解が難しかったと思われるところに力点を置いたフォローを行うやり方をした。</p> <p>効率的な予習に資するため、毎回、学生に教科書の該当箇所について、どこを理解するべきかについてチェック式のポイントをまとめた「予習チェックシート」を予め配布し、かつ、各トピックの理解度についてどう判断したか、5段階で自己評価するアンケートを授業開始時に毎回実施し、学生の苦手分野の把握に努めた。</p>				

	また、毎回実施する小テスト(選択式)、定期試験(選択、穴埋め、記述問題の複合方式)は、 CBT や薬剤師国家試験を意識した仕様とした。
今後の対応	<p>予めシラバスで反転授業方式をとることを明記し、予習をしてこなければ、授業理解に大いに支障を来すことを厳しく注意喚起しておいたこともあり、学生の多くは事前配布の予習用チェックシートなどを利用し、(当然、個人差はあるだろうが)予習については実施してくれているようではある。</p> <p>授業に臨む意識向上については、ある程度達成出来たと思うが、それが授業内容の十分な理解を伴っているものなのかについては不安も残る。反転授業の効果については、CBT 模試等の結果とも照らし合わせながら、検証していきたい。</p> <p>なお、今年度の本試験不可は3名(1名は再試)であり、昨年度の7名より減少した。本授業は2年目であるため、昨年度に受講した学生からの「情報」の効果があつたのだろうと思われる。小テストについても、昨年度の学生よりは良く出来ている印象を持った、だが一方で、極端に出来ない学生もおり、この小テストの不出来が、成績評価の不出来とかなりの相関関係があるようなので、小テストを学生の弱い部分、苦手な部分の特定に活用し、授業内容をブラッシュアップしていく必要があるだろう。</p>

科目名	早期体験実習	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	平木 洋一	科目担当者	石田 卓巳、西村 信弘、一木 裕子、多田納 豊、塚本 宏樹、山本 緑、今井 竜也、朴 珍相、宗像 千恵、柴田 健太郎、福田 光良		
自己点検・評価	<p>早期体験実習（アーリーエクスポージャー）は、薬剤師として医療に携わるための心構えを養い、薬学を学ぶ意義や学習意欲を高めることを目的として、入学直後の早い段階で実施している。本年度は、医療施設の見学、薬害に関する講義、そしてSGD（スモールグループディスカッション）を組み合わせたプログラムを計画した。実習の一環として、九州・山口地区の県薬剤師会のご協力のもと、学生が帰省先から薬局を訪問する見学を実現することができた。病院見学も、関連施設で計画通りに実施され、学生たちは薬剤師が実際に働く現場を体験し、卒業後の職種や業務内容についての理解を深める機会となった。病院見学の際には、薬剤師に積極的に質問を</p>				

	<p>する学生の姿も見られ、実地での学びの効果を実感することが出来た。</p> <p>薬害の講義では、薬害の原因や実態だけでなく、薬害と社会との関係についても学べるよう、元薬害肝炎九州原告団代表の方を講師にお招きし、当事者の視点からの講演を行っていただいた。薬局・病院見学の前に講義を実施し、学生が事前に必要な知識を身につけ、自ら学習目標を設定。その後の見学体験をもとに、薬害と社会のつながりや倫理、薬剤師の役割と課題について、グループディスカッションを通じて意見交換を行い、その内容を発表しレポートとしてまとめた。</p> <p>これらの実習は、学生にとってコミュニケーション力やプレゼンテーション力を培う最初の機会となり、大学1年生という柔軟な感性を持つ時期に、実際の現場や講義から多くの刺激を受けることで、患者中心の医療や薬を取り巻く社会・福祉のあり方を見つめ直し、自らの進路について深く考える貴重な機会となったと思われる。</p>
今後の対応	<p>本年度の実施結果を踏まえると、大きく方針を変更する必要はないと考えている。ただし、今年度は準備に十分な時間を確保できず、見学先の決定までに時間を要する場面が見られた。そのため、今後はより早い段階から準備を開始し、余裕を持った計画立案を心がけたいと考えている。</p> <p>早期体験実習そのものに対する学生からの評価はおおむね好評であり、引き続き継続して実施していく。また、薬害肝炎原告団代表による講義も非常に高い評価を得ており、今後も継続して取り入れていく方針である。</p>

科目名	病院・薬局 事前実習Ⅰ	学年	4 学年	期	後期
科目責任者	家入一郎	科目担当者	阿部義人、石田卓巳、猪部学、太田昭一郎、緒方勝也、梶岡俊一、西村信弘、平木洋一、村田祐造、一木裕子、窪田香織、齊藤秀俊、多田納豊、塚本宏樹、成川佑次、宗像達夫、山本緑、吉武康之、貝塚拓、中矢正、宗像千恵、磯田紀之、坂井崇亮、澤井円香、福田光良		
自己点検・評価	<p>本科目は、5年次の病院・薬局実務実習のための事前学習として、学生が4年次までに学習した物理、化学、生物、衛生といった基礎系科目を総復習し、症例や処方箋を基に臨床との繋がりを意識しながら横断的に理解するとともに、薬剤師としての自覚を持ち、ヒトを思い敬う態度や医療の</p>				

	<p>担い手としての生命倫理・医療倫理の倫理観を身に付けることを目的とする科目である。</p> <p>5年次の学外実習では、社会人としての行動が求められるため、その重要な態度の一つとして、時間厳守を身につけるために当科目は出欠を厳しく管理した。また、これまでの基礎科目分野の知識の復習・定着のための演習授業とともに、これらの基礎知識が臨床現場と結びつくことを意識できるための科目横断型の授業を設定した。また、医療倫理・生命倫理の倫理観（態度）を修得するために、3つの題材についてSGDによるアクティブラーニングを実施した。さらに、このSGDにおいては、自他の考えについて理解を深めることとグループワークの態度を客観的に評価する視点を養成することを目的として学生間のピア評価を実施した。</p> <p>当科目は昨年度から開講され、本年度が2回目となる。教員の退職等に伴い、本年度の体制が一部変わり調整が必要な領域があったが、先生方のご尽力により、昨年度に引き続き、当科目の目的を達成できる内容が実施できたと考える。当科目により、学生は、基礎知識の定着とともに、一部の臨床症例と基礎知識との繋がりを科目横断的に理解するとともに、その様な視点を体得する一助になったと考える。また、グループワークを通して医療人としての倫理観を醸成する機会となり、5年次の病院・薬局実務実習に向けて重要な科目として機能していると考えられる。</p>
今後の対応	<p>本年度も当科目の到達目的を達成できる内容が実施できたと考えられるため、来年度も同様の内容で実施する予定である。昨年度の授業アンケートの自由記載において授業時間の超過の指摘があったが、今年度はその点の改善がなされた様子である。引き続き、全体的に更に内容を改善し続ける意識をもって取り組む。動画の活用や確認問題の実施と解説は、学修に一定の効果があると考えられるため、部分的にでも継続して行う予定である。</p>

科目名	卒業研究 (2024-2025)	学年	4 学年	期	後期
科目責任者	家入一郎	科目担当者	全専任教員		
自己点検・評価	<p>本科目は、「薬学教育モデル・コアカリキュラム」（平成 25 年改訂版）に基づき、学生が実験や調査研究を通じて研究の本質を体験し、科学的根拠に基づく問題解決能力を養成することを目的としている。今年度、最上級生が5年次に進級したことを受けて、前年度に設定された卒業研究分野毎（有機化学分野、生薬・天然物化学分野、タンパク質医薬品科学分野、医薬資源情報科学分野、遺伝子発現解析学分野、</p>				

	<p>細胞機能制御学分野、感染防御学分野、分子細胞免疫学分野、臨床神経生理学分野、薬理学分野、臨床薬物動態学分野、臨床薬学分野、分子衛生学分野、社会薬学分野、生命医療倫理学分野)による実質的な卒業研究が初めて開始された。</p> <p>初運営であることを考慮し、5月にすべての担当教員と配属学生に卒業研究分野決定と卒業研究開始時のアンケートを実施し、次年度に向けての改善点を整理した。また、3月に研究テーマの設定状況を調査し、すべての学生の卒業研究進行状況を確認した。卒業研究の実施記録は、学生に配布された記録ノートによって行われ、規定時間はこの記録をもとに確実に確保されている。</p> <p>教員の移動による再配属の必要性があったが、すべて学生-教員間の合意の下で、同系統テーマを持つ研究分野に再配属されており、問題なく実施できている。</p>
今後の対応	<p>今後、卒業研究発表指導、卒業論文作成指導を行い、すべての学生が研究活動の基礎を経験していくことになる。初の運営になるため万全の準備を行い、質を高め、安定した卒業研究運営を行っていく。</p>

科目名	卒業研究 (2025-2026)	学年	4 学年	期	後期
科目責任者	家入一郎	科目担当者	全専任教員		
自己点検・評価	<p>自ら研究課題に取り組んで、実験あるいは調査研究を行うことにより、研究がどのようなものであるかを体験し、科学的根拠に基づいて問題点を解決する能力を養うことを目的として、「薬学教育モデル・コアカリキュラム」(平成 25 年改訂版)の内容に対応した卒業研究設定している。本年度は、昨年同様に卒業研究分野と各分野の担当教員を設定し、卒業研究の基本運営ルールや学生の配属方針を決定した。分野の設定は各教員の専門研究領域を基に、各教員間の協議によって設定した。</p> <p>分野ごとの研究テーマを記載した卒業研究分野紹介資料を作成し、4 年次の前期終了時のガイダンス時間に学生に配布した。これと並行して各教員の研究紹介の時間(各教員 30~60 分間の持ち時間)を設け、「研究」に臨むための講義として「リサーチマインド養成講座」を開講した。各学生の配属希望を調査し、基本運営ルールに従って、学生の成績を基に各分野の定員に合わせて 110 名の学生の配属を決定した。卒業研究に実施記録は各学生に配布した記録ノートによって行うこととし、実習としての規定時間はこの記録をもとに確実に確保さ</p>				

	<p>れる。</p> <p>実質的な研究活動期間は、実務実習実施期間に合わせて、4年次後期の2月からに設定されており、令和6年度内の1か月程度においては大きな問題はなく卒業研究が開始できた。</p>
今後の対応	<p>今後、各分野の担当教員主導で卒業研究活動が実施されていくが、定期的に進行状況を確認し、記録する必要があると考えている。アンケート、報告書、中間報告会等の実施の可能性を教員間で協議して質を保ちつつ安定した卒業研究運営を行っていく。</p>

第四部 福岡薬学部研究活動報告

1. 2024年度研究活動

2. 氏名（役職）

阿部義人（教授）

研究概要

タンパク質を「観る」（構造生物学）および「創る」（タンパク質工学）を目的として以下の研究を行っている。主にタンパク質多量体化の調節機構を薬学的観点から調べている。

1) 抗 ATP 受容体 P2X4 抗体他、抗体の物性および利用に関する研究

神経障害性疼痛に関与すると考えられている ATP 受容体 P2X4 に対する抗体を作成し、本抗体の物性およびその利用法の検討を行っている。本抗体により P2X4 をターゲットにした体内動態調査および阻害剤創製を目指している。今年度は、本抗体の大腸菌発現系の改良を行った。

2) 大腸菌 DNA 複製機構に関する構造生物学研究

大腸菌における複製開始および再開機構の構造生物学的解析を行い、生命現象を分子およびアミノ酸のレベルで明らかにすることを目指している。今年度は、複製再開因子 DnaT の多量体化機構に関して調べ、高品質タンパク質結晶生成実験（JAXA との共同研究）により、宇宙空間におけるタンパク質結晶化をおこなった。

学会発表・シンポジウム

1. 阿部義人, 抗 P2X4 抗体 Fab の大腸菌発現系の改良. バイオインタラクション ワークショップ（京都）2024/6/28
2. 阿部義人, 立体構造に基づく分子会合面を考慮した大腸菌発現系での antiP2X4 抗体 Fab 生産法の改良. 第 14 回国際医療福祉大学学会学術大会（成田、Web 開催）2023/9/16
3. 阿部義人, 大腸菌複製再開因子 DnaT におけるオリゴマー構造. ニセコミーティング「第 8 回生命分子科学研究会」（熊本）2024/9/16
4. 阿部義人, DNA 複製再開因子のオリゴマー構造解析. タンパク質・抗体工学に関する研究シーズ・情報交換会（岡山）2024/12/7

依頼講演・招待講演 他

1. 阿部義人, 体のしくみ ～吸収・代謝・排出について～. 令和 6 年度 登録販売者生涯学習研修会, 2024/4/11

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本生化学会
3. 日本分子生物学会
4. 日本生物物理学会
5. 日本蛋白質科学会
6. 日本神経科学学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本生化学会 九州支部 支部評議員
2. 佐賀薬剤師会 登録販売者研修ワーキンググループ委員

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, 構造予測による新規タンパク質オリゴマー分子のデザインとその実験的検証, 2024～2026 年度, 研究代表者
2. 国際医療福祉大学学内研究費, タンパク質医薬品を目指した構造予測によるオリゴマー分子のデザイン, 2024 年度, 研究代表者

氏名（役職）

家入一郎（教授）

研究概要

薬物体内動態を制御する miRNA による薬物動態関連タンパク質を介した臓器間相互作用に関する研究（九州大学グループとの共同研究）

miRNA による薬物トランスポーターや代謝酵素の機能変化が臓器間で干渉する現象に注目した検討を行っている。肝臓から放出される miRNA が脳実質細胞に取り込まれ、脳に発現しない薬物動態関連タンパク質により新規機能を獲得する現象を *in vitro* のレベルで確認した。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Suetsugu K, Shigematsu T, Nakamura T, Hirota T, Ieiri I. Clinical Pharmacokinetics and Pharmacodynamics of Letemovir in Allogeneic Hematopoietic Cell Transplantation. *Clin. Pharmacokinet.*, 63(7), 945-964 (2024).
2. Kimura K, Tanuma J, Kimura M, Imamura J, Yanase M, Ieiri I, Kurosaki M, Watanabe T, Endo T, Yotsuyanagi H, Gatanaga H. Safety and tolerability of OP-724 in patients with haemophilia and liver cirrhosis due to HIV/HCV coinfection: an investigator-initiated, open-label, non-randomised, single-centre, phase I study. *BMJ. Open Gastroenterol.*, 11(1), e001341 (2024).
3. Yamada T, Belabbas T, Suetsugu K, Hirota T, Mori Y, Kato K, Akashi K, Egashira N, Ieiri I. Factors Influencing Serum Posaconazole Concentrations in Patients With Hematologic Malignancies Receiving Delayed-Release Tablets. *Ther. Drug Monit.*, 46(5), 603-610 (2024).
4. Arima M, Inoue H, Misumi A, Tsukamoto S, Matsushita I, Araki S, Ohta M, Takahashi K, Imazato M, Goto T, Aoki Y, Tagawa K, Hirose M, Fujita Y, Yoshida N, Nakao S, Kondo H, Kusuhara K, Kimura K, Hasegawa S, Ikeda Y, Kodama Y, Moritake H, Ochiai M, Ohga S, Kishimoto J, Todaka K, Ieiri I, Sonoda KH. *Jpn. J. Ophthalmol.*, 68(5), 490-499 (2024).
5. Matsukane R, Isshiki R, Suetsugu K, Minami H, Hata K, Matsuo M, Egashira N, Hirota T, Nakagawa T, Ieiri I. Risk Factors of Cetuximab-Induced Hypomagnesemia and the Effect of Magnesium Prophylaxis in Patients with Head and Neck Cancer: A Retrospective Study. *Biol. Pharm. Bull.*, 47(3), 732-738 (2024).
6. Uchida M, Ishida S, Mochizuki E, Ozawa N, Yonemitsu H, Ochiai H, Nakamura H, Kawashiri T, Watanabe H, Tsuji T, Suetsugu K, Kato K, Egashira N, Akashi K, Ieiri I.

Risk Factor for Rash in Patients Receiving Cytarabine and Idarubicin Induction Therapy for Acute Myeloid Leukemia. *Cancer Diagn. Progn.*, 4(5), 617-622 (2024).

7. Tsuji T, Nagata K, Tanaka M, Hasebe S, Yukita T, Uchida M, Suetsugu K, Hirota T, Ieiri I. Eye-tracking-based analysis of pharmacists' thought processes in the dispensing work: research related to the efficiency in dispensing based on right-brain thin king. *J. Pharm. Health. Care Sci.*, 10(1), 21.

【総説】

1. Hirota T, Ieiri I. Interindividual variability in statin pharmacokinetics and effects of drug transporters. *Expert Opin. Drug Metab. Toxicol.*, 20(1-2), 37-43 (2024). (Review)

依頼講演・招待講演 他

【特別講演】

1. 家入一郎. Pharmacogenetics (PGx)-臨床活用の現状と期待される未来-. 第 40 回日本 TDM 学会学術大会 (札幌) 2024/7/15

【教育講演】

1. 家入一郎. 添付文書を中心とした日常臨床、病棟活動に活用できる薬物動態の理解. 第 12 回日本くすりと糖尿病学会学術集会 (仙台) 2024/10/5

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本薬物動態学会
3. 日本くすりと糖尿病学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 公益社団法人臨床薬理研究振興財団理事
2. 一般社団法人薬学教育評価機構理事
3. 独立行政法人医薬品医療機器総合評価機構外部審査委員
4. 九州・山口地区実務実習調整機構監事
5. 一般社団法人日本くすりと糖尿病学会副理事長

氏名（役職）

石田卓巳（教授）

研究概要

環境汚染化学物質による生体内メタルホメオスタシスのかく乱に関する研究

ダイオキシン類などの環境汚染化学物質が生体内微量必須元素のホメオスタシスに与える影響を明らかにする。環境汚染化学物質は、現在でも様々な経路を介してヒトに暴露されている。このため、その影響を明らかにすると共に対策を講ずることは、疾病を予防し健康を維持するうえで重要な課題である。本研究の成果は、環境因子を起点とした疾病の発症機序の解明に新たな知見を提示するものである。

原著論文・総説

1. Zhou J-R, Kinno S, Kaihara K, Sawai M, Ishida T, Takechi S, Fang J, Nohara T, Yokomizo K. Saponin Esculeoside A and Aglycon Esculeogenin A from Ripe Tomatoes Inhibit Dendritic Cell Function by Attenuation of Toll-like Receptor 4 Signaling. *Nutrients*, 16(11): 1699 (2024).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 趙爽利, 宋穎霞, 李任時, 古賀貴之, 石田卓巳, 石井祐次, 田中嘉孝. アセトアミノフェン肝障害における SeBP1 の役割. フォーラム 2024 : 衛生薬学・環境トキシコロジー (仙台) 2024/9/4
2. 石田卓巳. キヌレニンによる転写制御シグナルの活性化と細胞機能への影響の解析: AhR を介した亜鉛輸送タンパク質発現への影響. 第 14 回国際医療福祉大学学会学術大会 (成田) 2024/9/16
3. 立川怜奈, 古賀貴之, 中島隆博, 廣村信, 石井祐次, 平尾雅代, 竹田修三, 石田卓巳, 小武野優子, 戸田晶久, 副田二三夫. 肝臓への脂肪蓄積に対する Selenium binding protein 1 (SBP1) 欠損の影響の性差の解析. 第 41 回日本薬学会九州山口支部大会 (熊本) 2024/11/24
4. 古賀貴之, 廣村信, 平尾雅代, 竹田修三, 石井祐次, 石田卓巳, 小武家優子, 藤井由希子, 戸田晶久, 副田二三夫. 褐色脂肪組織における Selenium binding protein 1 (SBP1) の寄与. 日本薬学会第 145 年会 (福岡) 2025/3/26 - 3/29
5. 趙爽利, 宋穎霞, 中嶋悠子, 鄒幸, 古賀貴之, 石田卓巳, 李任時, 廣田有子, 田中嘉孝, 石井祐次. Selenium-binding protein (SeBP) 1/2 の欠損は、コレステロール排出および脂質代謝を阻害することにより LDL を上昇させる. 日本薬学会第 145 年会 (福岡) 2025/3/26 - 3/29

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本生化学会

研究費獲得状況

1. 国際医療福祉大学学内研究費, キヌレニンによる細胞内亜鉛恒常性への影響の解析, 2024 年度, 研究代表者
2. 基盤研究 C, がん細胞に特徴的な亜鉛恒常性の破綻における AhR の役割とその細胞機能への影響, 2022~2024 年度, 研究代表者

氏名（役職）

猪部学（教授）

研究概要

T細胞活性化誘導細胞死(AICD)の誘導機構に関する研究（金沢大学 医薬保健研究域・薬学系 松永グループとの共同研究）

T細胞は活性化して増殖し、エフェクター細胞として効果を発揮した後、その大多数は活性化誘導細胞死(AICD)により自滅する。T細胞の活性化に比べ、後期過程である AICD の誘導機構は十分に明らかにされていないとはいえず、また、開発されてきた多数の免疫作用物質が、AICD に及ぼす効果も十分に解析されていない。T細胞ハイブリドーマに抗 CD3 抗体刺激を加えることで、AICD を誘導することができる。T細胞の活性化を抑制するタクロリムスは、AICD を抑制した。この細胞モデルを用い、AICD 誘導機構の解明や新たな作用物質の同定を目指す。

補助シグナル分子 HVEM によるリンパ球の制御機構に関する研究

リンパ球、特に T細胞は、抗原刺激による活性化の際に、補助シグナル分子群による調節を受ける。LIGHT や BTLA と結合する HVEM は、T細胞の調節を担う補助シグナル分子群のひとつで、T細胞の活性化を正および負に制御することが示唆されている。HVEM の結合分子の一部は、B細胞でも発現が認められる。T細胞の AICD や B細胞の活性化における HVEM の役割を解析することで、リンパ球調節機構の解明を目指す。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Kawai H, Yagyu F, Terada A, Matsunaga T, Inobe M. CD28 confers CD4⁺ T cells with resistance to cyclosporin A and tacrolimus but to different degrees. *Asian Pac. J. Allergy Immunol.*, 42(3), 298-304 (2024).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 猪部学, 深谷将太郎. T細胞 AICD モデルを用いた免疫恒常性に対する免疫作用物質の影響評価. 第 14 回国際医療福祉大学学会学術大会（成田）2024/9/16

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本免疫学会

3. 日本分子生物学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, 新規免疫チェックポイント分子 HVEM による B 細胞の制御機構, 2024～2027 年度, 研究代表者
2. 国際医療福祉大学学内研究費, 活性化誘導細胞死(AICD)に対する補助シグナルの影響, 2024 年度, 研究代表者

氏名（役職）

太田昭一郎（教授）

研究概要

血清ペリオスチン測定による炎症疾患診断キットの開発

細胞外マトリクス分子の一種であるペリオスチンがアレルギー性炎症や間質性肺炎等の線維化疾患の増悪に関わっていることを示し、血清ペリオスチン測定キットを作製して間質性肺炎における保険適用を申請中である。

血清 SCCA2 測定によるアトピー性皮膚炎診断キットの開発

扁平上皮系腫瘍マーカーである SCCA2 がアレルギー性疾患で上昇することを示し、血清 SCCA2 測定キットを作製して小児アトピー性皮膚炎での保険適用を得た。

B 細胞の運動性を制御する分子の研究

B 細胞の接着のトリガーとなる新規分子を同定し、接着機構の一端を解明することによって、免疫応答における B 細胞の動態を詳細に解析するとともに、当該分子を免疫異常病態の制御標的として検査および治療に応用を目指している。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Matsuo R, *et al.* Improvement trend for individual health guidance intervention according to Japan clinical guidelines by public health nurses for type 2 diabetes mellitus who visited for medical checkups regularly: a case-control preliminary report. *J. Clin. Biochem. Nutr.*, 74(2), 141-145 (2024).
2. Minami M, *et al.* Characterized factors of subjects who were first time diagnosed as hyperglycemia more than 126 mg/dL during annual or biannual medical checkups: a case-control study in Japan. *J. Clin. Biochem. Nutr.*, 75(3), 217-221 (2024).

特許

1. 太田昭一郎, 他. Method for detection of idiopathic interstitial pneumonia, 米国 US8420310.
2. 太田昭一郎, 他. Method for detection of idiopathic interstitial pneumonia, ヨーロッパ EP2295599.
3. 太田昭一郎, 他. 特発性間質性肺炎の検出方法, 日本国第 5717178 号.

4. 太田昭一郎, 他. アトピー性皮膚炎の検出方法および予防・治療剤のスクリーニング方法, 日本国第 5522717 号.
5. 太田昭一郎, 他. 非特発性間質性肺炎の治療薬のスクリーニング方法, 日本国第 5632994 号.
6. 太田昭一郎, 他. SCCA2 濃度測定によるアレルギー疾患の検査方法, 日本国第 5750646 号.
7. 太田昭一郎, 他. 慢性副鼻腔炎の検出方法, 日本国第 5871228 号.
8. 太田昭一郎, 他. Antibody capable of binding to specific region of periostin, and method of measuring periostin using the same, 米国 US9347954.
9. 太田昭一郎, 他. Antibody capable of binding to specific region of periostin, and method of measuring periostin using the same, ヨーロッパ EP2754672.
10. 太田昭一郎, 他. ペリオスチンの特定領域に結合する抗体及びこれを用いたペリオスチンの測定方法, 日本国第 6183809 号.
11. 太田昭一郎, 他. Method for screening for a therapeutic agent for idiopathic interstitial pneumonia, 米国 US9482676.
12. 太田昭一郎, 他. Method for detecting chronic sinusitis, ヨーロッパ EP2775303.
13. 太田昭一郎, 他. Method for detecting chronic sinusitis, 米国 US9625451.
14. 太田昭一郎, 他. 慢性副鼻腔炎の検出方法, 日本国第 5871228 号.
15. 太田昭一郎, 他. アトピー性角結膜炎の検出方法, 日本国第 6381013 号.
16. 太田昭一郎, 他. 試料に含まれるペリオスチンの測定試薬、ペリオスチン測定用前処理剤、ペリオスチン測定方法及びペリオスチン測定の感度の改善方法, 日本国第 7006599 号.

所属学会

1. 日本臨床検査医学会
2. 日本臨床化学会
3. 日本免疫学会
4. 日本アレルギー学会

研究費獲得状況

1. 文部科学省科学研究費（基盤研究 C），包括的線維化疾患診断を目指したペリオスチン測定システムの開発, 2020～2024 年度, 研究代表者

氏名（役職）

緒方勝也（教授）

研究概要

手内筋群の巧緻運動の神経基盤を神経生理学的に明らかにする研究

ヒトの手指巧緻運動は非常に精密な制御を受けているが、一次運動野から皮質脊髄路を経て手内筋群に至る神経興奮性をどのように協調させているのか解明は不十分である。一次運動野を経頭蓋磁気刺激を用いて手内筋の応答を評価すると各筋で刺激毎の応答が変動するだけでなく、手内筋間の応答も一様ではないことがわかる。これらの手内筋群の興奮性制御の神経基盤を経頭蓋磁気刺激、脊髄興奮性をみる F 波、脳波などを用いて明らかにしていく。

一次感覚野に対する経頭蓋磁気刺激と経頭蓋交流電流刺激の同期刺激の研究

一次運動野の経頭蓋磁気刺激ペアパルス刺激(rPPS)と経頭蓋交流電流刺激の相互作用に関する研究を行った。経頭蓋交流電流刺激は 10 Hz, 20 Hz での刺激を行い、交流波形の山あるいは谷といった位相に合わせて rPPS を行うと 20 Hz で促通効果が明らかとなった。またこの促通効果がコリン作動性ニューロンの機能変化を伴う可能性が示唆された。

バイノーラルビートによる聴覚誘発脳磁界反応の計測（九州大学大学院 検査技術学分野 重藤寛史教授、九州大学大学院 人文科学研究院 山田絵美助教との共同研究）

健常成人を対象として、聴覚性幻覚の1つであるバイノーラルビートに特徴的な脳活動を脳磁図で評価する。脳磁図は高精度な信号源推定が可能であり、バイノーラルビートが生じる際の両側側頭葉を中心とする大脳皮質活動、および両側側頭葉の相互作用を詳細に検討し、その神経基盤を明らかにする。また自律神経変調の可能性が指摘されており、バイノーラルビートによる心拍変動が生じる際に特徴的な脳活動が観察されるか検討する。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Nakazono H, Ogata K, Mitsutake T, Takeda A, Yamada E, Tobimatsu S. Neural mechanisms underlying the after-effects of repetitive paired-pulse TMS with B tACS on the human primary motor cortex. *Sci. Rep.*, 15, 7286 (2025).
2. Yamada E, Takeda A, Nakazono H, Tanaka M, Ogata K, Tobimatsu S. How the brain differentiates human and monkey faces: Neuromagnetic evidence from spatiotemporal dynamics. *Neurosci.*, 565, 80-90 (2024).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 緒方勝也, 松野豊, 平田大勝, 池田拓郎, 後藤純信. 手内筋群の興奮連関の評価: F波と経頭蓋磁気刺激による検討. 第63回日本生体医工学会大会(鹿児島) 2024/5/25
2. 緒方勝也, 松野豊, 平田大勝, 池田拓郎, 後藤純信. 正中神経と尺骨神経同時刺激による手内筋F波はTMSで促通する. 第14回国際医療福祉大学学術大会(成田) 2024/9/16
3. 緒方勝也, 松野豊, 平田大勝, 池田拓郎, 後藤純信. 共分散構造分析を用いた一次運動野および脊髄興奮性変動の解析. 第54回日本臨床神経生理学会学術大会(札幌) 2024/10/24

【国際学会】

1. Ogata K. Interactions in the Intrinsic Hand Muscles: Investigation using F-Waves and Transcranial Magnetic Stimulation. 33rd International Congress of Clinical Neurophysiology (Jakarta) 2024/9/13

所属学会

1. 日本臨床神経生理学会
2. 日本神経学会
3. 日本内科学会
4. 日本生体医工学会
5. 日本リハビリテーション医学会
6. 日本てんかん学会
7. 日本作業療法研究学会
8. 認知神経科学会
9. Society for Neuroscience
10. Institute of Complex Medical Engineering

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本臨床神経生理学会代議員、教育委員会委員、認定試験問題作成委員
2. 日本生体医工学会九州支部副支部長
3. Institute of Complex Medical Engineering 評議員
4. 九州臨床神経性研究会事務局

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, 脳状態依存刺激を活用した手指分離運動の神経基盤解明とリハビリへの応用, 2021~2024 年度, 研究代表者
2. 基盤研究 B, 運動野に可塑性を誘導する新規非侵襲的脳刺激法の開発: その神経基盤と臨床応用, 2022~2026 年度, 研究分担者
3. 基盤研究 C, てんかん脳における興奮抑制平衡維持メカニズムの解明と個別治療への応用, 2023~2026 年度, 研究分担者

氏名（役職）

梶岡俊一（教授）

研究概要

平滑筋の収縮弛緩に関する研究、幹細胞治療の研究、尿細菌叢の研究

平滑筋の収縮弛緩に関する研究を、基礎から臨床に関連して幅広く検討を行っている。今年度は特に、精囊、尿道に加え、尿道括約筋の生理学的機能を明らかにした。さらに今年度は、幹細胞治療では、歯肉幹細胞を用いての骨化誘導、3Dバイオプリンターへの適応に成功し、論文化した。また、尿細菌叢の研究では、腎癌の腫瘍マーカーとして、尿細菌叢が用いられることの可能性を展開したのに加え、邦人の健常者コントロールとしての尿細菌叢のサンプル採取を増やした。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Zakaria MF, Kato H, Sonoda S, Kato K, Uehara N, Kyumoto-Nakamura Y, Sharifa MM, Yu L, Dai L, Yamaza H, Kajioaka S, Nishimura F, Yamaza T. NaV1.1 contributes to the cell cycle of human mesenchymal stem cells by regulating AKT and CDK2. *J. Cell Sci.*, 137(19), 2024. jcs261732.

【総説】

1. Okabe A, Yokomizo A, Takei M, Shiota M, Morooka K, Eto M, Kajioaka S. 間質性膀胱炎/膀胱痛症候群の尿流動態検査を用いた解析. *日本排尿機能学会誌*, 第33巻第2号 (2024).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. Okada T, Okabe A, Mitsui R, Hashitani H, Kajioaka S, Eto M, Okada T, Okabe A, Mitsui R, Hashitani H, Kajioaka S, Eto M. Elucidation of physiological function of human seminal vesicle smooth muscle. 第111回日本泌尿器科学会総会（横浜）2024/4/25-27
2. Okada T, Maki T, Mitsui R, Hashitani H, Kato K, Kajioaka S. Thermo-regulative smooth muscle contraction in the lower urinary tract, focused on TRP channels. Ion Channel Modulation Symposium – Japan 2024（東京）2024/5/30-31
3. 岡田達憲, 牧知子, 三井烈, 橋谷光, 加藤健一, 梶岡俊一. TRPチャンネルに着目した膀胱平滑筋における温度調節性収縮の探索. 第66回日本平滑筋学会総会（東京）2024/8/2-3

4. 岡田達憲, Nouval Shahab, 牧知子, 梶岡俊一, 江藤正俊. 膀胱平滑筋における環状ヌクレオチドの役割. (福島) 2024/9/5-7
5. Kajioka S, Okada T, Okabe A, Maki T, Kato K, Shiota M, Hashitani H, Eto M. The new insight of underlying mechanisms of cooling-induced bladder contraction. APPW2025 (千葉) 2025/3/17-19

【国際学会】

1. Kajioka S, Okabe A, Okada T, Shiota M, Inokuchi J, Etoh M. Physio-pharmacological mechanisms underlying ejaculation in human seminal vesicle. 39th EAU Annual Congress EAU2024 (Paris, France) 2024/4/5-8
2. Kajioka S, Okabe A, Okada T, Toyoda M, Shiota M, Inokuchi J, Takei M, Yokomizo A, Yoshida A, Eto M. 39th EAU Annual Congress EAU2024 (Paris, France) 2024/4/5-8
3. Kajioka S, Okada T, Okabe A, Maki T, Kato K, Shiota M, Eto M. The understanding of underlying mechanisms of cooling-induced bladder smooth muscle contraction 39th EAU Annual Congress EAU2024 (Madrid, Spain) 2025/3/21-24

受賞

1. 39th EAU Annual Congress EAU2024 (Paris, France) best abstract 賞

所属学会

1. 日本歯科麻酔学会
2. 日本薬理学会
3. 日本遺伝子治療細胞学会
4. 日本生理学会
5. 日本平滑筋学会
6. 日本泌尿器科学会
7. 日本排尿機能学会
8. 日本癌学会
9. 日本臨床薬理学会
10. 日本ロボット外科学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本薬理学会代議員
2. 日本生理学会評議員
3. 日本平滑筋学会評議員
4. アレキサンダーフォンボルト奨学金日本支部協会会員

5. オックスフォード大学同窓会日本支部会員

研究費獲得状況

1. 基盤研究 B, 乳歯歯髄幹細胞によるヒルシュスプルング病と類縁疾患の病因解明および根治療法の開発, 2023～2025 年度, 研究分担者
2. 基盤研究 C, 下部尿路における微小収縮-感覚連関の生理および病態意義, 2023～2025 年度, 研究分担者

氏名（役職）

岸拓弥（教授）

研究概要

循環恒常性制御における脳の役割に関する研究

「心不全は脳によるロバスティックな生命維持システムの不全である」という概念創出ならびに「脳を治療標的とする革新的慢性心不全治療開発」に関する検討を行っている。今年度は、引き続き循環動態数理モデルを用いたシミュレーションにより、圧受容器反射による脳の血圧から交感神経への変換アルゴリズム異常に対する介入として、アストロサイトの水チャネル活性化が有効であることを明らかにした。これより、新たな心不全治療標的の探索及び介入手段開発への展開が期待されている（科学技術研究費基盤 C）

血圧治療アプリに関する研究

高血圧患者の行動変容を促し降圧効果を発揮できる高血圧アプリの開発をオムロンヘルスケアとの共同研究で行っており、IUHW オープンイノベーションセンターでのプロジェクトに採択され、高邦会高木病院高血圧・心不全センター外来にてパイロット研究を実施し、有効な結果が得られた。その結果は *Hypertension Research* 誌に掲載された。

心不全治療におけるビッグデータ解析

日本・スウェーデン・アメリカ・英国で行われた、心不全薬物治療におけるビッグデータ解析研究（EVOLUTION HF）において、日本の研究責任者を務め、ガイドラインに準じた治療が十分になされておらず、そのことが心血管イベントの抑制が不十分になっているだけでなく医療経済的にも問題であることを明らかにした。また、SGLT2 阻害薬の慢性心不全治療における医療経済的な利益解析を行い、日本の医療費において年間 500 億の医療費削減につながることを明らかにし、*Circulation Report* 誌に掲載された。また、日本の心不全データベースである JROAD HF 研究において研究立案や解析の中心メンバーとなり、多くの臨床研究を率いている。

医学系学会における SNS 活用の意義

日本循環器学会は日本医学系学会では突出した SNS 活用を行っており、情報広報部長としてその責任者をしており、その有効性について研究を行っている。今年度は学術集会における twitter の拡散にインフルエンサーの役割が重要であることや、学会雑誌に掲載される論文を twitter 投稿することによる引用回数の増加についての論文が *Circulation Report* 誌に掲載された。来年度は引き続き学会の広報活動における twitter の役割について研究を行い、“Tweet the Meeting”を戦略的に行うための方法について他学会をリードする役割を担う。

腎デナベーションの拡張不全型心不全における有効性の検討

交感神経活動を抑制できる腎デナベーションの拡張不全型心不全における有効性の検討を大阪大学との共同研究で行い、**ESC Heart Fail** 誌に掲載された。

ACP の啓発を妨げる社会的要因について研究

心不全患者におけるアドバンス・ケア・プランニングの推進・啓発の妨げとなる社会的要因について、久留米大学・神戸大学・北海道大学と共同研究を行い、**J Cardiol** 誌に掲載された。

デジタル技術を活用した高血圧治療の指針作成

日本高血圧学会と AMED の事業で統括委員を担い、ウェアラブルデバイスの項目のシステマティックレビューおよび推奨文執筆を行った (AMED 事業)

COVID-19 罹患後症状マネジメント研究

COVID-19 罹患後の循環器疾患発見・症状マネジメントについて、厚生労働省の研究班として実施し、「COVID-19 罹患後症状のマネジメント」指針の執筆を行なった。

維持透析患者の心血管イベント発症予測因子探索

高邦会高木病院腎臓内科での維持透析患者における心血管イベント発症予測因子探索を高邦会高木病院腎臓内科・救急部 (中山・後藤医師) と行い、消化管出血の影響が **Medicine** 誌に掲載され中山医師の、性差の影響が **J Clin Biochem Nutr** 誌に掲載され高木医師の学位論文となった。現在は心血管イベントにおける因子の研究を後藤遺書と進めている。

維持透析患者の予後における骨折の影響

高邦会高木病院腎臓内科での維持透析患者の予後において下半身の骨折や予後を規定数重要な因子であることを高邦会高木病院整形外科の吉川医師の大学院学位論文研究として明らかにし、**Ther Apher Dial** 誌に掲載された。また、整形外科コンサルトにより予後が改善できる可能性についても吉川医師と研究を行い、**Cureus** 誌に掲載された。

不妊治療における子宮ポリープの病理組織の特徴の研究

高邦会高木病院産婦人科の有馬医師と、不妊治療の成功率と子宮内膜ポリープの病理組織における特徴の関係について探索的に研究を行っている。

心房細動に対するアブレーションの再発に関わる因子の探索研究

高邦会高木病院循環器内科と心房細動に対するアブレーションの再発に関わる因子の探索研究を行っている。年齢に関する研究は山本医師の学位論文として *Int Heart J* 誌に掲載され、現在は手法の影響（片桐医師）や心房細動にタイプによる違い（藤村医師）、血清カリウム値の影響（富田医師）の研究を進めている。

健診センター受診者における糖尿病新規発症予測因子の探索

高邦会高木病院予防医学センター受診者において、糖尿病新規発症予測因子の探索を高邦会高木病院予防医学センターの南医師（大学院生）の学位論文研究として指導し、論文が *J Clin Biochem Nutr* 誌に掲載された。

著書

1. 岸拓弥. 左室拡張障害から HFpEF を診る. *Heart View*, メジカルビュー, 28 巻 2 号, p38-43 (2024).
2. 岸拓弥. 心臓神経症. 診断と治療, 診断と治療社, 東京, 113 巻 1 号, p100-104 (2024).
3. 岸拓弥. 脂質異常症・高尿酸血症. 薬学部学生のための病態検査学, 南江堂, p178-186 (2024).
4. 岸拓弥. 循環器症状へのアプローチ. 新型コロナウイルス感染症診療の手引き 罹患後症状のマネジメント, 第 3.0 版, 厚生労働省, p24-26 (2024).

原著論文・総説

【原著論文】

1. Kishi T, Usui H, Nagayoshi S. A prospective pilot trial of the health data monitoring system without educational content for patients with hypertension. *Hypertens. Res.*, 47(2), 529-532 (2024).
2. Nakayama S, Yamanouchi K, Takamori A, Goto T, Shimada F, Imamura T, Hirooka Y, Kitajima A, Onozawa K, Kakiuchi T, Takagi K, Kishi T, Fujimoto K, Sakamoto Y. Gastrointestinal bleeding among 151 patients undergoing maintenance hemodialysis for end-stage renal failure: A 5-year follow-up study. *Medicine*, 103(7), e37274 (2024).
3. Matsuo R, Imamura T, Takamori A, Kishi T, Minami M, Miyakawa J, Yoshitake N, Hayashi A, Nakayama Y, Egashira N, Teramoto M, Ishinari H, Kajiyama I, Fujisaki S, Kakiyama H, Satou K, Nakafusa R, Tanaka C, Tanaka M, Isomura Y, Izumi K, Ohta S, Souta N, Matsuo N, Yamamoto K, Tsuji S, Umemura T, Takagi K, Fujimoto K. Improvement trend for individual health guidance intervention according to Japan clinical guidelines by public health nurses for type 2 diabetes mellitus who visited for medical checkups regularly: a case-control preliminary report. *J. Clin. Biochem. Nutr.*, 74(2), 141-145 (2024).

4. Shiraki T, Mizuno H, Kishi T, Asakura M, Asanoi H, Yasumura Y, Sakata Y. Cardiac sympathetic nerve activity trends after renal denervation in heart failure with preserved ejection fraction. *ESC Heart Fail.*, 11(4), 2426-2431 (2024).
5. Yoshikawa K, Kishi T, Takamori A, Kitajima A, Goto T, Nakayama S, Yamanouchi K, Takagi K, Hirooka Y, Fujimoto K, Nagata N, Nagata O, Kuroki F, Fukuda N, Akiyoshi Y, Yamamoto T. Lower body bone fractures have high mortality rates and poor prognosis in the patients with hemodialysis. *Ther. Apher. Dial.*, 28(5), 690-696 (2024).
6. Shibata T, Mizuno A, Ohmori T, Oishi S, Nishizaki K, Nabeta T, Kishi T, Nagai T, Anzai T. Public awareness of palliative care for heart failure in Japan: A cross-sectional study. *J. Cardiol.*, 84(4), 274-275 (2024).
7. Mizuno A, Yoneoka D, Kishi T, Kusunose K, Matsumoto C, Sahashi Y, Ishida M, Sanada S, Fukuda M, Sugimoto T, Hirano M, Sata M, Anzai T, Node K. From Optional to Default - Enhancing Article Viewership Through X (Formerly Twitter) Posting. *Circ. Rep.*, 6(9), 389-394 (2024).
8. Minami M, Imamura T, Takamori A, Minagawa H, Matsuo R, Miyakawa J, Izumi K, Ohta S, Yamanouchi K, Souta N, Yamamoto K, Tsuji S, Umemura T, Anzai K, Hirai Y, Fujimoto K, Kishi T. Characterized factors of subjects who were first time diagnosed as hyperglycemia more than 126 mg/dl during annual or biannual medical checkups: a case-control study in Japan. *J. Clin. Biochem. Nutr.*, 75(3), 217-221 (2024).
9. Takagi K, Kishi T, Goto T, Yamanouchi K, Yoshikawa K, Imamura T, Nakayama S, Anzai K, Akiyoshi Y, Kitajima A, Onozawa K, Takamori A, Fujimoto K. Female patients with end-stage renal failure treated by hemodialysis had a low mortality rate and small patient number compared to male patients: 5-year follow-up study in Japan. *J. Clin. Biochem. Nutr.*, 75(3), 237-240 (2024).
10. Yoshikawa K, Kishi T, Takamori A, Goto T, Onozawa K, Takagi K, Kuroki F, Akiyoshi Y, Yamamoto T. Benefits of Continuous Outpatient Orthopedic Consultations for Both Upper and Lower Body on the Mortality Rates of Hemodialysis Patients. *Cureus.*, 16(12), e75576 (2024).

【総説】

1. Kario K, Nishiyama A, Shibata S, Arima H, Furuhashi M, Ichihara A, Ishida M, Katsuya T, Kishi T, Miura K, Miura SI, Mogi M, Ohishi M, Shibata H, Shimosawa T, Sugawara A, Tamura K, Toyoda K, Yamamoto K, Node K. Digital hypertension, implementation hypertension, and internationalization - 3 pillars of Japanese Society of Hypertension 2024-2026 advancing hypertension science from Japan to the world in the information network era. *Hypertens. Res.*, 48(1), 1-5 (2024).

【Editorial comment】

1. Kishi T. Gender differences in the association of serum uric acid with left ventricular hypertrophy should be focused. *J. Hypertens.*, 42(1), 53-55 (2024).

依頼講演・招待講演 他

1. 岸拓弥. Angiotensin II Receptor-induced Astrocyte Dysfunction Disrupts Circulatory Homeostasis in the Heart and Multiple Organ Systems Leading to Heart Failure (プレナリーセッション). 日本循環器学会学術集会 (神戸) 2024/3/8
2. 岸拓弥. Is Generative Artificial Intelligence a Savior or Forbidden Fruit for Medical Article and Peer Review? (会長特別企画). 日本循環器学会学術集会 (神戸) 2024/3/10
3. 岸拓弥. 日本循環器学会公式X@JCIRC_IPRとYouTubeの5年間の活動で見えてきた学会公式SNSの光と闇 (シンポジウム). 日本臨床腫瘍学会学術集会 (名古屋) 2024/3/28
4. 岸拓弥. 日本循環器学会公式X@JCIRC_IPRとYouTubeの5年間の活動で見えてきた学会公式SNSの光と闇 (シンポジウム). 日本病理学会総会 (東京) 2024/3/29
5. 岸拓弥. あえて言おう血管不全研究は必要ですか? 日本血管不全学会は必要ですか? (シンポジウム). 日本血管不全学会 (那覇) 2024/4/21
6. 岸拓弥. Generative AIは循環器病予防に役立つかをGenerative AIに聞いてみた (シンポジウム). 日本循環器病予防学会学術集会 (東京) 2024/5/11
7. 岸拓弥. 明日から語る「起立性低血圧」トリビア～高血圧診療には必須です～ (シンポジウム). 高血圧フォーラム (東京) 2024/5/26
8. 岸拓弥. アンチエイジングにシンギュラリティは既に来ている (シンポジウム). 日本抗加齢医学会学術集会 (熊本) 2024/6/2
9. 岸拓弥. 日本循環器学会公式X@JCIRC_IPRとYouTubeの5年間の活動で見えてきた学会公式SNSの光と闇 (シンポジウム). 日本麻酔科学会総会 (名古屋) 2024/6/8
10. 岸拓弥. 日本循環器学会公式X@JCIRC_IPRとYouTubeの5年間の活動で見えてきた学会公式SNSの光と闇 (シンポジウム). 日本皮膚科学会学術総会 (名古屋) 2024/6/9
11. 岸拓弥. 今日のスライドも演者も (?!) ChatGPT作です～使わない手はない～ (会長特別企画). 日本循環器学会九州地方会 (鹿児島) 2024/6/29
12. 岸拓弥. 池谷裕二 vs 岸拓弥 ChatGPTの登場で変わる時代、研究者はAIにどう向き合うべきか (シンポジウム). Digital Toxicology Conference (福岡) 2024/7/5
13. 岸拓弥. 明日から慢性心不全のGDMTをドヤ顔で語るための教育講演 (教育講演). 日本心臓病学会学術集会 (仙台) 2024/9/28

14. 岸拓弥. 臓器連関で維持される循環動態恒常性のシステム中枢は脳内神経グリア連関である～治療手段としての脳メカノストレス～ (シンポジウム). 日本心臓病学会学術集会 (仙台) 2024/9/29
15. 岸拓弥. 日本におけるダパグリフロジンによる心不全関連イベントの抑制及び削減医療費の推定 (シンポジウム). 日本心不全学会学術集会 (大宮) 2024/10/4
16. 岸拓弥. 統計いやだ・・・ (シンポジウム). 日本心不全学会学術集会 (大宮) 2024/10/5
17. 岸拓弥. プレゼンテーションはこうする (シンポジウム). 日本心不全学会学術集会 (大宮) 2024/10/6
18. 岸拓弥. 高血圧の主たる成因は脳内神経グリア連関異常である～治療手段としての脳メカノストレス～ (シンポジウム). 日本高血圧学会総会 (福岡) 2024/10/11
19. 岸拓弥. メタバース空間での自己客観視と未来予想による高血圧患者個別最適化治療 (シンポジウム). 日本高血圧学会総会 (福岡) 2024/10/12
20. 岸拓弥. デジタルトランスフォーメーションなしの日本高血圧学会はありえない (シンポジウム). 日本高血圧学会総会 (福岡) 2024/10/12
21. 岸拓弥. HFpEFを循環生理学で考えると見えてくる薬物治療 (シンポジウム). 日本臨床生理学会 (東京) 2024/11/15
22. 岸拓弥. 日本循環器学会公式X@JCIRC_IPRとYouTubeの5年間の活動で見えてきた学会公式SNSの光と闇. 日本冠疾患学会学術集会 (東京) 2024/11/29
23. 岸拓弥. 医療のシンギュラリティはもうすぐそこにある～No AI, No ヘルスケア～ (特別講演). 北九州AI医学・医療研究会 (小倉) 2024/11/30
24. 岸拓弥. 日本循環器学会公式X@JCIRC_IPRとYouTubeの5年間の活動で見えてきた学会公式SNSの光と闇 (シンポジウム). 日本臨床薬理学会総会 (大宮) 2024/12/24

所属学会

1. 日本循環器学会
2. 日本内科学会
3. 日本心臓病学会
4. 日本高血圧学会
5. 日本心不全学会
6. 日本循環制御医学会
7. 日本高血圧関連疾患モデル学会
8. 日本心血管内分泌代謝学会
9. 日本抗加齢医学会
10. 日本薬理学会
11. 日本生理学会

12. 日本糖尿病学会
13. 日本内分泌学会
14. 日本緩和医療学会
15. 日本血管不全学会
16. 日本心臓脈管作動物質学会
17. 日本循環器病予防学会
18. 日本腎臓学会
19. 日本性差医学会
20. American Heart Association
21. American Physiological Society
22. European Society of Cardiology
23. International Society of Cardiovascular Pharmacotherapy Japan Section
24. International Society for Heart Research Japan Section

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本循環器学会（Fellow、情報広報部会部会長、総務委員会委員、学術集会運営委員会委員、歴史編纂ワーキング長、九州支部評議員・あり方委員会委員・ダイバーシティ委員会委員）
2. 日本心不全学会評議員・広報委員会委員
3. 日本高血圧学会（理事、Fellow、広報・情報委員会委員長、Hypertension Research編集委員会、ダイバーシティ推進委員会委員、学会活性化ワーキング委員）
4. 日本心血管内分泌代謝学会理事
5. 日本血管不全学会理事
6. 日本循環制御医学会理事
7. 日本抗加齢医学会評議員
8. 日本薬理学会学術評議員
9. 日本心脈管作動物質学会評議員
10. 日本循環器病予防学会評議員
11. 日本臨床生理学会評議員
12. 日本産科麻酔学会 SNS 活用ワーキングアドバイザー
13. 日本腎臓学会広報委員会アドバイザー
14. 日本臨床薬理学会広報委員会アドバイザー
15. American Heart Association, Fellow
16. European Society of Cardiology, Fellow
17. International Society of Cardiovascular Pharmacotherapy Japan Section, Fellow
18. International Society for Heart Research Japan Section, Fellow

研究費獲得状況

1. 基盤研究C（一般研究），脳グリンパティックシステムに着目する心不全治療開発及び運動療法最適化への基盤研究, 2023～2025年度, 研究代表者
2. AMED「予防・健康づくりの社会実装にむけた研究開発基盤整備事業（ヘルスケア社会実装基盤整備事業）」, デジタル技術を活用した生涯にわたり血圧管理に関する指針の研究開発, 2022～2024年度, 研究分担者

氏名（役職）

吉良潤一（教授）

研究概要

1. 中枢神経脱髄疾患における新規ノド抗体の探索とノド抗体介在性脱髄機序の解明（福岡中央病院脳神経センター及び九州大学生体防御医学研究所との共同研究）

中枢神経脱髄疾患である多発性硬化症(multiple sclerosis, MS)は、中枢神経を侵す脱髄疾患では最も多く、世界に約 300 万人の患者がいる。国指定難病となっており、根治療法はない。疾患修飾薬により再発は減るものの、慢性進行型には無効である。剖検例の病理学的検索で、ランビエ絞輪部の伸長を示すノドパッチがみられるが、その原因は不明である。視神経脊髄炎(neuromyelitis optica, NMO)では、aquaporin 4 (AQP4)や myelin oligodendrocyte glycoprotein (MOG)に対する自己抗体がみられる例が多いが、seronegative NMOSD も存在し、それらは有効な治療法がない。私たちは、これまでに中枢神経と末梢神経の両者を侵す中枢末梢連合脱髄症(combined central and peripheral demyelination, CCPD)において、ランビエ傍絞輪部に存在する neurofascin (NF) 155 に対する IgG4 クラスの自己抗体が存在すること、抗 NF155 抗体陽性例では CIDP が起こるとともに約 90%で視覚惹誘発電位検査での異常がみられることを報告している。そこで、中枢神経脱髄疾患である MS や seronegative NMO、及び抗 NF155 抗体陰性の CCPD 患者血清を用いて視神経標本の組織免疫染色で新規ノド抗体を見出し、その責任抗原の同定に成功した（米国特許出願中）。抗体陽性例を集積し、新規中枢神経ノド抗体は seronegative NMO/CCPD 及び進行型 MS で高率に陽性となることを明らかにした。また、抗体産生のリスクとして、全身性自己免疫疾患の合併や HLA クラス II 遺伝子多型が寄与していることを見出した。今後さらに、特徴的な臨床像の解明を目指すとともに、同抗体をマウスに視神経内注入したり、責任抗原でマウスを免疫したりすることで、病態の再現を行い、病原性を証明する予定である。

2. 末梢神経脱髄疾患における新規ノド抗体の探索とその責任抗原の同定（九州大学神経内科学分野との共同研究）

慢性炎症性脱髄性多発神経炎(chronic inflammatory demyelinating polyneuropathy, CIDP)は、末梢神経を侵す最も代表的な脱髄疾患である。国指定の難病で根治療法はない。私たちは、末梢神経や後根神経節を用いた免疫組織染色により多数の CIDP 患者血清をスクリーニングし、ランビエ傍絞輪部に結合する新規ノド抗体を発見し、その責任抗原が LGI4 であることを報告した（特許出願中）。抗 LGI4 抗体陽性 CIDP 患者の臨床像と腓腹神経生検所見を解明し、抗 LGI4 抗体を用いた受け身移入（患者 IgG のマウス坐骨神経注入）により、ランビエ絞輪の破壊を証明できた（論文 revision 中）。現在、抗 LGI4 抗体陽性例の免疫遺伝学的背景を次世代シーケンスで解析している。

3. 進行型多発性硬化症におけるグリオパチー機序の解明と治療開発（九州大学神経内科学分野及び横浜市立大学神経内科学・脳卒中医学教室との共同研究）

進行型 MS の剖検標本でオリゴデンドログリアの connexin (Cx) 32/47 が脱髄範囲を越えて広汎に脱落していることを報告した。そこでオリゴデンドログリア特異的・時限的に Cx47 を脱落させることができる inducible conditional knockout (icKO) マウスを作成し、MS の動物モデルである実験的自己免疫性脳脊髄炎(experimental autoimmune encephalomyelitis, EAE)を誘導した。すると、急性期および慢性期 EAE が顕著に増悪し、脱髄とグリア炎症が進行性に悪化した。これにより進行型 MS の動物モデルを作成できた。したがって、オリゴデンドログリアの Cx47 はアストログリアの Cx43 と gap junction (GJ)チャンネルを形成してエネルギー源の供給やカリウムイオンのバッファリングを通じて脳の恒常性を維持しているばかりでなく、脳内の炎症環境を制御していることを初めて示すことができた。一方、アストログリアの Cx43 は、急性期には広範に脱落するが、慢性期にはアストログリオシスを反映して顕著に発現が亢進する。そこで、大脳皮質アストログリア特異的・時限的に Cx43 を脱落させることができる icKO マウスを作成し、EAE を誘導したところ脱髄炎が著明に軽減した。Cx43 は、酸化ストレス時などに低分子量の truncated translational isoform が産生される。これらはチャンネル機能を持たないが、非チャンネル機能として RNA や DNA を結合できる。私たちは、グリア細胞間で情報伝達に重要な役割を果たしている Cx43 や Cx47 などのグリア Cx が、MS の動物モデルである EAE を起こしたマウスの末梢血から精製したエクソソームにも発現しており、グリア Cx を発現したエクソソームの量が EAE の重症度によって変動することを発見した。EAE 発症時には末梢血でエクソソーム中の Cx43 低分子量 isoform である GJA1-29k が著増し、Cx43 icKO マウスでは EAE 時にもその増加が消失していた。実際に MS や類縁疾患の視神経脊髄炎(neuromyelitis optica, NMO)の患者においても、末梢血由来エクソソームにおいて急性増悪時には GJA1-29k が有意に増加し GJA1-11k が著減することを発見した（米国神経学会誌に論文発表）。グリア由来エクソソームは結合したマイクロ RNA (miRNA) などを、血液脳関門を越えて免疫細胞等に伝搬できることから、GJA1-29k 含有グリオゾームは脱髄炎の増幅や広範化に関わっていると考えた。今後、Cx47 icKO マウスや Cx43 icKO マウス、及び脱髄炎患者末梢血由来エクソソーム miR の解析を通じて、炎症性グリアが脱髄炎を増悪させる機序を解明し、グリア Cx を標的とする進行型 MS の全く新しい治療法を開発する。

4. 多系統萎縮症モデルにおけるグリオパチー機序の解明と治療開発（九州大学神経内科学分野との共同研究）

多系統萎縮症(multiple system atrophy, MSA)はオリゴデンドログリアに α -synuclein (α -syn)が蓄積し脱髄と神経脱落を起こす。治療法の全くない国指定難病である。多数の

MSA-C(小脳型)の病理検討により初期病巣からオリゴデンドログリア Cx32 がランビエ絞輪で脱落、次いでアストログリア Cx43 が失われ、進行期にはオリゴデンドログリア細胞体の Cx47 が喪失する一方、アストログリア Cx43 が発現亢進し、ヘミチャネル化することを見出した。そこで凝集性の強いヒト変異 α -SynA53T を Tet-off 系で任意の期間オリゴデンドログリアに発現できるマウス (TetO- α SynA53T Tg/+ マウスと PLP-tTA Tg/+ マウスを交配させた TetO- α SynA53T Tg/+; PLP-tTA Tg/+ マウス) を作成した。本マウスは凝集性の強い A53T 変異 α -syn を Tet-off システムで doxycycline を除くことにより任意の時期に発現させることができる。髄鞘完成期 (8 週齢) から発現させると小脳失調を主徴とし小脳白質・脳幹の脱髄を呈する MSA-C 様病態を示した。このモデルでは病初期からランビエノードでオリゴデンドログリアの Cx32 が脱落し、次いでアストログリアの Cx43 が失われ、進行期にはオリゴデンドログリア細胞体の Cx47 が喪失する一方、アストログリアの Cx43 が再発現した。全脳の RNA のマイクロアレイ解析と脳から単離したミクログリアの single cell RNA sequence により脱髄と軸索脱落に先行して特定のミクログリアクラスターが増加・浸潤していることを見出した。ミクログリアの増殖と維持に不可欠な colony stimulating factor 1 receptor (CSF1R) inhibitor を投与しても、このミクログリアクラスターは残存し、MSA-C 症状がかえって増悪した。今後、synucleinopathy の増悪に寄与しているミクログリアクラスターを標的とした治療開発を行う。また、このモデルでは α -Syn oligomer がオリゴデンドログリアに発現した後に、ニューロンへ transmission することを見出した (英語論文として発表)。中枢神経への移行性の高い Cx43 inhibitor の投与は、MSA-C の臨床・病理所見を有意に軽減した。その際に、 α -Syn oligomer が増加する一方、リン酸化 α -Syn 凝集体が減少することを見出した。したがって、Cx43 inhibitor は α -Syn oligomer による伝搬からリン酸化 α -Syn 凝集体形成に至る過程を阻止することで治療効果を示すと考えた。現在、oligomer による異常 α -Syn のオリゴデンドロサイトからニューロンへの伝搬とリン酸化 α -Syn 凝集体形成プロセスの関連を解析している (英語論文投稿中)。

5. エクソソームが神経変性疾患の病態および疾患進行に与える影響の解明 (福岡中央病院脳神経センター及び九州大学神経内科分野との共同研究)

エクソソームはほとんどの細胞から分泌される直径 30 nm ~ 100 nm 程度の膜小胞である。エクソソームは表面に様々な細胞由来分子を発現するとともに、その中には miRNA も含まれ、遠隔的な細胞間情報伝達に重要な役割を果たしている。また、エクソソームは血液脳関門を容易に通過することから、中枢神経と末梢組織の双方向性の情報伝達にも大きな役割を担うと考えられる。私たちは、アルツハイマー病 (Alzheimer disease, AD) の動物モデルの末梢血から精製したエクソソームには、アミロイドベータ ($A\beta$) やリン酸化タウ (p-tau) が含まれ、野生型と比較してエクソソームに含有されている miRNA に違いがあることを見出した。AD 患者でも同様にエクソソーム miR が健常高齢者とは大きく異

なっており、AD 診断の新しいバイオマーカーになることを明らかにした（米国特許出願中）。また、私たちは、上記の MSA-C モデルマウスで脳幹・小脳や脊髄などの脱髄が起こる部位でグリア Cx が広汎に脱落することを見出し、グリア Cx が本症における脱髄の発生に重要な役割をもつことを明らかにしている。しかし、AD や MSA 患者において末梢血でグリア Cx を発現したエクソソームの変化が見られるかは不明である。そこで、AD、MSA 等の難治性神経変性疾患の患者において、末梢血から回収したエクソソームのフローサイメトリーによる表面発現分子の解析、エクソソームの miRNA 解析、超高感度デジタル ELISA (single molecule array, SIMOA) 法による含有物質（炎症性サイトカイン・ケモカイン、neurofilament L や glial fibrillary acidic protein、myelin basic protein などの神経組織由来分子）の測定を行う。これらの測定結果と、臨床・検査所見との関連を検討することで、エクソソームの神経変性疾患の病態進行における役割、疾患バイオマーカーとしての意義を明らかにする。

著書

1. Kira J, Isobe N. Multiple sclerosis. Neuroimmune diseases; from cells to the living brain. Mitoma H, Manto M (Second Eds). Springer First Online: 15 October 2024. pp 1–38.
2. 吉良潤一. 多発性硬化症・同心円硬化症. 脳神経内科診断ハンドブック, 下畑亨良 編, 中外医学社, 改訂 2 版 2024 (2024 年 3 月出版)
3. 吉良潤一. 急性散在性脳脊髄炎. 脳神経内科診断ハンドブック, 下畑亨良 編, 中外医学社, 改訂 2 版 2024 (2024 年 3 月出版)

原著論文・総説

【原著論文】

1. Ko S, Yamasaki R, Okui T, Shiraishi W, Watanabe M, Hashimoto Y, Kobayakawa Y, Kusunoki S, Kira J, Isobe N. A nationwide survey of facial onset sensory and motor neuronopathy in Japan. *J. Neurol. Sci.*, 2024: 45912295 (2024). <https://doi.org/10.1016/j.jns.2024.122957>.
2. Takase EO, Yamasaki R, Nagata S, Watanabe M, Masaki K, Yamaguchi H, Kira J, Takeuchi H, Noriko Isobe. Astroglial connexin 43 is a novel therapeutic target for chronic multiple sclerosis model. *Sci. Rep.*, 14, 10877 (2024). <https://doi.org/10.1038/s41598-024-61508-2>.
3. Yamaguchi H*, Nishimura Y*, Matsuse D*, Masaki K*, Tanaka T*, Saiga T*, Harada M, Sekiya H, Dickson DW, Matsuo E, Tanaka KF, Yamasaki R, Isobe N, Kira J*. A novel model of multiple system atrophy-cerebellar variant reveals a unique microglia subset

- associated with aggressive α -synucleinopathy. *Brain Behav. Immun.*, 121, 122-141 (2024). doi: 10.1016/j.bbi.2024.07.004. *equal contribution
4. Watanabe M, Isobe N, Niino M, Nakashima I, Matsushita T, Sakai Y, Nakahara J, Kawachi I, Ochi H, Nakatsuji Y, Nakamura Y, Nakamura K, Sakata K, Matsui M, Kuwabara S, Kira J, for the Research Committee of Neuroimmunological Diseases in Japan. Prevalence of, and disability due to, multiple sclerosis and neuromyelitis optica spectrum disorder in Japan by the fifth nationwide survey. *Neurology*, 103, e209992 (2024). doi:10.1212/WNL.0000000000209992.
 5. Sato N, Wakimoto K, Kato K, Susuta Y, Ueda K, Satou Y, Sasajima T, Kira J. Safety and Effectiveness of Fingolimod in Japanese Patients with Multiple Sclerosis: Results of a Post-marketing Surveillance Study. *Clin. Exp. Neuroimmunol.*, 1-14 (2024). doi:10.1111/cen3.12814.
 6. Tanaka E, Yamasaki R, Saitoh B, Abdelhadi A, Nagata S, Yoshidomi S, Inoue Y, Matsumoto K, Kira J, Isobe N. Postnatal allergic inhalation induces glial inflammation in the olfactory bulb and leads to autism-like traits in mice. *Int. J. Mol. Sci.*, 25, 10464 (2024). <https://doi.org/10.3390/ijms251910464>.
 7. Kakumoto T, Orimo K, Matsukawa T, Mitsui J, Ishihara T, Onodera O, Suzuki Y, Morishita S, Japan Multiple System Atrophy Registry Consortium including Kira J, Toda T, Tsuji S. Frequency of FGF14 intronic GAA repeat expansion in patients with multiple system atrophy and undiagnosed ataxia in the Japanese population. *Eur. J. Hum. Genet.*, (2024). <https://doi.org/10.1038/s41431-024-01743-3>.
 8. Maimaitijiang G, Kira J, Nakamura Y, Watanabe M, Takase EO, Nagata S, Sakoda A, Zhang X, Masaki K, Yamasaki R, Isobe N, Yamaguchi H, Imamura T. Blood Exosome Connexins and Small RNAs Related to Demyelinating Disease Activity. *Ann. Clin. Transl. Neurol.*, (2025). doi: 10.1002/acn3.52307.
 9. Wan D, Zhao S, Zhang C, Xu F, Wang H, Tao S, Qiu Z, Jiang H, Li D, Wang F, Li D, Chen J, Wang Y, Yan Y, Zhao Y, Gao X, Jin B, Liu D, Zhang M, Feng J, Hou S, Wang M, Chen T, Lin M, Han J, Wen X, Jiang W, Liu L, Long Y, Zhao Y, Kira J, Liu Z, Chai G, Hao J. Novel meningoencephalomyelitis associated with vimentin IgG autoantibodies. *JAMA Neurol.*, (2025). doi:10.1001/jamaneurol.2024.4763.
 10. Yata T, Sato G, Ogawa K, Naito T, Sonehara K, Saiki R, Edahiro R, Namba S, Watanabe M, Shirai Y, Yamamoto K, Ho NK, Nakanishi T, Yamamoto Y, Hosokawa A, Yamamoto M, Japan MS/NMOSD biobank, The BioBank Japan Project, Japan COVID-19 Task Force, Oguro-Igashira E, Nii T, Maeda Y, Nakajima K, Nishikawa R, Tanaka H, Nakayamada S, Matsuda K, Nishigori C, Sano S, Kinoshita M, Koike R, Kimura A, Imoto S, Miyano S, Fukunaga K, Mihara M, Shimizu Y, Kawachi I, Miyamoto

K, Tanaka Y, Kumanogoh A, Niino M, Nakatsuji Y, Ogawa S, Matsushita T, Kira J, Mochizuki H, Isobe N,* Okuno T,* Okada Y. Contribution of germline and somatic mutations to risk of neuromyelitis optica spectrum disorder. *Cell Genom.*, (2025) (in press).

【症例報告】

1. Yokote A, Yamashita K, Sakoda A, Iwanaga Y, Nakamura Y, Haro K, Kanamoto Y, Matsubara N, Kira J. Zoster sine herpete affecting multiple lower cranial nerves presenting severe dysphagia in a patient with Parkinson's disease. *Internal Medicine*, (2024). doi: 10.2169/internalmedicine.4250-24.

【Editorial comment】

1. Kira J. Treating Baló's concentric sclerosis in the monoclonal antibody era. *Multiple Sclerosis Journal*, 2025.

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 吉良潤一, 張旭, 緒方英紀, 田代匠, 山下謙一郎, 芹野南美, 迫田礼子, 稲水佐江子, 岩永育貴, 柳原由記, 横手頭, 波呂敬子, 飛松省三, 磯部紀子, 中村優理, AMED AN 班. NF155 抗体と LG14 抗体が二重陽性の超高齢発症自己免疫性ノドパチー (AN) . 第 243 回日本神経学会九州地方会 (福岡) 2024/3/2
2. Harada M, Masaki K, Sekiya H, Matsuse D, Yamaguchi H, Nishimura Y, Takase EO, Tanaka E, Tanaka T, Kira Y, Dickson DW, Fujishima K, Matsuo E, Yamasaki R, Takeuchi H, Taniwaki T, Isobe N, Kira J. Differential roles of phosphorylated α -synuclein and oligomers in a novel multiple system atrophy cerebellar type model. 第 65 回日本神経病理学会総会学術研究会 (山口) 2024/5/16~18
3. 眞崎勝久, 西村由宇慈, 原田雅也, 吉良雄一, 松瀬大, 山口浩雄, 田中辰典, 山崎亮, 磯部紀子, 吉良潤一. 多系統萎縮症における GPR17 陽性ミエリン形成前オリゴデンドロサイトの増加と髄鞘脱落への関与. 第 65 回日本神経病理学会総会学術研究会 (山口) 1024/5/16~18
4. Harada M, Masaki K, Sekiya H, Matsuse D, Yamaguchi H, Nishimura Y, Takase EO, Tanaka E, Tanaka T, Kira Y, Dickson DW, Fujishima K, Matsuo E, Yamasaki R, Takeuchi H, Taniwaki T, Isobe N, Kira J. Glia-neuron transmission of alpha-synuclein oligomers in an aggressive multiple system atrophy model. 第 65 回日本神経学会学術大会 (東京) 2024/5/29 (優秀口演賞候補セッション: 基礎部門)

5. Zhang X, Kira J, Mitsuishi M, Tsuchimoto D, Maimaitijiang G, Imamura T, Sakoda A, Nakamura Y. Nodal ATP1A2/3 antibody is a new pathogenic marker for juvenile onset NMOSD/CCPD and progressive MS. 第 65 回日本神経学会学術大会 (東京) 2024/5/29 (優秀口演賞候補セッション: 臨床部門)
6. Tashiro T, Ogata H, Yamasaki R, Kira J, Isobe N, J-Caspr1 Study Group. Clinical features of anti-Caspr1 autoimmune nodopathy in Japan. 第 65 回日本神経学会学術大会 (東京) 2024/5/29 (優秀口演賞候補セッション: 臨床部門)
7. Kira J, Maimaitijiang G, Sakoda A, Watanabe M, Nagata S, Takase EO, Masaki K, Yamasaki R, Isobe N, Zhang X, Imamura T, Nakamura Y. Exosome connexin 43-truncated isoforms, 29k and 11k, respectively relate to mitigation of MS and NMO. 第 65 回日本神経学会学術大会 (東京) 2024/5/29~6/1
8. Imamura T, Kira J, Yukitake M, Mitsuishi M, Maimaitijiang G, Zhang X. New exosome microRNA markers are useful for diagnosis and disease progression of Alzheimer's disease. 第 65 回日本神経学会学術大会 (東京) 2024/5/29~6/1
9. 磯部紀子, 雪竹基弘, 齋木豊和, 戸田裕之, 吉良潤一. フィンゴリモドを服用した MS 患者における JCV に対する免疫応答の検討 (最終解析結果). 第 65 回日本神経学会学術大会 (東京) 2024/5/29~6/1
10. 小早川優子, 江千里, グザリアイ・ママティジャン, 吉良潤一, 田代匠, 山崎亮, 磯部紀子. ALS の進行速度を表す新尺度 FVC-DiP は髄液及び血清ニューロフィラメント濃度と相関する. FVC-DiP, a novel scale for progression rate of ALS, correlates with CSF and serum neurofilament. 第 65 回日本神経学会学術大会 (東京) 2024/5/29~6/1
11. Guzailiyai M, Kira J, Sakoda A, Watanabe M, Nagata S, Tasaki EO, Masaki K, Yamasaki R, Isobe N, Zhang X, Imamura T, Nakamura Y. Exosome SNORD37 is a new marker for relapse mitigation in NMO and miR133b is that for progressive MS. 第 65 回日本神経学会学術大会 (東京) 2024/5/29~6/1
12. Ogata H, Tashiro T, Yamasaki R, Fujii T, Zhang X, Kira J, Isobe N, J-CNTN1 Study Group. Characterization of nodopathy with IgG4 anti-contactin-1 antibodies through a larger cohort in Japan. 第 65 回日本神経学会学術大会 (東京) 2024/5/29~6/1
13. Ko S, Yamasaki R, Okui T, Shiraishi W, Watanabe M, Hashimoto Y, Kobayakawa Y, Kusunoki S, Kira J, Isobe N. A nationwide epidemiological survey of Facial Onset Sensory and Motor Neuronopathy (FOSMN) in Japan. 第 65 回日本神経学会学術大会 (東京) 2024/5/29~6/1
14. Takase EO, Yamasaki R, Nagata S, Watanabe M, Masaki K, Yamaguchi H, Kira J, Takeuchi H, Isobe N. Targeting astroglial connexin in chronic multiple sclerosis animal model therapy. NEURO2024 第 47 回日本神経科学大会 (福岡) 2024/7/24~27

15. Hayashi S, Yamasaki R, Kobayakawa Y, Kira J, Isobe N. Low parvalbumin in CSF is the first promising histopathology-related biomarker for sporadic ALS. 第 65 回日本神経学会学術大会（東京） 2024/5/29~6/1
16. 岡美希, 飛松省三, 中村優理, 石川智絵, 迫田礼子, 横手頭, 山下謙一郎, 波呂敬子, 岩永育貴, 柳原由記, 上村貴志, 原田一宏, 内尾栄一, 吉良潤一. 視覚誘発電位と光干渉断層計を用いた客観的な視神経障害の検出. 第 65 回日本神経学会学術大会（東京） 2024/5/29~6/1
17. 張旭, 横手頭, 迫田礼子, 山下謙一郎, 満石三喜男, 今村友裕, グザリアイ・ママティジャン, 緒方英紀, 磯部紀子, 中村優理, 吉良潤一. LGI4 抗体陽性 autoimmune nodopathy (AN)の臨床スペクトラムと病態機序. 第 35 回日本末梢神経学会学術集会（鹿児島） 2024/9/3（第 35 回日本末梢神経学会賞受賞）
18. 緒方英紀, 田代匠, 林田仁志, 山崎亮, 吉良潤一, 磯部紀子. Neurofascin 155 抗体陽性自己免疫性ノドパチーとの比較に基づく contactin 1 抗体陽性症例の臨床的特徴. 第 35 回日本末梢神経学会学術集会（鹿児島） 2024/9/3~4
19. 岩永育貴, 迫田礼子, 柳原由記, 横手頭, 山下謙一郎, 波呂敬子, 中村優理, 飛松省三, 吉良潤一. 三叉神経髄内根と顔面神経髄外根の同時再発を認めた CCPD の一例. 第 245 回日本神経学会九州地方会（熊本） 2024/9/28
20. グザリアイ・ママティジャン, 吉良潤一, 中村優理, 渡邊充, 迫田礼子, 高瀬オズデミール・エズギ, 永田諭, 眞崎勝久, 山崎亮, 張旭, 磯部紀子, 今村友裕. 二次進行型多発性硬化症では exosome GJA-29k が著増し伝達する防御的 microRNA の減少により障害増悪に寄与する. 第 36 回日本神経免疫学会学術集会（富山） 2024/10/3（学会賞受賞候補セッション）
21. 張旭, 吉良潤一, 満石三喜男, ママティジャン・グザリアイ, 今村友裕, 迫田礼子, 中村優理. ATP1A2/3 ノド抗体は seronegative NMOSD/中枢末梢連合脱髄症(CCPD)/進行型 MS の新規バイオマーカーである. 第 36 回日本神経免疫学会学術集会（富山） 2024/10/3（学会賞受賞候補セッション）
22. Takase EO, Yamasaki R, Nagata S, Watanabe M, Masaki K, Yamaguchi H, Kira J, Takeuchi H, Isobe N. Inhibiting astroglial connexin mitigates restores synaptic loss in animal model of chronic multiple sclerosis. 第 36 回日本神経免疫学会学術集会（富山） 2024/10/3
23. 原田雅也, 竹内創, 水谷佳祐, 松吉彩乃, 小倉海斗, 宋偲琦, 高瀬オズデミール・エズギ, 清田恵美, 吉良雄一, 岩尾和紀, 篠田紘司, 渡邊充, 眞崎勝久, 山崎亮, 吉良潤一, 磯部紀子, Japan Multiple Sclerosis Genetics Consortium (JMSGC). X 染色体上 SNP と HLA の多発性硬化症の発症リスクや重症度への関連の性差. 第 36 回日本神経免疫学会学術集会（富山） 2024/10/3~4

24. 吉良潤一, ママティジャン・グザリアイ, 中村優理, 渡邊充, 迫田礼子, 高瀬オズデミール・エズギ, 永田諭, 眞崎勝久, 山崎亮, 張旭, 磯部紀子, 今村友裕. 視神経脊髄炎再発時には血液 exosome GJA1-11k の低下と SNORD35/95/97 の上昇が起こり障害軽減に関連する. 第 36 回日本神経免疫学会学術集会 (富山) 2024/10/4
25. 林信太郎, 山崎亮, 小早川優子, 吉良潤一, 磯部紀子. ミクログリア・マクロファージの特異な脊髄内分布に着目した筋萎縮性側索硬化症診断マーカーの創出. 第 36 回日本神経免疫学会学術集会 (富山) 2024/10/4
26. 磯部紀子, 清水優子, 杉本太路, 水野将行, 岡田和将, 笹ヶ迫直一, 佐藤弥生, 神田三智弘, 吉良潤一, MSERJ study group. 日本人多発性硬化症患者における疫学調査 (MSERJ study) ~日本人集団解析結果 第二回報告. 第 42 回日本神経治療学会学術集会 (千葉) 2024/11/7~9
27. 横手顕, 迫田礼子, 柳原由記, 岩永育貴, 中村優理, 山下謙一郎, 波呂敬子, 飛松省三, 吉良潤一. 臨床症状に遅れて特徴的な画像所見を認めた孤発性クロイツフェルト・ヤコブ病の 1 例. 第 246 回日本神経学会九州地方会 (長崎) 2024/12/14

【国際学会】

1. Donofrio PD, Stascheit F, Gorson K, Hofman E, Karam C, Kira J, Kostera-Pruszczyk A, Léger J, Nobile-Orazio E, Attarian S, Markov M, Tse A, Lowe M, Lewis RA. Diagnostic Adjudication of Chronic Inflammatory Demyelinating Polyneuropathy in the ADHERE Trial: Updates on the First 200 Cases. The 41st Annual Meeting of the German Society for Neuro-Intensive and Emergency Medicine (DGNI) and German Stroke Society (DSG) (ANIM 2024) (Kassel, Germany) 2024/2/1~3
2. Donofrio P, Rath J, Gorson K, Hofman E, Karam C, Kira J, Kostera-Pruszczyk A, Léger J, Nobile-Orazio E, Attarian S, Markov M, Tse A, Lowe M, Lewis R. Diagnostic Adjudication of Chronic Inflammatory Demyelinating Polyneuropathy in the ADHERE trial: Updates on the First 200 Cases. 21st annual meeting of the Austrian Society for Neurology (Vienna, Austria) 2024/3/13~15
3. Tashiro T, Ogata H, Fukami Y, Koga M, Deguchi K, Hamada Y, Ito Y, Kanai M, Katsumoto A, Kurokawa T, Machida A, Mihara M, Miyaue N, Naba I, Nakae Y, Nakamura A, Nishimura H, Okamoto T, Satake R, Shibuya M, Shimoda M, Shimohata T, Takeda Y, Taneda K, Tezuka T, Togo M, Uehara T, Yamaguchi K, Yoshikura N, Yamasaki R, Kira J, Koike H, Katsuno M, Isobe N. Clinical Features of Anti-Contactin-Associated Protein 1 Autoimmune Neuropathy in Japan. PNS2024 (Peripheral Nerve Society annual meeting) (Montreal, Canada) 2024/6/22~25
4. Isobe N, Nishida Y, Shimizu F, Miyazaki Y, Fukami Y, Suzuki C, Nakashima I, Kawachi I, Tajiri R, Kanda M, Sato Y, Kira J, MSERJ Study Group. Real-World Evidence on the

Status of Diagnosis, Treatment and Disease Characteristics in Japanese Patients with Multiple Sclerosis (3rd report of MSERJ) (Bangkok, Thailand) 2024/10/30~11/2

5. Kobayakawa Y, Ko S, Maimaitijiang G, Kira J, Tashiro T, Kishimoto J, Yamasaki R, Isobe N. Neurofilament light chain levels in serum and cerebrospinal fluid correlate with Forced Vital Capacity Decline Pattern scale (FVC-DiP) in ALS patients. 35th International Symposium on ALS/MND (Montreal, Canada) 2024/12/6~8
6. Hayashi S, Yamasaki R, Kobayakawa Y, Kira J, Isobe N. Parvalbumin and calbindin in the CSF are the promising histopathology-associated biomarkers for sporadic ALS. 35th International Symposium on ALS/MND (Montreal, Canada) 2024/12/6~8

【その他】

1. 吉良潤一, 張旭, 満石三喜男, 藤井敬之, グザリアイ・ママティジャン, 今村友裕, 迫田礼子, 柳原由記, 岩永育貴, 山下謙一郎, 横手頭, 波呂敬子, 小早川優子, 磯部紀子, 岡孝和, 桑原聡, 中村優理. 第3回アトピー性脊髄炎全国臨床疫学調査と自己免疫性神経障害性疼痛レジストリ構築. 「神経免疫疾患領域における難病の医療水準と患者のQOL向上に資する研究」(神経免疫班)合同班会議(東京) 2024/1/11~12
2. 吉良潤一, 張旭, 緒方英紀, 満石三喜男, グザリアイ・ママティジャン, 今村友裕, 横手頭, 迫田礼子, 柳原由記, 岩永育貴, 山下謙一郎, 波呂敬子, 三嶋崇靖, 坪井義夫, 佐藤亮太, 神田隆, 小林正樹, 北川一夫, 波平幸裕, 大屋祐輔, 磯部紀子, 海田賢一, 桑原聡, 中村優理. 病態モデルに基づいた抗LGI4抗体の作用機序の解明と自己免疫性ノドパチー診断アルゴリズム. 「神経免疫疾患領域における難病の医療水準と患者のQOL向上に資する研究」(神経免疫班)合同班会議(東京) 2024/1/11~12
3. 緒方英紀, 磯部紀子, 張旭, 中村優理, 海田賢一, 桑原聡, 吉良潤一. NF155抗体のエピトープ解析及び自己免疫性ノドパチーレジストリの現状報告. 「神経免疫疾患領域における難病の医療水準と患者のQOL向上に資する研究」(神経免疫班)合同班会議(東京) 2024/1/11~12
4. 吉良潤一, 張旭, 満石三喜男, グザリアイ・ママティジャン, 今村友裕, 横手頭, 迫田礼子, 柳原由記, 岩永育貴, 山下謙一郎, 波呂敬子, 緒方英紀, 田代匠, 磯部紀子, 佐藤亮太, 神田隆, 小池春樹, 三嶋崇靖, 坪井義夫, 小林正樹, 北川一夫, 波平幸裕, 大屋祐輔, 海田賢一, 桑原聡, 土本 大介, 中村優理. 自己免疫性ノドパチー調査研究班の包括報告並びに抗LGI4抗体陽性自己免疫性ノドパチーの臨床像と作用機序. 「神経免疫疾患領域における難病の医療水準と患者のQOL向上に資する研究」(神経免疫班)合同班会議(東京) 2025/1/9~10
5. 吉良潤一. 開会の挨拶. 市民公開講座「多発性硬化症を知ろう」(福岡) 2024/11/10
6. 吉良潤一. Opening Remarks に代えて: MSの地域医療体制と治療薬の動向について. ケシンプタ発売3周年記念講演会 in Fukuoka. 2024/11/24

7. 吉良潤一, 張旭, 満石三喜男, ママティジャン・グザリアイ, 今村友裕, 迫田礼子, 中村優理. 中枢神経脱髄疾患における新規ノド抗体の同定と抗体産生のリスク因子. 「神経免疫疾患領域における難病の医療水準と患者の QOL 向上に資する研究」(神経免疫班) 合同班会議(東京) 2025/1/9~10
8. 吉良潤一, 張旭, 満石三喜男, ママティジャン・グザリアイ, 今村友裕, 迫田礼子, 中村優理. 新規中枢神経ノド抗体陽性脱髄疾患の臨床像. 「神経免疫疾患領域における難病の医療水準と患者の QOL 向上に資する研究」(神経免疫班) 合同班会議(東京) 2025/1/9~10
9. 吉良潤一, 張旭, 藤井敬之, 満石三喜男, 迫田礼子, 吉富小都, 牛島美保, ママティジャン・グザリアイ, 今村友裕, 桑原聡, 磯部紀子, 中村優理. アトピー性脊髄炎・抗 Plexin D1 抗体陽性神経障害性疼痛の全国臨床疫学調査結果第 1 報と神経障害性疼痛に関連した新規抗神経抗体の探索. 「神経免疫疾患領域における難病の医療水準と患者の QOL 向上に資する研究」(神経免疫班) 合同班会議(東京) 2025/1/9~10

依頼講演・招待講演 他

1. 吉良潤一. 視神経脊髄炎関連疾患の新しいバイオマーカー. 奈良神経疾患治療を考える会 2024 (奈良) 2024/4/19
2. 吉良潤一. 多発性硬化症の診療と研究をめぐる連携. ノバルティスファーマ社員向け研修会(ウェブ講演会) 2024/6/25
3. Kira J. Novel blood exosome markers in secondary progressive multiple sclerosis (SPMS) & neuromyelitis optica spectrum disorder (NMOSD) at relapse. Huaxia Conference, Department of Neurology, Xuanwu Hospital, Capital Medical University (Beijing, China) 2024/8/31
4. Kira J. Novel pathogenic nodal autoantibodies in PNS & CNS demyelinating diseases and their genetic backgrounds. Huaxia Conference, Department of Neurology, Xuanwu Hospital, Capital Medical University (Beijing, China) 2024/8/31
5. Kira J. Novel blood exosome markers in secondary progressive multiple sclerosis (SPMS) & neuromyelitis optica spectrum disorder (NMOSD) at relapse. International Conference at Department of Neurology, Third Affiliated Hospital of Sun Yat-Sen University (Guangzhou, China) 2024/9/2
6. Kira J. The latest Japanese nationwide survey results of MS/NMOSD and the Japanese MSBase study showing the most frequent usage of dimethyl fumarate (DMF) in RRMS. International Conference at Department of Neurology, Third Affiliated Hospital of Sun Yat-Sen University (Guangzhou, China) 2024/9/2
7. Kira J. Clinical Presentations and Treatment of IgG4 Paranodopathies. 18th International Congress on Neuromuscular Diseases. (Perth, Australia) 2024/10/28

受賞

1. 第 35 回日本末梢神経学会賞共同受賞.

張旭, 横手顕, 迫田礼子, 山下謙一郎, 満石三喜男, 今村友裕, グザリアイ・ママティジャン, 緒方英紀, 磯部紀子, 中村優理, 吉良潤一. **LGI4 抗体陽性 autoimmune nodopathy (AN)の臨床スペクトラムと病態機序**. 第 35 回日本末梢神経学会学術集会 (鹿児島) 2024/9/3

特許

1. 慢性炎症性脱髄性多発神経炎の診断方法、キット及びバイオマーカー

発明者 : 吉良潤一, 河村信利, 山崎亮, 松瀬大, 緒方英紀
出願人名 : 国立大学法人九州大学
出願国 : 米国
出願番号 : 15/544756
出願日 : 2016/1/20
登録番号 : US10509033
登録日 : 2019/12/17

2. 神経障害性疼痛マーカー及びその使用

発明者 : 吉良潤一, 藤井敬之, 山崎亮, 飯沼今日子, 土本大介, 中別府雄作
出願人名 : 国立大学法人九州大学
出願国 : 日本
出願番号 : 特願 2019-512547
出願日 : 2018/4/11

3. アルツハイマー病の尿と血清を用いた診断法とバイオマーカー及び測定キット

発明者 : 吉良潤一, 今村友裕
出願人名 : 国際医療福祉大学
出願国 : 米国
仮出願番号 : 63/469,446
出願日 : 2023/05/29

4. バイオマーカー、診断用キットおよび診断を補助する方法 (急性及び慢性の炎症性脱髄性末梢神経疾患の特異的な診断に使用することのできるバイオマーカー、診断用キットおよびそれらを用いた診断を補助する方法に関するものである)

発明者 : 吉良潤一, 張旭
出願人名 : 国際医療福祉大学
出願国 : 日本
出願番号 : 特願

出願日 : 2023/8/1

所属学会

1. 日本内科学会（功労会員、元理事、元九州支部代表）
2. 日本神経学会（名誉会員、元理事、第 55 回大会長）
3. 日本神経免疫学会（名誉会員、前理事、元理事長、第 17 回大会長）
4. 日本末梢神経学会（名誉会員、前理事、第 23 回大会長）
5. 日本脳卒中学会（名誉会員、元理事）
6. 日本自律神経学会（理事）
7. 日本難病医療ネットワーク学会（名誉会員、前理事長、前理事）
8. 日本神経治療学会（功労会員）
9. 日本神経化学会（功労会員）
10. American Neurological Association (Corresponding Member)

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本神経学会：代議員選挙管理委員会委員長，神経免疫セクションチーフ
2. 日本神経免疫学会：国際対応委員会委員，あり方委員会委員，MS/NMSD 委員会委員
3. International Society of Neuroimmunology, Asia-Pacific School of Neuroimmunology, Moderator
4. Multiple Sclerosis and Related Disorders (Editorial Board Member, Section Editor for Clinical Neurology)
5. Journal of The Neurological Sciences (Editorial Board Member)
6. Multiple Sclerosis Journal (Editorial Board Member)
7. BMC Medicine (Editorial Advisor for Neurology)

研究費獲得状況

1. 基盤研究 B, 新規発見ノド抗体による自己免疫性ノドパチーの中枢及び末梢神経脱髄機序の解明と治療, 2022 年～2024 年度, 研究代表者
2. 挑戦的研究（萌芽）, 新規同定病原性ミクログリアを標的とした変性と脱髄共通のグリア炎症病態の解明と治療, 2023 年～2024 年度, 研究代表者
3. 難治性疾患実用化研究事業（日本医療研究開発機構）, 抗 plexin D1 抗体及び新規発見抗 neuropil 抗体陽性アトピー性脊髄炎・自己免疫性神経障害性疼痛の新診療ガイドライン作成のためのエビデンスとレジストリ構築, 2023 年～2025 年度, 研究代表者
4. 基盤研究 C, 単一細胞 RNA 解析による多系統萎縮症増悪性ミクログリア亜群の同定と同細胞標的療法, 2022 年～2024 年度, 研究分担者
5. 基盤研究 C, 中枢神経炎症性疾患の治療を遺伝・免疫・血清学的指標を用いて最適化する方法の確立, 2022 年～2024 年度, 研究分担者

6. 基盤研究 C, ヘミチャネル阻害薬を用いた α シヌクレイン伝播阻止による多系統萎縮症の治療法開発, 2023 年~2025 年度, 研究分担者
7. 基盤研究 C, 毒性ターゲ A β 42 含有エキソソームによるアルツハイマー病早期診断と病態伝搬の解明, 2022 年~2024 年度, 研究分担者
8. 基盤研究 C, コネキシン 43 結合性マイクロ RNA を介する多発性硬化症重症化機構の解明と治療開発, 2024 年~2026 年度, 研究分担者
9. 基盤研究 C, ヘミチャネル阻害薬を用いた α シヌクレイン伝播阻止による多系統萎縮症の治療法開発, 2024 年~2026 年度, 研究分担者
10. 住友ファーマ株式会社共同研究, 認知症を対象とした新血液中バイオマーカーの関連分析及び臨床評価に関する研究, 2021 年~2024 年度, 吉良潤一 (国際医療福祉大学研究担当者)
11. 住友ファーマ株式会社共同研究, シヌクレイオパチーを中心とした神経変性疾患の発症・進展メカニズムの解明と創薬への応用, 2021 年~2024 年度, 吉良潤一 (国際医療福祉大学研究担当者)

氏名（役職）

西村信弘（教授）

研究概要

薬剤耐性菌対策のための抗菌薬適正使用に関する研究（島根大学医学部感染症グループとの共同研究）

耐性グラム陰性桿菌の遺伝子型と抗菌薬使用量の関連性について検討を行っている。耐性グラム陰性桿菌の遺伝子型および POT 型について経年変化を調査し、薬剤耐性率との関連を明らかにした。今後は、抗菌薬耐性対策のための抗菌薬適正使用シナリオの作成と耐性グラム陰性桿菌の伝播・蔓延を封じ込めるための感染制御アルゴリズムの構築を目指している。

薬物の体内動態および相互作用に関する研究

前立腺癌の治療薬について、グループ病院において投与中の患者を対象に、疫学調査を行い、治療効果あるいは副作用発現に関連する影響因子の同定を行っている（IUHW 高邦会グループ倫理審査承認済み）。さらに、患者血液中の抗がん薬濃度および代謝物濃度を測定し、薬物相互作用を起こしうる薬剤の併用が抗がん薬の体内動態や治療効果や副作用等への影響を解析し、抗がん薬治療の患者個別最適化を目指している。

著書

1. 西村信弘, 薬剤耐性 (AMR)の重要性と抗菌薬適正使用支援, 感染症学, 南山堂, pp406-41(2025). 分担著者
2. 西村信弘, 感染制御の院内体制と取り組み, 感染症薬学のひきだし: 疾患・治療・制御の基本から応用まで, 医学書院, pp396-403 (2025). 分担著者

原著論文・総説

【総説】

1. 西村信弘. 【薬剤耐性(AMR)対策アクションプランと病院での抗菌薬使用の実際】アクションプラン(2016-2020)の病院における総括. 日本病院薬剤師会雑誌. 60(5), 468-469 (2024).

雑誌記事・その他

1. 西村信弘. 新規発症糖尿病および血糖値悪化の診断に対するスタチン治療の影響: 個々の参加者データのメタ解析. 福岡県薬剤師会会誌, 37(4), 442-447 (2024)

2. 西村信弘. 再発予防のためにコルヒチンの有無にかかわらず尿酸降下療法を開始した痛風患者の心血管イベント：プライマリケア、入院、死亡率の関連. *福岡県薬剤師会会誌*, 38(2), 156-160 (2025)

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 香月知真, 石橋尚子, 福川由伎, 山田阿須美, 深町武児, 古川佳子, 西村信弘, 福島範子. C型肝炎ウイルス陽性者に対するフォローアップシステムの構築: 薬剤師肝炎コーディネーターと肝臓専門医による取り組み. 第60回日本肝臓学会総会(熊本市) 2024/6/24
2. 大仁田哲修, 石原慎之, 池淵明美伽, 矢野貴久, 西村信弘, 玉木宏樹, 猪川和朗, 森川則文, 直良浩司. Pharmacokinetic/toxicodynamic シミュレーションに基づくリネゾリドによる血小板減少症の定量的リスク評価. 第51回日本毒性学会学術年会(福岡) 2024/7/24
3. 香月知真, 藤丸心夢, 川下こなみ, 松本奈々彩, 福田光良, 宗像千恵, 江島和久, 西村信弘. 高齢前立腺癌患者におけるエンザルタミドの臨床効果および安全性に関連する因子の検討. 日本薬学会第145年会(福岡) 2025/3/27

依頼講演・招待講演 他

【依頼講演】

1. 薬剤耐性菌対策とワンヘルスアプローチ. 大川三瀬薬剤師会研修会(三瀬) 2024/7/17
2. 薬剤耐性菌対策とワンヘルスアプローチ. 柳川山門薬剤師会研修(三瀬) 2024/6/18
3. 新薬が誕生して患者さんに届くまで. 福岡県医師会 県民健康づくりセミナー(福岡市) 2024/9/25
4. 感染症のおはなし~なぜに抗菌薬は効くの?~. 第71回くすりのセミナー福岡(福岡) 2025/2/16

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本医療薬学会
3. 日本薬物動態学会
4. 日本臨床薬理学会
5. 日本緩和医療薬学会
6. 日本TDM学会
7. 日本化学療法学会
8. 日本環境感染学会

9. 日本感染症学会
10. 日本老年薬学会
11. 日本医療・病院管理学会
12. 九州山口薬学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 一般社団法人日本医療薬学会 代議員
2. 一般社団法人日本医療薬学会「医療薬学専門薬剤師研修小委員会」委員
3. 一般社団法人日本医療薬学会「医療薬学」編集委員
4. 一般社団法人日本 TDM 学会「TDM 研究」編集委員
5. 公益社団法人日本化学療法学会 評議員
6. 一般社団法人日本環境感染学会 評議員
7. 九州山口薬学会 理事
8. 病院・薬局実務実習九州・山口地区調整機構 運営委員
9. 一般社団法人日本病院薬剤師会 代議員
10. 一般社団法人福岡県病院薬剤師会 副会長
11. 福岡県病院薬剤師会・筑後支部 会長
12. 公益社団法人福岡県薬剤師会 常務理事
13. 大川三潯薬剤師会 理事
14. 福岡県保健医療介護部薬務課 福岡県薬物乱用防止講習会講師団 講師
15. 薬剤師のための九州山口感染対策セミナー 世話人

研究費獲得状況

1. 基盤研究 B（一般研究・繰越），多剤耐性菌の発生・伝播を防止するための感染制御・抗菌薬適正使用アルゴリズムの構築, 2021～2024 年度, 研究代表者
2. 基盤研究 C, 簡易型耐性菌スクリーニングシステムの開発およびその臨床応用, 2024～2026 年度, 研究代表者

氏名（役職）

平木洋一（教授）

研究概要

医薬品は、リスクとベネフィットを適切に理解し、適正に使用されることで、その価値を最大限に発揮する。しかし、医薬品の副作用に関しては、添付文書に記載された臨床試験における副作用およびその発生頻度のみでは、市販後における多様な年齢層、併用薬、合併症を考慮した情報として不十分である。市販後に新たに報告される副作用の多くは、投与された患者の総数が不明であることから、「頻度不明」として記載されることが一般的である。しかし、市販後の副作用発現状況を解析することで、使用成績調査などを待たずに、より詳細な副作用情報を得ることが可能となる。特に、日本の医薬品副作用データベース（Japanese Adverse Drug Event Report, JADER）の膨大な自発報告データを解析することにより、臨床試験での副作用情報を補完し、医薬品の安全性向上に寄与することが期待される。近年、ヨーロッパおよびアジア諸国における医薬品監視

（pharmacovigilance）研究において、Dipeptidyl Peptidase-4（DPP-4）阻害薬と水疱性類天疱瘡および急性膵炎との関連が報告されている。しかし、日本におけるこれらの関連性については十分に検討されていない。そこで、本研究では JADER のデータを用いて、水疱性類天疱瘡と DPP-4 阻害薬の関連性を解析することを目的とする。

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 川野智美, 小野寺慶太, 塚田寛子, 堀南奈子, 平山愛理, 森島恵理佳, 黒川真佑花, 関 瞭, 下村真代, 小山田純治, 平木洋一. 糖尿病非合併 CKD 患者に対するエンパグリフロジンの尿蛋白の有無における貧血改善効果の検討. 第 34 回日本医療薬学会年会（千葉）2024/11/3

所属学会

1. 日本化学療法学会
2. 日本医療薬学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本医療薬学会代議員

氏名（役職）

村田祐造（教授）

研究概要

下垂体後葉ホルモンによる血糖変化のメカニズムの解明

下垂体後葉ホルモンのオキシトシンによる、糖負荷後の血糖値変化に関する検討を行っている。今年度は、オキシトシン投与により、臍島からホルモンが分泌されることが明らかとなった。これより、オキシトシンによる血糖調節の可能性が期待される。

Rat 胚子心臓における α -SMA の局在とその消長に関する研究

Rat 胚子心臓において、平滑筋のマーカである α -SMA の局在について、免疫組織化学的に検討を行っている。今年度は、受精後 10.5、11.5 日（E10.5, E11.5）において α -SMA が心室に局在しており、心筋細胞未分化の状態でも、血液循環が行われていると考えられる。これより、心臓の発生に関して更なる知見が得られることが期待されている。

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

- 1 柴田健太郎, 坂梨史典, 齊藤秀俊, 村田祐造. Rat 胚子の心筋収縮開始前における血液循環に関する検討： α -SMA 免疫組織学的解析. 第 14 回国際医療福祉大学学会学術大会（成田）2024/9/16

所属学会

1. 日本解剖学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本解剖学会九州支部代議員

研究費獲得状況

1. 国際医療福祉大学学内研究費（一般研究 B），全胚培養した rat 胚を用いて心膜と心臓大血管流入路、流出路の発生機序を追究する, 2024 年度, 研究分担者

氏名（役職）

山口政俊（特任教授）

研究概要

1. セロトニンやカテコールアミン関連物質の高感度・高選択的分析法の開発とその薬理・臨床研究への展開に関する研究を行っている。本研究は、神経疾患の科学的診断法の確立や治療薬の基礎的研究・開発に貢献できる。
2. 医薬品の化学的構造をピンポイントに光学（蛍光、化学発光、燐光）発光標識し、対応する光学検出器で定性・定量する超高感度検出法を開発し、さらに高速液体クロマトグラフィーやキャピラリー電気泳動などの分離手法と連結することに基づく高選択的分析法の開発を行っている。本研究は、医薬品の新規開発及びその適正使用に関する研究に役立つ。
3. 我々が新規に開発したエキシマー蛍光誘導体化に基づく生体ジカルボン酸類の超高感度・選択的定量法を開発する。この開発は、先天性脂肪酸代謝異常症の診断法の開発に貢献できる。

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本分析化学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 薬学教育評価機構 総合評価評議員
2. 化学物質評価研究機構 理事
3. 日本分析化学会 九州支部幹事
4. 日本薬学会 九州山口支部幹事

氏名（役職）

一木裕子（准教授）

研究概要

医療用ビッグデータを活用した臨床薬学によるデータサイエンスに関する研究

医療用ビッグデータを用いたデータサイエンスの探究に関する検討を行っている。今年度は、様々な医薬品の副作用に関する検討を行った。今後は更に研究を重ね、医薬品との相互作用による副作用について展開する予定である。

インターロック分子の触媒的不斉構築

不斉合成研究は大きく進歩し、我が国は世界を先導している。インターロック分子はその特異な構造から、分子マシンやデバイスへの応用が期待され、盛んに研究が行われている。一方で、これほど構造的な特徴を持つ分子にもかかわらず、創薬に向けた利用はほとんど行われていない。このような状況を鑑み、ロタキサン及びカテナンの不斉合成法を研究開発し発展させる予定である。

糖尿病外来における病院薬剤師による服薬指導の血糖コントロールに対する効果に関する研究

糖尿病外来において医師の診察前に病院薬剤師がチェックシートを用いた服薬指導を行い、病院薬剤師の薬学的管理が糖尿病治療に有効であることが明らかとなった。

著書

1. 21世紀の疾患:神経関連アミロイドーシス, 医学と看護社, (2020), 分担著者

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 一木裕子, 川尻雄大, 峯圭佑, 森皓平, 小林大介, 島添隆雄, 西村信弘. 新型コロナウイルスワクチンと他のワクチンとの副反応の比較: FDA 有害事象報告システム (FAERS) と日本の有害事象報告データベース (JADER) の解析. 日本薬学会第 144 年会 (横浜) 2024/3/28-31
2. 一木裕子, 有害事象ベースによるコロナとインフルエンザワクチン脳血管イベントの比較調査. 第 14 回国際医療福祉大学学会, 2024/9/16

依頼講演・招待講演 他

【特別講演】

1. 一木裕子. 糖尿病～糖尿病治療薬の適正使用について～. 佐賀薬剤師会 生涯学習講演会, 2023/5/20
2. 一木裕子. 薬剤師のキャリアアップを目指して. 九州大学薬学部キャリア支援講演, 2024/1/10

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本医療薬学会
3. 日本生薬学会
4. 日本くすりと糖尿病学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 福岡県糖尿病療養指導士 北九州 CDE の会監事
2. 福岡県薬剤師会学術倫理審査会委員

研究費獲得状況

1. 国際医療福祉大学学内研究費（一般研究 A）, GLP-1 受容体作動薬における副作用の探究による適正使用, 2024 年度, 研究代表者
2. 基盤研究 B, インターロック分子の触媒的不斉構築, 2024 年度, 研究分担者

氏名（役職）

窪田香織（准教授）

研究概要

漢方薬・生薬のミトコンドリア機能改善を介したフレイル治療への適応に関する研究（福岡大学薬学部 臨床疾患薬理学教室との共同研究）

加齢とともに運動機能や認知機能等が低下したフレイルには適切な西洋医学的治療薬はないが、多くの漢方薬が処方されている。しかし詳細な作用機序の解明や作用の中心を成す構成生薬や有効成分の同定など、臨床応用を拡大するにはさらに多くの知見が必要である。また、ミトコンドリア機能不全が、フレイルや多くの精神神経疾患に関与することから、ミトコンドリア機能障害によるフレイルモデル細胞を作製し、フレイルや精神神経疾患への漢方薬の有効性を検討している。今年度は、ミトコンドリアストレス応答レポーター遺伝子を導入した培養細胞系を構築した。今後は本モデル細胞を用いてフレイルに有効性を示す漢方薬・生薬の探索ならびにその機序解明を継続する。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Nagamatsu T, Kubota K, Watanabe T, Katsurabayashi S, Iwasaki K. Kamikihito reduces β -amyloid25-35-induced axon damage via neurotrophic factors. *J. Nat. Med.*, 78(1), 246-254 (2024). doi: 10.1007/s11418-023-01761-3.
2. Kitaoka O, Oyabu K, Kubota K, Watanabe T, Kondo S, Matsui T, Katsurabayashi S, Iwasaki K. Location analysis of presynaptically active and silent synapses in single-cultured hippocampal neurons. *Front. Neural. Circuits.*, 18, 1358570 (2024). doi: 10.3389/fncir.2024.1358570.
3. Kubota K, Katsurabayashi S, Watanabe T, Iwasaki K, Nagamatsu T, Akaike N. 5-Deazaflavin (TND1128) and its hybrid analogs are cytoprotective against hydrogen peroxide (H_2O_2)-induced oxidative stress. *bioRxiv.* (2024). doi: <https://doi.org/10.1101/2024.05.07.592882>. 査読なし
4. Hatae A, Watanabe T, Taniguchi C, Kubota K, Katsurabayashi S, Iwasaki K. Ninjinyoeito ameliorates anorexia and changes in peptide YY and ghrelin levels of cisplatin-treated mice. *Neuropeptides*, 107, 102464 (2024). doi: 10.1016/j.npep.2024.102464.

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 波多江旺信, 渡辺拓也, 谷口知世, 窪田香織, 桂林秀太郎, 岩崎克典. 抗悪性腫瘍薬シスプラチンによる十二指腸の時計遺伝子振幅変化を人参養栄湯は軽減する. 第41回和漢医薬学会学術大会(千葉、千葉大学亥鼻キャンパス) 2024/8/24
2. 永松拓海, 窪田香織, 篠倉菜緒, 松尾京香, 仮屋崎光梨, 渡辺拓也, 桂林秀太郎, 岩崎克典. 酸化ストレス防御機構 Keap1-Nrf2 経路に対する人参養栄湯および加味帰脾湯の効果. 第41回和漢医薬学会学術大会(千葉、千葉大学亥鼻キャンパス) 2024/8/24
3. 北岡音哉, 高岡優, 大藪康平, 渡辺拓也, 窪田香織, 右田啓介, 桂林秀太郎, 岩崎克典. 単一海馬ニューロン培養標本における静かなるシナプスの発達変化と投射部位の位置解析. 第77回日本薬理学会西南部会(福岡、福岡市美術館) 2024/11/16
4. 齊藤秀俊, 窪田香織, 柴田健太郎, 武田弘志. ミクログリア細胞株のインターフェロン応答における電位依存性カルシウムチャネルの関与. APPW2025 第130回日本解剖学会/第102回日本生理学会/第98回日本薬理学会合同大会(千葉、幕張メッセ) 2025/3/19
5. 永松拓海, 窪田香織, 仮屋崎光梨, 石田恵理奈, 渡辺拓也, 藤川理沙子, 桂林秀太郎, 岩崎克典. ミトコンドリア機能障害に対する人参養栄湯および加味帰脾湯の効果. APPW2025 第130回日本解剖学会/第102回日本生理学会/第98回日本薬理学会合同大会(千葉、幕張メッセ) 2025/3/19

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本薬理学会
3. 和漢医薬学会
4. 日本分子生物学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 一般社団法人和漢医薬学会 代議員
2. 一般社団法人和漢医薬学会 編集委員

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, ミトコンドリア障害神経モデルの構築およびフレイルに対する漢方薬の網羅的解析, 2023~2025 年度, 研究代表者
2. 国際医療福祉大学学内研究費, 漢方薬・生薬のミトコンドリア機能改善を介したフレイル治療への適応に関する基礎研究, 2024 年度, 研究代表者

氏名（役職）

齊藤秀俊（准教授）

研究概要

行動変容を引き起こすグリア機能の解明に関する研究（九州大学薬学部 薬理学分野グループとの共同研究）

脊髄後角抑制性介在神経の特定集団（NpyP 陽性・DynP 神経）の感覚伝達における役割の解析を行っている。今年度は、DynP 陽性神経の神経障害性疼痛モデル病態における役割の解析を行った。また、病態時の NpyP 陽性細胞とグリア細胞との相互作用解析を行い、NpyP 陽性細胞への興奮性/抑制性入力の変化について、組織学的なシナプスマーカーの解析を進めている。

グリア細胞活性化メカニズムの解明に関する研究（安田女子大学薬学部 薬理学分野グループとの共同研究）

インターロイキン 1 β 発現レポーター遺伝子を搭載したミクログリア細胞株を用いた、唾液抗菌ペプチドの抗炎症作用解析。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Inoue E, Minatozaki S, Shimizu S, Miyamoto S, Jo M, Ni J, Tozaki-Saitoh H, Oda K, Nonaka S, Nakanishi H. Human β -Defensin 3 Inhibition of *P. gingivalis* LPS-Induced IL-1 β Production by BV-2 Microglia through Suppression of Cathepsins B and L. *Cells*, 4, 13(3), 283 (2024).
2. Muramoto S, Shimizu S, Shirakawa S, Ikeda H, Miyamoto S, Jo M, Takemori U, Morimoto C, Wu Z, Tozaki-Saitoh H, Oda K, Inoue E, Nonaka S, Nakanishi H. Noradrenaline Synergistically Enhances *Porphyromonas gingivalis* LPS and OMV-Induced Interleukin-1 β Production in BV-2 Microglia Through Differential Mechanisms. *Int. J. Mol. Sci.*, 26, 2660 (2025).

雑誌記事・その他

【学会雑誌】

1. 薬理系薬学 Topics “GluN2A を介したケタミンの抗うつ作用メカニズム”. *ファルマシア*, 2024/9/1

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 齊藤秀俊, 八田拓弥, 津田誠. 心理社会的ストレスが慢性疼痛病態モデルに及ぼす影響. 第 40 回日本ストレス学会 (宇都宮) 2024/11
2. 白川澄香, 森本千陽, 村本桜, 齋藤秀俊, 野中さおり, 中西博. ノルアドレナリンのジンジバリス菌外膜ベシクルによるミクログリアにおける IL-1 β 産生に対する相乗作用メカニズムの解析. 第 63 回日本薬学会中四国支部学術大会 (就実大学) 2024/11
3. 村本桜, 竹森佑月, 白川澄香, 齋藤秀俊, 野中さおり, 中西博. ノルアドレナリンのジンジバリス菌リポ多糖類によるミクログリアにおける IL-1 β 産生に対する相乗作用メカニズムの解析. 第 63 回日本薬学会中四国支部学術大会 (就実大学) 2024/11
4. 池田穂乃花, 山口花, 池元睦, 齋藤秀俊, 野中さおり, 中西博. ノルアドレナリンのジンジバリス菌病原因子によるミクログリアにおける IL-1 β 産生に及ぼす作用の解析. 第 63 回日本薬学会中四国支部学術大会 (就実大学) 2024/11
5. Sawai M, Tatano Y, Tozaki-Saitoh H, Miyake K, Itoh S, Kaitsuka T, Kansui H, Miyauchi Y, Takechi S. Therapeutic efficacy analysis of dihydropyrazine in multiple organs failure by sepsis. 第 47 回分子生物学会年会 (福岡) 2024/11
6. 藤森一樹, 齊藤秀俊, 角田昂大, 栗野陽平, 勢力薫, 橋本均, 津田誠. Identification of neurons in the brain that generate and sensitize pain. 第 98 回日本薬理学会年会 (幕張) 2025/3
7. 齊藤秀俊, 窪田香織, 柴田健太郎, 武田弘志. Involvement of voltage-gated calcium channels in the interferon response of a microglial cell line. 第 98 回日本薬理学会年会 (幕張) 2025/3
8. 澤井円香, 多田納豊, 齋藤秀俊, 三宅克也, 周建融, 寒水壽朗, 宮内優, 武知進士. 糖化産物ジヒドロピラジンによる多臓器における抗炎症治療効果解析. 第 145 回日本薬学会 (福岡) 2025/3

所属学会

1. 日本薬理学会
2. 日本神経化学会
3. 日本神経科学会
4. 日本疼痛学会
5. 日本ストレス学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究(C), 脊髄ミクログリアと脳神経の相互作用をシナプスレベルで解析する, 2022~2026 年度, 研究代表者

2. 学術変革領域研究(A), グリア多様性を軸にした介入法による感覚など全身機能の変容,
2020~2024 年度, 分担研究者

氏名（役職）

多田納豊（准教授）

研究概要

MAC が産生する D-アミノ酸のマクロファージ細胞に対する作用の検討

本テーマでは、長期的に細胞内感染する抗酸菌について、マクロファージの活性化・分極化の制御における抗酸菌由来 D-アミノ酸の働きについての解明を目指している。

非結核性抗酸菌である *M. intracellulare* による産生が認められた 5 種類の D-アミノ酸について、マクロファージ細胞株（RAW264.7 細胞）に及ぼす影響を RNAseq 解析により検討したところ、IFN や IL-1 などの炎症性サイトカインや CCR2 ケモカインシグナル関連遺伝子、細胞外マトリックス制御関連遺伝子など、アミノ酸毎に様々な遺伝子の発現変動が認められた。定量的 PCR 解析ではマクロファージにおける CCR2 受容体の発現変動が認められた。

著書

1. 佐野千晶, 多田納豊. 8 章 抗酸菌の同定. 抗酸菌検査ガイド 2025, 日本結核・非結核性抗酸菌症学会 編, 南江堂, PP. 51-77 (2025).

原著論文・総説

【総説】

1. 多田納豊, 富岡治明. 抗酸菌に対するマクロファージ殺菌能を担う各種抗菌エフェクター分子 - ATP の抗菌作用との関連から -. 結核, 99(2), 79-83 (2024).
2. 富岡治明, 多田納豊. *Mycobacterium avium-intracellulare* complex の薬剤耐性メカニズム. 結核, 100(2), 55-61 (2025).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 多田納豊, 宗像達夫, 澤井円香, 八木秀樹, 佐野千晶, 富岡治明. *Mycobacterium avium* complex 由来 D-アミノ酸によるマクロファージの遺伝子発現の変化. 第 97 回日本細菌学会総会（札幌・札幌コンベンションセンター）2024/8/7
2. Sawai M, Tatano Y, Miyake K, Zhou JR, Kaitsuka T, Kansui H, Miyauchi Y, Takechi S. Dihydropyrazine application to prevent and treat sepsis: therapeutic effect in multiple organs. Forum 2024 Pharmaceutical health Sciences · Environmental Toxicology（仙台・東北大学青葉山キャンパス）2024/9/4

3. 澤井円香, 多田納豊, 三宅克也, 周建融, 貝塚拓, 寒水壽朗, 宮内優, 武知進士. 糖化産物ジヒドロピラジンの敗血症予防・治療への応用: 多臓器における治療効果. フォーラム 2024: 衛生薬学・環境トキシコロジー (仙台・東北大学青葉山キャンパス) 2024/9/5
4. 多田納豊, 宗像達夫, 澤井円香, 八木秀樹, 佐野千晶, 富岡治明. *Mycobacterium intracellulare* が産生する D アミノ酸のマクロファージの活性化および遺伝子発現への影響. 九州微生物研究フォーラム 2024 (大分・J:COM ホルトホール大分) 2024/9/13-14
5. 澤井円香, 多田納豊, 石田卓巳, 武知進士. 糖化産物ジヒドロピラジン (DHP) による生体への有害性の調査. 第 14 回国際医療福祉大学学会学術大会 (国際医療福祉大学成田キャンパス+オンライン) 2024/9/16
6. 多田納豊, 宗像達夫, 澤井円香, 八木秀樹, 佐野千晶, 富岡治明. 抗酸菌由来 D-アミノ酸によるマクロファージの炎症関連遺伝子発現の制御についての検討. 第 14 回国際医療福祉大学学会学術大会 (国際医療福祉大学成田キャンパス+オンライン) 2024/9/16
7. Sawai M, Tatano Y, Tozaki-Saitoh H, Miyake K, Zhou JR, Itoh S, Kaitsuka T, Kansui H, Miyauchi Y, Takechi S. Therapeutic efficacy analysis of dihydropyrazine in multiple organs failure by sepsis. 第 47 回日本分子生物学会年会 (福岡・福岡国際会議場、マリンメッセ福岡) 2024/11/27
8. 多田納豊, 宗像達夫, 澤井円香, 八木秀樹, 佐野千晶. *Mycobacterium avium* complex 由来 D-アミノ酸によるマクロファージの遺伝子発現変動. 日本薬学会第 145 年会 (福岡・福岡国際会議場、マリンメッセ福岡) 2025/3/27
9. 濱歩夢, 若林樹, 浅川翔太, 藤平ほのか, 多田納豊, 八木秀樹. Lysophosphatidyl serine 受容体-2 (LysoPS2) の抗体作製と機能解析. 日本薬学会第 145 年会 (福岡・福岡国際会議場、マリンメッセ福岡) 2025/3/27
10. 澤井円香, 多田納豊, 齋藤秀俊, 三宅克也, 周建融, 寒水壽朗, 宮内優, 武知進士. 糖化産物ジヒドロピラジンによる多臓器における抗炎症治療効果解析. 日本薬学会第 145 年会 (福岡・福岡国際会議場、マリンメッセ福岡) 2025/3/27
11. 今野陽菜, 多田納豊, 紺野奇重. 溶解性改善に着目したアシクロビルをリード化合物とした抗 VZV 薬の創製. 日本薬学会第 145 年会 (福岡・福岡国際会議場、マリンメッセ福岡) 2025/3/27

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本細菌学会
3. 日本感染症学会
4. 日本化学療法学会

5. 日本結核・非結核性抗酸菌症学会
6. 日本生化学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, 抗酸菌産生 D アミノ酸とマクロファージの感染防御メカニズムとの関連性についての検討, 2021～2024 年度, 研究代表者
2. 基盤研究 C, 抗酸菌産生 D アミノ酸によるマクロファージの細胞外微小環境に及ぼす影響, 2024～2026 年度, 研究代表者
3. 基盤研究 B, 多剤耐性菌の発生・伝播を防止するための感染制御・抗菌薬適正使用アルゴリズムの構築, 2021～2024 年度, 研究分担者 (研究代表者: 西村信弘)
4. 基盤研究 C, 簡易型耐性菌スクリーニングシステムの開発およびその臨床応用, 2024～2026 年度, 研究分担者 (研究代表者: 西村信弘)

氏名（役職）

塚本宏樹（准教授）

研究概要

免疫応答を調節する抗体・化合物の探索・創出による治療・創薬開発の基盤研究

免疫応答に関わる分子の機能を調節する抗体や化合物を作製・探索し、がん、アレルギー、敗血症、自己免疫疾患を始めとした免疫疾患の新規治療・創薬開発の基盤研究を進めている。今年度は、TLR4 シグナル経路における 4 つのアダプター分子 MyD88、TRIF、TIRAP、TRAM についてゲノム編集による遺伝子欠損細胞を作製し、TLR4 シグナルによる抗原取込の抑制機序を解析した。TLR4 刺激抗体が食物アレルギーの発症、増悪を抑制、予防する分子機序の一端が明らかにされ、自然免疫を標的とした新しいアレルギー治療・予防戦略や環境要因とアレルギー増加の因果関係の理解において、研究成果の貢献が期待される。

著書

1. 塚本宏樹. 8 章 ビタミン・金属. コンパス生化学改訂第 3 版, 前田正知/浅野真司 編, 南江堂, 東京, p189-215 (2025). 分担著者

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 塚本宏樹. 抗原提示細胞の抑制を介した Toll 様受容体 4 刺激抗体の食物アレルギー抑制機序解明（優秀賞）. 第 14 回国際医療福祉大学学会学術大会（成田、ハイブリッド開催）2024/9/16
2. 塚本宏樹, 大高理人. 将来構想勉強会成果報告会（3 班、大学業務のデジタルトランスフォーメーション）. 第 14 回国際医療福祉大学学会学術大会（成田、ハイブリッド開催）2024/9/16
3. 塚本宏樹, 高梨理紗子. 抗原提示細胞の貪食を抑制する Toll 様受容体（TLR）シグナル経路の解析. 日本薬学会第 145 年会（福岡）2025/3/26-29

受賞

1. 第 14 回国際医療福祉大学学会学術大会 優秀賞

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本生化学会

3. 日本免疫学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C（一般），低分子免疫チェックポイント阻害化合物による複合がん免疫療法の創薬基盤研究, 2024～2026 年度, 研究代表者
2. 学内研究費（一般研究 A 一般），抗原提示細胞の貪食を抑制する Toll 様受容体 4（TLR4）シグナル経路の解析, 2024 年度, 研究代表者

氏名（役職）

成川佑次（准教授）

研究概要

生薬・漢方薬の科学的解明に関する研究

生薬、漢方薬は、科学的に未解明な部分が多く、特に生薬の多様性に基づく問題が数多く残されている。今年度から卒業研究開始とともにいくつかのテーマで検討している。まず、オウセイ（黄精）とギョクチク（玉竹）の化学成分に関する研究、シンイ（辛夷）の基原に関する研究など漢方薬の原料となる生薬の品質に関する研究を行っている。漢方薬に関しては五苓散や黄連解毒湯の配合生薬や剤形などに注目してその品質や生物活性の違いを検討している。これらの研究は生薬や漢方薬の適正利用や科学的解明につながると考えられる。また、薬用植物園の整備を進め、各種薬用植物の栽培に関しても順次進めて行く。

天然由来物質による制御性細胞に関する研究（慶應義塾大学薬学部との共同研究）

新たな医薬品の開発を目指して新たな制御性細胞死を誘導する天然由来成分の探索に関する検討を行っている。今年度は、シソ科植物に含まれる化合物が制御性細胞死を誘導することが明らかとなった。これより、薬剤耐性を有するがん細胞に対して有効な医薬品の開発につながることを期待されている。

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本生薬学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本生薬学会代議員
2. 日本生薬学会関西支部委員

氏名（役職）

朴珍相（講師）

研究概要

医療情報データベースを基盤とする国際共同研究—医薬品安全性評価を革新する観察疫学的アプローチ—

医療情報データベースなど多様な情報源を活用し、国際共同研究として医薬品の安全性を包括的に評価している。国内外から得られた実臨床データを観察疫学的に分析することで、医薬品の適正使用の現状やその影響を可視化し、医療政策や経済的な効果を定量的に把握することを目指しているのである。

現在は、疾患レジストリなどの **Real World Data (RWD)** を用いた医薬品の有効性評価を根拠資料として位置づけるため、国内外のデータベースを活用した **Validation study** を推進している。この研究により、臨床疫学・薬剤疫学の国際比較が可能となり、将来的には世界規模で統一された基準に基づく、より精度の高い安全性評価や適正使用指針の策定が期待される。

所属学会

1. 日本医療情報学会
2. The Royal Society of Medicine, United Kingdom

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 医療材料マネジメント研究会 幹事
2. Editorial Board Member for Scientific Reports
3. Editorial Board Member for European Child & Adolescent Psychiatry
4. Editorial Board Member for European Journal for Biomedical Informatics

研究費獲得状況

1. 文部科学省科研費（若手研究），実臨床データを用いたポリファーマシー実態に関する国内外の比較研究, 2021～2024 年度, 研究代表者

氏名（役職）

宗像達夫（准教授）

研究概要

抗菌活性ペプチドの探索研究

生物には元々細菌などから身を守るための防御機能があり、その一つとして抗菌活性ペプチドがある。抗菌ペプチドは、細菌や真菌に対する強力な抗菌活性を持つため、新しい抗菌薬の開発において重要な役割を果たしている。本年度は、数種の植物の種子、果実などを用いて、抗菌ペプチドとしてのシード探索を行った。

機能性天然物に着目したサクラの成分研究

身近に存在するサクラの成分には、抗酸化、ヒアルロニダーゼ活性阻害、チロシナーゼ活性阻害などの生理活性を有する化合物が含まれている。本年度はエラスターゼ阻害活性の高い分画の精製をについて研究を行った。今後、これらの構造決定を行うことで、機能性を有する化粧品への応用などを視野に入れている。

ナトリウムチャンネルと作用薬との相互作用に関する研究（国際医療福祉大学薬学部角南教授との共同研究）

ナトリウムチャンネルとフレカイニドに代表される抗不整脈薬との相互作用について、構造に着目して解明を行っている。本年度も近年報告されているナトリウムチャンネルの結晶構造を元に、その相互作用解明を試みている。

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 多田納豊, 宗像達夫, 澤井円香, 八木秀樹, 佐野千晶, 富岡治明. *Mycobacterium avium complex* 由来 D-アミノ酸によるマクロファージの遺伝子発現の変化. 第 97 回日本細菌学会総会（札幌）2024/8/7
2. 多田納豊, 宗像達夫, 澤井円香, 八木秀樹, 佐野千晶, 富岡治明. *Mycobacterium intracellulare* が産生する D アミノ酸のマクロファージの活性化および遺伝子発現への影響. 九州微生物研究フォーラム 2024（大分）2024/9/13-14
3. 多田納豊, 宗像達夫, 澤井円香, 八木秀樹, 佐野千晶, 富岡治明. 抗酸菌由来 D-アミノ酸によるマクロファージの炎症関連遺伝子発現の制御についての検討. 第 14 回国際医療福祉大学学会学術大会（成田）2024/9/16
4. 多田納豊, 宗像達夫, 澤井円香, 八木秀樹, 佐野千晶. *Mycobacterium avium complex* 由来 D-アミノ酸によるマクロファージの遺伝子発現変動. 日本薬学会第 145 年会（福岡）2025/3/27

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本コンピュータ化学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, 抗酸菌産生 D アミノ酸によるマクロファージの細胞外微小環境に及ぼす影響, 2024~2027 年度, 研究分担者

氏名（役職）

山本緑（准教授）

研究概要

セルフケアの薬学教育に向けた取り組み

セルフケアは、疾病予防や健康寿命の延伸、さらに医療費削減対策の観点からも、セルフメディケーションと共にわが国で推進されている。セルフケアの手段として、健康食品の果たす役割は大きい。健康食品の利用は、消費者の意思決定と自己責任に委ねられるが、消費者の一番身近な医療専門職である薬剤師が介入することで、健康被害のリスク低減に寄与する可能性は高い。薬学における健康食品に係る教育の定着化を目標に、健康食品の利用状況や健康被害の現状を調査すると共に、福岡薬学部4年生を対象にした知識・意識の実態を調査した。

骨粗しょう症の一次予防に向けた次世代の踵骨骨梁面積率と生活習慣に関する検討

現在の若者は、20年前と較べて骨密度低下が示唆されていることに加え、コロナ禍の生活環境変化の経験から、今後の骨の健康状態が大いに懸念される。次世代の骨粗しょう症予防に取り組むべく、オープンキャンパスに参加した高校生を対象に、超音波（QUS）法を用いた骨量測定および骨の健康についての啓発講義を実施した。

薬物乱用問題に関する調査研究

薬物乱用問題において社会問題化しているのは、若年層における大麻乱用と市販薬の過剰摂取である。本研究では、大学生の薬物乱用に関する実態調査を行い、得られた成果を青少年への啓発・教育活動へ還元することを目的とする。昨年度に引き続き、本学の福岡薬学部1年生を対象にした調査および結果解析を行った。また、オープンキャンパスに参加した高校生を対象に、大麻についての啓発講義を実施した。

学会発表・シンポジウム

1. 山本緑. 大麻乱用についての薬学生の意識・実態調査. 第14回国際医療福祉大学学会学術大会. 2024/9/16

依頼講演・招待講演 他

1. 山本緑. 薬物乱用問題について. 八女学院高等学校, 2024/9/6

所属学会

1. 日本薬学会

2. 日本社会薬学会
3. 日本医薬品情報学会
4. 環境アセスメント学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 長崎県環境影響評価審査会委員

氏名（役職）

吉武康之（准教授）

研究概要

スチレン系ポリマーとホウ酸の複合体に関する研究

グルコサミン共役スチレンマレイン酸共重合体とホウ酸との複合体形成に関する研究で、複合体形成の反応気候解明と遷移状態の反応シミュレーションを行った。

所属学会

1. 有機合成化学協会
2. アメリカ化学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 B（一般研究），遠隔位不斉誘導に基づくインターロック分子の不斉構築，2024～2026 年度，研究分担者

氏名（役職）

今井竜也（講師）

研究概要

1. 人間の行動・思考特性から考える医療をめぐる法・制度・規範の形成

人間の持つ行動や思考の特性には、バイアス、感情、不合理・非科学的な要因という要因が付随している。それらを理解したうえで、医療をめぐる法や制度・規範というものにどのように反映させ、望ましい方向性に人や社会を導けるのかについて、行動経済学におけるナッジ理論、人間の利己的行動・利他的行動という行動科学の観点に着目しながら考察する。

2. 医療技術の社会適用と規範形成をめぐる ELSI

医療技術を確立し、社会に普及させていく過程で、どのような倫理的・法的・社会的問題(Ethical, Legal and Social Issues : ELSI)が起こり、それら問題への対処を踏まえ、我々の社会はどのような価値観を受容・許容し、医療技術利用のためのルール作りをしていけばよいのかについて、特に人の生と死に関わる医療を対象として考察している。

3. 医療技術の利用をめぐるリスクコミュニケーション／リスクマネジメントに関する研究

医療技術の利用には、必ず一定のリスクが付随する。そのリスクを利用者にどこまで／どのように伝え、利用の可否を判断する要素として適切に活用しうるだろうか。その医療の持つ社会的意味や性質なども考慮しながら、望ましいリスクコミュニケーション／リスクマネジメントのあり方を考察している。

所属学会

1. 日本法哲学会
2. 日本医事法学会
3. 日本生命倫理学会
4. 日本医学哲学・倫理学会
5. 日本保健医療社会学会
6. 科学技術社会論学会
7. 日本国際保健医療学会
8. 日本医療福祉政策学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 一般社団法人薬学教育協議会 ヒューマニティ関連教科担当教員会議 委員

2. 一般社団法人日本私立薬科大学協会 薬剤師国家試験問題検討委員会 法規・制度・倫理部会 委員

氏名（役職）

今村友裕（講師）

研究概要

アルツハイマー病における血液エクソソーム中のマイクロ RNA を利用したバイオマーカーに関する研究

私たちは、AD マウス末梢血エクソソームで候補となるマイクロ RNA を同定した。これらのマイクロ RNA を利用して、早期診断のバイオマーカーの実用化に向けて研究を行っている。今年度は、SIMOA で測定した既存の確立された A β や GFAP、NfL との関連が明らかにより、実際の臨床での応用に近づいた。

アルツハイマー病における血漿中 S38AA 断片を利用したバイオマーカーに関する研究 （住友ファーマ株式会社との共同研究）

住友ファーマ株式会社が同定した血漿中 S38AA 断片によるアルツハイマー病におけるバイオマーカーとしての有用性を前向きコホートで検証している。九州大学脳神経内科、福岡中央病院脳神経センター、高木病院脳神経内科、国立病院機構大牟田病院脳神経内科による他施設研究によって、実用化に向けて研究を進めている。

人間ドック経年受診患者における 2 型糖尿病患者発症の危険因子および予後に関する研究

高木病院予防医学センターの健診受診者のデータを用いて、2 型糖尿病を発症する群と発症しない群の健診データを解析することで、そのリスク因子の解析を行っている。今年度は、2 型糖尿病発症のリスク因子を特定することができ。論文として発表することができた。現在は発症後の経過の解析を行っている。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Maimaitijiang G, Kira J, Nakamura Y, Watanabe M, Takase EO, Nagata S, Sakoda A, Zhang X, Masaki K, Yamasaki R, Isobe N, Yamaguchi H, Imamura T. Blood Exosome Connexins and Small RNAs Related to Demyelinating Disease Activity. *Ann. Clin. Transl. Neurol.*, 2025. doi: 10.1002/acn3.52307.
2. Yamamoto T, Kishi T, Takamori A, Katagiri T, Kajiwara M, Fujimura T, Imamura T, Inage T, Hirooka Y. Catheter ablation in older patients with atrial fibrillation: clinical characteristics and outcomes, including cardiac function, in a retrospective analysis at a regional hospital center in Japan. *Int. Heart J.*, 66(1), 2024. doi: 10.1536/ihj.24-368.
3. Takagi K, Kishi T, Goto T, Yamanouchi K, Yoshikawa K, Imamura T, Nakayama S, Anzai, Akiyoshi Y, Kitajima A, Onozawa K, Takamori A, Fujimoto K. Female patients

with end-stage renal failure treated by hemodialysis had a low mortality rate and small patient number compared to male patients: 5-year follow-up study in Japan. *J. Clin. Biochem. Nutr.*, 75(3), 237-240 (2024).

4. Minami M, Imamura T, Takamori A, Minagawa H, Matsuo R, Miyakawa J, Izumi K, Ohta S, Yamanouchi K, Souta N, Yamamoto K, Tsuji S, Umemura T, Anzai K, Hirai Y, Fujimoto K, Kishi T. Characterized factors of subjects who were first time diagnosed as hyperglycemia more than 126 mg/dl during annual or biannual medical checkups: a case-control study in Japan. *J. Clin. Biochem. Nutr.*, 75(3), 217-221 (2024).

雑誌記事・その他

1. 人生 100 年時代の漢方薬～漢方薬の過去、現在、未来～. 漢方スクエア Vol.21 No.13 通巻 459 号, 2024/7/10 (WEB マガジン)

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. Zhang X, Kira J, Mitsuishi M, Tsuchimoto D, Maimaitijiang G, Imamura T, Sakoda A, Nakamura Y. Nodal ATP1A2/3 antibody is a new pathogenic marker for juvenile onset NMOSD/CCPD and progressive MS. 第 65 回日本神経学会学術大会 (東京) 2024/5/29 (優秀口演賞候補セッション: 臨床部門)
2. Kira J, Maimaitijiang G, Sakoda A, Watanabe M, Nagata S, Takase EO, Masaki K, Yamasaki R, Isobe N, Zhang X, Imamura T, Nakamura Y. Exosome connexin 43-truncated isoforms, 29k and 11k, respectively relate to mitigation of MS and NMO. 第 65 回日本神経学会学術大会 (東京) 2024/5/29~6/1
3. Imamura T, Kira J, Yukitake M, Mitsuishi M, Maimaitijiang G, Zhang X. New exosome microRNA markers are useful for diagnosis and disease progression of Alzheimer's disease. 第 65 回日本神経学会学術大会 (東京) 2024/5/29~6/1
4. Maimaitijiang G, Kira J, Sakoda A, Watanabe M, Nagata S, Ezgi O, Masaki K, Yamasaki R, Isobe N, Zhang X, Imamura T, Nakamura Y. Exosome SNORD37 is a new marker for relapse mitigation in NMO and miR133b is that for progressive MS. 第 65 回日本神経学会学術大会 (東京) 2024/5/29~6/1
5. 張旭, 横手顕, 迫田礼子, 山下謙一郎, 満石三喜男, 今村友裕, グザリアイ・ママティジャン, 緒方英紀, 磯部紀子, 中村優理, 吉良潤一. LGI4 抗体陽性 autoimmune nodopathy (AN)の臨床スペクトラムと病態機序. 第 35 回日本末梢神経学会学術集会 (鹿児島) 2024/9/3 (第 35 回日本末梢神経学会賞受賞)

6. 今村友裕, 松尾莉奈, 南美和子, 太田昭一郎, 梅村創, 宮川純子, 藤崎さとみ, 藤本一眞. 耐糖能異常のある受診者に対する保健指導の効果. 第14回国際医療福祉大学学会学術大会(国際医療福祉大学成田キャンパス) 2024/9/16
7. グザリアイ・ママティジャン, 吉良潤一, 中村優理, 渡邊充, 迫田礼子, 高瀬オズデミール・エズギ, 永田諭, 眞崎勝久, 山崎亮, 張旭, 磯部紀子, 今村友裕. 二次進行型多発性硬化症では exosome GJA-29k が著増し伝達する防御的 microRNA の減少により障害増悪に寄与する. 第36回日本神経免疫学会学術集会(富山) 2024/10/3(学会賞受賞候補セッション)
8. 張旭, 吉良潤一, 満石三喜男, ママティジャン・グザリアイ, 今村友裕, 迫田礼子, 中村優理. ATP1A2/3 ノド抗体は seronegative NMOSD/中枢末梢連合脱髄症(CCPD)/進行型 MS の新規バイオマーカーである. 第36回日本神経免疫学会学術集会(富山) 2024/10/3(学会賞受賞候補セッション)
9. 吉良潤一, ママティジャン・グザリアイ, 中村優理, 渡邊充, 迫田礼子, 高瀬オズデミール・エズギ, 永田諭, 眞崎勝久, 山崎亮, 張旭, 磯部紀子, 今村友裕. 視神経脊髄炎再発時には血液 exosome GJA1-11k の低下と SNORD35/95/97 の上昇が起こり障害軽減に関連する. 第36回日本神経免疫学会学術集会(富山) 2024/10/4

【その他】

1. 吉良潤一, 張旭, 満石三喜男, 藤井敬之, グザリアイ・ママティジャン, 今村友裕, 迫田礼子, 柳原由記, 岩永育貴, 山下謙一郎, 横手頭, 波呂敬子, 小早川優子, 磯部紀子, 岡孝和, 桑原聡, 中村優理. 第3回アトピー性脊髄炎全国臨床疫学調査と自己免疫性神経障害性疼痛レジストリ構築. 「神経免疫疾患領域における難病の医療水準と患者の QOL 向上に資する研究」(神経免疫班)合同班会議(東京) 2024/1/11~12
2. 吉良潤一, 張旭, 緒方英紀, 満石三喜男, グザリアイ・ママティジャン, 今村友裕, 横手頭, 迫田礼子, 柳原由記, 岩永育貴, 山下謙一郎, 波呂敬子, 三嶋崇靖, 坪井義夫, 佐藤亮太, 神田隆, 小林正樹, 北川一夫, 波平幸裕, 大屋祐輔, 磯部紀子, 海田賢一, 桑原聡, 中村優理. 病態モデルに基づいた抗 LGI4 抗体の作用機序の解明と自己免疫性ノドパチー診断アルゴリズム. 「神経免疫疾患領域における難病の医療水準と患者の QOL 向上に資する研究」(神経免疫班)合同班会議(東京) 2024/1/11~12
3. 吉良潤一, 張旭, 満石三喜男, グザリアイ・ママティジャン, 今村友裕, 横手頭, 迫田礼子, 柳原由記, 岩永育貴, 山下謙一郎, 波呂敬子, 緒方英紀, 田代匠, 磯部紀子, 佐藤亮太, 神田隆, 小池春樹, 三嶋崇靖, 坪井義夫, 小林正樹, 北川一夫, 波平幸裕, 大屋祐輔, 海田賢一, 桑原聡, 土本 大介, 中村優理. 自己免疫性ノドパチー調査研究班の包括報告並びに抗 LGI4 抗体陽性自己免疫性ノドパチーの臨床像と作用機序. 「神経免疫疾患領域における難病の医療水準と患者の QOL 向上に資する研究」(神経免疫班)合同班会議(東京) 2025/1/9~10

4. 吉良潤一, 張旭, 満石三喜男, ママティジャン・グザリアイ, 今村友裕, 迫田礼子, 中村優理. 中枢神経脱髄疾患における新規ノド抗体の同定と抗体産生のリスク因子. 「神経免疫疾患領域における難病の医療水準と患者の QOL 向上に資する研究」(神経免疫班) 合同班会議(東京) 2025/1/9~10
5. 吉良潤一, 張旭, 満石三喜男, ママティジャン・グザリアイ, 今村友裕, 迫田礼子, 中村優理. 新規中枢神経ノド抗体陽性脱髄疾患の臨床像. 「神経免疫疾患領域における難病の医療水準と患者の QOL 向上に資する研究」(神経免疫班) 合同班会議(東京) 2025/1/9~10
6. 吉良潤一, 張旭, 藤井敬之, 満石三喜男, 迫田礼子, 吉富小都, 牛島美保, ママティジャン・グザリアイ, 今村友裕, 桑原聡, 磯部紀子, 中村優理. アトピー性脊髄炎・抗 Plexin D1 抗体陽性神経障害性疼痛の全国臨床疫学調査結果第 1 報と神経障害性疼痛に関連した新規抗神経抗体の探索. 「神経免疫疾患領域における難病の医療水準と患者の QOL 向上に資する研究」(神経免疫班) 合同班会議(東京) 2025/1/9~10

依頼講演・招待講演 他

【特別講演】

1. 今村友裕. 人生 100 年時代の漢方薬～超高齢社会を漢方薬と共に生きる～. 豊田加茂医師会学術講演会(福岡県福岡市) 2022/4/20
2. 今村友裕. 認知症治療薬を再考する. 福岡精神科病院協会筑後ブロック薬剤師会(福岡県久留米市) 2024/5/11
3. 今村友裕. 人生 100 年時代の漢方薬～漢方薬の過去、現在、未来～. 第 8 回老年薬学会学術大会 ランチョンセミナー6(東京都千代田区) 2024/5/19
4. 今村友裕. 人生 100 年時代の漢方薬～超高齢化社会を漢方薬と共に生きる～. 東三学術講演会(愛知県豊橋市、福岡市より WEB 配信) 2022/9/4
5. 今村友裕. 『人生 100 年時代の漢方薬』～超高齢社会を漢方薬と共に生きる～. 城北地区地域連携講演会(埼玉県) 2024/9/10
6. 今村友裕. 『人生 100 年時代の漢方薬』～超高齢社会を漢方薬と共に生きる～. 岡崎市医師会学術講演会(愛知県岡崎市、福岡市より WEB 配信) 2024/9/24
7. 今村友裕. 『人生 100 年時代の漢方薬』～超高齢社会を漢方薬と共に生きる～. 碧南市医師会学術講演会(愛知県碧南市、福岡市より WEB 配信) 2024/9/26
8. 今村友裕. 人生 100 年時代の漢方薬～超高齢社会を漢方薬と共に生きる～. 宗像内科医会学術講演会(福岡県宗像市、福岡市より WEB 配信) 2024/10/11
9. 今村友裕. 「気」の巡りと漢方薬について. 福精協筑後ブロック院長会学術集会(福岡県久留米市) 2024/10/21

10. 今村友裕. 人生 100 年時代の漢方薬～超高齢社会を漢方薬と共に生きる～. **Kampo Online Seminar** (全国 WEB 講演会) (福岡市 KIT STUDIO 福岡より WEB 配信) 2024/11/7
11. 今村友裕. 人生 100 年時代における漢方薬の役割～古くて新しい漢方薬～. **NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク 第 3 回全国の集い in 福岡 2024** (福岡県福岡市) 2024/11/3
12. 今村友裕. 人生 100 年時代の漢方薬～超高齢社会を漢方薬と共に生きる～. **ふじ漢方フォーラム～高齢者医療と漢方～** (静岡県富士市) 2024/11/27
13. 今村友裕. **ドネペジル、アゲイン！！**. 興和株式会社社内研修会 (福岡県久留米市) 2024/12/3
14. 今村友裕. 『人生 100 年時代の漢方薬』～超高齢社会を漢方薬と共に生きる～. 西尾市医師会廿日会 (愛知県西尾市、福岡市より WEB 配信) 2024/12/17

受賞

1. 第 35 回日本末梢神経学会賞 共同受賞.
張旭, 横手顕, 迫田礼子, 山下謙一郎, 満石三喜男, 今村友裕, グザリアイ・ママティジャン, 緒方英紀, 磯部紀子, 中村優理, 吉良潤一. **LGI4 抗体陽性 autoimmune nodopathy (AN)の臨床スペクトラムと病態機序**. 第 35 回日本末梢神経学会学術集会 (鹿児島) 2024/9/3
2. 2024 年度グッドティーチング賞 (ラージクラス) 共同受賞

特許

1. アルツハイマー病の尿と血清を用いた診断法とバイオマーカー及び測定キット
発明者 : 吉良潤一, 今村友裕
出願人名 : 国際医療福祉大学
出願国 : 米国
仮出願番号 : 63/469,446
出願日 : 2023/05/29

所属学会

1. 日本内科学会 (専門医)
2. 日本神経学会 (専門医)
3. 日本認知症学会 (専門医、指導医)
4. 日本糖尿病学会
5. 日本内分泌学会
6. 日本甲状腺学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, 毒性ターン A β 42 含有エキソソームによるアルツハイマー病早期診断と病態伝搬の解明, 2022～2024 年度, 研究代表者
2. 基盤研究 B, 新規発見ノド抗体による自己免疫性ノドパチーの中枢及び末梢神経脱髄機序の解明と治療, 2022～2024 年度, 研究分担者
3. 挑戦的研究 (萌芽), 新規同定病原性ミクログリアを標的とした変性と脱髄共通のグリア炎症病態の解明と治療, 2023～2024 年度, 研究分担者
4. 基盤研究 C, コネキシン 43 結合性マイクロ RNA を介する多発性硬化症重症化機構の解明と治療開発, 2023～2024 年度, 研究分担者

氏名（役職）

貝塚拓（講師）

研究概要

翻訳因子 *EEF1D* の変異に起因する神経発達障害の分子病態解明と治療法の開発（琉球大学医学研究科分子・細胞生理学講座との共同研究）

本研究では *EEF1D* の遺伝子産物である eEF1B δ L の細胞内機能と神経疾患との関連について解析を行っている。本来 *EEF1D* は翻訳因子を産生するが、そのバリエーションである eEF1B δ L は核内で遺伝子転写を刺激する転写因子である。近年、その遺伝子の変異と神経発達障害との関連性が報告されている。今年度はヒト細胞において eEF1B δ L 特異的な欠損株を作製し、欠損株で特定の遺伝子群が変動することを明らかにした。今後はそれら遺伝子発現の制御機構を明らかにし、神経発達障害の分子病態解明と治療薬の探索などの研究展開が期待される。

多能性幹細胞の分化過程における概日時計発生メカニズムの解明（熊本大学生命科学研究部分子生理学講座との共同研究）

成体のほぼ全ての細胞は時計遺伝子を基軸とした概日時計機構を有するのに対し、胚性幹細胞や人工多能性幹細胞では時計機構が未発達である。本研究では、ヒト iPS 細胞を用いて、体細胞への分化の過程で如何にして時計が発生するのか、そのメカニズムの解明に取り組んでいる。今年度は、神経系への分化過程で時計が発生する時期の特定に近づいた。今後はその段階における時計遺伝子群のエピゲノム変化を明らかにするなどの研究展開が期待される。

原著論文・総説

【総説】

1. Kaitsuka T. The Unique Roles of Ion Channels in Pluripotent Stem Cells in Response to Biological Stimuli. *Biology*, 13(12), 1043 (2024). Review

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 貝塚拓, 高松岳也, 松下正之. 翻訳因子 eEF1B δ の脳特異的バリエーションによる翻訳関連遺伝子発現の制御. NEURO2024（福岡）2024/7/25
2. 貝塚拓. がん細胞における概日リズム誘導法の開発. 第14回国際医療福祉大学学会学術大会（千葉）2024/9/16

【国際学会】

1. Kaitsuka T, Rockwood J, Kozak J Ashot. DO MODULATORS OF TRPM7 CHANNELS AFFECT TRPM7 KINASE ACTIVITY IN INTACT CELLS? FASEB Science Research Conferences (St. Paul, Minnesota) 2024/6/16

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本時間生物学会
3. 日本生理学会
4. 日本神経科学学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本時間生物学会評議員

研究費獲得状況

1. 国際医療福祉大学学内研究費, てんかん関連因子 eEF1B δ L による翻訳関連遺伝子の転写制御, 2024 年度, 研究代表者

氏名（役職）

中矢正（講師）

研究概要

FUS による筋萎縮性側索硬化症（ALS）発症分子機構解明に関する研究

RNA 結合タンパク質 FUS は ALS の原因因子であり、様々な変異が家族性 ALS を引き起こすことが知られている。また、孤発性 ALS 患者においてもその凝集体が変性神経細胞内に観察されることから、その機能異常が疾患発症に深く関わることが考えられている。しかしながらその分子機構は明らかではない。本研究では、FUS の機能とその破綻による疾患発症分子機構を明らかにすることを目的として、FUS 野生型及び変異型を発現させた神経細胞を用いた解析を行っている。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Nakaya T. Release of FUS into the extracellular space is regulated by its amino-terminal prion-like domain. *FEBS Lett.*, (2024). doi: 10.1002/1873-3468.15086. Online ahead of print.

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 中矢正. 筋萎縮性側索硬化症発症分子機構における遺伝子スプライシングと翻訳過程の関連性解明. 第 14 回国際医療福祉大学学会学術大会（成田・Zoom）2024/9/16

所属学会

1. 日本 RNA 学会
2. 日本神経化学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, ALS 原因因子 FUS の細胞外分泌分子機構の解明, 2022~2026 年度, 研究代表者

氏名（役職）

宗像千恵（講師）

研究概要

バンコマイシン注の配合変化に関する研究（長崎大学医薬品情報学分野との共同研究）

バンコマイシン注と多剤との組み合わせでの配合変化の要因検索・先発品と後発品の比較に関する検討を行っている。今年度は、バンコマイシン注とヘパリン注の配合変化について、検討した。この2剤における白濁はイオン結合によるものであり、どのような濃度でも配合は不可との結論を得た。これを論文化する予定である。

緩和ケア領域での配合変化に関する研究（日本医科大学多摩永山病院・湘南医療大学との共同研究）

学会員共同で緩和ケア領域での配合変化に関する検討を行っている。アンケート結果より臨床現場で検証が求められている薬剤が判明し、これを論文化した。現在はその中でも添加物の亜硫酸塩に着目し、亜硫酸塩を含む注射剤がオピオイド注射液との配合変化に及ぼす影響についてデータ収集している。

带状疱疹治療薬に関するアカデミック・ディテールング資材開発（医薬品安全性学会副作用情報部会会員としての研究）

アカデミック・ディテールングとは薬剤師が医師に薬剤の適正な選択について教示する試みである。基礎（化学・薬理・動態）の専門家と臨床の薬剤師が意見を交わしながら、带状疱疹治療薬の使用適正化を薬剤師が医師に教示するアカデミック・ディテールング資材の作成を行っている。今後はこの資材の有用性調査の研究を実施する予定である。

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 宗像千恵. バンコマイシン注射剤とヘパリンナトリウム注射剤の配合変化に関する検討. 第14回国際医療福祉大学学会学術大会（成田）2024/9/16
2. 近藤匡慶, 宗像千恵, 龍恵美, 吉田真人, 菅谷量俊, 林太祐, 国分秀也. 緩和薬物療法認定薬剤師に対するアンケート調査に基づく医療用麻薬注射薬配合マネジメントツールの有用性. 第34回日本医療薬学会年会（千葉）2024/11/2
3. 杉山奈津子, 出雲貴文, 木村聡子, 鈴木邦彦, 頓宮美樹, 長澤宏之, 古野喬志, 宗像千恵, 森崎隆博, 紺野奇重, 辻稔, 永井尚美, 中谷善彦, 平川聡史, 岸達生, 小茂田昌代. 带状疱疹治療薬アカデミック・ディテールング資材開発への取り組み. 第34回日本医療薬学会年会（千葉）2024/11/3

4. 杉山奈津子, 出雲貴文, 木村聡子, 鈴木邦彦, 頓宮美樹, 長澤宏之, 宗像千恵, 森崎隆博, 紺野 奇重, 辻 稔, 永井尚美, 中谷 善彦, 平 川 聡史, 岸 達生, 小茂田昌代. がん患者における带状疱疹治療薬アカデミック・ディテールリング ～個別最適化に向けての試み～. 第 14 回日本臨床腫瘍薬学会学術大会 (横浜) 2025/3/16
5. 香月知真, 藤丸心夢, 川下こなみ, 松本奈々彩, 福田光良, 宗像千恵, 江島和久, 西村信弘. 高齢前立腺癌患者におけるエンザルタミドの臨床効果および安全性に関連する因子の検討. 日本薬学会第 145 年会 (福岡) 2025/3/27

【シンポジウム】

1. 宗像千恵. アメナメビルの注意点を審査報告書から読み解く. シンポジウム「带状疱疹治療の処方提案をいかにするか!？」第 10 回日本医薬品安全性学会学術大会 (新潟) 2024/7/20

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本医療薬学会
3. 日本緩和医療学会
4. 日本緩和医療薬学会
5. 日本医薬品安全性学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本緩和医療薬学会 社員
2. 日本医薬品安全性学会 副作用情報部会 部員

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, 簡易型耐性菌スクリーニングシステムの開発およびその臨床応用, 2024～2026 年度, 研究分担者

氏名（役職）

磯田紀之（助教）

研究概要

医薬品候補化合物に対する新規フッ素官能基導入法に関する研究

医薬品候補化合物に対する新規フッ素官能基導入法に関する検討を行っている。今年度は、モノフルオロアルケン骨格の収束的合成を可能とする、新規ジフルオロアルケンビルディングブロックの開発と利用法に関する研究を論文にまとめた。これより、アミド結合等価体であるモノフルオロアルケンの効率的な合成が可能となると期待できる。

ルイス酸が関与する鈴木・宮浦クロスカップリング反応に関する研究

鈴木・宮浦クロスカップリング反応は、信頼性の高い炭素-炭素結合形成手法であるが、鍵となる金属交換の進行に塩基の添加が必要であり、副反応として脱ホウ素プロトン化が課題であった。これに対し、ルイス酸としての性質を持つ垂鉛錯体の添加により、塩基なしでもクロスカップリング反応が高効率に進行することを発見した。現在、本手法をクロスカップリング反応に不向きなフッ素化アルキル基の導入に展開し検討を行なっている。。

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本化学会
3. 日本フッ素化学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 B（一般研究）, 24K02154-5, 2024～2026 年度, 研究分担者

氏名（役職）

坂井崇亮（助教）

研究概要

不斉直接的ビニロガス共役付加を利用した γ -ラクトン誘導体合成に関する研究

有機分子触媒を用いた不斉直接的ビニロガス共役付加反応による γ -ラクトン誘導体の不斉合成に関する研究を行っている。二官能性有機分子触媒を用いた γ -ブチロラクトン誘導体合成の基質（共役付加受容体）を探索中である。また、新規有機分子触媒の合成および触媒ライブラリーの充実化を行っている。

所属学会

1. 日本薬学会
2. 有機合成化学協会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 B, インターロック分子の触媒的不斉構築, 2024~2026 年度, 研究分担者

氏名（役職）

澤井円香（助教）

研究概要

糖化産物による生体影響に関する研究

現在、抗炎症作用を有する糖化産物ジヒドロピラジン（DHP）による生体影響に関する検討を行っている。今年度は、DHPの細胞膜への影響や炎症反応により生じる活性酸素に対する効果を解析した。引き続き、DHPの生体影響の解明のみならず、根本的な治療薬がない炎症性疾患の予防や治療効果改善に役立つ萌芽的知見の構築を行う。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Takechi S, Sawai M, Miyauchi Y. Dihydropyrazine induces endoplasmic reticulum stress and inhibits autophagy in HepG2 human hepatoma cells. *J. Toxicol Sci.*, 49(7), 313-319 (2024).
2. Zhou JR, Kinno S, Kaihara K, Sawai M, Ishida T, Takechi S, Fang J, Nohara T, Yokomizo K. Saponin Esculeoside A and Aglycon Esculeogenin A from Ripe Tomatoes Inhibit Dendritic Cell Function by Attenuation of Toll-like Receptor 4 Signaling. *Nutrients*, 16(11), 1699-1699 (2024).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 多田納豊, 宗像達夫, 澤井円香, 八木秀樹, 佐野千晶, 富岡治明. *Mycobacterium avium complex* 由来 D-アミノ酸によるマクロファージの遺伝子発現の変化. 第 97 回日本細菌学会総会（札幌）2024/8/7
2. Sawai M, Tatano Y, Miyake K, Zhou JR, Kaitsuka T, Kansui H, Miyauchi Y, Takechi S. Dihydropyrazine application to prevent and treat sepsis: therapeutic effect in multiple organs. Forum 2024 Pharmaceutical health Sciences · Environmental Toxicology (Sendai) 2024/9/4
3. 折田優華, 宮内優, 澤井円香, 武知進士. 糖化産物ジヒドロピラジンによるオートファジー抑制機構の解析. フォーラム 2024 : 衛生薬学・環境トキシコロジー（仙台）2024/9/4
4. 岩山萌花, 宮内優, 澤井円香, 武知進士. 糖化産物ジヒドロピラジンによる細胞死の解析. フォーラム 2024 : 衛生薬学・環境トキシコロジー（仙台）2024/9/4

5. 澤井円香, 多田納豊, 三宅克也, 周建融, 貝塚拓, 寒水壽朗, 宮内優, 武知進士. 糖化産物ジヒドロピラジンの敗血症予防・治療への応用: 多臓器における治療効果. フォーラム 2024: 衛生薬学・環境トキシコロジー (仙台) 2024/9/5
6. 多田納豊, 宗像達夫, 澤井円香, 八木秀樹, 佐野千晶, 富岡治明. *Mycobacterium intracellulare* が産生する D アミノ酸のマクロファージの活性化および遺伝子発現への影響. 九州微生物研究フォーラム 2024 (大分) 2024/9/13-14
7. 澤井円香, 多田納豊, 石田卓巳, 武知進士. 糖化産物ジヒドロピラジン (DHP) による生体への有害性の調査. 第 14 回国際医療福祉大学学会学術大会 (成田) 2024/9/16
8. 多田納豊, 宗像達夫, 澤井円香, 八木秀樹, 佐野千晶, 富岡治明. 抗酸菌由来 D-アミノ酸によるマクロファージの炎症関連遺伝子発現の制御についての検討. 第 14 回国際医療福祉大学学会学術大会 (成田) 2024/9/16
9. 宇都宮万季, 宮内優, 澤井円香, 武知進士. 糖化産物ジヒドロピラジンは CAMKK2-AMPK-ULK1 シグナリング経路を活性化する. 第 41 回日本薬学会九州支部会 (熊本) 2024/11/24
10. Sawai M, Tatano Y, Tozaki-Saitoh H, Miyake K, Zhou JR, Itoh S, Kaitsuka T, Kansui H, Miyauchi Y, Takechi S. Therapeutic efficacy analysis of dihydropyrazine in multiple organs failure by sepsis. 第 47 回日本分子生物学会年会 (福岡) 2024/11/27
11. 武知進士, 澤井円香, 宮内優. 糖化産物ジヒドロピラジンによる CAMKK2-AMPK-ULK1 シグナリングの活性化. 第 47 回日本分子生物学会年会 (福岡) 2024/11/29
12. 澤井円香, 多田納豊, 齊藤秀俊, 三宅克也, 周建融, 寒水壽朗, 宮内優, 武知進士. 糖化産物ジヒドロピラジンによる多臓器における抗炎症治療効果解析. 日本薬学会第 145 年会 (福岡) 2025/3/27
13. 宮内優, 澤井円香, 寒水壽朗, 武知進士. ジヒドロピラジン曝露に対する終末糖化産物除去受容体 OST48 の影響. 日本薬学会第 145 年会 (福岡) 2025/3/27
14. 武知進士, 澤井円香, 宮内優. 糖化産物ジヒドロピラジンによる CAMKK2-AMPK-ULK1 シグナリング経路の活性化. 日本薬学会第 145 年会 (福岡) 2025/3/27
15. 多田納豊, 宗像達夫, 澤井円香, 八木秀樹, 佐野千晶. *Mycobacterium avium complex* 由来 D-アミノ酸によるマクロファージの遺伝子発現変動. 日本薬学会第 145 年会 (福岡) 2025/3/27

所属学会

1. 日本薬学会
2. 分子生物学会
3. 日本毒性学会

研究費獲得状況

1. 若手研究, 糖化産物 DHP の TLR4 シグナル抑制作用を利用した敗血症性脳症へのアプローチ, 2025~2027 年度, 研究代表者
2. 若手研究, 糖化産物 DHP による TLR4 シグナル抑制機構の解明: 敗血症治療への新規アプローチ, 2023~2024 年度, 研究代表者
3. 国際医療福祉大学学内研究費, 糖化産物ジヒドロピラジン(DHP)による免疫機構への影響の解析, 2024 年度, 研究代表者

氏名（役職）

柴田健太郎（助教）

研究概要

冠状動脈開口部領域の形態学的研究（佐賀大学医学部解剖学教室 倉岡晃夫教授の指導、監督）

解剖実習体より摘出した大動脈標本を対象として、日本人における冠状動脈開口部領域の形態学的特徴につき検討中である。本研究成果は、同部位の詳細な解剖学的理解を通して、冠状動脈へのカテーテル挿入手技や経カテーテル大動脈弁植え込み術（TAVI）等の合併症防止に貢献することが期待される。

Rat 胚を用いた心臓発生に関する研究（本学福岡薬学部 村田祐造教授との共同研究）

免疫組織化学染色を用いて rat 胚の心臓発生領域を同定し、主に心膜腔形成に関連する領域の観察を続けている。本観察結果は、胸郭正中癒合不全のメカニズムを考察する上で重要になる可能性がある。

オキシトシンが血糖値に与える影響に関する研究（本学福岡薬学部 村田祐造教授との共同研究）

オキシトシン投与後 rat における血糖値の経時的变化を、血糖測定器や ELISA（酵素結合免疫吸着測定法）を用いて測定している。また、血糖値変動に関係する臓器から組織切片を作成し、免疫組織化学染色を行っている。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Uchida Y, Shibata K, Aijima R, Danjo A, Yamashita Y, Kuraoka A. Anatomical study on the posterior alveolar canal in maxillary tuberosity region using computed tomography. *J. Oral Maxillofac. Surg. Med. Pathol.*, 36(6), 798-803 (2024).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 柴田健太郎, 坂梨史典, 齊藤秀俊, 村田祐造. Rat 胚子の心筋収縮開始前における血液循環に関する検討: α -SMA 免疫組織学的解析. 第 14 回国際医療福祉大学学会学術大会（千葉）2024/9/16
2. 齊藤秀俊, 武田弘志, 柴田健太郎. 感覚変容をもたらすストレス応答脳神経回路の解明. 第 14 回国際医療福祉大学学会学術大会（千葉）2024/9/16

3. Saitoh H, Kubota K, Shibata K, Takeda H. Involvement of voltage-gated calcium channels in the interferon response of a microglial cell line. APPW2025 (第 130 回日本解剖学会/第 102 回日本生理学会/第 98 回日本薬理学会合同大会) (千葉) 2025/3/17-19

所属学会

1. 日本解剖学会
2. 日本薬理学会
3. アジア口腔顎顔面外科学会
4. 国際医療福祉大学学会

研究費獲得状況

1. 国際医療福祉大学学内研究費一般研究 B (奨励), 全胚培養した rat 胚を用いて心膜と心臓大血管流入部、流出路の発生機序を追及する, 2024 年度, 研究代表者

氏名（役職）

福田光良（助教）

研究概要

鼻から脳への薬物送達に関する研究（日本大学薬学部 薬剤学研究室 鈴木豊史教授との共同研究）

鼻から脳への薬物送達に関して、薬物動態学的側面から検討を進めている。今年度は、脳虚血モデルマウスにポリエチレングリコールを併用した低分子医薬品であるエダラボンを経鼻投与したところ、未治療群に比べて梗塞巣体積の増大を有意に抑制することを明らかにした。これより、エダラボンの経鼻投与は、急性脳梗塞治療において有用であることが期待される。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Nagatomo T, Kanai M, Fukuda M, Shimazaki M, Yamamoto Y, Suzuki N, Hashizaki K, Suzuki T. Quantitative Relationship between the Viscosity of Pediatric Syrups Containing Ambroxol Hydrochloride and the Adhesive Remaining Amount in the Metering Glass. *The Journal of Community Pharmacy and Pharmaceutical Sciences*, oa. 2024-0026 (2024).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 福田光良, 長友太希, 鈴木直人, 鈴木豊史. ポリエチレングリコールを併用したエダラボン経鼻投与後の脳内神経保護効果. 第13回国際医療福祉大学学会学術大会（千葉）2024/9/16
2. 香月知真, 藤丸心夢, 川下こなみ, 松本奈々彩, 福田光良, 宗像千恵, 江島和久, 西村信弘. 高齢前立腺癌患者におけるエンザルタミドの臨床効果および安全性に関連する因子の検討. 日本薬学会第145年会（福岡）2025/3/26-29

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本薬剤学会
3. 日本 DDS 学会
4. 日本病院薬剤師会

研究費獲得状況

1. 若手研究, 鼻から脳への低・中分子分布評価と脳内活性化ミクログリア炎症機構の解明, 2023~2025 年度, 研究代表者